

都城市所在

さ さ が さ き
笹ヶ崎遺跡
(第一次～第三次調査)

県道飯野松山都城線(都城志布志道路)梅北工区道路整備工事に伴う発掘調査報告書3

2016

宮崎県埋蔵文化財センター

都城市所在

さ さ が さ き
笹ヶ崎遺跡
(第一次～第三次調査)

県道飯野松山都城線(都城志布志道路)梅北工区道路整備工事に伴う発掘調査報告書3

2016

宮崎県埋蔵文化財センター



笹ヶ崎遺跡遠景（南東から）



笹ヶ崎遺跡調査区全景 (左が北)



A区堀切 (右側は土壘 北東から)

序

宮崎県教育委員会では、平成26年度及び平成27年度に、県道飯野松山都城線（都城志布志道路）梅北工区道路整備工事に伴い、都城市梅北町に所在する笹ヶ崎遺跡の発掘調査を実施しました。本書はその発掘調査の記録を掲載した報告書です。

笹ヶ崎遺跡では、縄文時代草創期に属する集石遺構が検出されたほか、大型の掘立柱建物跡や堀切、土塁など、中世の城館跡と推測できる遺構を多数検出しました。それらは、都城盆地における先人の暮らしを物語る文化遺産として大きな意義を有するものです。本書や出土遺物・記録類が、学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

なお、最後になりましたが、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関、地元の方々には心より厚くお礼申し上げます。

平成28年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 岩切 隆志

例 言

- 1 本書は、県道飯野松山都城線（都城志布志道路）梅北工区道路整備工事に伴い、宮崎県教育委員会が実施した宮崎県都城市梅北町に所在する笹ヶ崎遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、宮崎県土整備部都城土木事務所の依頼を受け、宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。発掘調査の期間は以下の通りである。
第一次調査 平成26年5月27日～平成27年2月27日（現地調査152日）
第二次調査 平成26年7月28日～平成27年2月27日（現地調査120日）
第三次調査 平成27年7月2日～平成27年8月28日（現地調査35日）
- 3 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行い、整理作業員の協力を得て行った。なお、石器の石材同定については、当センターの赤崎広志の協力を得た。
- 4 グリッド杭設置に伴う測量業務、空中写真撮影、自然科学分析（放射性炭素年代測定・樹種同定）は、次の業者に委託した。
 - ・測量業務委託 (株)旭総合コンサルタント、(株)平和総合技研、
(株)南日本総合コンサルタント
 - ・空中写真撮影 (有)ふじた、(有)スカイサーバイ九州
 - ・自然科学分析 (株)古環境研究所
- 5 本書で使用した第1図「笹ヶ崎遺跡および周辺遺跡位置図」は、国土地理院発行の5万分の1『都城』をもとに作成した。
- 6 本書で使用した土層断面及び遺物の色調等は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を参考にした。
- 7 本書中の図面の方位は、座標北（G.N.）を示している。標高は海拔絶対高である。また全体図で使用した座標は、世界測地系に準拠している。
- 8 本書の編集と執筆は、山元清春、根井英樹、甲斐貴充が行った。
- 9 石材の分類は、赤崎広志の監修のもと、山元、根井が行った。
- 10 出土遺物その他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。
- 11 遺構の表記に使用した略号は、以下のとおりである。
S A：竪穴建物跡 S B：掘立柱建物跡 S C：土坑 S D：土坑墓
S E：溝状遺構 S G：犬走状遺構 S I：集石遺構

本文目次

第1章	はじめに	
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の組織	1
第2章	遺跡の地理的・歴史的環境	
第1節	地理的環境	2
第2節	歴史的環境	2
第3章	調査の記録	
第1節	調査の経過	
1	第一次調査	6
2	第二次調査	7
3	第三次調査	8
第2節	基本層序	
1	A区の基本層序	9
2	B区の基本層序	11
3	C区の基本層序	12
第3節	遺構と遺物	
1	A区の遺構と遺物	
(1)	縄文時代早期の遺物	14
(2)	縄文時代前期の遺物	14
(3)	縄文時代後期～晩期の遺構と遺物	14
(4)	古墳時代の遺物	17
(5)	古代～中世の遺構と遺物	18
(6)	時期不明の遺構と遺物	20
2	B区の遺構と遺物	
(1)	VⅢ層の遺構と遺物	34
(2)	IV層の遺構と遺物	35
(3)	Ⅲ層上面の遺構と遺物	36
①	Ⅱ層の遺構と遺物	36
②	古墳時代の遺構と遺物	38
③	古代の遺物	39
④	中世の遺構と遺物	39
⑤	時期不明の遺構と遺物	45
3	C区の遺構と遺物	
(1)	縄文時代草創期の遺構	81
(2)	縄文時代早期の遺構と遺物	81
(3)	縄文時代前期の遺物	82
(4)	その他の縄文時代遺物	83
(5)	古墳時代の遺物	83
(6)	古代～中世の遺構と遺物	84
(7)	時期不明の遺物	87
4	D区の調査	
(1)	D1区の調査	100
①	古墳時代～中世の遺構	101
②	包含層出土の遺物	101
③	小結	102
(2)	D2区の調査	103

① 古墳時代～中世の遺構	104
② 包含層出土の遺物	108
③ 小結	108
第IV章 自然科学分析	
第1節 自然科学分析の概要	111
第2節 放射性炭素年代測定	111
第3節 樹種同定	113
第4節 植物珪酸体分析	115
第5節 花粉分析	120
第V章 総括	129

挿図目次

第1図 笹ヶ崎遺跡および周辺遺跡位置図	5
第2図 笹ヶ崎遺跡グリッド配置図	8
第3図 A区土層断面図	10
第4図 B区土層断面図	11
第5図 C区土層断面図	13
第6図 A区縄文時代の遺構分布図およびSC6・土器集中部①実測図	21
第7図 A区古代・中世および時期不明の遺構分布図・SC5・土器集中部②実測図	22
第8図 A区堀切・土塁・平坦部実測図(1)	23
第9図 A区堀切・土塁・平坦部実測図(2)	24
第10図 A区縄文時代の出土遺物実測図(1)	25
第11図 A区縄文時代の出土遺物実測図(2)	26
第12図 A区縄文時代の出土遺物実測図(3)	27
第13図 A区縄文時代の出土遺物実測図(4)	28
第14図 A区古墳時代～中世の出土遺物実測図	29
第15図 A区中世・時期不明の出土遺物実測図	30
第16図 B区縄文時代早期～中期の遺構分布図	47
第17図 B区縄文時代晩期～中世および時期不明の遺構分布図	48
第18図 B区S13、SC18・20、SA2実測図	49
第19図 B区SA3、SE1・5実測図	50
第20図 B区SE2～4・6～8実測図	51
第21図 B区SE9～11・13・14実測図	52
第22図 B区SE12、SB1実測図	53
第23図 B区SB2・4実測図	54
第24図 B区SB3実測図	55
第25図 B区SB6・7実測図	56
第26図 B区SB5・8実測図	57
第27図 B区畝状遺構・SG2実測図	58
第28図 B区SC5・SA1実測図	59
第29図 B区縄文時代の出土遺物実測図(1)	60
第30図 B区縄文時代の出土遺物実測図(2)	61
第31図 B区縄文時代の出土遺物実測図(3)	62
第32図 B区縄文時代の出土遺物実測図(4)	63
第33図 B区縄文・古墳時代の出土遺物実測図	64
第34図 B区古墳時代・古代・中世の出土遺物実測図	65
第35図 B区中世の出土遺物実測図(1)	66

第36図	B区中世の出土遺物実測図(2)	67
第37図	B区中世の出土遺物実測図(3)	68
第38図	B区中世の出土遺物実測図(4)	69
第39図	B区IV層出土石器実測図	70
第40図	B区II層・III層出土石器実測図	71
第41図	B区III層出土・時期不明の石器実測図	72
第42図	C区縄文時代の遺構分布図およびS11・S13実測図	88
第43図	C区S12・散礫実測図	89
第44図	C区中世の遺構分布図およびSG1実測図	90
第45図	C区SE1・SE4～SE8実測図	91
第46図	C区SD1・SE2実測図	92
第47図	C区堀切実測図	93
第48図	C区縄文時代の出土遺物実測図	94
第49図	C区縄文時代・古墳時代～中世の出土遺物実測図	95
第50図	C区縄文時代・中世および時期不明の出土遺物実測図	96
第51図	D1区第V層上面検出状況図	100
第52図	D1区土層堆積状況図(南壁)	101
第53図	D1区硬化面下出土土師器実測図	101
第54図	D1区包含層出土遺物実測図(1)	101
第55図	D1区包含層出土遺物実測図(2)	102
第56図	D2区第V層上面検出状況図	103
第57図	D2区土層堆積状況図(南壁)	104
第58図	D2区1号土坑(SC1)検出状況図	104
第59図	D2区1号土坑(SC1)出土遺物実測図	104
第60図	D2区1号溝状遺構(SE1)検出状況図	105
第61図	D2区1号溝状遺構(SE1)出土遺物実測図	105
第62図	D2区1号柵列出土遺物実測図	106
第63図	D2区柵列1・2検出状況図	107
第64図	D2区包含層出土遺物実測図	109
第65図	暦年校正結果	122
第66図	B区北側地点における植物珪酸体分析結果	125
第67図	B区中央部における植物珪酸体分析結果	125
第68図	笹ヶ崎遺跡の炭化材	126
第69図	笹ヶ崎遺跡の植物珪酸体(プラント・オパール)	127
第70図	笹ヶ崎遺跡の花粉	128

表目次

第1表	A区出土遺物観察表	31
第2表	A区出土石器・銅製品計測表	33
第3表	B区出土遺物観察表	73
第4表	B区出土石器計測表	80
第5表	C区出土遺物観察表	97
第6表	C区出土石器・銭貨計測表	99
第7表	D区出土遺物観察表	110
第8表	D区出土石器・石製品計測表	110
第9表	資料の前処理・調整・測定法	111
第10表	暦年代表	112
第11表	笹ヶ崎遺跡における炭化材の樹種同定結果	122

第12表	笹ヶ崎遺跡における植物珪酸体分析結果	123
第13表	笹ヶ崎遺跡における花粉分析結果	124
	報告書抄録	

写真図版目次

図版1	A区SC1・SC5・SC6完掘、堀切・土塁・平坦部、C区S11～S13	131
図版2	C区散礫、SD1、SE1・SE7、SE2、堀切、SG1	132
図版3	B区S13、SC18・8完掘、SA2・3	133
図版4	B区SE1～8	134
図版5	B区SE9・11～14、溝状遺構群	135
図版6	B区SB3・4・8、1～8	136
図版7	B区SB5～7、畝状遺構、SG2、SC3断面、SC5	137
図版8	B区SA1、SC4・6・7・9・10	138
図版9	D区第3次発掘調査遺跡全景、D1区・D2区遺跡全景、D2区1号溝状遺構、他	139
図版10	A区縄文土器(1)～(3)	140
図版11	A区縄文土器(4)～(6)	141
図版12	A区縄文土器(7)・(8)	142
図版13	A区縄文土器(9)、古墳時代・古代土師器	143
図版14	A区中世土師器(1)・(2)、瓦器	144
図版15	A区白磁・青磁・青花・陶器・須恵器	145
図版16	A区石器(1)・(2)、銅製品	146
図版17	B区縄文土器(1)・(2)	147
図版18	B区縄文土器(3)・(4)	148
図版19	B区縄文土器(5)、古墳時代SA2土師器(1)	149
図版20	B区古墳時代SA2土師器(2)・SA3土師器(1)	150
図版21	B区古墳時代SA3土師器(2)・(3)	151
図版22	B区古墳時代SA3土師器(4)、古代土師器等	152
図版23	B区中世土師器(1)・(2)	153
図版24	B区中世白磁(1)・(2)	154
図版25	B区中世青磁(1)・(2)	155
図版26	B区中世青磁(3)・青花	156
図版27	B区須恵器等・陶器(1)	157
図版28	B区陶器(2)・(3)	158
図版29	B区石器(1)・(2)	159
図版30	B区石器(3)・(4)	160
図版31	B区石器(5)・(6)	161
図版32	C区縄文土器(1)・(2)	162
図版33	C区縄文土器(3)・(4)	163
図版34	C区古墳時代～中世土師器	164
図版35	C区白磁・青磁	165
図版36	C区青磁・青花・陶器・石器・銭貨	166
図版37	D1区包含層出土遺物(1)～(3)、D2区SC1・SE1・柵列・包含層出土遺物(1)(2)	167
図版38	D2区包含層出土遺物(3)～(6)	168

第I章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

都城志布志道路は、平成6年12月、宮崎県都城市から鹿児島県志布志市に至る総延長約40kmの地域高規格道路として計画された。このうち、九州縦貫自動車道都城ICから都城市五十町ICまでの約13.4kmの区間は、都城道路として国土交通省による事業が進められている。五十町ICから鹿児島県境に至る約8kmの区間については、主要地方道都城東環状線として宮崎県による事業が進められ、現在、五十町ICから梅北ICまでの区間はすでに供用が開始されている。このように、都城志布志道路は一つの道路でありながら北側を国、南側を県が施工しており、笹ヶ崎遺跡は、梅北IC以南の宮崎県が施工する区間（梅北工区）内に位置している。

都城東環状線については、平成12年9月に宮崎県都市計画課から宮崎県文化課（現文化財課）へ協議がなされた。文化課は同年10月に路線内に8箇所の周知の埋蔵文化財包蔵地があることを回答し、以後、開発計画と埋蔵文化財の保護について協議を重ね、現状保存が困難な遺跡についてはやむを得ず記録保存の措置をとることとなった。

笹ヶ崎遺跡は平成25年7～8月に文化財課、平成26年5月に埋蔵文化財センターが実施した確認調査によって中世の遺構遺物が確認されたため、第一次調査（B区）を平成26年5月～平成27年2月、第二次調査（A・C区）を平成26年7月～平成27年2月、第三次調査（D1・2区）を平成27年7～8月にかけて実施した。

第2節 調査の組織

笹ヶ崎遺跡における発掘調査組織は以下のとおりである。

調査主体：宮崎県教育委員会

事業調整：宮崎県教育庁文化財課

主査 堀田孝博（平成25年度）

主査 二宮満夫（平成26年度）

主査 松本 茂（平成27年度）

発掘調査・整理作業及び報告書作成：宮崎県埋蔵文化財センター

所長 岩切隆志（平成26～27年度）

副所長 長津宗重（平成26年度兼総務課長）、菅付和樹（平成27年度兼調査課長）

総務課長 上谷政隆（平成27年度）

調査課長 菅付和樹（平成26年度）

主幹兼調査第一担当リーダー 松林豊樹（平成26年度は副主幹、平成27年度）

主査 山元清春（第一次調査主任、整理・報告書作成）

主査 根井英樹（第二次調査主任、整理・報告書作成）

主査 甲斐貴充（第三次調査主任、整理・報告書作成）

主幹兼調査第三担当リーダー 福田泰典（平成26年度：確認調査担当）

主査 橋本英俊（平成26年度：確認調査担当）

主事 沖野 誠（平成26年度：確認調査担当）

第II章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

都城市は、宮崎県南西部に位置する都城盆地のほぼ中央にあり、人口約16.5万人、面積約653km²は、いずれも県内第2の都市である。都城盆地は、北東部の諸県丘陵、鰐塚山系および霧島山系に囲まれ、北から南東方面にかけては高原町、小林市、宮崎市、三股町、日南市、串間市の4市2町に、南西方面は鹿児島県霧島市、曾於市、志布志市の3市に隣接する。

今回調査の対象となった笹ヶ崎遺跡は、都城市街地から南に約4.5km離れた都城市梅北町に所在する。南東方向に金御岳（標高472m）をのぞむ標高約160mの台地上に位置し、南西方面から床丸川、南東方面から梅北川が流れ、東側で合流し北流する。調査前は、山林及び畑地であった。年代指標となるテフラとして、入戸火砕流（約28,000年前）、桜島薩摩テフラ（Sz-S、P14、約12,800年前）、桜島末吉テフラ（Sz-Sy、P11、約8,000年前）、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah、約7,300年前）、霧島御池降下軽石（Kr-M、約4,600年前）、桜島文明降下軽石（Sz-Bm、P3、A.D.1471年）などの堆積が明瞭に確認できる。

遺跡の周辺には、谷を隔てた北西側の丘陵に高樋遺跡、北側の梅北川右岸に梅北城跡、左岸に梅北針谷遺跡、床丸川の南側に大年遺跡、中床丸遺跡などが分布する。

第2節 歴史的環境

旧石器時代

県内では300ヶ所近い旧石器時代の遺跡が確認されているが、そのほとんどは県北五ヶ瀬川流域と宮崎平野に集中している。県西部や県南部の地域では、シラスをはじめとする火砕流や火山灰堆積が非常に厚く、現在確認されている遺跡数は少ない。都城盆地では、大岩田上村遺跡、池増遺跡、雀ヶ野第3遺跡、軍人原遺跡などで細石刃石器群が確認されている。

縄文時代

草創期の遺跡としては、県内最古級の土器片と細石刃が共存して出土した都城市高城町の軍人原遺跡がある（平成26年度都城市調査実施）。また、同市山之口町の王子山遺跡からは、隆帯文土器も出土している。

早期の遺跡では、宮野・立野遺跡から、全縄文施文の「五十市式土器」が出土している。その他、円筒形土器、条痕文土器、突帯文土器、貝殻文円筒形土器を中心に、押型文土器、手向山式土器、平格式土器、塞ノ神式土器、燃糸文土器なども出土している。田尻・尻枝遺跡で陥し穴状遺構2基とピット群、加治屋B遺跡で集石遺構19基、立岩遺跡で集石遺構31基と土坑6基、働女木遺跡で集石遺構1基と土坑1基、松ヶ迫遺跡では連結土坑が検出されている。

前期は、鬼界アカホヤ火山灰の降灰による影響か、遺跡数が激減する。都城市が行った笹ヶ崎遺跡の発掘調査（A区東側に隣接する地点）では、前期後半の曾畑式土器が出土している。加治屋A遺跡では、陥し穴状遺構が検出されている。

中期も引き続き遺跡数は少ない。都城周辺地域から、瀬戸内系の船元式土器が出土している。伊勢谷第1遺跡では、国内最古と思われる焼失住居が検出された。田谷・尻枝遺跡では陥し穴状遺構が検出されている。

後期は遺跡数が急増する。土器では凹線文土器、綾B式土器、指宿式土器、岩崎下層式土器、市来式土器、中岳II式土器、三万田式土器、丸野式土器、西平式土器のほか、黒色磨研土器と粗製土器も出現する。岩立

遺跡では竪穴建物跡2軒と土坑数十基が検出され、中岳Ⅱ式土器などが出土している。今房遺跡では磨製石斧と磨石を埋納した土坑が検出された。上牧第2遺跡では、後期初頭の竪穴建物跡が確認され、床面中央には焼土を含む炉と思われる土坑が設けられている。

晩期には、条痕文土器や組織痕土器、突帯文土器や孔列文土器が見られる。大岩田村ノ前遺跡では柱穴と見られるピットが楕円形状に巡る竪穴状遺構が検出されている。中尾山・馬渡遺跡では土坑6基が検出され、包含層からは、組織痕土器や孔列文土器などが出土している。横尾原遺跡では隅丸方形の小型の竪穴建物跡1軒が検出され、埋土から松添式土器や組織痕土器が出土している。

弥生時代

坂元A遺跡では、中世に至るまでの水田跡が検出され、同地区での稲作文化の継承がうかがえる。また、横市川対岸の脇穴遺跡では、刻目突帯文土器や石包丁などを伴う晩期末から前期にかけての松菊里型の円形竪穴建物跡と水田層が検出された。さらに黒土遺跡でも、石包丁や朽痕土器などが出土しており、イネのプラントオパールも検出されている。大岩田村ノ前遺跡では、黒髪式の甕を伴う竪穴状遺構が検出されている。また、牧の原第2遺跡や諸麦遺跡では、竪穴建物跡の埋土中から瀬戸内系の凹線文土器も出土している。40軒の竪穴建物跡が検出された加治屋B遺跡や、独立棟持柱をもつ掘立柱建物跡を検出した岩立遺跡もある。後期では、ベッド状遺構を伴う竪穴建物跡と、周溝状遺構が検出された加治屋A遺跡がある。平田遺跡D・E地点でも、中期後半から後期初頭にかけて同様の遺構が検出されているが、竪穴建物跡からは、約32cmの鉄矛が出土している。後半から終末期にかけては、花弁状住居跡や周溝状遺構などが検出された今房遺跡がある。この周溝状遺構からは、免田式の長頸壺や安国寺式の複合口縁壺などが出土している。脇穴遺跡でも、同時期の溝状遺構と木組状遺構とが直交する形で検出されている。

古墳時代

都城盆地は県内陸部では唯一前方後円墳が分布する地域で、地下式横穴墓も併せて分布しているが、横穴墓は分布しない。前方後円墳は、盆地北部に所在する高城牧ノ原古墳群（前方後円墳3基、円墳10基）、志和地古墳群（前方後円墳1基、円墳10基）、高崎塚原古墳群（前方後円墳1基、円墳18基）にみられる。地下式横穴墓は、雀ヶ野地下式横穴墓1基、高崎塚原地下式横穴墓群6基、横尾（細瀬）地下式横穴墓群5基、原村上地下式横穴墓群7基、築池地下式横穴墓群（志和地古墳内）6基、下川東牧ノ原地下式横穴墓群26基、菓子野地下式横穴墓群9基、香禅寺地下式横穴墓1基など盆地の台地上に分布がみられる。その他の墓制として、香禅寺地下式横穴墓群で地下式板石積石棺墓が1基、高城牧ノ原古墳群で箱式石棺墓4基が分布する。

集落遺跡は弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての集落に引き続き、前期の集落遺跡も数か所見られる。中期～後期の集落遺跡としては、平峰遺跡で竪穴建物跡31軒、土坑2基が確認されている。

後期にはいと横市川流域で大規模集落が見られる。鶴喰遺跡では68軒の竪穴建物跡が確認され、そのうち28軒でかまどが付設されていた。養原遺跡では一辺6～7mの大型竪穴建物跡が検出された。

古代・中世

10世紀成立の『和名類聚抄』によると、都城市は日向国五郡（臼杵郡・児湯郡・那珂郡・宮崎郡・諸県郡）の中の諸県郡に属する。また、平安時代中期編纂の延喜式兵部省諸国駅伝馬条には「鳥津駅」が見え、古代交通路の要衝であったことがうかがえる。その後の万寿年間（1024～1028）に大宰府大監平基による開発が始まり、関白藤原頼通に寄進し、12世紀後半に国内最大の荘園となる「鳥津荘」が成立したとされている。

その他、元暦二年(1185)源頼朝に鳥津荘下司職に任命され、日向・大隅・薩摩の各守護職に任命された惟宗(鳥津)忠久は、文治二年(1186)に、同荘惣地頭職に補任され、「鳥津」姓を名乗ったとされる。

本遺跡が所在する梅北地区周辺には、平季基関連の史跡などが分布している。梅北町益貫は居館跡であるとの伝承がある。季基は、万寿三年(1026)頃に当地に下向し、三俣院の主として益貫に居住したとされている。その他梅北川東岸の丘陵上に城取りし、四つの曲輪からなる群郭式山城として知られる梅北城も平季基の築城と伝えられるが確証はない。現在は城の中央部を残すのみだが、その北側と東側には土塁が現存し、空堀もほぼ原型をとどめている。

他にも、筆無遺跡(今町)では、掘立柱建物跡、周溝墓、土坑墓などが確認されている。遺物としては墨書土器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、貿易陶磁器、石帯、小型滑石製石鏡などが出土している。先述の惟宗忠久の史跡についても、建久七年(1196)当地に下り、初めは安久町の堀之内御所に住み、その後祝吉御所(郡元町)へ移ったと伝えられ、現在は「鳥津家発祥の地」の石碑が建てられている。このように梅北地区周辺には、古代からの史跡等が数多く散見され、鳥津荘開発の拠点として重要な地域であったと考えられる。

[参考文献]

- 都城市文化財調査報告書 第66集『王子原第2遺跡』都城市教育委員会 2004
都城市文化財調査報告書 第76集『梅北佐土原遺跡』都城市教育委員会 2007
都城市文化財調査報告書 第83集『梅北北原遺跡』都城市教育委員会 2007
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第42集『梅北佐土原遺跡・中尾遺跡・巖原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター 2001
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第63集『母智丘谷遺跡・畑田遺跡・嫁坂遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター 2002
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第166集『筆無遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター 2008
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第204集『梅北針谷遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター 2011
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第211集『平峰遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター 2012
都城市史編さん委員会『都城市史 通史編 自然・原始・古代』都城市 1997
都城市史編さん委員会『都城市史 通史編 中世・近世』都城市 2005
都城市史編さん委員会『都城市史 資料編 考古』都城市 2006
宮崎県『宮崎県史 通史編 中世』1998



- | | | | |
|-------------|----------|------------|------------|
| 1 笹ヶ崎遺跡 | 2 大年遺跡 | 3 中床丸遺跡 | 4 梅北針谷遺跡 |
| 5 梅北城跡 | 6 黒尾神社 | 7 下久保遺跡 | 8 今町一里塚 |
| 9 鶴尾遺跡 | 10 坂ノ下遺跡 | 11 働女木遺跡 | 12 平峰遺跡 |
| 13 油田遺跡 | 14 筆無遺跡 | 15 大岩田上村遺跡 | 16 黒土遺跡 |
| 17 大岩田村ノ前遺跡 | 18 大岩田城跡 | 19 王子原遺跡 | 20 梅北佐土原遺跡 |
| 21 大浦遺跡 | 22 嫁坂遺跡 | 23 金御岳遺跡 | 24 西生寺跡 |
| 25 千手院跡 | 26 保木島遺跡 | 27 高樋遺跡 | |

第1図 笹ヶ崎遺跡および周辺遺跡位置図 [S=1/50,000]

第三章 調査の記録

第1節 調査の経過

今回の調査は、第1章の第1節で説明したとおり、第一次～第三次調査まで実施している。以下、各調査ごとに経過を述べる。

1. 第一次調査（調査期間：平成26年5月27日～平成27年2月27日）

第1次調査は、B区4,600㎡を対象に実施した。調査前のB区は杉林と畑として利用されていた。地形は、全体的に平坦であるが、北東部が東に傾斜し、南部が南へ緩やかに傾斜していた。表土下は、Ⅱ層以下が良好な状態で残っている部分もあれば、Ⅲ層やⅤ層まで後世の耕作等により削平されている部分もあった。このうち、Ⅱ層は縄文時代後晩期～中世の包含層、Ⅳ層は縄文時代前期～中期の包含層、Ⅷ層は縄文時代早期の包含層として調査を行った。

調査は、試掘の結果をもとに、Ⅰ層（耕作土）を重機により除去（無遺物層であるⅢ層・Ⅴ～Ⅶ層・Ⅸ層～ⅩⅡ層も重機掘削）し、Ⅱ層・Ⅳ層・Ⅵ層・ⅩⅢ層を人力掘削した。また、排土置き場確保のため、調査区を前半部（調査区北側）・後半部（調査区南側）に分割し、調査区北側より調査を実施した。

前半部では、5月27日より北側にあった杉根エリアからⅠ層の重機掘削を行った。南側において試掘結果にはないⅡ層が存在したが、人力掘削の結果、遺構は検出されず、遺物のみ出土した。Ⅲ層上面では、竪穴建物跡2軒・ピット群・溝状遺構6条・土坑2基を検出した。竪穴建物跡からは、古墳時代の遺物が出土した。溝状遺構からは、青磁や古代の遺物が出土した。土坑からは、土師器小片と土錘が出土した。9月12日に空中写真撮影を行ったあと9月17日より重機による杉の抜根を行い、Ⅲ層の霧島御池軽石層の重機掘削を行った。

次にⅣ層上面の精査を行ったが、遺構は検出されなかった。遺物は、5m×5mトレンチを設定しⅣ層の25%人力掘削を行ったが、土器片・石器が数点出土したのみであった。

9月30日より、搬出通路確保のため前半部の西側にダンプ通路を設定したため、先行してⅣⅣ層（シラス層）までの調査を行った。次にⅤ層上面を精査し、ピット群を検出したが、掘立柱建物跡等は確認できなかった。遺物は、土器片や石器が出土した。重機でⅤ～Ⅶ層を掘削後、Ⅷ層上面で精査したが、遺構は検出されなかったため、予定されていたⅧ層面での空中写真撮影は行わなかった。また、5m×5mトレンチを設定しⅧ層の25%人力掘削を行ったが、土器片が6点出土したのみであった。最後に重機でⅣⅣ層（シラス層）上面までを10%掘削したのち精査したが、遺構遺物ともに検出されなかったため10月23日から排土反転を行った。

後半部の表土掘削は、10月28日より行い、Ⅱ層・Ⅲ層上面での精査を行った。その結果、溝状遺構8条、掘立柱建物跡8棟、竪穴建物跡1軒、土坑7基、犬走状遺構1条を検出した。遺物は、土器片・石器・青磁が出土した。12月19日に空中写真撮影を行った。

1月7日より、Ⅲ層の重機掘削を行いⅣ層上面で精査した結果、土坑8基を検出した。遺物は、土器片・石器が出土した。また、5m×5mトレンチを設定しⅣ層の25%人力掘削を行ったが、土器片が十数点出土したのみであった。その後Ⅴ層上面で精査したが、遺構・遺物ともに検出されなかったため、2月2日よりⅧ層上面までを重機掘削した。

Ⅷ層上面では調査区東側を中心に散礫がまばらに検出された。また、調査区東側を中心に土器片や石器が

検出された。5m×5mトレンチを設定しⅧ層の25%人力掘削を行った。東側を中心に礫が多く見られたが、集石遺構となるものはなかった。東側は遺構検出の可能性が高いと判断したため、人力でIX層まで掘削した。その結果、IX層で集石遺構が1基検出された。2月13日より、重機でXIV層（シラス層）上面までを10%掘削したのち精査したが、遺構・遺物ともに検出されなかったため埋め戻し、調査を終了した。

現地での調査終了後、宮崎県埋蔵文化財センター本館に出土品及び図面などの記録類を持ち帰り、平成27年4月～12月の期間で整理作業を行った。

2. 第二次調査（調査期間：平成26年7月28日～平成27年2月27日）

第二次調査の対象面積は、A区1,700㎡、C区1,500㎡で、計3,200㎡である。調査に先立ち、平成26年7月23日から調査事務所等の建て込み、25日から重機によるC区の竹木等の伐採を行った。

大年遺跡方面からの橋梁工事が10月頃から予定されていたため、南側のC区から調査に取りかかった。7月28日から重機による表土除去後、8月7日より25名の発掘作業員の雇用を開始した。まず、縄文時代晩期までの遺物包含層であるⅡ層からⅣ層を人力掘削し、精査を行った。遺物量は全体的に少なく、出土状況は調査区北側に偏っていた。ブロック状に残るⅢ層桜島文明降下軽石層の下層から、中世の溝状遺構7条、土坑墓1基、堀切、犬走状遺構1条を検出し、10月29日に第1回目の空中写真撮影を行った。続いて11月5・6日に無遺物層のⅤ層霧島御池降下軽石層(Kr-M)、Ⅵb層鬼界アカホヤ火山灰層(K-Ah)、Ⅶ層桜島末吉テフラ濃集層(Sz-Sy)までを重機で掘削した。11月11・12日には、橋脚建設工事のために調査区南端が約2m切り落とされた。Ⅷ層以下を25%掘りで人力掘削を行っていたが、礫の検出が多かったため全面掘りに変更し掘削を進め、縄文時代早期の集石遺構2基を検出した。その後IX層桜島薩摩テフラ層(Sz-S)以下を25%掘削し、縄文時代草創期の集石遺構1基を検出した。遺物出土は数点のみで少なかった。

A区では、9月3日から重機による竹木等の伐採、続いて11日から16日まで表土除去を行った。Ⅱ層黒褐色土層の人力掘削は10月8日から開始し、とくにⅣ層から縄文時代晩期から中世の土器片、陶磁器片、石器を多数取り上げた。遺物量は、C区よりもA区の方が多かった。遺構は、中世の堀切・土塁・平坦部、縄文時代後期～晩期の土坑3基、及び時期不明の土坑1基を検出した。12月18日に、Ⅴ層霧島御池降下軽石(Kr-M)層上面で第2回目の空中写真撮影を行った。

次に、平成27年1月13日からⅤ層霧島御池降下軽石層(Kr-M)の重機掘削を行い、続いてその下のⅥ層黒褐色土層を人力掘削した。さらに1月22日には、Ⅶa層鬼界アカホヤ火山灰二次堆積層およびⅦb層鬼界アカホヤ火山灰層(K-Ah)の重機掘削を行い、続いてその下のⅦa層黒褐色土層を人力掘削したが、遺構・遺物は確認できなかった。

次に、2月2日からⅧb層桜島末吉テフラ濃集層(Sz-Sy)を重機掘削し、Ⅷc層からIX層桜島薩摩テフラ(Sz-S)を含む層までを25%人力掘削したが、やはり遺構は確認できず、調査区北側に密度の低い散礫が見られた程度であった。遺物は、縄文時代早期の土器片が数点出土した。2月10日に、調査区遠景の第3回空中写真撮影を行った。2月19日にA区、20日にC区を重機で埋め戻しを行い、調査区壁面の土層断面図を作成し、現地での調査を終了した。

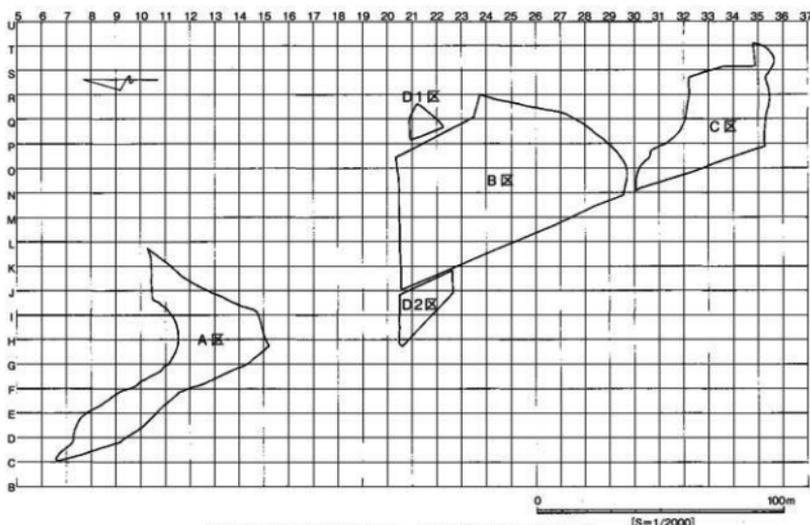
現地での調査終了後、B区同様、宮崎県埋蔵文化財センター本館に出土品及び図面などの記録類を持ち帰り、平成27年4月～12月の期間で整理作業を行った。

3. 第三次調査（調査期間：平成 27 年 7 月 2 日～同年 8 月 28 日）

調査は、平成 27 年 7 月 2 日から同年 8 月 28 日にかけての約 2 か月間実施した。対象面積は、第一次調査（B 区）北東側の D1 区の 150m²、北西側の D2 区の 350m² の計 500m² である。平成 27 年 7 月 2 日から調査事務所等の設置、同月 3・6 日に重機を用いて I～II 層（現代の耕作土・造成土）及び III 層（桜島文明降下軽石層）の除去を行った。7 月 6 日から作業員を雇用し、D1・D2 区の一部に残っている IV 層（古代～中世の包含層）を人力掘削によって掘り下げ、V 層の霧島御池降下軽石層（Kr-M）上面での遺構検出・精査を行った。IV 層は、残存状況が悪く、出土遺物は少量であったが、古代～中世頃の土師器・陶磁器などが出土した。一方、遺構は、古墳時代の土坑 1 基、古代～中世の遺状遺構と推測される硬化面 1 か所、中世の柵列 2 条・溝状遺構 2 条を確認した。

8 月 11 日に V 層上面での検出状況の空中写真撮影を行い、同日より B2 区南側の約 35m² の VI 層以下の人力掘削を開始した。VI 層において、遺構は確認されなかったが、縄文時代前期～中期頃の縄文土器や石器類が検出された。VI 層の遺構・遺物検出頻度が低かったことや試掘調査の結果を受けて、VI 層以下はトレンチ調査に切り替えた。トレンチは、B1 区に 3 か所、B2 区に 4 か所の計 7 か所（のべ面積は約 70m²）設置し、それぞれ、VI 層以下、X I 層（桜島薩摩テフラ層）まで掘り下げたが、遺構・遺物ともに確認できなかった。平成 27 年 8 月 28 日までに遺構検出状況図や土層堆積状況図などの必要な情報の記録、調査区域の重機による埋め戻し、事務所等の撤去等を行い、現地での調査を終了した。

調査終了後、宮崎県埋蔵文化財センター本館に出土品及び図面類などを持ち帰り、平成 27 年 9 月下旬から整理作業・報告書作成作業を行った。



第2図 笹ヶ崎遺跡グリッド配置図 [S=1/2,000]

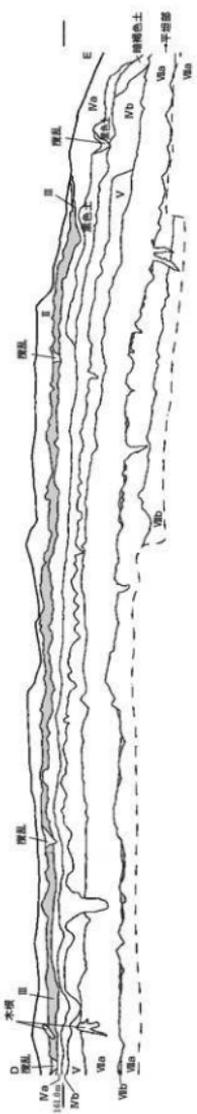
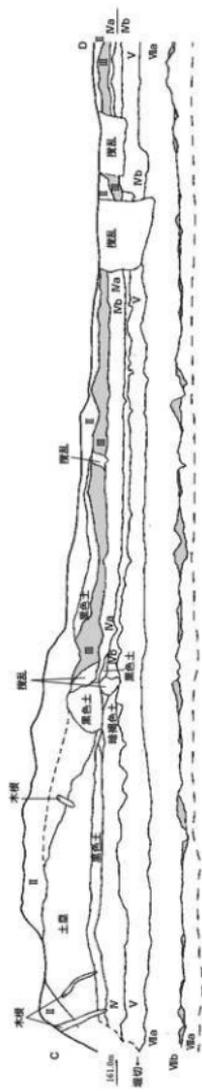
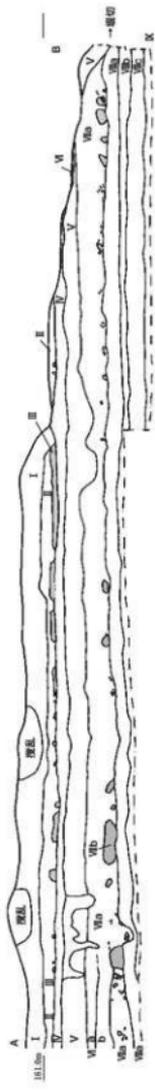
第2節 基本層序

笹ヶ崎遺跡の調査においては、都城地区での遺構検出の鍵層である霧島御池降下軽石層 (Kr-M 約 4,600 年前)、鬼界アカホヤ火山灰層 (K-Ah 約 7,300 年前)、桜島末吉テフラ濃集層 (Sz-Sy, P11 約 8,000 年前)、及び桜島薩摩テフラ層 (Sz-S, P14 約 12,800 年前) 上面で遺構検出を行った。具体的な層序については、調査区毎に特徴が異なるため、以下それぞれに述べる。

1. A区の基本層序

I層	灰褐色砂質土 (Hue7.5YR 4/2)	2-5nm の中径の灰白色の粒子を 10% 程含む 耕作土・造成土
II層	黒褐色砂質土 (Hue7.5YR 2/2)	7nm 以下の灰白色の粒子 (文明ボラ) が 30% 程混じる 旧耕作土
III層	灰白色砂質土 (Hue2.5Y 8/2)	桜島文明降下軽石層 (Sz-Bm, P3, AD1,471 年 文明ボラ層)
IV層	黒褐色砂質土 (Hue10YR 2/2)	霧島御池降下軽石由来の黄褐色の小径の粒子を 5% 程含む (遺物包含層)
V層	黄褐色砂質土 (Hue7.5YR 7/8)	霧島御池降下軽石層 (Kr-M, 約 4,600 年前 御池ボラ層)
VI層	黒褐色砂質土 (Hue7.5YR 2/2)	霧島御池降下軽石由来の黄褐色の小径の粒子が 2% 程混じる (遺物包含層)
VII a 層	明褐色砂質土 (Hue7.5YR 5/6)	鬼界アカホヤ火山灰二次堆積層 (K-Ah 二次堆積層)
VII b 層	黄褐色砂質土 (Hue7.5YR 7/8)	鬼界アカホヤ火山灰層 (K-Ah, 約 7,300 年前)
VIII a 層	黒褐色砂質土 (Hue10YR 2/2)	P11 由来と思われる黄褐色の小径～極小径も粒子を 10% 程含む
VIII b 層	黒褐色砂質土 (Hue10YR 2/2)	桜島末吉テフラ濃集層 (Sz-Sy, P11 約 8,000 年前)
VIII c 層	黒褐色砂質土 (Hue10YR 3/2)	上層は P11 由来、下層は P14 由来の粒子・塊が混じる
IX層	ぶい黄褐色砂質土 (Hue10YR 7/4)	桜島薩摩テフラ (Sz-S, P14 約 12,800 年前) の大径のブロック状の塊を含む 中径の黄褐色の粒子が 1% 程混じる

このうち、II層が中世～近世、IV層が縄文時代後期～中世、VI～VII a 層が縄文時代前期～中期、VIII層が縄文時代早期の遺物包含層であった。A区土層は、調査区の南側に明瞭なVI層の堆積が見られるが、北側の方では、次第に黒褐色土が明褐色土へと変化する。それとほぼ同じ地点から、その上層ではIII層が明瞭な層として残存するという特徴があった。I層は表土で、層厚は約 10～20cm である。II層は、桜島文明降下軽石を含む層厚約 10cm の旧耕作土である。III層は、調査区南側の残存状況はよくないが、VI層黒褐色土が消失する辺りから北端に向かって、ほぼ全面に約 10cm 程の良好な堆積が見られた。この層の下からは、堀切、土塁、平坦な造成部、および土坑 4 基を検出した。IV層は霧島御池降下軽石を含む黒褐色土層 (場所により、より暗色の a 層と明色の b 層に細分化) で、中世の土師器、陶磁器から縄文時代晩期の土器、石器などの遺物出土量が最も多かった包含層である。V層は御池ボラ層で、調査区全体に 20～30cm の層厚で堆積していた。VI層は黒褐色土層 (場所により、より暗色の a 層と明色の b 層に細分化) で、遺物の出土量は少なかった。VII a 層は鬼界アカホヤ火山灰二次堆積層で、層厚は約 40cm を測る。VII b 層が鬼界アカホヤ火山灰堆積層 (K-Ah) で、ブロック状に堆積している。最下層には火山豆石が確認できた。VIII層は、層厚約 30～40cm の黒褐色土層であるが、桜島末吉テフラ (Sz-Sy, P11) の含有量の差によって、少量を含むVIII a 層、濃集層であるVIII b 層、極少量を含むVIII c 層に分けた。この層からは、縄文時代早期の土器片が出土したほか、散濺を検出したが、遺構に関するものは確認できなかった。IX層が、層厚約 20～30cm の桜島薩摩テフラ (Sz-S, P14) を含むぶい黄褐色土層である。なおIX層以下は、X層がぶい黄褐色土層、XI層は橙色土層、XII層が淡黄色土層 (入戸火砕流二次堆積層) である。

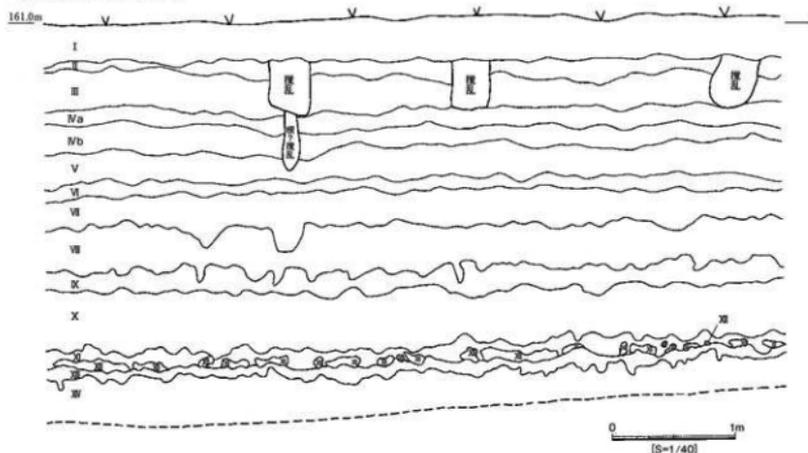


第3图 A区土层断面图

0 20m
[1:500]

2. B区の基本層序

B区中央部の土層断面図を第4図に示した。土層は霧島御池降下軽石(Kr-M)と鬼界アカホヤ火山灰層(K-Ah)の2つを鍵層とし、中央部にのみII層が確認できたため、中央部の土層断面図がB区の土層堆積状況を反映していると考えられる。



基本層序 (調査区中央部)

- 第I層 黒褐色(10YR 3/1)の表土で平均層厚35cm前後。小径の黄橙バミスと中径の灰白色軽石を7%含む。
- 第II層 縄文時代後晩期の包含層で黒褐色(10YR 3/3)、平均層厚20cm前後。小径の黄橙バミスを10%含む。調査区中央に見られる。
- 第III層 霧島御池軽石(Kr-M)の堆積層(10YR 5/6)で平均層厚30cm前後。耕作等の影響で調査区南東部において残存していないところがあるが、全体的に安定した堆積状況である。
- 第IV層 縄文時代前期～中期の包含層で黒褐色(10YR 3/2)、平均層厚25cm前後。小中径の黄橙バミスを少量含む。
- 第IV層 a 縄文時代前期～中期の包含層で黒褐色(10YR 3/2)、平均層厚10cmで中径の黄橙バミスを7%含む。
- 第IV層 b 縄文時代前期～中期の包含層で黒褐色(10YR 3/2)、平均層厚15cmで小径の黄橙バミスを3%含む。
- 第V層 鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)の堆積層(10YR 5/6)で平均層厚30cm前後。調査区全体で安定した堆積状況である。
- 第VI層 黒褐色土(10YR 2/2)で平均層厚10cm前後。小中径の黄橙バミスを5%含む。同層中から遺構・遺物は確認されなかった。
- 第VII層 桜島II(SZ-II)テフラを含む黒褐色土層(10YR 3/1)で平均層厚25cm前後。小中径の黄橙バミスを密に含む、しまりが強い。同層中から遺構・遺物は確認できなかった。
- 第VIII層 縄文時代早期包含層の黒褐色(10YR 2/2)で平均層厚10cm前後。中径の黄橙バミスを少量含む。
- 第IX層 桜島薩摩(SZ-S)を含む暗褐色土層(10YR 3/3)で平均層厚20cm前後。大径の黄橙バミスを少量含む。集石遺構を確認できた。
- 第X層 暗褐色土層(10YR 3/3)で平均層厚45cm前後。黒褐色(10YR 3/1)のまだら模様で下側ほど多く見られる。
- 第XI層 褐色土(10YR 5/6)で平均層厚15cm前後。粘性が強く、粒子が細かい。
- 第XII層 黄褐色土(10YR 5/8)で平均層厚10cm前後。小中径のバミスを密に含む。
- 第XIII層 褐灰色土(10YR 5/1)で平均層厚10cm前後。極めて粘性が強い。
- 第XIV層 シラス層(10YR 7/6)で遺構・遺物は確認されなかった。

第4図 B区土層断面図 [S=1/40]

3. C区の基本層序

- I層 灰褐色砂質土 (Hue7.5YR 4/2) 2-5mmの中径の灰白色軽石粒を10%程含む
- II層 黒褐色砂質土 (Hue7.5YR 2/2) 7mm以下の灰白色軽石粒(文明ボラ)が30%程混じる
- III層 灰白色砂質土 (Hue2.5Y 8/2) 桜島文明降下軽石層 (Sz-Bm, P3 AD1471年 文明ボラ層)
- IV層 黄褐色砂質土 (Hue10YR 5/8) 霧島御池降下軽石由来の径2mm以下の黄橙色の粒子を多く含む(遺物包含層)
- V層 黄橙色砂質土 (Hue7.5YR 7/8) 霧島御池降下軽石層 (Kr-M, 約4,600年前 御池ボラ層)
- VIa層 明黄色砂質土 (Hue7.5YR 5/6) 鬼界アカホヤ火山灰二次堆積層 (K-Ah 二次堆積層)
- VIb層 黄橙色砂質土 (Hue7.5YR 7/8) 鬼界アカホヤ火山灰層 (K-Ah, 約7,300年前)
- VII層 黒褐色砂質土 (Hue10YR 2/2) 桜島末吉テフラ濃集層 (Sz-Sy, P11 約8,000年前)
- VIII層 黒褐色砂質土 (Hue10YR 3/2) ごく少量の10-20mm程のにぶい黄褐色の塊を含む
- IX層 にぶい黄橙色砂質土 (Hue10YR 7/4) 桜島薩摩テフラ (Sz-S, P14 約12,800年前) の大径のブロック状の塊を含む 中径の黄橙色の粒子が1%程混じる
- X層 にぶい黄橙色砂質土 (Hue10YR 6/4) 明黄褐色の中径のブロック状の塊が混在する
- XI層 橙色粘質土 (Hue7.5YR 6/8) 浅黄褐色の大径の塊を含む 底部に非常に固くしめる塊が見られる
- XII層 淡黄色砂質土 (Hue2.5YR 8/3) 灰白色の板状構造がみえる 入戸火砕流二次堆積層(シラス)

このうち、II層が中世～近世、IV層が縄文時代後期～中世、VIII層が縄文時代早期の遺物包含層であった。I層は表土で、層厚は約10～30cmである。II層は、桜島文明降下軽石を含む層厚約10～30cmの旧耕作土で、土器片や陶磁器片、石器などが出土した。III層は、桜島文明降下軽石層 (Sz-Bm, P3, AD1471) で、調査区全体に残存状況はよくなく、所々小さなブロック状に見られる程度だが、中世の遺構に関係する地点では埋土として残り、保存状態がよかった。IV層は黄褐色土層で、霧島御池降下軽石を多く含む層厚約20～50cmの層で、土器片や石器などが少量出土した。V層は霧島御池降下軽石層 (Kr-M, 約4,600年前) で、調査区全体に20～40cmの層厚でブロック状に堆積していた。A区南側でV層の下に見られた黒褐色土層は、C区には全く見られず、VIa層に鬼界アカホヤ火山灰二次堆積層が約50～60cmの層厚で、VIb層に鬼界アカホヤ火山灰層(K-Ah)がブロック状に10～20cmの層厚で堆積している。VIb層の最下層には火山豆石が確認できた。VII層は、桜島末吉テフラ (Sz-Sy, P11 約8,000年前) を含む黒褐色土層で、層厚約40～50cmを測る。VIII層は、層厚約20～40cmの黒褐色土層である。この層からは、縄文時代早期の散濫及び集石遺構2基を検出した。遺物は、縄文時代早期の土器片や石器が出土した。IX層が層厚約15～25cmの桜島薩摩テフラ (Sz-S, P14 約12,800年前) をブロック状に含むにぶい黄橙色土層で、この層の下位でX層上面に近い位置から、縄文時代草創期の集石遺構1基を検出した。X層が、にぶい黄橙色土層で層厚約35～45cm、XI層は層厚約15～25cmの橙色土層、XII層が淡黄色土層(入戸火砕流二次堆積層)であった。いずれも無遺物層である。なお、C区南端には土地改変の跡がうかがえるが、埋土状況を第5図に示している。

第3節 遺構と遺物

1. A区の遺構と遺物

本調査区では、縄文時代早期から中世にかけての遺構・遺物が確認された。以下、時代毎に述べる。

(1) 縄文時代早期の遺物

本調査区では、VIIb層鬼界アカホヤ火山灰層下位のVIII層の掘削において、以下の遺物が出土した。なお、遺構は検出されなかった。

土器 [第10図 - 1・2]

1、2は深鉢である。1は調査区南側中央部のG 13 グリッドより出土した。内面は縦方向にケズリによる調整を施す。外面には縦方向の貝殻腹縁刺突文が見られ、知覧式土器の胴部片と考えられる。2は、内面に横方向のナデ調整が見られ、炭化物が付着している。外面は剥離気味だが、網目状捺糸文がみられ、塞ノ神式土器の胴下部～底部片と考えられる。

(2) 縄文時代前期の遺物

本調査区では、V層霧島御池降下軽石層下位のVI～VII a層掘削において、以下の遺物が出土した。出土地点は、ほとんどが調査区北側の舌状に延びる台地上に偏っている。なお、遺構は検出されなかった。

土器 [第10図 - 3～6]

すべて深鉢である。3は口縁から胴部片である。内面に横・斜め方向の粗い貝殻条痕文が見られ、外面上部は3条の貼付突帯文、その下位は斜め方向の粗い貝殻条痕文の上に斜め方向の貼付突帯文が付く。轟B式土器と考えられる。4は口縁から胴部片である。内面は丁寧な横方向のナデによる調整が施され、口縁部には5条の沈線文、口唇部には刺突文を施す。口縁部は外反し、外面上位に6～8条の横方向の短い沈線文、その下位には2～3条の縦方向の沈線文で区画した中を斜位の短沈線文を交互に施して埋め、ススが付着している。5は口縁から胴部片である。内面上部は斜め方向の貝殻条痕文の上を横方向のナデ、下部は横方向のナデ、内面口縁部には鋸歯状の沈線文の間を横位の短沈線文で充填している。部分的に黒斑、口縁部付近と下半部にススの付着が見られる。外面上部にも横方向の沈線文による綾杉文や折帯文が施される。下半部には斜め方向の浅い沈線文の後、ナデ調整を施した跡が見える。上半部には多量のススが付着する。口唇部は、斜め方向の連続刺突文が見られる。6は胴部片である。内面は丁寧な横方向のナデによる調整、外面は横方向の沈線文と縦方向の短沈線文が交互に施される。4～6は曾畑式土器と考えられる。

石器 [第13図 - 32]

打製石鏃

32はC7グリッドVII a層調査区北端舌状台地先端部に向かう落ち際に出土した。形状は正三角形に近く、両端の上半分は直線的に、下半分は3つの弧が連なるように加工されている。基部は深い抉りがあり、脚部は円形に加工している。黒曜石製(腰岳産か)である。

(3) 縄文時代後期～晩期の遺構と遺物

本調査区では、霧島御池降下軽石層上位のIV層掘削において、土坑3基と土器集中部1箇所を検出した。いずれも調査区南側で検出された。遺物も土坑の周辺部に多く出土する傾向があり、調査区南側が活動の中心部であったと考えられる。

土坑 (SC)

本調査区では、霧島御池降下軽石層の上面で、13基の土坑と多数のピットを検出した。調査区の大部分が山林として利用され、杉や檜の樹根の影響を非常に大きく受けていたため、遺構検出に困難を極めた。検出されたピットは80基を数えるが、堅穴建物跡の柱穴列等、遺構と推定できるような規則性を見出すことができなかった。2号・3号および7～13号土坑は、樹痕によるものと判断し、遺構からは除外した。また、5号土坑は、埋土中の炭化材を自然科学分析した結果、近世の年代値がでたため、(6) 時期不明の遺構と遺物の項で述べる。

1号土坑 (SC1)

調査区最南端の斜面際で検出した(G15グリッド)。全掘していないが、形状は、長辺約1.3m+ α 、短辺約0.7～0.9m+ α の不定形を呈する。検出面の標高は約160.5mで、現況の深さは検出面から最大で1.1mを測る。埋土は、しまり・粘性ともに弱い黒褐色土で、縄文時代晩期の土坑と考えられる。埋土からの遺物の出土はなく、使用目的は不明である。

4号土坑 (SC4)

H12グリッドで検出した。形状は、長辺2.9m、短辺1.0mの長楕円状で、北から約10°西に振った谷部方向に長軸を取っている。検出面の標高は約160.5mで、現況の深さは、検出面から最大で0.5mを測る。埋土は、しまり粘性ともに弱い黒褐色土で、縄文時代晩期の土坑と考えられる。埋土中の遺物は無いが、遺構周辺部からは、磨製石斧(39)や、晩期の浅鉢片が多く出土した。

6号土坑 (SC6) [第6図]

G13グリッドで検出した。プランは、直径1.0mのほぼ正円を呈し、深度は検出面から0.5mを測る。埋土は、しまりやや強く、粘性やや弱い黒褐色土で、埋土からは剥片1点、土器片2点、計3点の遺物が出土した。

【SC6出土遺物】

土器 [第11図～11]

11は粗製深鉢の口縁部から胴部片である。SC6から出土した土器片と周辺から出土した土器片が接合したものである。内面は上半分が風化のため不明であるが、下半分はナデ調整、一部に横方向の貝殻条痕文が残る。頸部には一部指頭痕がある。外面上半分は、横方向の貝殻条痕文の後横方向のナデ、下半分は横・斜め方向の貝殻条痕文がみられる。外面上部にはススが付着する。口唇部・内外面に門歯痕と思われる傷がある。

土器集中部①出土遺物 [第12図～22]

22は、G13グリッドSC6北西側で確認された土器集中部①[第6図]で出土した縄文時代晩期の組織痕土器である。波状口縁をもち、内面調整は上半分が横方向の丁寧なナデ、下半分が粗いナデである。外面は、上部に貝殻条痕文が見え、ススが付着する。下半分が粗いナデで、下位に編布圧痕が見られる。

【包含層出土遺物】

遺物は、調査区南側中央部のG13～H13グリッド周辺から南東側にかけて集中して出土しており、北側からの出土はほとんど無い。

土器 [第10～13図 - 7～10・12～21・23～31]

7～10・12～14は粗製深鉢である。7・8は口縁部片で、2点とも内外面は横方向のナデ調整が施され、口縁部が肥厚し無文の口縁帯を成す。7の外面にはススが付着する。9は底部片で、内外面とも横方向のナデ調整が施され、外面には貝殻条痕文が見られる。10は底部片で、内面は横方向の粗いナデ調整と部分的な黒斑が見える。上部にコゲ有り。外面は、胴部に横方向の貝殻条痕文、底部が横方向のナデ、底面のナデには指押さえの跡がある。また、外面に白色物・黒色物が付着する。底部は完形。12は口縁から胴部片で、内面は横方向の工具ナデによる調整が施され、部分的に指押さえの跡がある。口唇部は横ナデ、外面上半分は横・斜め方向の工具ナデで、部分的に指押さえの跡がある。下半分は斜め方向の貝殻条痕文が見られ、剥離気味である。13は胴部から底部片で、内面はナデ、外面は横方向のナデ調整を施す。14は底部片で、内面はナデ、外面は斜め・横方向の工具ナデ調整が施される。内面は黒変する。

15～21・23～25は粗製浅鉢である。15は口縁から胴部片で、内面上部は横方向のミガキ、下部は横方向のナデ、外面には貝殻条痕文、口縁部にススの付着が見られる。16は口縁から底部片で、内面底部はナデ、胴部は横方向の貝殻条痕文が見られ、口縁部は横方向のナデ、全体的に黒斑が認められる。外面口縁部は横方向のナデによる調整が施され、胴部は横・斜め方向の貝殻条痕文が見られ、ススの付着が認められる。底部は組織痕の後、不定方向の貝殻条痕文、ナデ調整を施す。17～20は組織痕土器である。17は口縁から底部片で、内面胴部に斜め方向のナデと広範囲に黒斑が認められる。口縁部内面は横方向のナデと一部ススの付着があり、外面は横方向の貝殻条痕文の後、横方向のナデによる調整が施され、一部に粘土の継ぎ目が残る。胴部は「く」字状に屈曲し、底部にかけて明瞭な編布圧痕が見られる。外面の屈曲部分から上部にはススが付着する。18は胴部片で、内面は横方向の粗いナデ、外面は縦方向の工具ナデによる調整を施す。下部は「く」字状に屈曲し編布圧痕が見られる。19・20は底部付近である。19は、内面調整が縦方向の粗いナデで、黒斑がある。外面には網目圧痕が見られる。20は、内面調整が縦方向のナデで、外面には網目圧痕が見られる。21は口縁から底部片で、内面は胴部から底部にかけてナデ調整を施し、「く」字状に屈曲する部分には指頭痕が見られる。口縁部は内外とも横方向の貝殻条痕文が見られる。外面胴部は斜め方向の粗いケズリが見られるが、底部は風化が著しく調整は不明である。外面一部にススが付着する。23～25は口縁部片である。23は、内外面とも横方向のナデの調整を施し、口唇部はとくに丁寧な横方向のナデである。口縁部の外周に、粘土の接合部分のくぼみがある。24は、内外面とも調整は横方向のナデで、下部に孔列文を有す。外面から内面にかけて貫通している。外面にはススが付着し、口唇部には外へ張り出すように粘土を貼り付けた跡が見える。25は、内外面とも横方向の粗いナデ調整と沈線文、部分的な黒斑が見える。ヒレ状突起を貼り付けている。

26～31は精製浅鉢である。26は口縁から胴部片で、内外面とも横方向のミガキが施され、胴部外面には幅0.8mmのミガキの跡が見える。内外面とも部分的にススが付着する。胴部は「く」字状に屈曲し、口縁部は丸くおさめる。27は口縁から頸部片で、頸部が「く」字状に外傾し、口唇部にはヒレ状突起が付く。口唇部から外面にかけては赤色顔料がわずかに付着している。外面は横方向のナデの後、沈線文を施す。内外面ともススが付着する。28は口縁から胴部片で、胴部内面は横方向のナデ、口縁部内面から外面

は横方向のミガキによる調整を施す。口唇部にはヒレ状突起が付き、頸部はほぼ直角に屈曲する。口唇部から外面にススの付着が見られる。29は、口縁部片が内外面とも横方向のミガキ、口唇部は横ナデの調整を施す。頸部から胴部片は、内面は風化が著しく、頸部にミガキ痕がわずかに残る。外面は、上半分は横方向のミガキ、底部に近い部分は横・縦方向のミガキ調整を施す。胴部・頸部でほぼ直角に屈曲し、胴部の最大径部には沈線文が見られる。30は頸部から胴部片である。内面は下半部が丁寧なナデ、上半部が横方向のミガキ、外面は胴部の最大張り出し部より上部は横方向のミガキ、下部は縦方向のミガキ、さらに下は丁寧な横方向のナデで調整している。頸部に1箇所穿孔が見られる。一部にススが付着。31は、口縁から胴部片で、内外面とも横方向のミガキが施され、口唇部は横方向のナデによる調整である。胴部で「く」字状に屈曲し口縁部が外反する。

石器 [第13図 - 33~41]

遺物は、調査区南側のG13~H13グリッド周辺での出土が多かった。

石錐

33はG13グリッドIV層で出土した。つまみ部はなく、表裏両面に剥離を加えて下端を錐状に尖らせている。チャート製である。

打製石斧

34はG13グリッドIV層で出土した。いわゆる撥形を呈し、上部には深い抉りが見られる。35はH13グリッドIV層で出土した。上下両端が張り出し、上部に近い部位に抉りが見られる。右側縁部は複数回の敲打により直線的に、左側縁部は、曲線的に加工されている。36はH14グリッドIV層で出土した。下部のみが残存し、全体の形状は不明である。37はH13グリッドIV層で出土した。下部のみが残存し、全体の形状は不明である。34~37は、すべてホルンフェルス製である。

二次加工剥片

38はI14グリッドIV層で出土した。横長剥片に二次加工を施している。ホルンフェルス製である。

磨製石斧

39はH12グリッドSC4周辺のIV層で出土した。ほぼ完形だが、先端部がわずかながら欠けている。40はG14グリッドIV層で出土した。上部が1/3程度欠損していると考えられる。2点ともホルンフェルス製である。

磨石

41はD8グリッドIV層で出土した。正門に近く、端部にわずかながら敲いたような使用痕が認められる。上下両面に磨り跡が見られる。砂岩製である。

(4) 古墳時代の遺物

【包含層出土遺物】

遺構はなく、古墳時代の土師器が調査区南側の台地から一段下のI12グリッドで出土した。

土器 [第14図 - 42]

42は壺の胴部~底部片である。内面は風化気味で、多くの炭化物が付着している。外面は横・斜め方向のナデ調整を施し、部分的に炭化物が付着している。

(5) 古代～中世の遺構と遺物

【遺構】

古代の遺構は検出されなかった。土器集中部が1か所あり。中世に関する遺構では、地元では、当遺跡周辺が中世の城であったという伝承があり、調査前の地表面観察から堀切と土塁の存在がおおよそわかっていた。今回、霧島御池降下軽石層上層のIV層掘削において、堀切1条、土塁1基が確認され、さらに平坦部および浅い堀切1か所を検出した。堀切・土塁をはさむ調査区南側と北側は、ほぼ同じ標高約160mの台地である。堀切と浅い堀切の堀底の高さは約158mで、北から30°東に振った方向に、同じ向きで掘られている。堀切・平坦部は、埋土の文明ボラ堆積状況から、降灰時期（AD 1,471年）にはすでに掘りが埋まっていることから、構築されたのは南北朝期の14世紀頃だと考えられる。

土器集中部②出土遺物 [第14図 - 43]

43はG13グリッドの土器集中部②（第7図）から出土した古代の土師器の甕の口縁から底部片である。内面口縁部は丁寧な横方向のナデ、胴部は斜め方向のケズリによる調整が施されている。なお、底部は風化が著しく調整方法は不明である。外面調整は、丁寧なナデである。上半部にススが付着する。

堀切 [第8・9図]

E10～E11グリッドで検出した。V層霧島御池降下軽石層上層から、入戸火砕流堆積物層（シラス層）まで約2m掘り込んでいる。堀底の形状は菜研堀で舌状台地を分断するように掘られている。埋土はほぼ自然堆積が見られ、霧島文明降下軽石層は埋土中に明瞭に確認できる。底部には、幅約0.5mのラミナ状堆積を示すと考えられる硬化面が、明瞭に確認できる。遺構埋土からは、銅製品（91）や中世の土師器片が出土した。

【堀切出土遺物】

銅製品 [第15図 - 91]

91は堀切の埋土3層から先端部が曲がった状態で出土した銅製の筭である。表面には緑青が認められる。

土塁 [第8・9図]

E10グリッドで検出した。堀切から出た残土を、北側に積み上げて造作しているが、アカホヤ火山灰だけを選り分けて、別途盛り上げたようにみえる。盛土の下部はしまりが強く、上部の層はしまりが弱い傾向があった。盛土の高さは標高約162.5mで、構築面からの高さは約1.5m、堀底からの比高差は、約4.5mになる。遺構に伴う埋土中から遺物は出土しなかった。

平坦部 [第8・9図]

C7グリッドで検出した。調査区北端の舌状台地先端部を削平し、平坦面を造作している。先端の平坦部の手前は、幅約1.2m、深さ約0.5mの、浅い堀切で台地を区切っているのが確認できる。箱堀の形状で、ほぼ水平に標高約158mのシラス層まで掘られている。埋土は自然堆積により堀が埋まった後、桜島文明降下軽石が水平に堆積している。硬化面は見られず、埋土中からは遺物も出土しなかった。

【包含層出土遺物】

遺物の出土地点は、古代の土器片が土器集中部②を検出した調査区南側のG13グリッド周辺、中世の土器片は、堀切・土塁よりも北側のD8～9グリッド周辺での出土が多く、時期により活動の場が移り変わっていく様子がうかがえる。

土器 [第14図 - 44～70]

44～50は古代の土師器環である。底部の切り離し技法はへら切りによるものである。44は深い環の体部から底部片である。底面はへら切り後ナデによる調整を施す。底部は完形である。10世紀頃のものと考えられる。45は底面をへら切り後にナデ調整を施す。底面周辺は成形が雑で、粘土がめくれている部分があり、門歯痕も多く見られる。46は口唇部に横ナデによる調整を施す。47は内面に回転ナデの後ミガキをかけているようである。下部に門歯痕と思われる傷あり。外面下部にへら削りの跡が見える。48は内外面ともに風化が著しい。底面に一部黒斑が認められる。49は底面をへら切り後にナデ調整を施す。50は、古代の土師器塊である。口縁部は内湾し、口唇部は丁寧なナデによる調整を施す。

51は内黒土器塊の口縁部片である。内面は幅1.5mmの横ミガキ、外面は回転ナデ、口唇部は横ナデによる調整を施す。

52は製塩土器とされる布痕土器の口縁から胴部片である。内面に布目圧痕、外面にナデの跡が見える。

53～60は中世土師器の環である。底部切り離し技法は57の静止糸切りを除き、回転糸切りによるものである。53は、口唇部にナデ調整を施し、ほぼ全面にススが附着する。ほぼ完形である。54は、底部から直線的に開き、口縁部はつまみ出すような形状である。55の口唇部はナデによる調整を施す。56の口唇部は横方向のナデによる調整を施す。体部は若干内湾気味に開く。57・58は、内面の中央部分がくぼむ。59は、内面に門歯痕と思われる傷あり。60は体部から外側に大きく開く。

61～69は中世土師器の小皿である。底部切り離し技法は64のへら切りを除き、回転糸切りによるものである。61は内外面ともに回転ナデによる調整を施す。胴部から底部片で、糸切り底である。62は口唇部にナデによる調整を施す。口縁部にススが残り、灯明皿である。63は口唇部にナデによる調整を施す。内面の中央部が膨らむ。完形である。64は口唇部に丁寧な横方向のナデによる調整を施す。内面にススが附着しており、灯明皿である。65は口唇部にナデによる調整を施す。内面の中央部がややくぼむ。66は口唇部にナデによる調整を施す。外側に開く器形である。67は口唇部にナデによる調整を施す。口縁部の立ち上がりが極端に短い。68は口唇部から外面にかけて門歯痕が認められる。口唇部に多い。底部が厚く中央部が内外面ともややくぼむ。69は口唇部にナデによる調整を施す。口縁部の立ち上がりが極端に短く、底部から直線的に立ち上がる器形である。

70は瓦器塊の胴部片である。内面は横・斜め方向のへらミガキ、外面は斜め方向のへらミガキによる調整を施す。外面に黒斑がみられる。

陶磁器 [第15図 - 71～87]

71は白磁碗である。内面に貫入が見られ、口縁部が外反する森田分類のC群に相当する。15世紀前後のものである。72～75は白磁皿である。72は、内面が施釉、外面が無釉で、萁筒底である。大宰府陶磁器分類のIV類に相当し、11世紀後半から12世紀初頭のものである。73～75は、森田分類のD群に相当する。15世紀前後のものである。73・74は、輪花高台で、見込みに目跡が残る。75は腰折れの器形で、口縁部が外反する。

76～79は青磁碗である。76は、蓮弁文が見られ、口縁部が内湾する器形である。16世紀頃のものである。77・79は、口縁部が外反する器形で、上田分類のD群に相当する。14世紀後半から15世紀前半頃のものである。78は口縁部が内湾する器形で上田分類のE群に相当する。14世紀後半から15世紀前半頃のものである。80は青磁皿である。口縁部が外反する器形で、14世紀後半から15世紀前半頃のものである。

81・82は景德鎮窯産の青花皿である。81は口縁から体部片で端反りの器形で草花文を描く。82は体部から底部片で、高台内に砂敷きで焼成された跡が残る。2点とも小野分類染付皿B群に属する15～16世紀のものである。

83・84は輸入褐釉陶器である。83は碗で、口縁端部がわずかに外反する器形である。84は、壺の頸部から胴部片である。

85は国産陶器の壺の胴部から底部片である。内面は回転ナデの後横方向のナデによる調整が施され、自然軸がかかる。外面は、横方向のケズリにより調整され、施軸されている。

陶器 [第15図 - 86]

86はSC5から出土した須恵器の壺の胴部である。内面に於て具痕、外面には横・縦方向のタタキの跡が見え、自然軸がかかる。87は須恵器の壺の胴部片である。内面に於て具痕、外面にタタキの跡が見える。

石器 [第15図 - 88～90]

砥石

88はF13 グリッドIV層で出土した。表面には明瞭な研ぎ痕が見られる。泥岩製である。89はH13 グリッドII層で出土した。表面には明瞭な研ぎ痕が見られる。砂岩製である。

紡錘車

90はD9グリッドの桜島文明降下軽石混じりのピット埋土から、青磁片と共出した滑石製の紡錘車である。完形で整形も丁寧である。

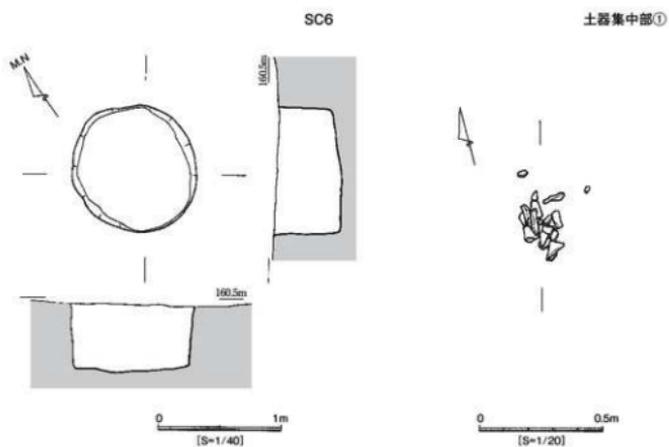
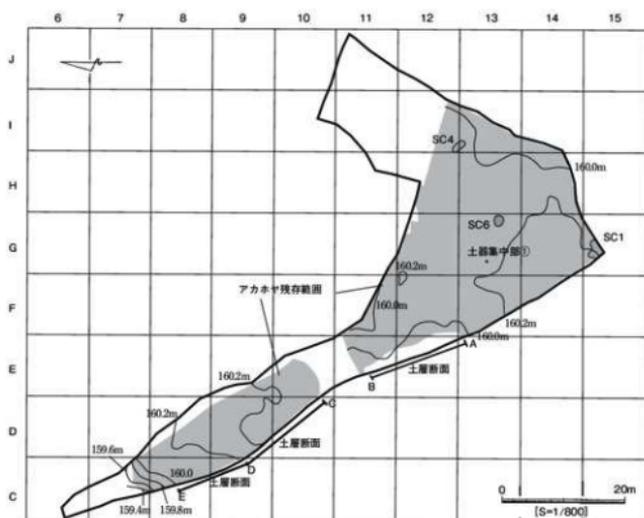
(6) 時期不明の遺構

【遺構】

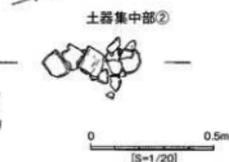
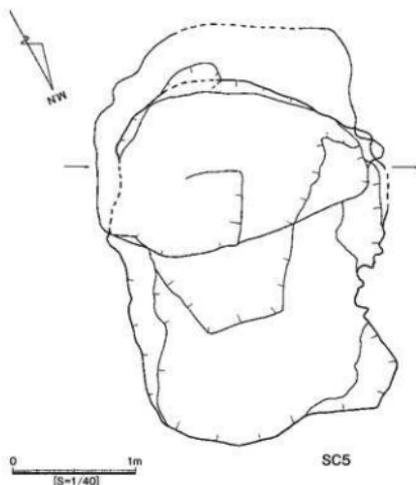
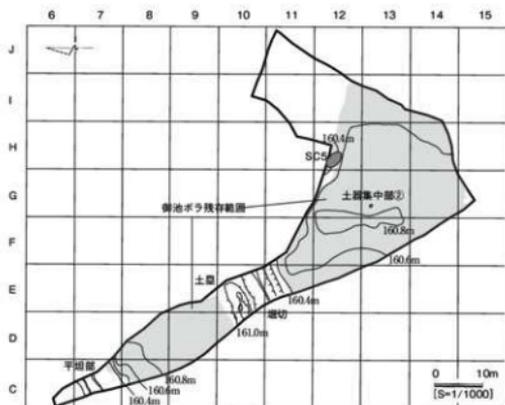
5号土坑 (SC5) [第7図]

調査時点では縄文時代後期～晩期の遺構と考えていたが、遺構埋土9層から取り上げた炭化材の自然科学分析を行ったところ、暦年較正160±25年BP(2σの暦年代でAD 1,720～1,787年)のスキという結果が出たため、この項で述べる。

調査区南側のG12～H12グリッドの谷部への落ち込みが見られる地点で検出した。プランは、長径2.1m、短径1.4mの楕円状で、検出面からシラス層までほぼ垂直に、2.3m掘り込んでいる。検出面の標高は約160mである。その形状や検出した場所から陥し穴状遺構として造られたと考えられるが、底面及び側面には、明確な杭の痕跡は検出できなかった。埋土上層から中層までは自然堆積が見られるが、下層は壁面が数回崩落したかのようなブロック状の堆積がある。土器片や須恵器片(86)、白磁片が出土した。

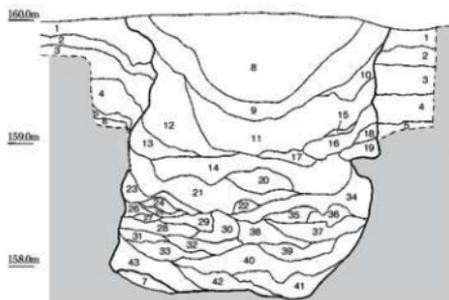


第6図 A区 縄文時代の遺構分布図 [S=1/800] およびSC6・土器集中部①実測図 [S=1/40・1/20]

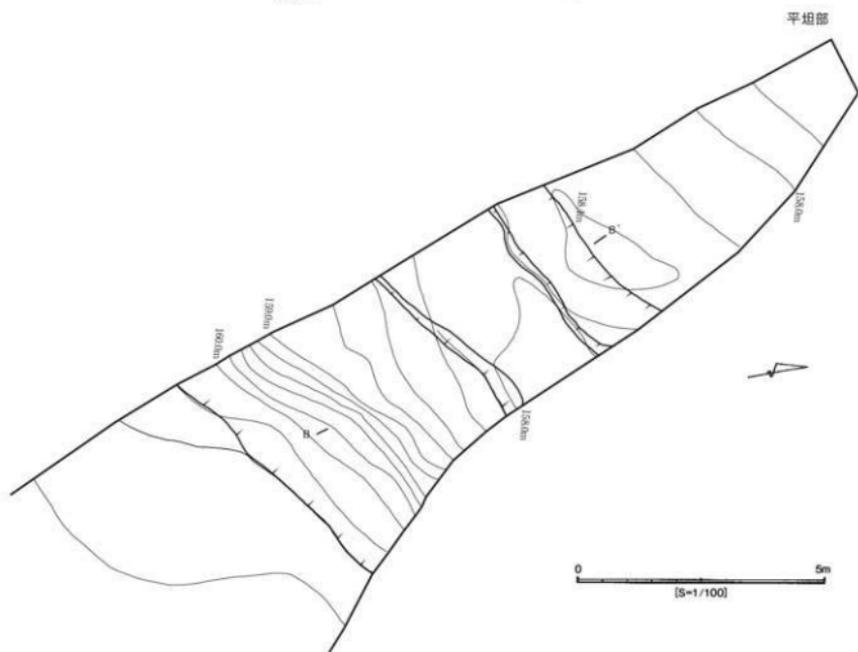
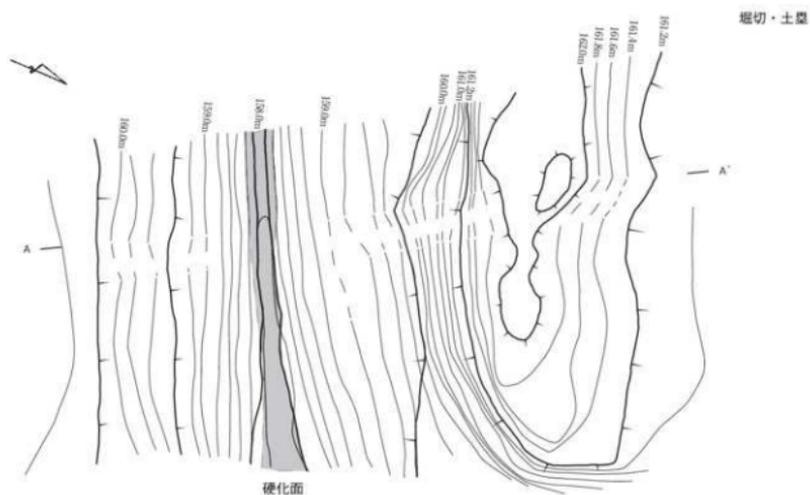


【SC5新築土層注記】

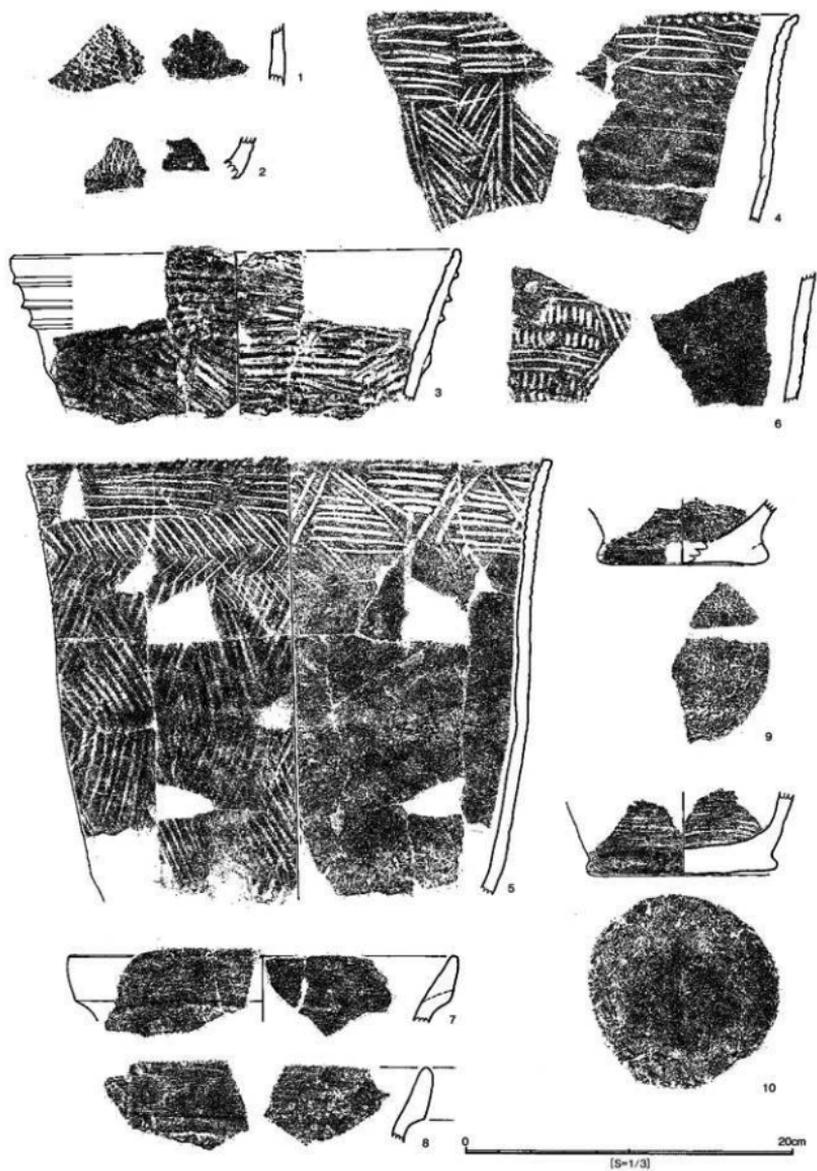
- 1 埴土層 アカネヤ層
- 2 埴土層
- 3 埴土層 P11 遺集層
- 4 埴土層
- 5 灰層 P14層
- 6 灰層
- 7 灰層 シラス層
- 8 黒色砂質土 (Hue7.5YR 1.7/1) 御池ボラの粒が15%程度じる
- 9 黒褐色砂質土 (Hue10YR 1.7/1) 御池ボラの粒が20%程度じる
- 10 暗褐色砂質土 (Hue10YR 3/2) 御池ボラの粒が30%程度じる
- 11 黒褐色砂質土 (Hue7.5YR 3/1) 御池ボラの粒が5~10%程度じる
- 12 暗褐色砂質土 (Hue10YR 3/4) 御池ボラの粒が5%程度じる
- 13 黒褐色砂質土 (Hue10YR 2/2) 御池ボラの粒が5~10%程度じる
- 14 黒色砂質土 (Hue10YR 2/1) 御池ボラは含まない
- 15 黒色砂質土 (Hue7.5YR 1.7/1) 御池ボラの粒が50%程度じる
- 16 黒色砂質土 (Hue7.5YR 2/1) 御池ボラの粒が20~30%程度じる
- 17 暗褐色砂質土 (Hue10YR 3/2) 御池ボラの粒が30%程度じる
- 18 黒褐色砂質土 (Hue7.5YR 3/1) 御池ボラの粒が10~15%程度じる
- 19 黒褐色砂質土 (Hue7.5YR 3/1) 御池ボラは含まない
- 20 暗褐色砂質土 (Hue10YR 4/4) 御池ボラの粒が20%程度じる
- 21 暗褐色砂質土 (Hue10YR 3/4) 御池ボラの粒が10%程度じる
- 22 黄褐色ブロック土 (Hue10YR 5/6) アカネヤ火山灰土ブロック
- 23 黒色砂質土 (Hue2.5Y 2/1) アカネヤ火山灰土ブロック
- 24 黒色砂質土 (Hue10YR 2/2) 褐色軽石が20%程度じる
- 25 暗褐色砂質土 (Hue10YR 3/2) 褐色軽石が5%程度じる
- 26 暗褐色砂質土 (Hue7.5YR 3/1) 6~7層のブロックが50%程度じる
- 27 暗褐色砂質土 (Hue7.5YR 2/2) 6~7層のブロックが10%程度じる
- 28 黄褐色砂質土 (Hue10YR 4/3) 6層の波れ込み
- 29 暗褐色砂質土 (Hue10YR 3/2) 黒色土のブロックに軽石が混じる
- 30 黄褐色ブロック土 (Hue10YR 5/6) アカネヤ火山灰土ブロック
- 31 黄褐色砂質土 (Hue10YR 4/3) 6層の波れ込み
- 32 暗褐色砂質土 (Hue2.5 YR 3/2) 褐色軽石が20%程度じる
- 33 黄褐色砂質土 (Hue10YR 4/2) 6層の波れ込み
- 34 黒色砂質土 (Hue10YR 3/2) アカネヤ火山灰土ブロックが10%程度じる
- 35 黒色砂質土 (Hue2.5Y 2/1) 黒色土のブロックに軽石が50%程度じる
- 36 黒色砂質土 (Hue2.5Y 2/1) 黒色土にアカネヤ火山灰土ブロックが50%程度じる
- 37 暗褐色砂質土 (Hue10YR 3/4) 暗褐色土にアカネヤ火山灰土ブロックが20%程度じる
- 38 暗褐色砂質土 (Hue10YR 3/2) 褐色軽石、アカネヤ火山灰土ブロック、黒色土ブロックが混じる
- 39 黒色砂質土 (Hue10YR 2/1) 黒色土にアカネヤ火山灰土ブロックが30%程度じる
- 40 黒色砂質土 (Hue2.5Y 2/1) 黒色土に褐色軽石が10%程度じる
- 41 細かい黄褐色砂質土 (Hue10YR 5/3) 6層の波れ込み
- 42 淡黄色砂質土 (Hue2.5Y 7/3) 7層の波れ込み
- 43 細かい黄褐色砂質土 (Hue10YR 5/3) 6層の波れ込み



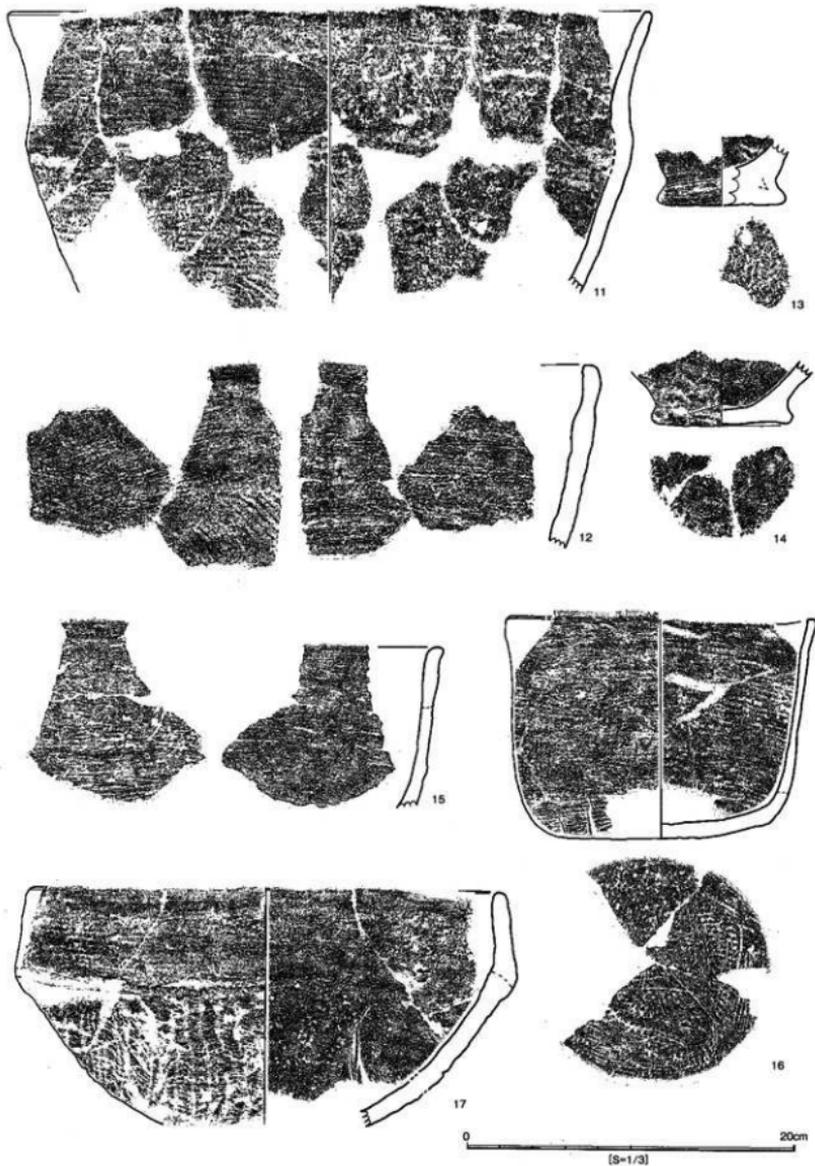
第7図 A区 古代・中世および時期不明の遺構分布図[S=1/1000]・SC5[S=1/40]・土器集中部②[S=1/20] 実測図



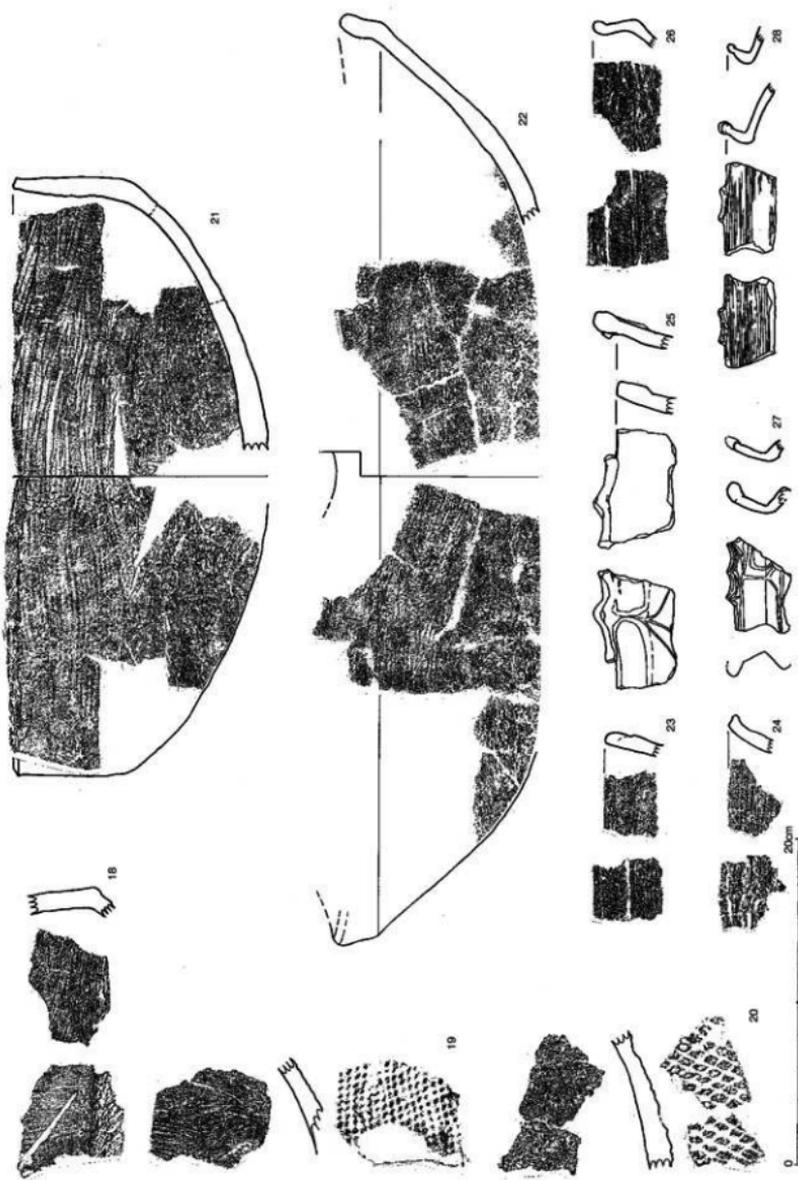
第8图 A区 堀切・土塁・平坦部实测图(1) [S=1/100]



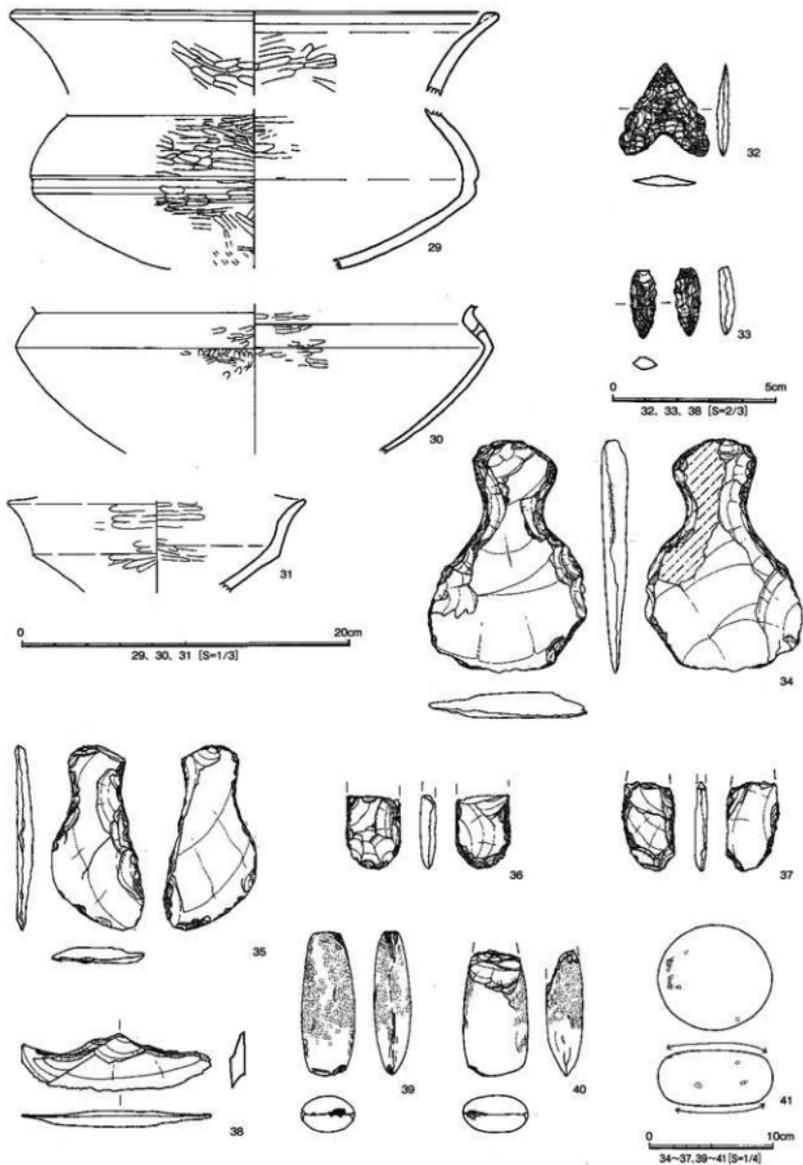
第10図 A区 縄文時代の出土遺物実測図(1)[S=1/3]



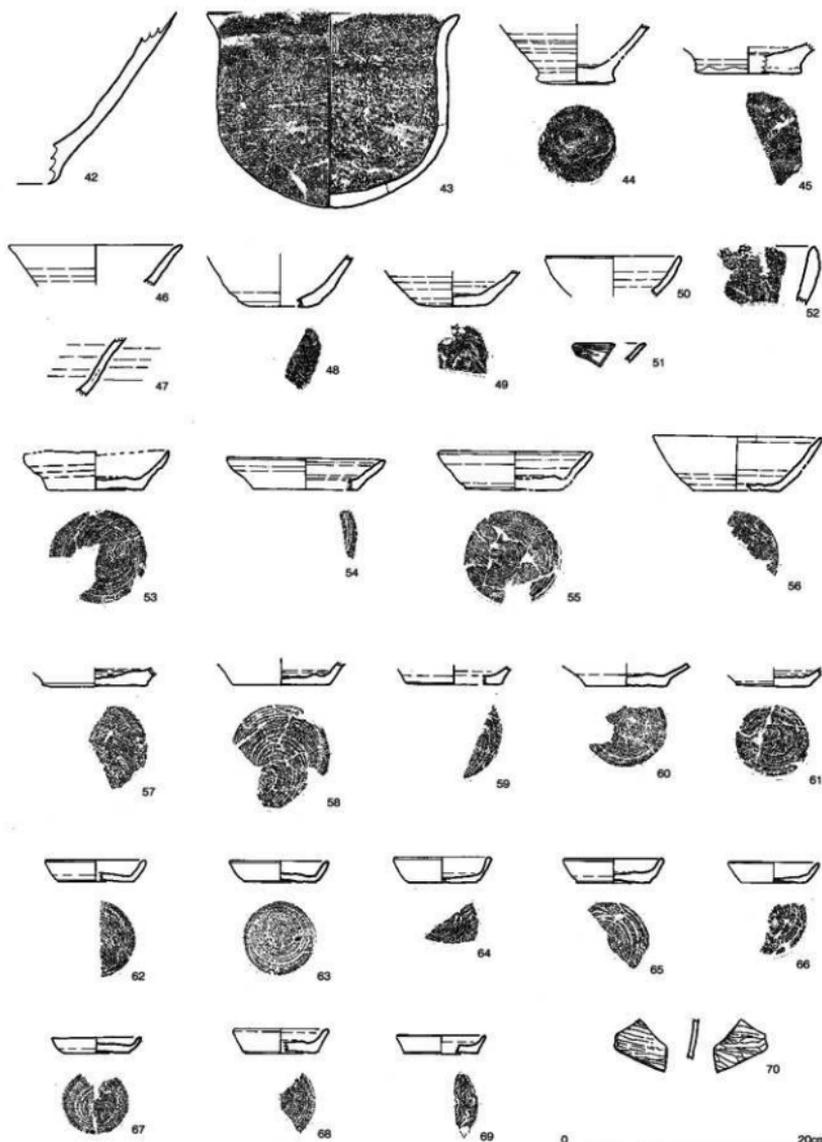
第 11 図 A 区 縄文時代の出土遺物実測図 (2) [S=1/3]



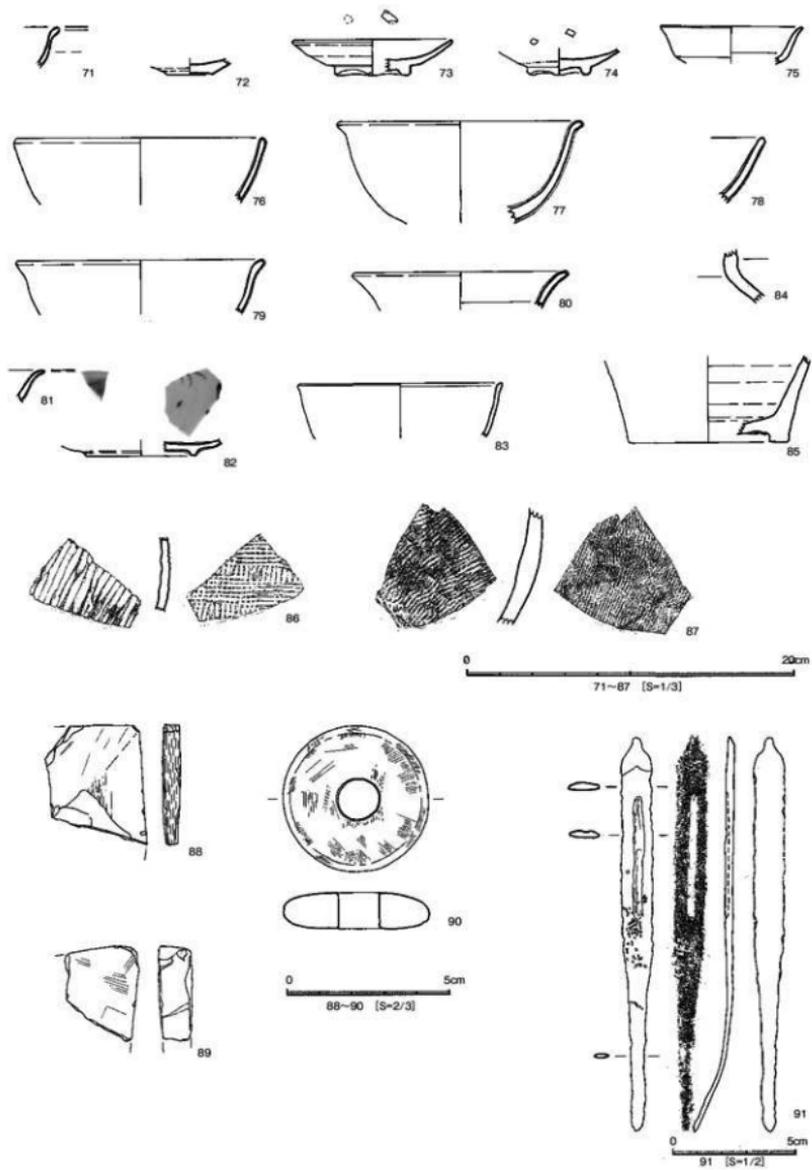
第12図 A区 縄文時代の出土遺物実測図(3) [S=1/3]



第13図 A区 縄文時代の出土遺物実測図(4) [S-1/3・2/3・1/4]



第14図 A区 古墳時代～中世の出土遺物実測図[S=1/4]



第 15 図 A 区 中世・時期不明の出土遺物実測図 [S-1/3・2/3・1/4]

第1表 A区出土遺物観察表

遺物番号	出土位置	種類	素材	部位	文様・調整の特徴		色調		胎土の特徴	残存率	量量・その他
					外面	内面	外面	内面			
1	溝1層	縄文土器	深鉢	胴部	耳取部縦筋文	ナズリ・粗い・具ナテ	にじみ黄 OY3Y 3.4	にじみ黄 OY3Y 2.2	3m以下の胎土が少量。3m以下の胎土が少量。胎土が少量。		
2	溝1層	縄文土器	深鉢	底部	縦目状赤糸文	横方向のナテ・炭化物付着	にじみ黄 OY3Y 7.2	にじみ黄 OY3Y 4.7	3m以下の胎土が少量。胎土が少量。		
3	溝1層	縄文土器	深鉢	口縁一部	横筋ナテ・8本の横筋文・下部には胎土が少量。胎土が少量。	横筋ナテ・8本の横筋文・下部には胎土が少量。胎土が少量。	にじみ黄 OY3Y 6.4	にじみ黄 OY3Y 6.4	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	1/4	磨定口徑 27.0cm
4	溝1層	縄文土器	深鉢	口縁一部	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	にじみ黄 OY3Y 5.4	にじみ黄 OY3Y 5.4	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。		
5	溝1層	縄文土器	深鉢	口縁一部	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	にじみ黄 OY3Y 6.4	にじみ黄 OY3Y 5.2	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。		
6	3層埋土 溝1層	縄文土器	深鉢	胴部	横筋ナテ・8本の横筋文・下部には胎土が少量。胎土が少量。	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	にじみ黄 OY3Y 4.3	にじみ黄 OY3Y 4.3	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。		
7	V層	縄文土器	深鉢	口縁部	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	にじみ黄 OY3Y 6.4	にじみ黄 OY3Y 4.2	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	1/9	磨定口徑 23.4cm
8	V層	縄文土器	深鉢	口縁部	横筋ナテ	横筋ナテ	にじみ黄 OY3Y 6.4	にじみ黄 OY3Y 6.4	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	1/16	
9	V層	縄文土器	深鉢	底部	横筋ナテ	ナテ	にじみ黄 OY3Y 6.4	にじみ黄 OY3Y 6.4	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	1/2	磨定底径10.4cm
10	V層	縄文土器	深鉢	胴部	横筋ナテ・8本の横筋文・下部には胎土が少量。胎土が少量。	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	にじみ黄 OY3Y 7.4	にじみ黄 OY3Y 7.4	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。		底径 11.45cm
11	SC 6	縄文土器	深鉢	口縁一部	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	洗黄 OY3Y 7.2	洗黄 OY3Y 7.2	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	1/5	磨定口徑 38.5cm
12	V層	縄文土器	深鉢	口縁一部	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	黄 OY3Y 4.1	黄 OY3Y 4.1	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	1/8	
13	V層	縄文土器	深鉢	胴部	横筋ナテ	ナテ	洗黄 OY3Y 6.4	洗黄 OY3Y 6.4	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	1/4	磨定底径7.8cm
14	V層	縄文土器	深鉢	胴部	横筋ナテ	ナテ	洗黄 OY3Y 6.4	洗黄 OY3Y 4.2	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	1/2	磨定底径8.6cm
15	V層	縄文土器	浅鉢	口縁一部	横筋ナテ	横筋ナテ	洗黄 OY3Y 4.4	洗黄 OY3Y 4.4	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。		
16	V層	縄文土器	浅鉢	口縁一部	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	洗黄 OY3Y 6.4	洗黄 OY3Y 5.1	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。		口縁部 磨定口徑18.7cm 磨定底径13.3cm 器高13.5cm
17	V層	縄文土器	浅鉢	口縁一部	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	洗黄 OY3Y 6.4	洗黄 OY3Y 6.4	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	1/4	磨定口徑28.3cm
18	V層	縄文土器	浅鉢	胴部	横筋ナテ	横筋ナテ	洗黄 OY3Y 6.4	洗黄 OY3Y 6.4	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。		
19	V層	縄文土器	浅鉢	底部付着	組織黄	組織黄	洗黄 OY3Y 6.4	洗黄 OY3Y 6.4	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。		
20	V層	縄文土器	浅鉢	底部付着	組織黄	組織黄	洗黄 OY3Y 6.4	洗黄 OY3Y 5.2	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。		
21	V層	縄文土器	浅鉢	口縁一部	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	洗黄 OY3Y 7.4	洗黄 OY3Y 7.4	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	1/8	磨定口徑35.6cm 器高13.5cm
22	土器 集中部1	縄文土器	浅鉢	口縁一部	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	洗黄 OY3Y 6.4	洗黄 OY3Y 6.4	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。		磨定口徑 68.0cm
23	V層	縄文土器	浅鉢	口縁部	横筋ナテ	横筋ナテ	洗黄 OY3Y 6.4	洗黄 OY3Y 5.2	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。		
24	V層	縄文土器	浅鉢	口縁部	横筋ナテ	横筋ナテ	洗黄 OY3Y 5.2	洗黄 OY3Y 4.1	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	1/16	
25	V層	縄文土器	浅鉢	口縁部	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	洗黄 OY3Y 7.2	洗黄 OY3Y 4.3	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	1/16	
26	V層	縄文土器	浅鉢	口縁部	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	洗黄 OY3Y 6.2	洗黄 OY3Y 6.2	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	1/11	
27	V層	縄文土器	浅鉢	口縁部	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	洗黄 OY3Y 6.4	洗黄 OY3Y 6.4	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。		磨定口徑11.8cm
28	溝1層	縄文土器	浅鉢	口縁一部	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	洗黄 OY3Y 6.2	洗黄 OY3Y 6.2	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	1/16	
29	V層	縄文土器	浅鉢	口縁一部	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	洗黄 OY3Y 5.4	洗黄 OY3Y 4.3	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。		磨定口徑29.0cm 磨定底径 27.0cm
30	V層	縄文土器	浅鉢	胴部	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	洗黄 OY3Y 7.4	洗黄 OY3Y 6.4	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	1/8	磨定底径 28.5cm
31	V層	縄文土器	浅鉢	口縁一部	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	洗黄 OY3Y 3.4	洗黄 OY3Y 2.1	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。	1/7	磨定口徑23.2cm
42	V層	土師器	甕	胴部	横筋ナテ	ナテ・炭化物付着	洗黄 OY3Y 6.4	洗黄 OY3Y 6.4	胎土が少量。胎土が少量。胎土が少量。		

階層番号	出土位置	種類	器種	部位	文様・図案の特徴		色調		胎土の特徴	推定量	注量その他
					外面	内面	外面	内面			
43	土器 集中部2	土師器	甕	口縁～ 底面	丁寧なナデ	口縁部は丁寧なナデ 胴部は斜め方向のワズリ	黄緑色 G5YR 6-9	黄 G5YR 6-9	2m以下の黄色透明な少量、2m以 下の白灰色赤褐色少量	1/2	口径20.5cm
44	土層	土師器	杯	外部～ 底面	回転ナデ、底面はへう切 りの長ナデ	回転ナデ	黄 G5YR 6-9	黄 G5YR 6-9	2m以下の黄色透明な少量、2m以 下の白灰色赤褐色少量	1/2	底径 底径16.1cm
45	土層	土師器	杯	外部～ 底面	回転ナデ、底面はへう切 りの長ナデ	回転ナデ	黄 G5YR 7-9	黄 G5YR 7-9	2m以下の黄色透明な少量、2m以 下の白灰色赤褐色少量	1/4	底径 底径18.7cm
46	土層	土師器	杯	口縁～ 外部	回転ナデ	回転ナデ	黄 G5YR 7-9	黄 G5YR 7-9	2m以下の赤褐色少量	1/7	底径 底径13.14cm
47	土層	土師器	杯	外部	上層は回転ナデ下部は へう切り	回転ナデの接ミガキ	にんべい G5YR 6-9	にんべい G5YR 6-9	2-3m以下の赤褐色少量、2m以 下の白灰色赤褐色少量	1/7	底径 底径15.7cm
48	土層	土師器	杯	外部～ 底面	回転ナデ	回転ナデ	黄 G5YR 7-9	黄 G5YR 7-9	2m以下の赤褐色少量、2m以 下の白灰色赤褐色少量	1/4	底径 底径16.6cm
49	土層	土師器	杯	外部～ 底面	回転ナデ、底面はへう切 りの長ナデ	回転ナデ	黄 G5YR 7-9	黄 G5YR 7-9	0.5-1mの黄色赤褐色少量、2m以 下の白灰色赤褐色少量	1/3	底径 底径15.7cm
50	土層	土師器	碗	口縁～ 胴部	回転ナデ、口唇部は丁寧 なナデ	回転ナデ	浅黄 G5Y 7-9	浅黄 G5Y 7-9	2m以下の黄色透明な少量、2m以 下の白灰色赤褐色少量	1/7	底径 底径11.0cm
51	土層	内里土器	碗	口縁部	回転ナデ	縦15mの葉の方向のゴキ 口唇部は丁寧なナデ	にんべい G5YR 7-9	黄 G5YR 7-9	2m以下の赤褐色赤褐色少量、2m以 下の白灰色赤褐色少量	1/14	底径 底径11.0cm
52	土層	赤褐色土器	鉢	口縁～ 胴部	ナデ	赤褐色	黄 G5YR 7-9	黄 G5YR 7-9	2m以下の赤褐色少量、2m以 下の白灰色赤褐色少量	1/7	底径 底径11.9cm
53	土層	土師器	杯	ほぼ完整	回転ナデ、赤切り底	回転ナデ	浅黄褐色 G5YR 8-3	浅黄褐色 G5YR 8-3	2m以下の赤褐色少量、2m以 下の白灰色赤褐色少量	1/12	口径 11.5cm 底径 底径3.2cm
54	土層	土師器	杯	口縁～ 底面	回転ナデ、赤切り底	回転ナデ	にんべい G5YR 7-9	にんべい G5YR 7-9	2m以下の赤褐色少量、2m以 下の白灰色赤褐色少量	1/7	底径 底径12.8cm 底径 底径18.5cm 底径 底径2.5cm
55	土層	土師器	杯	口縁～ 底面	回転ナデ、赤切り底	回転ナデ、口唇部はナデ	黄褐色 G5YR 8-3 黄褐色 G5YR 7-9	黄褐色 G5YR 8-3 黄褐色 G5YR 7-9	2m以下の赤褐色少量、2m以 下の白灰色赤褐色少量	1/8 1/16 1/8	底径 底径11.2cm 底径 底径18.0cm 底径 底径3.15cm
56	土層	土師器	杯	口縁～ 底面	回転ナデ、赤切り底	回転ナデ、口唇部は長ナ デ	黄 G5Y 7-9 浅黄 G5YR 8-9	黄 G5Y 7-9 浅黄 G5Y 7-9	2m以下の赤褐色少量、2m以 下の白灰色赤褐色少量	1/16 1/16 1/3	口径 11.6cm 底径 底径17.0cm 底径 底径4.5cm
57	土層	土師器	杯	底面	回転ナデ、赤切り底	回転ナデ	にんべい G5YR 7-9	にんべい G5YR 7-9	2m以下の赤褐色少量、2m以 下の白灰色赤褐色少量	1/4	底径 底径18.5cm
58	土層	土師器	杯	外部～ 底面	回転ナデ、赤切り底	回転ナデ	黄褐色 G5YR 5-2	黄褐色 G5YR 5-2	2m以下の赤褐色少量、2m以 下の白灰色赤褐色少量	7/10	底径 底径18.7cm
59	土層	土師器	杯	外部～ 底面	回転ナデ、赤切り底	回転ナデ	浅黄褐色 G5YR 8-4	浅黄褐色 G5YR 8-4	2m以下の赤褐色少量、2m以 下の白灰色赤褐色少量	1/3	底径 底径18.7cm
60	土層	土師器	杯	外部～ 底面	回転ナデ、赤切り底	回転ナデ	にんべい G5YR 7-9	にんべい G5Y 7-9	2m以下の赤褐色少量、2m以 下の白灰色赤褐色少量	1/2	底径 底径16.6cm
61	土層	土師器	小瓶	外部～ 底面	回転ナデ、赤切り底	回転ナデ	浅黄褐色 G5YR 8-4	浅黄褐色 G5YR 8-4	2m以下の赤褐色少量、2m以 下の白灰色赤褐色少量	1/10	底径 底径5.8cm
62	土層	土師器	小瓶 (灯明筋)	口縁～ 底面	回転ナデ、赤切り底	回転ナデ、口唇部はナデ	にんべい G5YR 7-9 にんべい G5YR 7-9	にんべい G5YR 7-9 黄褐色 G5Y 5-2	2m以下の赤褐色少量、2m以 下の白灰色赤褐色少量	1/2	底径 底径18.0cm 底径 底径16.2cm 底径 底径1.8cm
63	土層	土師器	小瓶	完整	回転ナデ、赤切り底	回転ナデ	にんべい G5YR 7-9	にんべい G5YR 7-9	2m以下の赤褐色少量、2m以 下の白灰色赤褐色少量	1/2	口径 17.9cm 底径 底径15.5cm 底径 底径1.7cm
64	土層	土師器	小瓶 (灯明筋)	口縁～ 底面	回転ナデ、へう切り底	回転ナデ、口唇部は丁寧 なナデ	にんべい G5YR 7-9 にんべい G5YR 7-9	にんべい G5YR 7-9 黄褐色 G5YR 2-1	2m以下の赤褐色少量、2m以 下の白灰色赤褐色少量	1/7	底径 底径17.6cm 底径 底径15.6cm 底径 底径2.1cm
65	土層	土師器	小瓶	口縁～ 底面	回転ナデ、赤切り底	回転ナデ、口唇部はナデ	浅黄褐色 G5YR 8-4 にんべい G5YR 7-9	浅黄褐色 G5YR 8-4 にんべい G5YR 7-9	2m以下の赤褐色少量、2m以 下の白灰色赤褐色少量	1/2	底径 底径17.7cm 底径 底径16.0cm 底径 底径2.05cm
66	土層	土師器	小瓶	口縁～ 底面	回転ナデ、赤切り底	回転ナデ、口唇部はナデ	黄褐色 G5YR 5-2	黄褐色 G5YR 5-2	2m以下の赤褐色少量、2m以 下の白灰色赤褐色少量	1/3	底径 底径17.2cm 底径 底径15.3cm 底径 底径1.7cm
67	土層	土師器	小瓶	口縁～ 底面	回転ナデ、赤切り底	回転ナデ、口唇部はナデ	にんべい G5YR 7-9 黄褐色 G5Y 5-2	にんべい G5YR 7-9 黄褐色 G5Y 5-2	2m以下の赤褐色少量、2m以 下の白灰色赤褐色少量	8/10	口径 17.2cm 底径 底径15.4cm 底径 底径1.3cm
68	土層	土師器	小瓶	口縁～ 底面	回転ナデ、赤切り底	回転ナデ	明黄褐色 G5YR 7-9	明黄褐色 G5YR 7-9	2m以下の赤褐色少量、2m以 下の白灰色赤褐色少量	1/16 1/6 1/3	口径 17.7cm 底径 底径15.7cm 底径 底径2.0cm
69	土層	土師器	小瓶	口縁～ 底面	回転ナデ、赤切り底	回転ナデ、口唇部はナデ	にんべい G5YR 7-9	にんべい G5YR 7-9	2m以下の赤褐色少量、2m以 下の白灰色赤褐色少量	1/3	底径 底径17.1cm 底径 底径15.9cm 底径 底径1.5cm
70	土層	瓦器	碗	胴部	斜め方向のヘウミガキ	斜め方向のヘウミガキ	黄褐色 G5Y 6-2	黄褐色 G5Y 4-1	1-3m以下の白灰色赤褐色少量		底径 底径2.85cm
71	土層	白磁	碗	口縁部	施釉	施釉 貫入	灰白 G5Y 7-1	灰白 G5Y 8-1	施釉	1/3	
72	土層	白磁	皿	底面	回転ナデ 無釉 呑高 底	回転ナデ 施釉	灰白 G5Y 7-2	灰白 G5Y 7-2	施釉		底径 底径2.85cm
73	土層	白磁	皿	口縁～ 底面	回転ナデ 施釉 呑高4段高 (予定4段高)	回転ナデ 施釉 呑高4段高 目録2段高	灰白 G5Y 6-1 黄褐色 G5Y 8-2	灰白 G5Y 8-2	2m以下の赤褐色少量	1/16 2/5 底面 底径1.2	底径 底径19.0cm 底径 底径18.4cm 底径 底径2.2cm
74	土層	白磁	皿	底面	施釉 貫入 底面(予定4段高)	施釉 貫入 目録2段高 (予定4段高)	灰白 G5Y 8-2	浅黄 G5Y 8-2	施釉	1/3	底径 底径13.8cm
75	土層	白磁	皿	口縁～ 底面	施釉 貫入	施釉 貫入	灰白 G5Y 8-1	灰白 G5Y 8-1	施釉	1/8	底径 底径18.8cm
76	土層	青磁	碗	口縁部	施釉	施釉 貫入	オリーブ G5Y 5-2	灰白 G5Y 7-1	施釉	1/12	底径 底径13.15cm
77	土層	青磁	碗	口縁～ 外部	回転ナデ 施釉 貫入	回転ナデ 施釉 貫入	オリーブ G5Y 5-2	灰白 G5Y 5-2	施釉	1/7	底径 底径14.4cm

図録番号	出土位置	種類	器種	部位	文様・調整の特徴		色調		胎土の特徴	残存率	流量・その他
					外面	内面	外面	内面			
78	5層	青磁	碗	口縁→ 下部	回転ナデ 施釉 下部に貫入	回転ナデ 施釉 下部に貫入	オリーブ灰 (OY 5-2) 一部黄釉 (2SY 5-3)	灰白(N 7)	無	1/4	
79	5層	青磁	碗	口縁部	施釉	施釉	青オリーブ 灰 (SGY 7-1)	灰白 (OYR 7-1)	無	1/8	器定口径15.0cm
80	8層	青磁	皿	口縁部	施釉 貫入	施釉 貫入	オリーブ灰 (OY 6-2)	灰白 (2SY 8-1)	無	1/6	器定口径12.8cm
81	5層	青花	皿	口縁→ 下部	施釉	施釉	明緑灰 (1 OGY 8-1)	灰白 (2SGY 8-3)	無		
82	5層	青花	皿	作部→ 下部	施釉 高台底筋	施釉	明緑灰 (SGY 8-3)	灰白 (2SGY 8-3)	無		器定口径6.8cm
83	8層	施釉 陶器	碗	口縁→ 下部	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉 口唇部 丁寧な様ナデ	青オリーブ GY 5-3 至尾 (OYR 3-2)	灰白 (SGY 8-1)	無	1/7	器定口径12.2cm
84	5層	施釉 陶器	皿	器部→ 胴部	施釉	様ナデ	灰青 (OYR 4-2) に青 (2SY 6-4)	に青 (OYR 6-3)	無		
85	5層	国産 陶器	皿	器部→ 底部	横方向のケズリ施釉	回転ナデの横方向の ナデ自然釉	青オリーブ (GY 5-2)	浅黄 (2SY 7-3) 灰白に青 (2SY 5-2) (2SYR 6-4)	①5cm以下の白色胎土 ②5cm以下の白色胎土 ③5cm以下の白色胎土	1/7	器定口径9.8cm
86	SC 5	須恵器	葉	器部	横・縦方向のツタキ 自然 施釉	全て自然	灰GY 4-1)	灰GY 4-1)	①5cm以下の白色胎土 ②5cm以下の白色胎土 ③5cm以下の白色胎土		
87	5層	須恵器	皿	胴部	ツタキ	全て自然	灰GY 5-2)	灰GY 5-2)	①5cm以下の白色胎土 ②5cm以下の白色胎土 ③5cm以下の白色胎土		

第2表 A区出土石器・銅製品計測表

図録番号	出土位置	種類	器種	材質	測 量				その他
					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	
32	7層A層	石器	打製石鏃	黒曜石層位?	2.8	2.75	0.35	1.7	
33	5層	石器	石鏃	チャート	2.1	0.8	0.45	0.7	
34	5層	石器	打製石斧	ホムンフェルス	19	12.8	2.1	46.6	
35	5層	石器	打製石斧	ホムンフェルス	15	7.6	1.4	145.3	
36	5層	石器	打製石斧	ホムンフェルス	6	4.4	1.2	46.3	
37	5層	石器	打製石斧	ホムンフェルス	7.3	4.3	1	39.5	
38	5層	石器	二次加工 調子	ホムンフェルス	1.8	5.8	0.5	4.1	
39	5層	石器	磨製石斧	ホムンフェルス	11.7	4.3	2.9	222.4	
40	5層	石器	磨製石斧	ホムンフェルス	30.3	5.3	3	241.2	
41	5層	石器	磨石	砂岩	9.4	8.6	4.5	365.1	
88	5層	石器	砥石	昆岩	3.7	3.1	0.6	7.9	
89	8層	石器	砥石	砂岩	2.9	2.3	1	9.8	
90	ビツト	石器	結核率	滑石	4.45	4.4	1.1	33.9	
91	堀切	銅製品	弁	銅	16.1	1.3	0.4	21.7	

2. B区の遺構と遺物

B区では、Ⅶ層（桜島11テフラを多く含む）下位のⅧ層と、Ⅲ層（霧島御池軽石堆積層）の上下に堆積するⅣ層及びⅡ層で遺構・遺物が確認された。以下、層位毎に記述する。

なお、土器については、器形や文様、突帯の形状など、バリエーションに富み、属性ごとの特徴を組み合わせることで類型化を行うことは容易でない。ここでは、既存の型式と照合させる形で記述を進める。

また、石器については、器種毎に分類し説明を加えるが、石鐮に関しては、脚端部が丸いタイプを円脚、四角いタイプを方脚、尖ったタイプを尖脚と定義した。

(1) Ⅶ層の遺構と遺物

桜島11テフラを含むⅦ層下位のⅧ層では、縄文時代早期に属する遺構が確認された。調査区南部のP25～P27・Q25グリッドにおいて礫が散在する状態で検出され、集石遺構が1基確認された。

遺物は、調査区北部（K21・23、L21～23グリッド）・南部（P24・25・27、Q25グリッド）で、縄文土器が数点ずつ出土したが、特徴に乏しい小片であったため、図化は行わなかった。

遺構

3号集石遺構（S13）[第18図]

第Ⅷ層を掘削し、Q25グリッド第Ⅸ層上面において若干の礫とともに円形の黒褐色土の広がりが検出された。黒褐色土を掘り下げたところ、直径約0.7mの円形プランで、深さ約5cmの浅皿状の掘り込みとなり、掘り込みの中央やや西寄りの部分は更に直径約0.3m、深さ約10cmのくぼみがみられた。掘り込み内には配石などはみられず、5～10cm大の角礫が東半部に偏った状態で検出された。礫は被熱の影響から赤く変色したのみみられ、掘り込み埋土中には焼土や炭化物がみられたが、遺物は出土しなかった。

なお、掘り込みの中央やや西側埋土中から出土した炭化物についてAMS年代測定法を実施した結果、8315±30年BP（BC7492～7297年）という結果が得られた。

(2) Ⅳ層の遺構と遺物

Ⅳ層では、調査区北部で遺構等は検出されなかったが、南部P25～26、O28グリッドで土坑2基（SC18・SC20）が検出された。

遺物は、調査区南東側を中心に縄文時代前期から中期頃の土器や石器が出土した。

遺構

18号土坑（SC18）[第18図]

O28グリッドで検出された。平面プランは長軸約1.8m×短軸約1.0mの不整形な楕円形状で、断面形状は長軸方向で袋状を呈する。埋土は、褐色土（10YR4/4）で、暗褐色土を少量含み、埋土上部20cmほどには霧島御池軽石（Kr-M）も少量含まれていた。なお、遺構に伴う遺物は出土しなかった。

20号土坑（SC20）[第18図]

P25～26グリッドにかけて検出された。長軸約3.0m×短軸約0.8mの長方形の平面プランで、基底部はほぼ平坦である。埋土は、褐色土（10YR4/6）のほぼ単一層で、2mm程度のパミス（Kr-M）を少量含んでいた。なお、遺構に伴う遺物は出土しなかった。

遺物

縄文土器 [第 29～31 図 - 92～120]

第IV層より出土した縄文土器は、概ね前期末～中期前半に時期比定されるもので、当地域においては類例の少ない資料である。

92と93は口唇部に刻みを付し、胴部外面に条痕の原体を使用した斜格子状の文様を施す。92はそれに加えて、小さな円文や並行する押し引き状の連点文が認められる。円文や列点文は、条痕文の施文後に付されている。内面には斜方向の条痕が残る。条痕を地文として施す広義の曾畑式系沈線文土器に近似する個体であろう(柴畑 1987)。ただし、口縁部内面に文様はみられない。

94は押し引き状列点文の上に微細な弧状の突帯を貼り付ける。内面の口縁下部にも同一原体による押し引き文が施文されている。95は押し引き文に加えて列点文を施す個体である。これらは、文様の特徴から尾田式(水ノ江 1990)に該当するものと考えられる。押し引き文を構成する単位は細かく、この点は尾田式の中でも中九州の特徴を示している(柴畑 1987)。

96～98と101～106は、並行する縦方向の突帯や弧状の列点文、刺突文などが施される一群であり、深浦式(相美 2008)に該当する。96の細身でやや窄まった器形は、細部において違いはあるが、鹿児島県大口市の瀬ノ上遺跡のI類の完形土器に似る(鹿児島県教育委員会 1986)。ただし、本遺跡の個体は突帯に刻目が入り、頂部を形成するモチーフではあるがやや不規則で、列点文は弧状の緩曲線を描く。97と98も弧状を描く突帯を貼り付ける。一方、101～104は貝殻腹縁による連点文、相交弧文が直線的に配列され、突帯を持たない。後者の方が深浦式の中でも古期に属すると考えられる(相美 2008)。

107は波状の刻目突帯を巡らせるもので、口唇部と胴部には刺突による列点文を施す。かつて片野3式と呼ばれた一群に含まれる個体であろう。

109は、確認できる範囲で外面に4条の三角突帯が巡る。胴下部はわずかに屈曲の痕跡が認められる。一見、轟B式の特徴に似るが、器形の特徴からみて、野久尾タイプの範疇に属する個体と判断される。99も特徴の似た突帯を有する。また、外面・内面に条痕を施す108や110、112も同類に含まれる可能性がある。

113～117は船元式系統に属するもので、内湾する口縁部と地文としての浅めの縄文が特徴である。114と115は長さ9～10mmの爪形文帯を曲線状に施す。116は頸部と胴部の境界の屈曲部にあたる。117は爪形文が交差する箇所、円形の孔が穿たれている。

118・119は後期前葉、120は後期中葉の後半に属する個体であり、第IV層からの出土とするには年代的にやや疑問であるが、出土記録を尊重している。118は波状口縁となる個体で、外面・内面ともに地文としての貝殻条痕を施し、その後、外面には全面に貝殻腹縁の刺突による圧痕文を施文する。

石器 [第 39 図 - 302～318]

石鏃

302はチャート製で二等辺三角形形状を呈し、脚部は挟りがやや深く、脚端部は方脚である。303はガラス質安山岩製で、身幅の狭い二等辺三角形形状を呈する。脚部の挟りは浅く、脚端部は門脚である。

石匙

6点出土した。6点中5点は横型だが、309のみ縦型である。石材では304・305・308はチャート製、306は頁岩製、307・309はガラス質安山岩製である。刃部調整では、5点が両面調整であるのに対し、308のみ片面調整である。305・307・308は刃部先端が欠損している。306は、素材剥片の歪みの影響から片方の刃

部先端が甲形形状を呈する。

磨製石斧

314はホルンフェルス製である。一部に自然面を残し、刃部を丁寧に研磨している。刃部先端に使用痕が見られる。

剥片石器

310はホルンフェルス製の搔器（スクレーパー）である。311はガラス質安山岩製である。両側縁部に刃部が見られる。312は砂岩製の粗製剥片石器である。はまぐり状の形態で平面は自然面と剥離面からなり、刃部に使用痕が見られる。313はガラス質安山岩製の石器で基部を有し、残存する側縁部には両面から調整された刃部がみられる。片方の側縁は欠損とみられ、縦型石匙であった可能性がある。

敲石

317・318は安山岩製である。317は一部に深い敲打痕が見られ、318は上下に敲打痕が見られる。

砥石

315は砂岩製である。自然面を多く残し、平面部両面に溝状の研磨痕が見られる。

異形石器

316は砂岩製の石棒の可能性が考えられる。六角柱状で両端ともに欠損しているが、側面六面は丁寧に研磨されている。

(3) III層上面の遺構と遺物

B区では、調査区の大半においてII層が失われており、I層直下にIII層がみられた。ただし、調査区中央付近、SE1の南側一帯にはII層が比較的良好に残存しており、調査区北部の南側を中心に、削平されずに残ったII層がみられたが、調査区全体では、I層の直下がIII層上面となる箇所が多かった。そのため、II～III層上面では、縄文時代後期後半～晩期・古墳時代・古代・中世と幅広い年代の遺構と遺物が検出された。

① 縄文時代後期～晩期の遺物

III層上面においては、縄文時代後期後半～晩期の土器や石器が多数出土したが、それらの遺物が伴う当該期の遺構は確認出来なかった。また、遺物の多くは、II層の堆積状況が明確である調査区北西部のL22・23グリッド、M22・23グリッドから集中して出土した。

縄文土器 [第31～33図 - 121～148]

121は肥厚した口縁部外面に沈線文が施された深鉢である。122～127は内外面にミガキ調整が施された深鉢とみられ、123は頸部外面に4条の沈線がみられる。128は口縁部外面に3条の凹線がみられ、内面は風化により判然としなが、外面は丁寧にミガキ調整である。129は胴部の屈曲部で最も外側に張り出す位置に1条の凹線を有し、内外面はミガキ調整である。130は外反する口縁部で、口縁部下と頸部に沈線が施され、内外面はミガキ調整である。121～130については既存の土器形式へ比定が難しいものも含まれるが、概ね太郎迫式から御領式の範疇と捉えておきたい。131・132は頸部から外反しながら立ち上がり、断面が三角形状に肥厚する深鉢の口縁部で、131の口縁部外面には2条の沈線と縦・横の刺突文、132には2条の凹線文がみられ、ともに中岳Ⅱ式とみられる。133～136は深鉢の口縁部で、133・134は口縁部が肥厚し、136は口縁部下に断面三角形の刻目を持たない突帯を有する。137は底部で胴部外面に縦方向の貝殻条痕、底部外面に編物圧痕がみられる。138・140・143は胴部中位で屈曲し底部まで組織痕を有するいわゆる組織痕土器である。

139は強く屈曲する頸部、141は強く屈曲する胴部、142は内湾しながら立ち上がる盤形を呈する鉢で、いずれもいわゆる黒色磨研土器である。144は底部から大きく開きながら胴部が立ち上がり、内側に屈曲して口縁部に続く鉢で、内外面ともにミガキ調整である。145は屈曲部から口縁部が内傾する鉢形土器で、口縁部及び屈曲部外面に刻目が施されている。また、風化により判然としないが、器面調整はミガキとみられ、口縁部下に外面からの穿孔がみられる。146は形態的には145に近いが、口縁部下と屈曲部のやや上外面に沈線を有し、内外面ともにミガキ調整が施されている。147は胴部の屈曲部から反外しながら口縁部が立ち上がる鉢で、口縁部及び屈曲部外面に刻目が施されている。148は鉢の胴部下位の破片で、上端には刻目突帯がみられる。

石器 [第40図 - 320 ~ 339]

石鏃

320は赤色頁岩製である。挟りが深く、先端部が欠損しているが二等辺三角形を呈すると思われ、脚端部は方脚に近い。321は、黒曜石製の五角形鏃である。挟りが浅く、脚部の一箇所が欠損しているが両側縁が外側に張り出し脚端部は尖脚である。

石匙

322は黒曜石製で横型の石匙である。刃部は先端が欠損しており、両面調整が見られる。

打製石斧

石材は、すべてホルンフェルス製である。323は図示した下方は欠損しており、その他の側縁は敲打による剥離調整が見られ、本来は上方が刃部の可能性がある。324・326・327は、敲打による剥離調整で明確な基部を成形している。刃部形態がそれぞれ異なり、324は刃部が基部下端より細く、326・327は刃部が広いしゃもじ形を呈するが、326は先端が尖り、327は先端が丸みを帯びている。325は打製石斧の転用品とみられ、側縁全体が敲打により潰れている。

剥片石器

328はホルンフェルス製の剥片石器である。はまぐり状の形態で両面に研磨調整があり、刃部に使用痕が見られる。

磨製石斧

329・330は基部に欠損が見られ、刃部先端部には使用痕が見られる。330はホルンフェルス製である。刃部最大幅約5cm重さ329.4gを計る。329は砂岩製である。一部に自然面を残し、刃部を丁寧に研磨している。刃部最大幅約5.5cm、現存重量222.4gを計る。

敲石

332 ~ 339は敲石である。332 ~ 337・339は砂岩製、331・338は安山岩製である。332・333・336・337は、平坦面の両面と周縁部に敲打痕が見られる。331・334・335は周縁部に敲打痕が見られ、333・334は平坦面の片面においては、中央に敲打痕が見られる。335は一部に敲打によると思われる欠損が見られる。338は一部側縁に敲打がみられるが、長軸の両端に敲打痕が集中する。339は欠損しているが、残存する長軸の先端部付近に敲打痕がみられ、その他の面の大部分は非常に滑らかで、磨石としても使用されていたとみられる。

② 古墳時代

調査区の東端部で、竪穴建物跡2軒(2・3号)を検出し、遺構内からは、土師器が多数出土した。

遺構

2号竪穴建物跡(SA2) [第18図]

Q 25 グリッドで検出された。平面プランは、隅丸方形を呈し、主軸方向は、座標北から東へ約 20 度振れている。規模は長軸で約 3.4 m、短軸で約 3.0 m、床面積は約 10m²である。床面は貼床で、検出面から床面までの深さは約 10 ～ 15cm を計る。なお、床を貼る前の堀込は検出面から深いところで約 30cm である。

遺物は床面からやや浮いた状態で、西側から比較的多く出土した。以下、器種毎に説明を加える。149 ～ 152 は甕である。149 はやや外傾気味に直立する口縁部で、口唇部を平坦に仕上げている。151 は胴部で外面に刻目突帯が貼り付けられている。152 は底部で、外面中央が大きく窪み、ドーナツ状を呈する。153 は大型の壺の底部で平底を呈する。154・155 は小型の壺で接合しないが同一個体の可能性が高い。156・157 はともに高環の環部で、156 は屈曲部からやや外反気味に開く口縁部、157 は屈曲部である。158・159 はいわゆるミニチュア土器で、内外面に指頭圧痕が多くみられる。

3号竪穴建物跡 (SA3) [第 19 図]

P 22 グリッドで検出された。一部は調査区域外であったため、全掘はしていない。また、先行トレンチや樹根などの影響から平面プランの把握が遅れたため、壁の立ち上がり部分を削平した箇所がある。一部に残存する壁面の状態が直線的であることから、平面プランは方形を基調としたプランと考えられ、その場合、主軸方向は座標北から東へ約 25 度振れている。想定される遺構の規模は約 4.0 m × 4.0 m、床面積は約 16m²と考えられる。調査区境界に設定したトレンチ断面で確認できる遺構の深さは、表土直下から床面まで約 50cm を計るが、本来は更に深かったと予想される。床面は貼り床で、竪穴の掘削後、10 ～ 20cm 程度埋めて床面を構築している。

遺物は、床面付近及び埋土中において多量に出土している。以下、器種毎に説明を加える。160 ～ 163 は甕である。160 はほぼ完形で平底の底部から胴部が外側に開きながら口縁部が内湾気味に立ち上がる形状で頸部が無く、胴部上半外面には粘土紐の接合痕跡を多く残す。161 ～ 163 は底部で、直線的な胴部からやや外反もしくは直立気味に底部へ続く。161 は底部外面中央が窪むドーナツ状を呈し、ほか 2 点は平底を呈する。165・166 は小形の丸底壺、167 も丸底の壺底部とみられる。168 ～ 170 は高環である。168・170 は脚柱部から水平に近い斜め上方に延び、稜をもって屈曲し、外反しながら口縁部が開く深めの環部である。169 はほぼ完形で環部に屈曲はみられず、脚部はやや斜め外方に開く脚柱部から裾部が稜を外反しながら開く。171 は器台で、図化した 3 点は接合せず、若干復元径に相違がみられるが、同一個体の可能性が高い。

③ 古代の遺物 [第 34 図 - 172 ～ 185]

少量ではあるが、古代の遺物として甕や環、製塩土器などが出土している。

172 ～ 174 は甕である。いずれも頸部で大きく屈曲して口縁部が開く形状で、胴部内面にはケズリ調整が施されている。175 ～ 178 は鉢形の製塩土器で内面に布目圧痕がみられる。179 ～ 181 は環である、底部はいずれもヘラ切り後丁寧な撫で調整が施されている。なお、182 はいわゆる円盤状高台を呈する。184 ～ 185 は高台付環若しくは埴である。184 は高台の先端が薄くかり気味であるのに対し 185 は分厚く丸みを帯びている。183 は内黒土器で高台付環とみられる。

④ 中世の遺構と遺物

中世の遺構としては、溝状遺構 14 条 (SE1 ～ SE14)、掘立柱建物跡 8 棟 (SB1 ～ SB8)、土坑 1 基 (SC5)、犬走状遺構 1 条、畝状遺構が検出された。中世の遺物の大半は、前半の調査区北部を中心に出土しており、特に、青磁・白磁については 1 号溝状遺構から多く出土している。

遺構

1号溝状遺構 (SE1) [第19図]

調査区北部を東西に横断する大溝で、西端部は明確に途切れており、東は調査区外まで延びている。L 23 グリッドからQ 24 グリッドに渡って検出され、検出された長さ約 58 m、深さ約 0.6 m、幅は西端部で約 4 m、東端部で約 1.2 mを測り、東に向かって細くなっている。5号溝状遺構と並行し、走向軸をN-115°-Eの東西方向にとり、後述する3・4・6号溝状遺構とは主軸がほぼ直交する。検出された際、埋土の最上層に桜島文明降下軽石の堆積が見られたほか、埋土中に硬化面が見られたことから、ある時期通路としての機能も果たしたと考えられる。

遺物としては青磁・白磁・陶器などが出土した。196は土師器小皿で底部はヘラ切り離しである。また、内面に踵実の圧痕とみられる窪みを有する。206・216は白磁の皿である。216は高台に4箇所の挟り込みがみられ、内面見込みに4箇所の目跡がみられる。2点ともにその形態から森田分類のD群に相当する。229～231・234・238・244は青磁碗である。229は外面に雷文帯がみられ、上田分類C群に相当する。230・231・234は口縁部が外反するもので、上田分類D類に相当する。なお、234の見込みに双魚文、238の見込みに印花文がみられ、ともに全面施釉後外底の釉が輪状に削り取られている。244は見込み及び高台内面から外底が無釉である。251は同安窯系青磁の皿で、内面にヘラによる文様とジグザグの櫛点描文がみられ、底部外面の釉が掻き取られていることから、太宰府分類I-2類とみられる。255・257・259・260は青磁盤とみられる。255・257は内面見込みと体部の立ち上がり付近に界線がみられ、255は畳付きから外底が無釉、257は全面施釉後外底の釉が輪状に削り取られている。259は口縁部がくの字状に屈曲し、端部が上方に屈曲する罌縁状口縁を有するもので、体部内面には細運弁文、界線を挟んで見込みに印花文がみられる。外底は全面施釉後輪状に削り取られている。260はくの字状に屈曲する口縁部で輪花状を呈する。口縁部内面に2条の波状文、体部内面に彫りと沈線を組み合わせた細運弁文、外面にも細運弁文が施されている。275は天目茶碗の口縁部で、口縁部内面に段がみられる。295は備前焼壺の口縁部である。内外面ともに回転ナデの調整が施され、外面には自然釉がかかる。343は泥岩製の砥石である。平面部両面に砥面が見られるが、石材特有のかい離性のためか砥面が剥離している。

2号溝状遺構 (SE2) [第20図]

O 21 グリッドからO 22 グリッドにかけて検出され、両端が明確でないが、残存長約 12 m、幅は広い部分で約 1.0 m、検出面からの深さ約 30 cmを測る。走向軸をN-20°-Eの南北方向にとり、わずかに弧状を呈する。出土遺物は少なく、2点を図化した。232・233は青磁碗で、232は外反する口縁形状から上田分類D類に相当する。233は見込みに印花文が施され、全面施釉後外底の釉が輪状に削り取られている。

3号溝状遺構 (SE3) [第20図]

K 20 グリッドからK 23 グリッドにかけて検出され、南端部は4号溝状遺構と並行し、6号溝状遺構に切られる。両端が調査区外へ続くが、検出された長さ約 27 m、最大幅約 2.0 m、検出面からの深さ約 40 cmを測り、走向軸をN-10°-Eの南北方向にとる。6号溝状遺構とは切り合っており、堆積状況から4号が6号よりも古い時期の遺構と考えられる。出土遺物のうち3点を図化した。193は土師器の小皿である。底部は糸切りで、内外面に踵実圧痕がみられる。口縁部が全て失われており、円盤状を呈するが、一部打ち欠いたようにみられる部分もあるため、人為的に加工された可能性がある。245は青磁碗の底部で見込みは円形に釉が削り取られ、外底から高台内面は無釉である。248は口縁部が屈曲し、体部外面に細運弁文を有する青磁の環で、太宰府

分類の龍泉窯系青磁Ⅲ-4類に相当する。

4号溝状遺構 (SE4) [第20図]

K 20グリッドからK 22グリッドにかけて検出され、南端部は判然としませんが、北側は調査区外へ延びる。検出された長さ約18m・最大幅約1.3m、検出面からの深さ約10cmを測り、走向軸をN-10°-Eの南北方向にとり、SE3と並行する。遺物は図化していないが、陶磁器の小片が出土した。

5号溝状遺構 (SE5) [第19図]

K 22グリッドからP 23グリッドにかけて検出され、西端部は切り合いにより判然としませんが、東端部は調査区内で収束している。検出された長さ約55m、最大幅約1.8m、深さ約1.0mを測り、走向軸をN-115°-Eの東西方向にとる。SE1の北側に並行し、SE1の西端部に回り込むように南方向へほぼ直角に曲がり、約5m延びた地点から西方向へほぼ直角に屈曲する。堆積状況から切り合い関係は確認されていないが、SE6とSE3の切り合い関係及び文明ボラの堆積状況から、SE3を切り、SE6に切られていると考えられる。遺物は出土していないが、溝の基底部に桜島文明降下軽石が厚く堆積していることから、軽石の降下年代に近い時期の遺構と考えられる。

6号溝状遺構 (SE6) [第20図]

K 20グリッドからK 23グリッドにかけて検出され、両端が調査区外へ延びる。検出された長さ約29m、最大幅約1.8m、検出面からの深さ約40cmを測り、走向軸をN-10°-Eの南北方向にとる。SE4の東側を並行し、SE3・5を切る。

出土遺物は比較的多く、14点を図化した。209・214・217・223は白磁の皿である。209・217は小形で、森田D群に相当する。217の高台には挟り込みがみられ、内底にも1箇所の目跡がみられる。214は小さな口縁部で特定は難しいが、外反する口縁で軸調などの特徴から福建・広東産白磁F類の可能性がある。223はやや大型の皿で、台形状の低い高台を有し、内底及び体部下位から外底まで露胎であり、これらの特徴から福建・広東産白磁E類に相当するとみられる。240・243・247は青磁碗である。240は見込みに印花文を有し、外底は無釉で高台内面途中まで施釉がみられる。243は全面施釉後、外底の釉を輪状に削り取っている。247は見込み部分の釉を円形に削り取っている。また、外面は本来畳付まで施釉されていたとみられるが、畳付及び高台外面下端の釉を削り取っている。282は須恵器の壺の肩から胴部で、外面に格子目敲き痕、内面に同心円当て具痕がみられる。284・285・287は備前焼罌鉢の口縁部である。3点ともに口縁部の上方への伸びがあまりみられず、断面形状は類似しているが、284・287にみられる罌目の単位は大きく異なる。292は玉縁状を呈する口縁部、293は外面に自然釉を残す頸部、内底に自然釉を残す平底の底部で、いずれも備前焼の壺とみられる。

7号溝状遺構 (SE7) [第20図]

N 24グリッドからO 24グリッドにかけて検出され、検出された長さ約4m、最大幅約1.0m、検出面からの深さ60cmを測り、走向軸をN-100°-Eの東西方向にとる。遺構に伴う遺物は出土しなかったが、埋土の最上位に桜島文明降下軽石の堆積がみられた。

9号溝状遺構 (SE9) [第21図]

O 29グリッドからP 28グリッドにかけて検出され、走向軸をN-50°-Eの東西方向にとる。南西端は調査区内で収束していたが、北東端は調査区外まで続き、検出された長さ約22m、幅約0.5m、検出面からの深さ約35cmを測る。遺構に伴う遺物は出土しなかったが、埋土の大半が桜島文明降下軽石の堆積であった。

10号溝状遺構 (SE 10) [第21図]

P 26 グリッドからO 27 グリッドにかけて検出され、走向軸をN-120°-Eの東西方向にとる。西北端は調査区内で収束するが、東南端は調査区外へと続く。検出された長さ約3.5m、最大幅約0.8m、検出面からの深さ約30cmを測る。遺構に伴う遺物は出土しなかったが、埋土の最上位に桜島文明降下軽石の堆積がみられた。

12号溝状遺構 (SE 12) [第22図]

N 27 グリッドからN 28 グリッドにかけて検出され、走向軸をN-25°-Eの南北方向にとる。北端は調査区内で収束し、南端は調査区外へと延びている。検出された長さ約12m、最大幅約4.5m、深さ約70cmを測り、南に向かって徐々に深くなっている。埋土中には文明ボラが含まれており、出土遺物は少なかった。342は始良溶結凝灰岩製の石製品で、高さ14cm、胴部上位の最大径23.5cmを計る円盤状を呈する。下面は平坦に仕上げられているが、上面中央に径約11cm、深さ約2cmの窪みを有することから、五輪塔の水輪の可能性はある。

13号溝状遺構 (SE 13) [第21図]

M 26 グリッドで検出され、走向軸をN-10°-Eにとる。北端は調査区内で収束し、南端は調査区外へと延びている。検出された長さ約7m、最大幅約2.5m、深さ約30cmを測る。埋土には僅かに桜島文明降下軽石が含まれており、少量の陶磁器が出土した。261は青磁盤の口縁部から体部で、内外面ともに無文である。

14号溝状遺構 (SE 14) [第21図]

N 28 グリッドからO 28 グリッドで検出された。調査区内で完全に収束しており、長さ約5.7m、最大幅約1.1m、深さ約20cmを測り、走向軸をN-70°-Eの東西方向にとる。図化していないが、青花の薄片が1点出土している。

掘立柱建物跡

調査区西側のM 25 グリッドを中心に8棟の掘立柱建物跡が検出された。いずれの建物も南北方向からやや東、若しくはそれに直交する方向に主軸をとる。各建物においては若干の主軸のズレや建物同士の切り合い関係も認められることから、僅かな時期差が存在する可能性が高い。1号・7号掘立柱建物跡は主軸がほぼ同軸、2～6号・8号も主軸がほぼ同軸である。SB3・4・8の3棟およびSB5・6の2棟は重複している。以下、建物毎に述べる。

1号掘立柱建物跡 (SB1) [第22図]

L 25 グリッドで検出された2間×3間の建物跡で、主軸を南北方向にとり、身舎の東に一部庇を持つ。柱穴は径10～25cmの円形または楕円形を呈し、底部の柱穴の方がやや小さい。柱穴の深さは、検出遺構面より約10～60cmを測り、ややばらつきがみられる。

2号掘立柱建物跡 (SB2) [第23図]

L 24 からM 24 グリッドに渡って検出された2間×3間の建物跡で、主軸を南北方向にとり、身舎の東に一部庇を持ち主軸を南北方向にとる。平面形態は1号建物と類似するが、底部分の柱が1間少ない。柱穴は径10～25cmの円形または楕円形を呈す。柱穴の深さは、検出遺構面より約40～90cmを測り、両端の梁中央の柱と庇及び庇が接続する東側桁行の2つの柱がやや浅い。

3号掘立柱建物跡 (SB3) [第24図]

M 25 グリッドを中心に検出された2間×6間の建物跡で、主軸を東西方向にとる。柱穴は径15～30cmの円形または楕円形を呈し、深さは検出面より約15～100cmを測る。建物を構成する柱穴内から、土器小片数点と青花1点が出土した。268は青花碗の体部で外面に唐草文がみられ、施文から小野B群の可能性はある。

4号掘立柱建物跡 (SB4) [第23図]

M25グリッドを中心に検出された3間×4間の建物跡で、身舎の南に庇を持ち主軸を東西方向にとる。柱穴は径15～30cmの円形または楕円形を呈す。深さは、検出面より約15～50cmを測る。

5号掘立柱建物跡 (SB5) [第26図]

N25グリッドを中心に検出された建物跡で、桁行方向は4軒だが、梁行方向は南側が3間。北側が2間である。また、西側は1本柱を欠く。柱穴は径10～25cmの円形または楕円形を呈す。深さは、検出面より約10～50cmを測る。

6号掘立柱建物跡 (SB6) [第25図]

N25グリッドで検出された1間×2間の建物跡で、主軸を南北方向にとる。柱穴は径10～20cmの円形または楕円形を呈し、深さは、検出面より約15～50cmを測る。

7号掘立柱建物跡 (SB7) [第25図]

M26グリッドを中心に検出された2間×3間の建物跡で、身舎の南に庇を持ち主軸を東西方向にとる。庇を南側に持つ。1号掘立柱建物跡とは主軸が同軸であることから同時期の可能性が考えられる。柱穴は径20～30cmの円形または楕円形を呈し、深さは検出面より約10～50cmを測る。

8号掘立柱建物跡 (SB8) [第26図]

M25グリッドで検出された1間×3間の建物跡で、主軸を東西方向にとる。身舎の中央に2つの柱穴を持つ。柱穴は径30～60cmの円形または隅丸方形を呈す。深さは、検出遺構面より約20～60cmを測る。

畝状遺構 [第27図]

調査区北側の調査区境界付近の断面観察で確認された。上層からの攪乱が激しく、平面的には検出できなかったが、桜島文明降下軽石によって畝間が埋没した状態がみられたため、復旧はなされなかった畑の跡と推察される。表土直下での検出であり、畝の上部は削平を受け消失しているが、畝付近の上下の土壌について実施した植物珪酸体分析の結果、陸稲栽培の可能性が指摘できる。なお、本遺構に伴う遺物は出土しなかった。

犬走状遺構 (SG2) [第27図]

O29グリッドからP28グリッド(調査区南斜面)にかけて検出された。南西側はC区で報告されている堀切に接しており、幅約1mの平坦面が北西方向に長さ20mほど確認され、調査区外まで延びていたと考えられる。出土遺物や覆土の堆積状況から14～15世紀頃の造成と推定され、C区(第2次調査)で確認された犬走状遺構や堀切遺構等と併せて考えると、中世城館関連遺構の可能性がある。覆土内からは陶磁器等が出土したが、図化するまでには至らなかった。

土坑

3号土坑 (SC3) [第35・38図 - 192・301]

M23・N23グリッド中間で検出された。長軸約1.3m、短軸約1.0mの楕円形を呈しており、埋土は、暗褐色土(10YR3/3)で、2mm程度のバミス(Kr-M)をまばらに含んでいた。遺構内遺物のうち、2点を図化した。192は土師器環とみられ、底部は糸切りである。301は、完形の土錘である。

5号土坑 (SC5) [第28図]

N28・N29グリッドで検出された。南側は調査区外まで延びており、全体形状は不明であるが、幅約3.2m、深さ約50cmを測る。埋土は、上部が暗褐色土(10YR3/4)で、3mm程度のバミス(Kr-M)をまんべんなく含み、文明軽石も少量含んでいる。埋土の中位には青磁・白磁・陶器(備前焼)・礫など数多くの遺物が

出土しており、廃棄された可能性が高い。遺構内遺物のうち9点を図化した。

204・208・213は白磁皿である。204は断面方形に近いしっかりした高台を有し、外底がやや兜巾状を呈する。体部が高台に対して大きな印象で、平坦な内底から内湾しながら立ち上がる器形的な特徴から森田分類B群に相当すると思われる。204・208は森田分類D群に相当するもので、208は高台に浅い挟り込みが施され、内定に3箇所の目跡を残す。246は青磁の底部で、見込みは円形に軸刺ぎが見られ、高台内面から外底は露胎である。274は青磁碗の底部で、施軸は内面及び体部外面までは全面施されているが、高台から畳付は部分的となり、高台内面から外底は露胎である。286・289・290は甗前焼の播鉢である。

286・289は口縁部で、SE6出土のものと比較すると口縁部が上方へ延びた形状を呈する。290は体部から底部で、残存状況から7条を1単位とする播目が全体で8単位施されていたとみられる。また、289・290は全体に赤みを帯びており、焼成状態がやや良くない。296は甗の肩部付近とみられ、外面には窯印とみられる格子状の線刻が施されている。

遺物 [第34～38図 - 186～191・194～203・207・211・212・215・218～222・225～228・235～237・239・241・242・249・250・252～254・256・258・264～273・277～283・291・293・294・297～299]

土師器

186～191・194・195は土師器環で、底部は全て糸切り底である。186は底部と体部に明瞭な段がみられる。187・190は底部がやや外方に張り出し、体部が内湾気味に立ち上がる。189も同様な器形とみられるが、底部の器壁が薄く、外底に墨書が施されている。188・191は前述のものに比べて底径がやや小さく、器高が高い印象を受ける。195は底部から体部が直線的に立ち上がり、他のものに比して器高が高い。197～201は土師器の小皿で、200のみへら切り、その他は糸切り底である。環と同様に器形にはばらつきがみられ、有る程度時期差があると考えられる。199・200は内面に煤やタール状の付着物がみられ、灯明皿として使用された可能性がある。

白磁

202は底部外面が施軸後削り取られたやや上げ底気味の平底を呈する皿の底部である。203は碗で口縁部が外反する。底部を欠くため不明確だが、軸調がやや黄色を帯び、細かい貫入が多くみられることから、森田分類E類の可能性が高い。207・211・212・220～221は皿で、森田分類D類とみられる。218は多角環で、これも森田分類D類である。215は口縁部が外反し、施軸が内底から高台外面まで及ぶ皿で、景德鎮窯系白磁B類皿IIに相当するとみられる。219は内底の軸が円形に削り取られた皿の底部で、福建・広東産白磁F類とみられる。222は全面施軸後畳付のみ軸刺ぎした薄手の皿で、器形や失透性の軸葉の特徴から景德鎮窯系白磁C類皿I-a類に相当する。

青磁

225は外面に片切彫りによる蓮弁文が施された碗で、上田分類B-3類にあたとみられる。226は外面に鎗蓮弁文を有する碗で、太宰府分類II-b類である。227は口縁部がやや丸みを帯びて外反し、体部外面上位に三条の並行沈線、その下に片切彫の蓮弁文が施されている。底部を欠くため不確定だが、上田分類B-2-a類に類似した個体が見られる。228は小片だが碗の口縁部とみられ、外面に施された横方向の沈線文は雷文帯の可能性が高い。235～237・239・241・242は碗の底部で、235～237・239は内底見込に印花文がみられる。また、237は体部外面に縦方向に沈線文がみられる。施軸では235は全面施軸後内底を輪状に削り、236は畳付から外底が露胎、237・239・241・242は高台内面途中から外底が露胎である。249・250・252

～254・256は皿とみられる。249・250は見込に印花文がみられ、中央付近は露胎、外底は施釉後輪状に釉が削り取られている。252は腰部から外反しながら立ち上がり、口縁部は輪花状を呈する。253は比較的高台径が大きいもので盤の可能性もあるが、高台内面から外底は露胎、内定見込は円形に釉が削り取られている。254は高台が低く、平坦な内底見込に印花文がみられる。256も低めの高台で、外底は全面施釉後釉が輪状に削り取られている。また、内底見込には中央に卍を挟んで双鱼の印文がみられる。258は口縁部がくの字状に屈曲し、端部が上方に屈曲する鐮状口縁を有する盤で、体部内面には細蓮弁文、界線を挟んで内底見込に印花文がみられる。外底は全面施釉後輪状に削り取られている。

青花

263～267は碗である。263は外面口縁部下に波溝文帯、体部に芭蕉葉文外面、内面口縁部に界線を有し、小野分類C群碗I類とみられる。264は内面に界線は見られず、外面は263と同様の施文がみられるが、波溝文の粗雑化や多くの貫入が見られ粗製である。265は口縁部の内外面に2条の界線、体部外面に花鳥文がみられる。266は碗の底部で、外面腰部に草花文?、以下高台外面まで5条の界線がみられ、見込には3条の界線の内に龍などの文様がみられる。267は口縁部付近から体部で、内面上位に界線、外面上位に文様帯、体部に施文がみられる。268は腰部で内・外面下位に界線、外面に小花文がみられる。269から273は皿である。273は端反の口縁部で、内面に界線、外面に界線と唐草文がみられる。270は基筒底で見込に2条の界線と花鳥・捻花文、外面に唐草文、腰部に2条の界線がみられる。271も基筒底を呈し、見込に花文、外面に芭蕉葉文がみられる。270・271は小野分類C群とみられる。272は高台径の大きな底部で、見込に草花文、高台と体部の境界付近に2条の界線がみられる。やや黄味を帯びた釉調で貫入も多く、畳付には重ね焼きの砂が多く見られるなど粗製である。273はいわゆるつば皿の口縁部で、内外面に施文がみられ、口唇部が輪花状を呈する。

その他の陶磁器

277は天目茶碗の体部片を加工したもので、内外面に黒色釉を残し、側面を研磨し円形に成形している。278・279は陶器の盤とみられる。278は外面下位が茶褐色を呈し、内底、外底ともに露胎である。279は内面に黄釉が施され、外面は露胎である。280～282は須恵器である。282は壺口縁部、281は東播系須恵器捏鉢の口縁部、282は壺の肩～胴部である。283・288・291・294・297・299は備前焼ともみられる。283・288は挿鉢で、283は口縁部から底部までほぼ復元可能であり、8条1単位の描目が12本施されていたとみられる。291はやや小型の壺の口縁部である。294は小形の壺で、肩部に明瞭な後線がみられる。297・298は壺または壺の底部で、ともに内面に自然釉がみられる。

石製品 [第40・41図 - 340・341・344・345]

340は滑石製石鍋の底部である。内面は横方向、外面には縦方向の成形時の工具痕がみられる。341は始良溶結凝灰岩製の石製品で側面は剥離しているが残存する面は丁寧に研磨されており、平坦面を成す。344・345は軽石製品である。344は図示した下部は欠損しているとみられ、短軸方向を斜めに貫通する穿孔もしくは抉りが施されている。345は半円形を呈するもので、中央からやや偏った部分に貫通しない直径約1cm深さ約4cmの穿孔がみられる。

⑤時期不明の遺構と遺物

時期不明の遺構として、竪穴状遺構1基(SA1)、土坑6基(SC4・6・7・9・10・11)、溝状遺構2条(SE8・11)を検出した。遺物としては、石器が出土した。

遺構

1号窪穴状遺構 (SA1) [第28図]

M 21 グリッドで検出された。平面プランは隅丸方形を呈し、主軸方向は、ほぼ東西と並行している。規模は長軸が約 2.6 m、短軸約 2.5 m、床面積は約 6.5m²である。検出面から床面までの深さは約 0.2 m であるが、本来の掘り込み面はさらに上部にあったものと考えられる。遺物は出土しなかった。

土坑

4号土坑 (SC4)

M 23 グリッドで検出された。長軸約 1.6 m × 短軸約 0.8 m の楕円形を呈しており、埋土は、暗褐色土 (10 YR 3/3) で、2mm 程度のバミス (Kr-M) をまばらに含んでいる。土器小片が十数点出土した。

6号土坑 (SC6)

O 24 から P 24 グリッドにかけて検出された。長軸約 7 m × 短軸約 5 m の不整楕円形状を呈しており、埋土は、上部が黒褐色土 (10 YR 2/3) で、3mm 程度の粒 (10 YR 7/8 黄橙色) と文明軽石を少量含んでいる。土器小片が数点出土した。

7号土坑 (SC7)

O 25 グリッドで検出された。長軸約 4.5 m × 短軸約 2.3 m の楕円形を呈しており、埋土は、上部が黒褐色土 (10 YR 3/2) で、文明軽石をまんべんなく含んでいる。遺物は土器小片が数点出土している。

8号土坑 (SC8)

N 28 グリッドで検出された。長軸約 3.2 m × 短軸約 2.6 m の楕円形を呈しており、埋土は、上部が暗褐色土 (10 YR 2/2) で、2mm 程度のバミス (Kr-M) を含み、文明軽石を少量含む。また、下部は、暗褐色土 (10 YR 3/3) で、2mm 程度のバミス (Kr-M) を含み、文明軽石を少量含む。遺物は土器片と石器が各 1 点出土した。319 はガラス質安山岩製の石鏃である。挟りが深く二等辺三角形で側縁に鋸歯状の加工が施され脚端部は円脚である。

9号土坑 (SC9)

P 24 グリッドで検出された。直径約 3 m の円形を呈しており、埋土は、上部が黒褐色土 (10 YR 2/3) で、3mm 程度の粒 (10 YR 7/8 黄橙色) と文明軽石を少量含んでいる。遺物は土器小片が数点出土した。

10号土坑 (SC10)

P 27 グリッドで検出された。直径約 3 m の円形を呈しており、埋土は、上部が暗褐色土 (10 YR 3/3) で、明黄褐色の微細なバミス (Kr-M) を多量に含み、下部には、暗褐色土 (10 YR 3/4) で、明黄褐色の微細なバミス (Kr-M) をかなり多量に含んでいる。遺物は土器小片が 1 点出土した。

11号土坑 (SC11)

P 26・27 グリッドで検出された。直径約 1 m の円形を呈しており、埋土は、上部には、灰黄褐色 (10 YR 4/2) と黒褐色 (10 YR 2/2) が点在し、下部には黒褐色 (10 YR 3/4) で、明黄褐色の微細なバミスを大量に含む。遺物は出土しなかった。

8号溝状遺構 (SE8) [第20図]

N 29 グリッドから O 29 グリッドにかけて検出され、走向軸を N-105°-E の東西方向にとる。西端部は細くなり収束し、東端部は判然としないが SE 9 との切り合いは確認されなかった。検出された長さ約 7.5 m ・ 最大幅約 1.2 m、深さ約 25cm を計る。遺構に伴う遺物は出土していない。

11号溝状遺構 (SE 11) [第21図]

O 24 グリッドからP 25 グリッドにかけて検出され、走向軸をN-105°-Eの東西方向にとる。調査区内で完全に取束しており、検出された長さ約17 m、最大幅約0.8、深さ約20cmを計り、やや弧状を呈する。遺構内から遺物は出土しなかった。

遺物 [第41図-346～360]

剥片石器

346は頁岩製の削器である。左側縁は片側から、右側縁は下位のみ両側から剥離調整によって刃部を成形している。

石匙

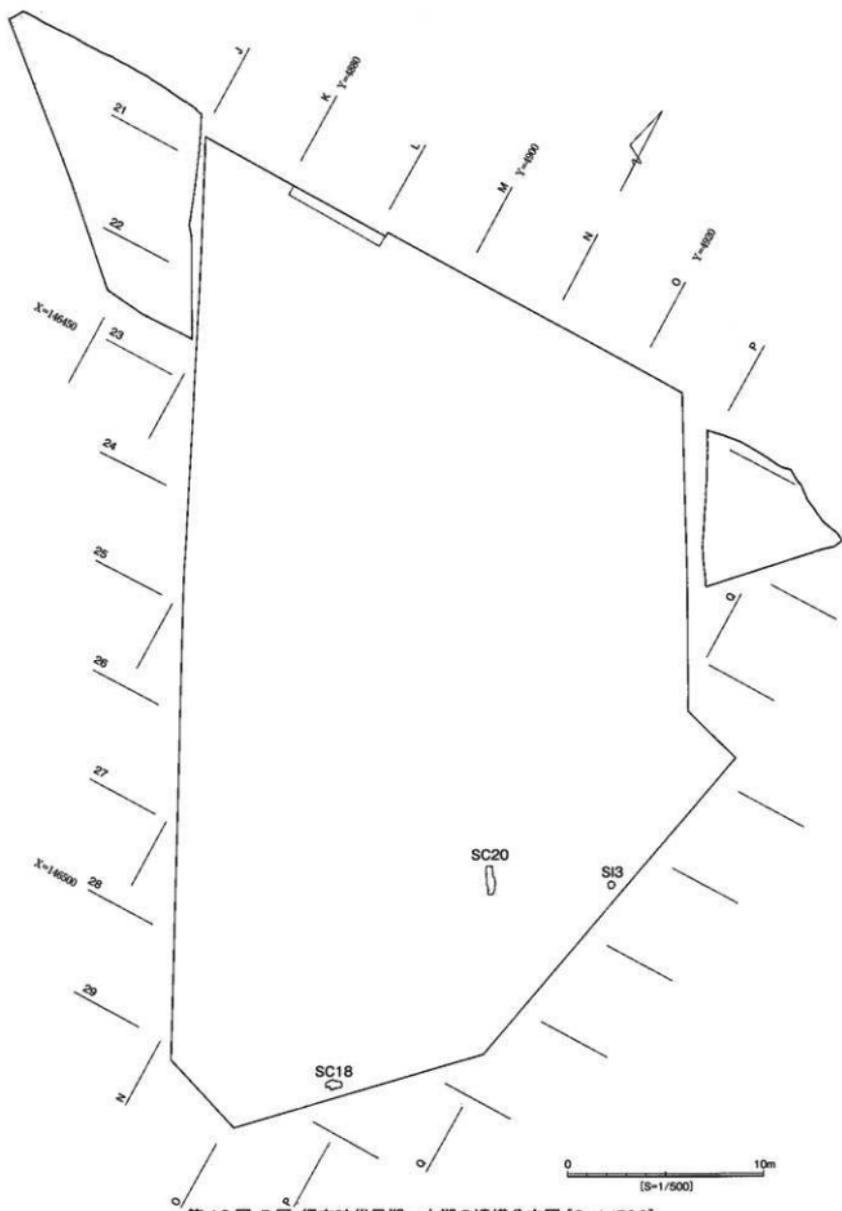
347はチャート製、348・349・351は砂岩製、350はガラス質安山岩製である。347の刃部は片面調整であるが、348～351の刃部は両面調整が見られる。なお、349は表面には黒色の付着物が見られる。

石鏃

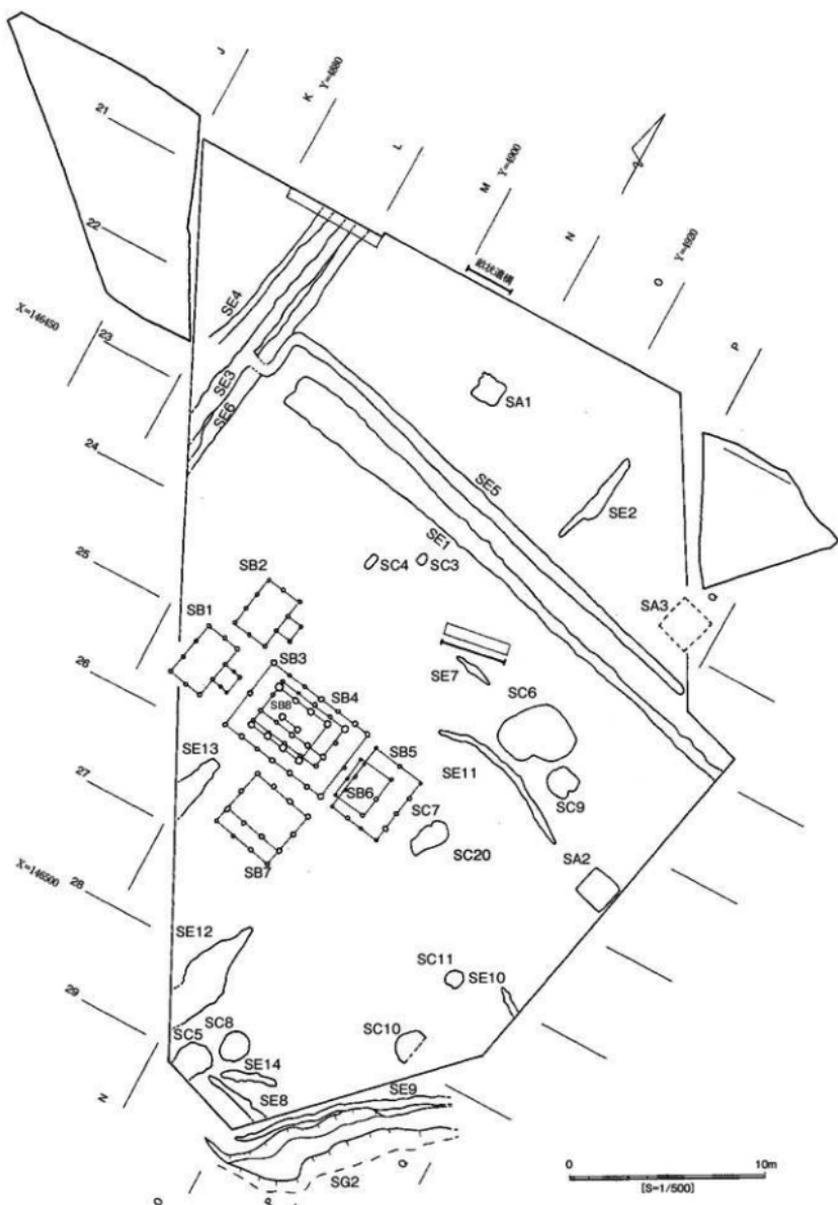
352～355はチャート製、356は千枚岩製、357はガラス質安山岩製である。352～354・356・357は平面形が正三角形に近く、355は二等辺三角形形状を呈する。脚部の形状では、352～355・357は脚端部が尖脚である。352～354・357は抉りが浅く、355・356は抉りが深い。なお、357の片面は剥離面、片面は研磨が施されており、周縁に剥離調整が施されるなど、他の石鏃とは成形技法が大きく異なる。

砥石

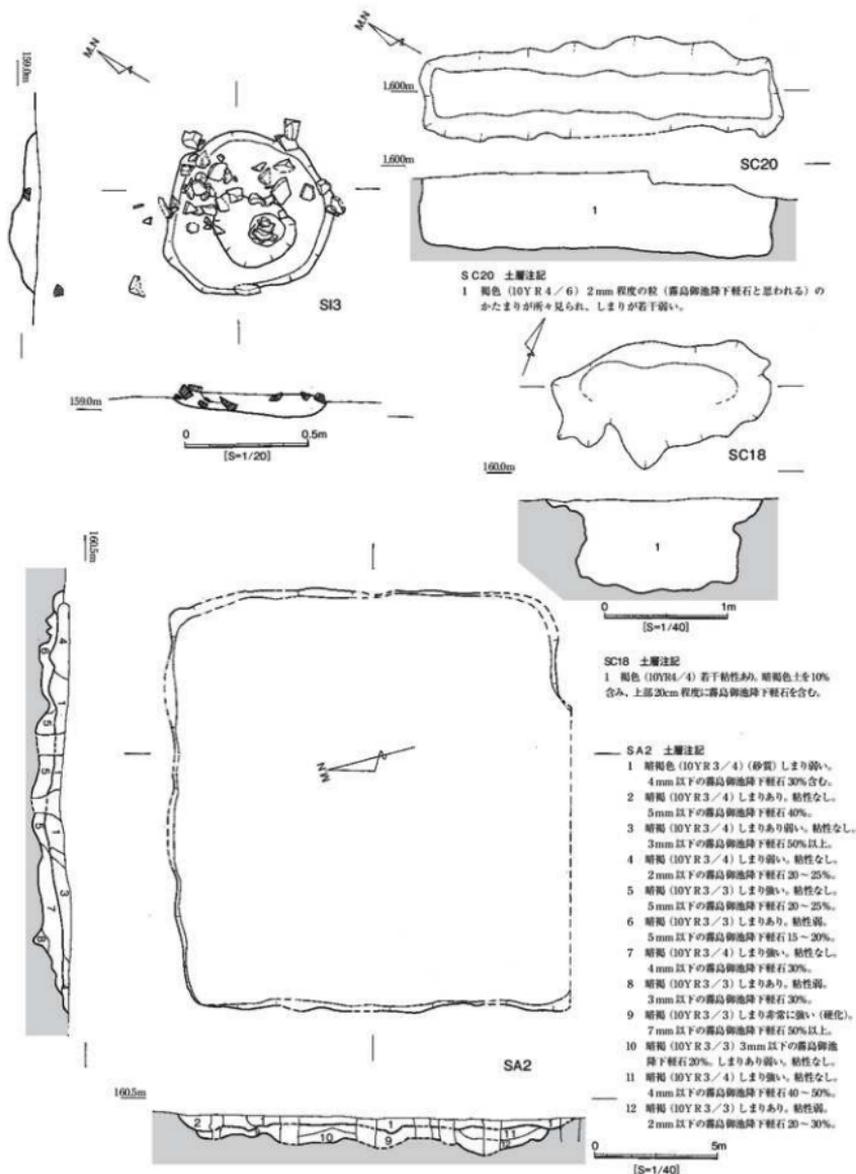
358は泥質砂岩製の小片であるが、広い平坦面の表裏面が砥面である。359は砂岩製で両端部が欠損しているが、欠損面を除く4面全てが砥面である。なお、1面には長軸方向に研磨によってできたとみられる断面V字の溝がみられ、溝の一部には鉄片が残されている。360はリソイダイト製で、いわゆる天草砥石である。断面は四角柱状であり、そのうちの二面に砥面が見られる。361は泥岩製で、平面部片面と両側面に砥面が見られる。



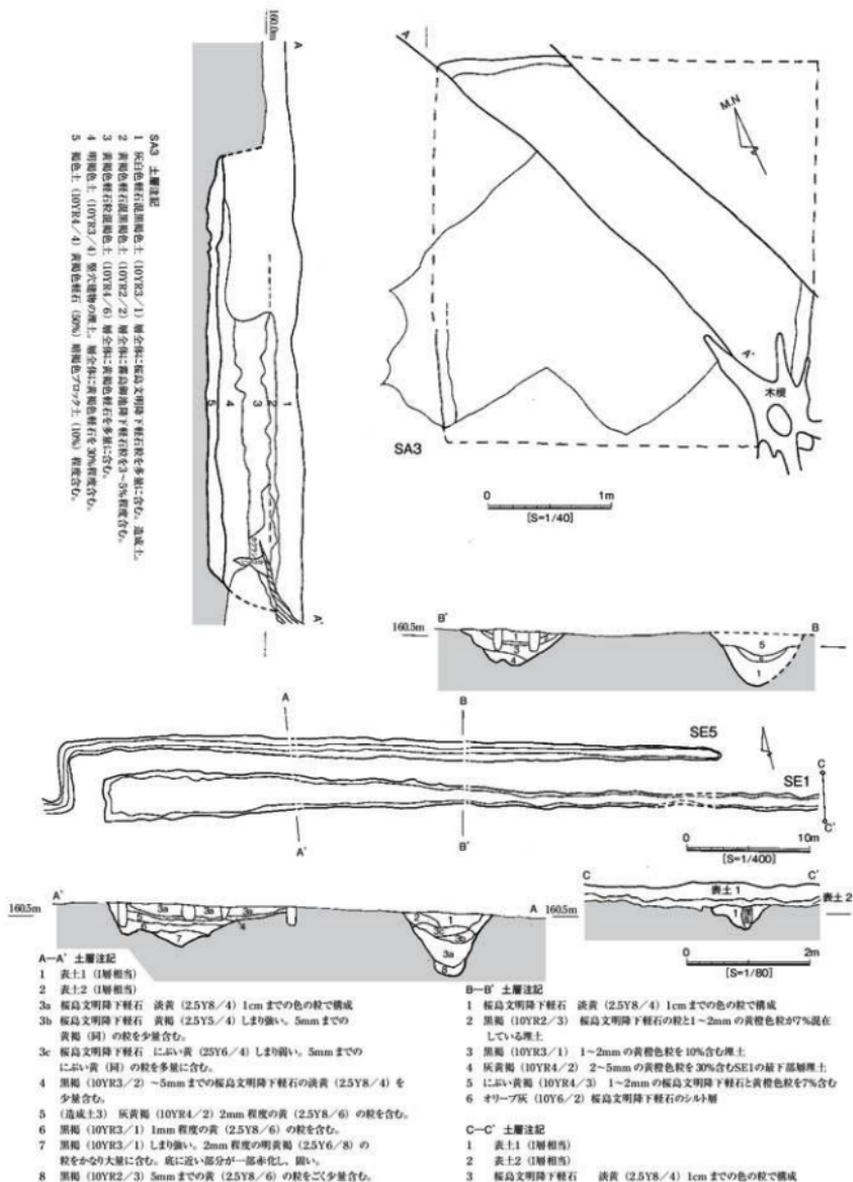
第16図 B区 縄文時代早期～中期の遺構分布図 [S=1/500]

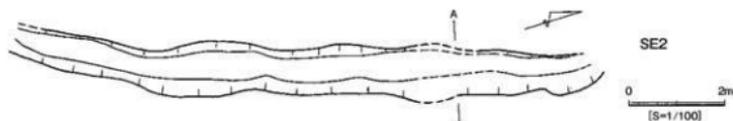


第 17 図 B 区 縄文時代晩期～中世および時期不明の遺構分布図 [S=1/500]



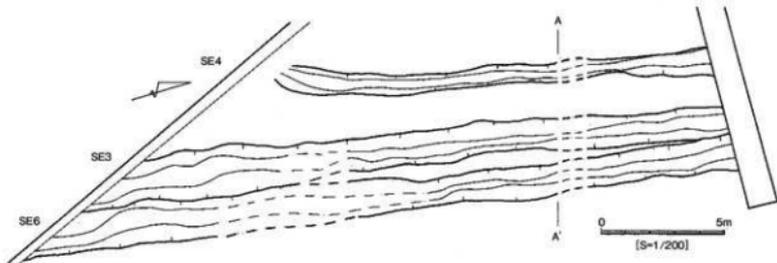
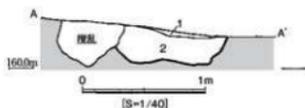
第18図 B区 SI3、SC18・20、SA2実測図 [S=1/40]





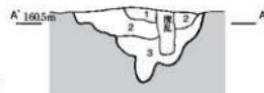
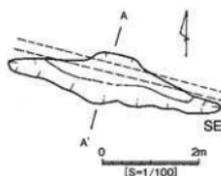
SE2 土層注記

- 1 黒褐色土 (10Y R 3 / 2) 1mm ~ 5mm 程度の板島文明降下軽石を多量に含む (もとは100%板島文明降下軽石層か)
- 2 暗褐色土 (10Y R 3 / 3) やや軟質。粒子が軽くザラザラしている。1mm ~ 3mm 程度の霧島御池降下軽石を20%含むほか、炭化物粒をわずかに含む



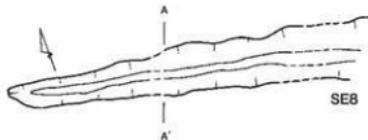
A-A' 土層注記

- 1 白色軽石混黒褐色土 (7.5 Y R 2 / 1) 土質は固いが、しまりはない。板島文明降下軽石と思われる白色軽石を多く (10%前後) 含む。
- 2 白色軽石混黒褐色土 (10Y R 3 / 1) 土質はかたいが、しまりはない。全体に板島文明降下軽石と思われる白色軽石を含む。
- 3 黒褐色土 (10Y R 3 / 1) 土質は少しやわらかく、しまりはない。2層と似ているが、白色軽石をほとんど含まない。
- 4 暗灰黄色土 (2.5 Y 5 / 2) 砂質状で粒子が細かい。板島文明降下軽石に伴う火山灰土と思われる。1 ~ 2mm の白色軽石を多く含む。
- 5 淡黄 (白色) 軽石土 (2.5 Y 7 / 3) 1 ~ 3mm の軽石より構成される層。板島文明降下軽石。
- 6 黄色軽石混黒褐色土 (7.5 Y R 3 / 1) 土質はふつうでしまりは強い。層全体に霧島御池降下軽石と思われる黄色軽石を多く含む。
- 7 黄色軽石混黒褐色土 (7.5 Y R 3 / 1) 6と似ているが、白色軽石をわずかに含む。
- 8 黄色軽石混黒褐色土 (10Y R 2 / 1) 土質はやわらかく、しまりがない。全体に霧島御池降下軽石と思われる黄色軽石を多く含む。



SE7 土層注記

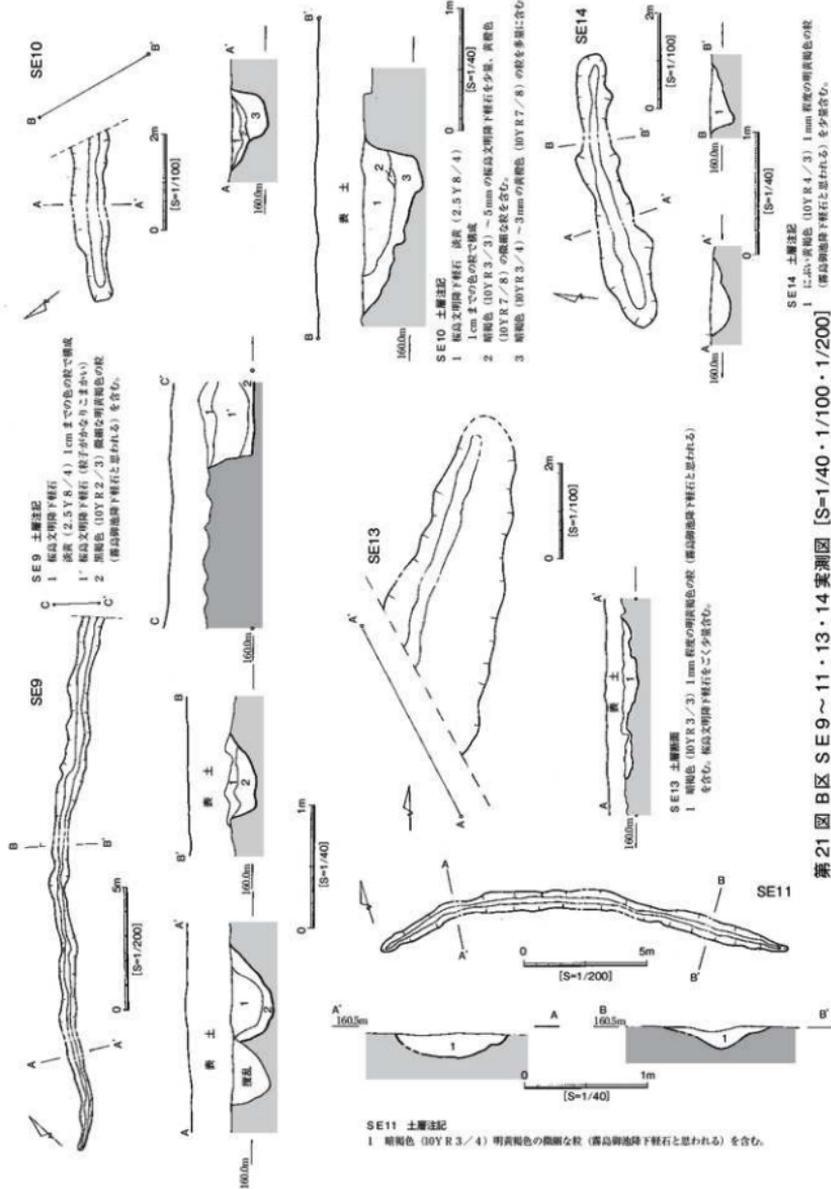
- 1 板島文明降下軽石
- 2 淡黄 (2.5 Y 8 / 4) 1cm までの色の粒で構成
- 3 黒褐色 (10Y R 2 / 3) 板島文明降下軽石と 10Y R 7 / 8 黄褐色の微細な粒を含む。
- 3 黒褐色 (10Y R 2 / 2) 黄褐色 (10Y R 7 / 8) の微細な粒を含む。



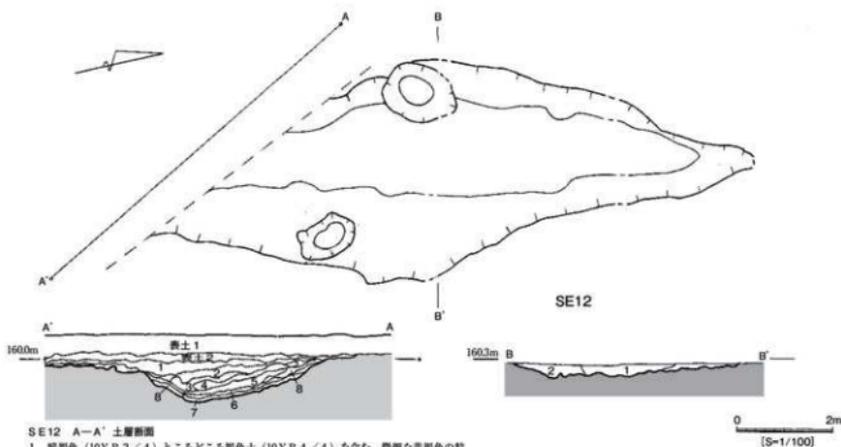
SE8 土層断面

- 1 黒色 (10Y R 2 / 1) ~ 5mm の黄褐色 (10Y R 7 / 8) の粒を含む。

第20図 B区 SE2 ~ 4・6 ~ 8実測図 [S=1/20・1/40・1/80・1/100・1/200]



第 21 図 B 区 SE 9 ~ 11 · 13 · 14 実測図 [S=1/40 · 1/100 · 1/200]

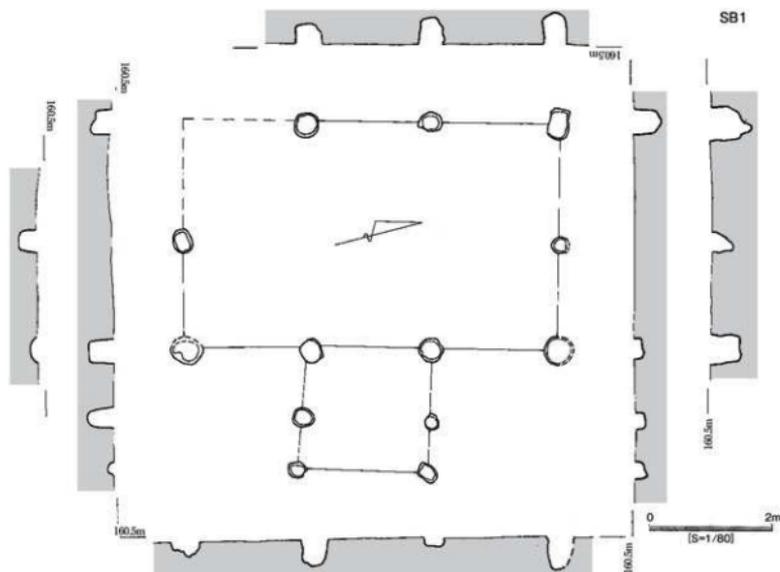


SE12 A-A' 土層断面

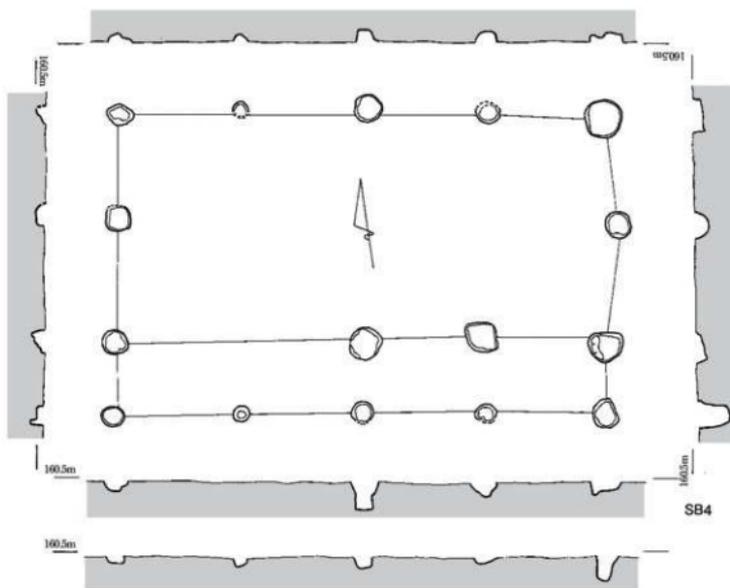
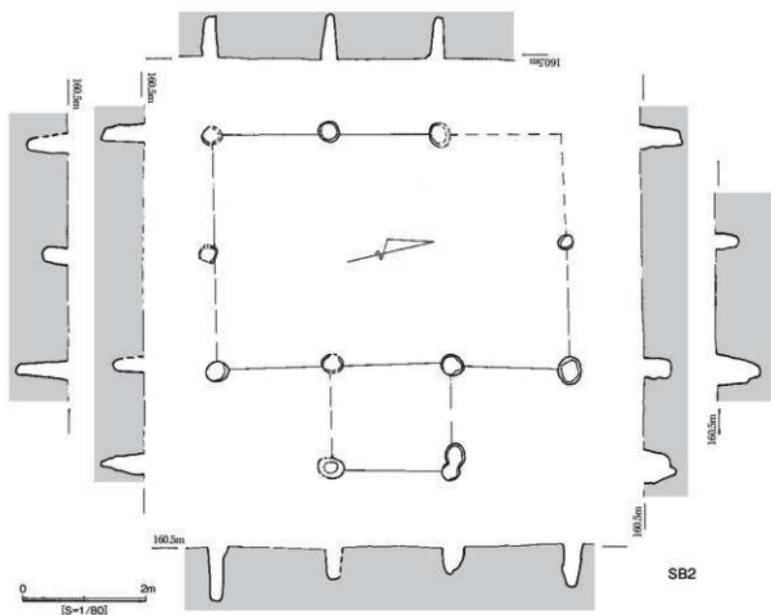
- 1 暗褐色 (10Y R 3/4) とところどころ褐色土 (10Y R 4/4) を含む。微細な黄褐色の粒 (薄島御池降下軽石と思われる) を含む。板島文明降下軽石を少量含む。
- 2 暗褐色 (10Y R 3/3) 板島文明降下軽石を含む。若干しまり弱い。
- 3 におい黄褐色 (10Y R 4/3) 板島文明降下軽石を含む。若干しまり弱い。
- 4 暗褐色 (10Y R 3/3) 板島文明降下軽石を少量含む。しまり強い。
- 5 上部が硬土。下部が炭化材を含む黒色土。
- 6 暗褐色 (10Y R 3/3) 砂質土をかなり大量に含む。
- 7 黒褐色 (10Y R 2/3) 若干粘性あり。
- 8 黒褐色 (10Y R 2/3) 板島文明降下軽石を含む。2mm 程度の黄褐色の粒をわずかに含む。

B-B' 土層断面

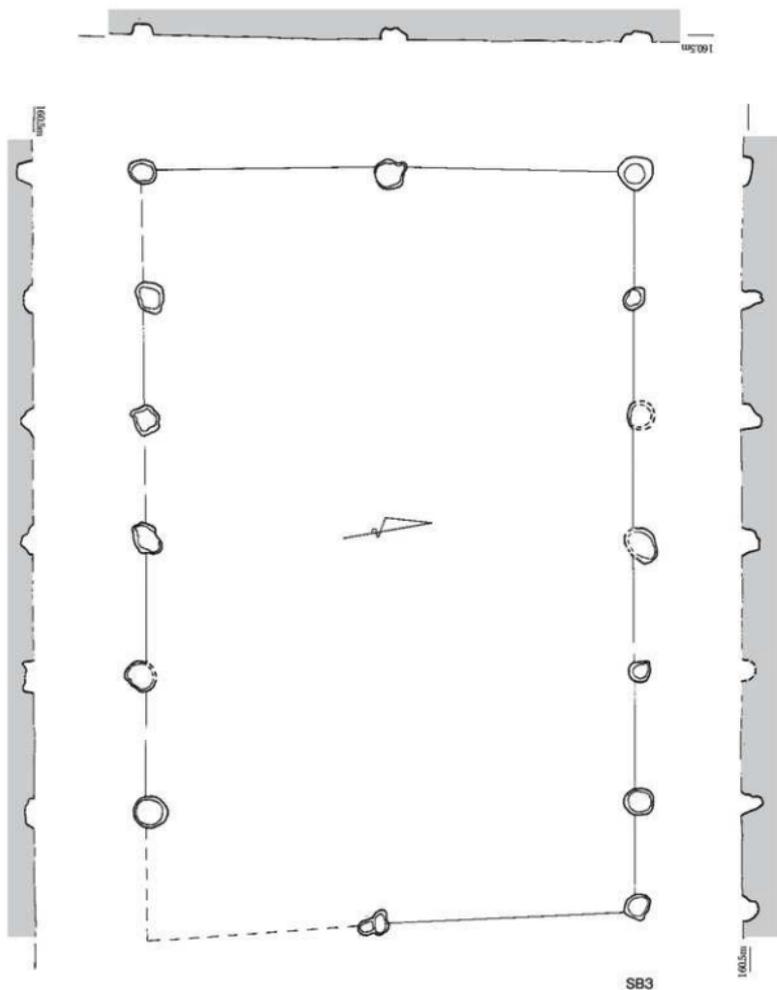
- 1 黒褐色 (10Y R 2/3) 2mm 程度の明黄褐色の粒 (薄島御池降下軽石と思われる) と板島文明降下軽石を少量含む。~5cm の炭化材を含む。
- 2 暗褐色 (10Y R 3/4) 微細な明黄褐色の粒 (同上) と 2mm 程度の板島文明降下軽石を含む。



第22図 B区 SE12, SB1 実測図 [S=1/80・1/100]



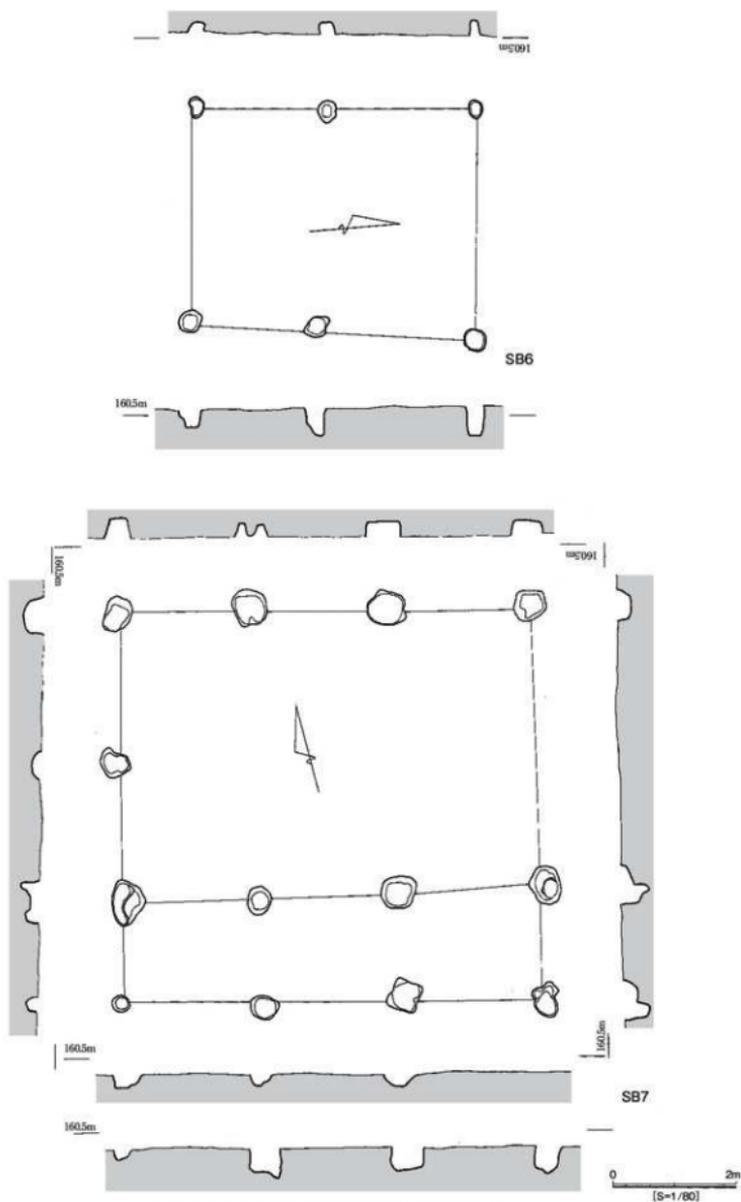
第23図 B区 SB2・4実測図 [S=1/80]



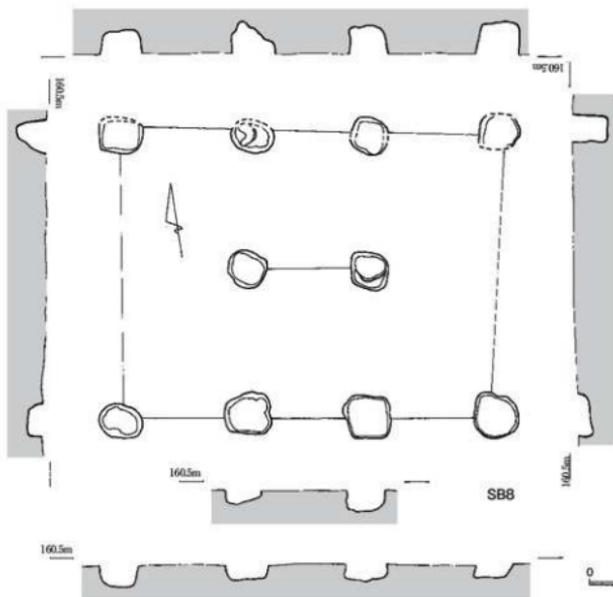
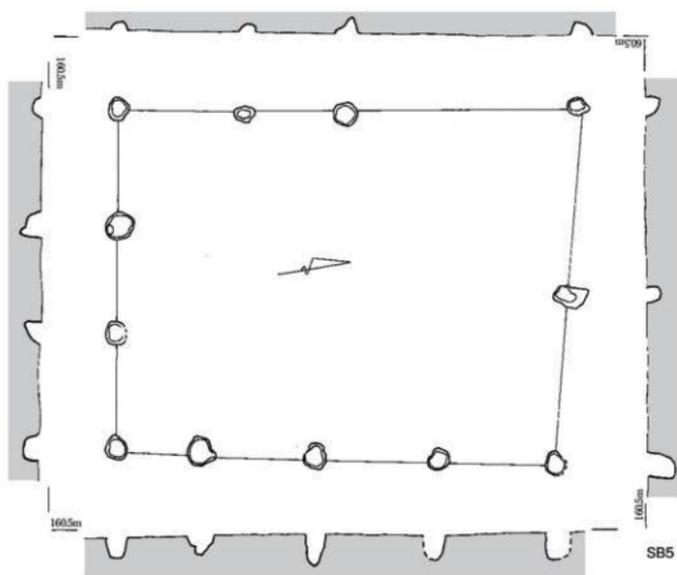
SB3



第24图 B区 SB3实测图 [S=1/80]

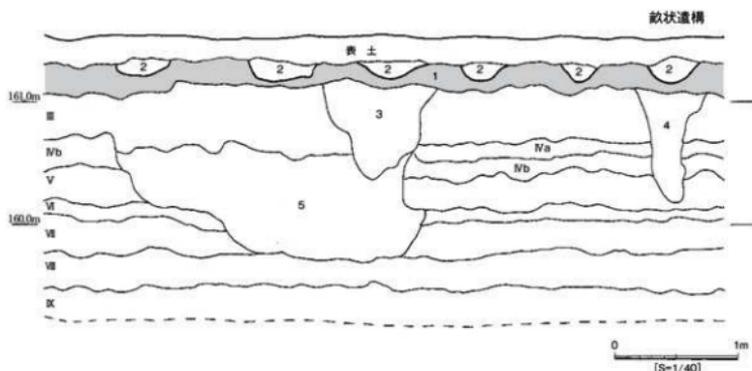


第25图 B区 SB6·7实测图 [S=1/80]



第26図 B区 SB5・8実測図 [S=1/80]

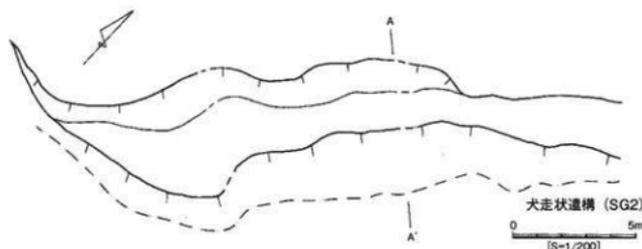
0 2m
[S=1/80]



畝状遺構 土層注記

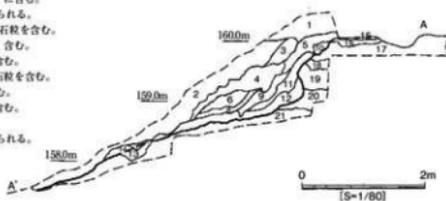
- 1 中食の耕作土
- 2 板島文明降下軽石 淡黄(2.5 Y8/4) 1cmまでの色の粒で構成

- 3 暗褐色(10Y R3/4) ~2mmの粒(同上)を大量に含む。
- 4 黒褐色(10Y R2/3) ~2mmの粒(同上)を大量に含む。
- 5 黒褐色(10Y R2/2) ~2mmの粒(同上)を少量含む。

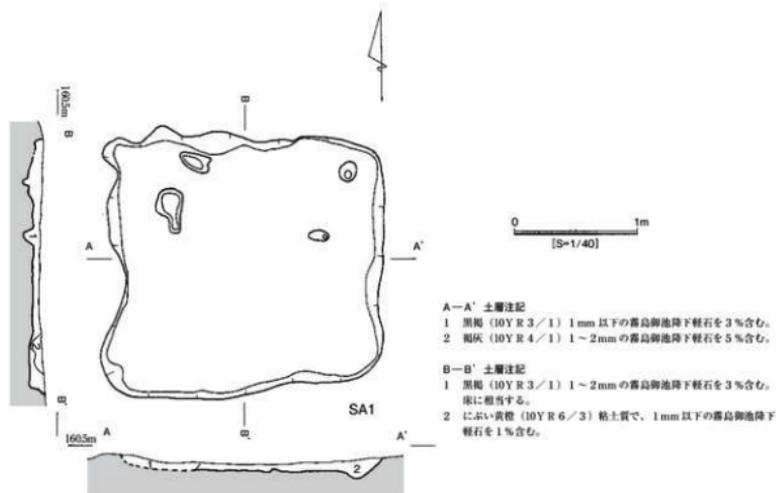
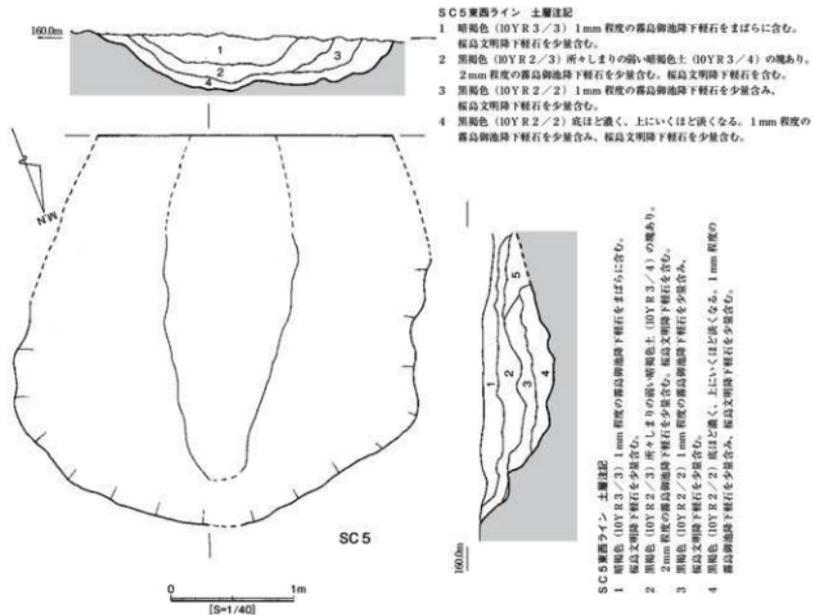


犬走状遺構 (SG2) 土層注記

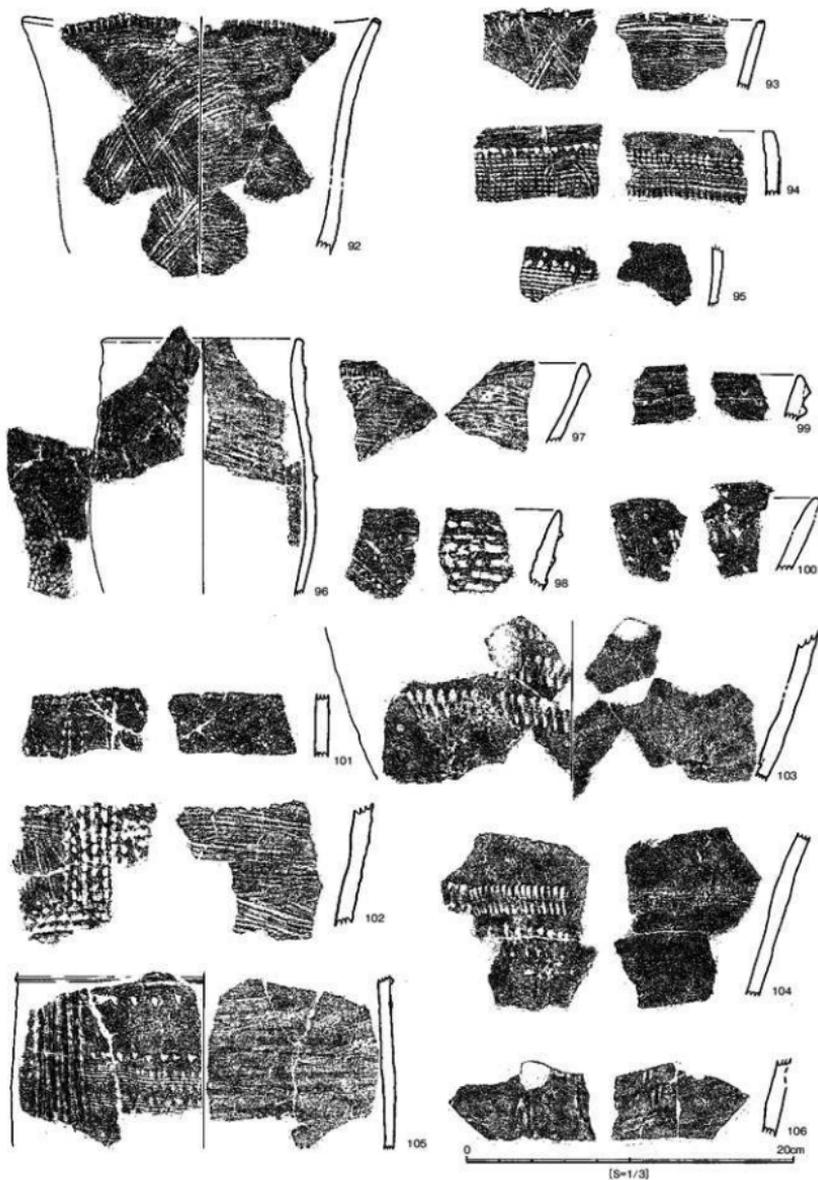
- 1 灰白色軽石混暗褐色土(10Y R3/3) 全体に灰白色(文明)黄褐色(御造)軽石粒を多量に含む。近現代の造成土。
- 2 灰白色軽石混暗褐色土(7.5 Y R3/3) 1層と似ているが、灰白色軽石粒の含有率が低い。
- 3 灰白色軽石粒混暗褐色土(7.5 Y R3/2) 黄褐色軽石粒の含有率が高く、色調が深い。
- 4 黄褐色軽石粒混暗褐色土(10Y R3/2) 黄褐色軽石粒を多く含む。土質はやわらかい。
- 5 黄褐色軽石粒混黒褐色土(10Y R2/1) 黄褐色軽石粒を多量(10%前後)に含む。
- 6 明黄褐色軽石層(2.5 Y7/6) 板島文明降下軽石。二次的堆積と考えられる。
- 7 灰白色軽石粒混暗褐色土(10Y R3/3) 多量(40~50%)の灰白色軽石粒を含む。
- 8 暗褐色土(10Y R3/3) 灰白色でなく黄褐色軽石粒を多く(10%前後)含む。
- 9 暗褐色土(10Y R2/2) 土質はやわらかく、黄褐色軽石粒を5%程度含む。
- 10 褐色土ブロック混暗褐色土(10Y R3/4) 褐色土ブロックと黄褐色軽石粒を多く含む。
- 11 暗褐色土(7.5 Y R3/3) アカホヤブロックと黄褐色軽石粒を多く含む。
- 12 黒褐色土(10Y R2/3) 土質はやわらかく、わずかに黄褐色軽石粒を含む。
- 13 暗褐色土(7.5 Y R3/1) 全体に灰白色軽石粒を含む。
- 14 暗褐色土(7.5 Y R3/1) 土質はやわらかく、御造による礫乱土と考えられる。
- 15 黄褐色軽石粒混暗褐色土(10Y R3/1) 5層と同一か?
- 16 黄褐色軽石層(10Y R6/6) 薄島御造降下軽石層
- 17 褐色土(10Y R4/6) 二次的アカホヤ堆積層
- 18 明黄褐色土(10Y R6/8) アカホヤ火山灰土
- 19 浅黄色パリス混黒褐色土(10Y R2/1) P11と考えられる浅黄色パリスを多量に含む。
- 20 暗褐色土(10Y R3/1) 19と21の兼層
- 21 黄褐色土(10Y R4/3) P14と考えられる黄褐色ブロック土を含む。



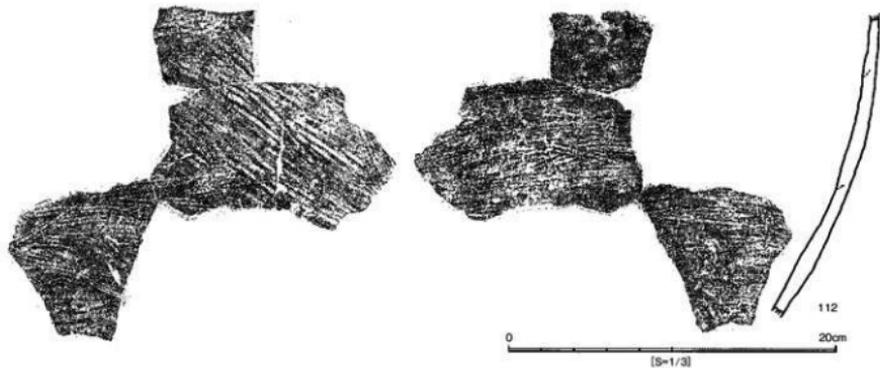
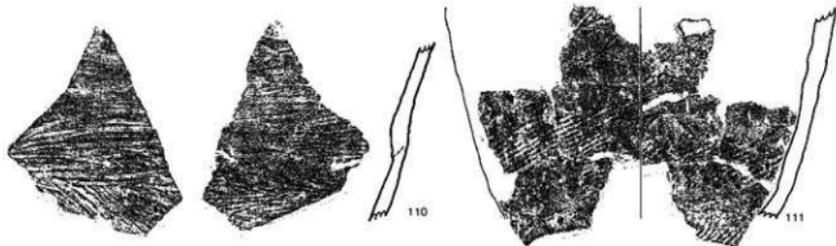
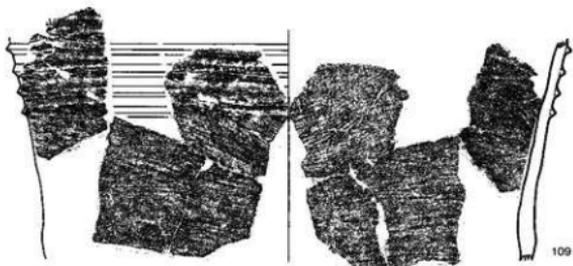
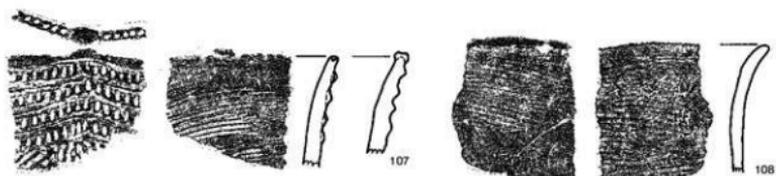
第27図 B区 畝状遺構 [S=1/40]・SG2実測図 [S=1/200・1/80]



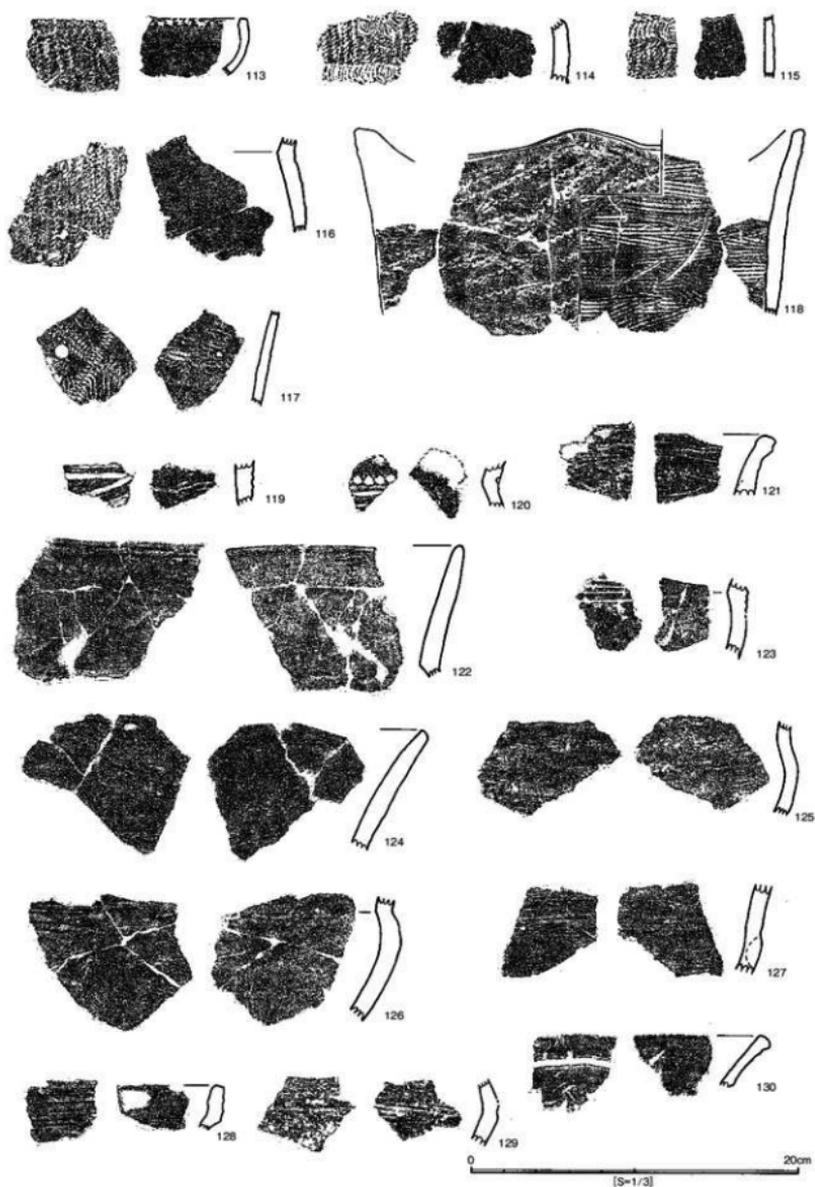
第28図 B区 SC5・SA1実測図 [S=1/40]



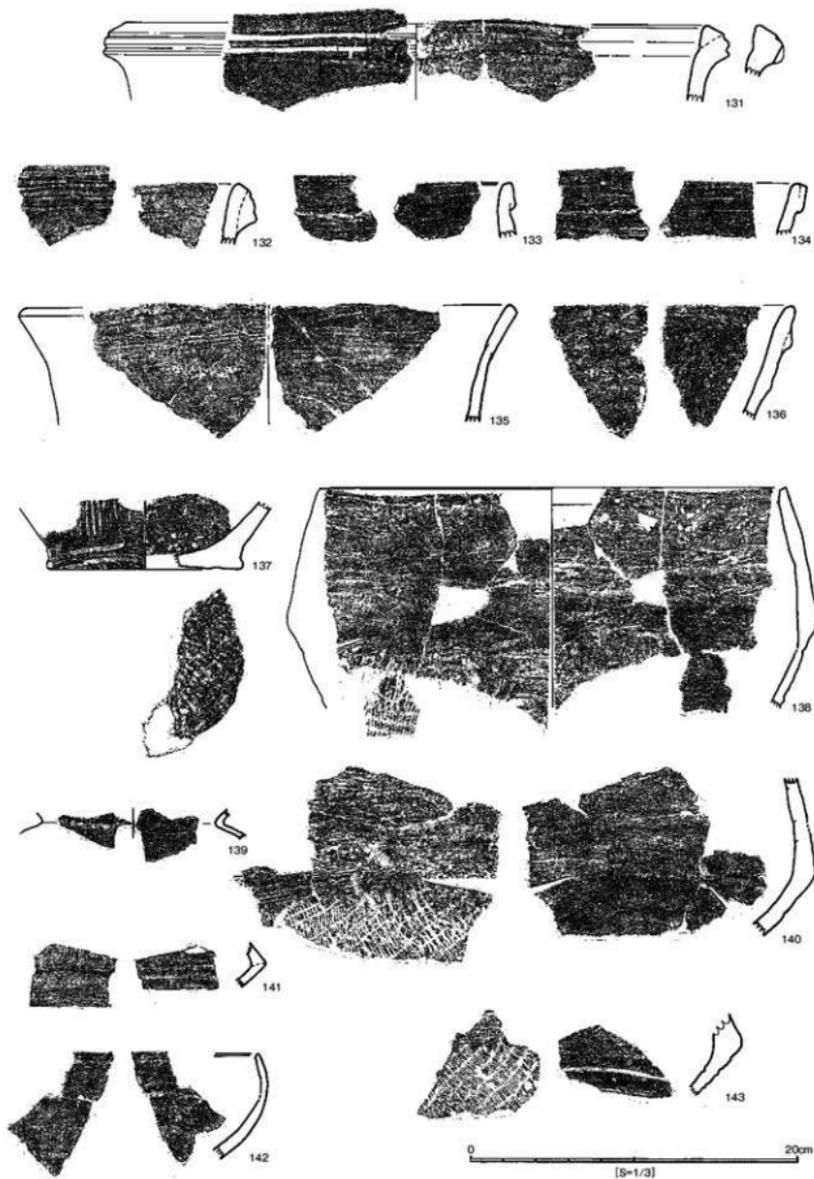
第 29 図 B 区 縄文時代の出土遺物実測図 (1) [S=1/3]



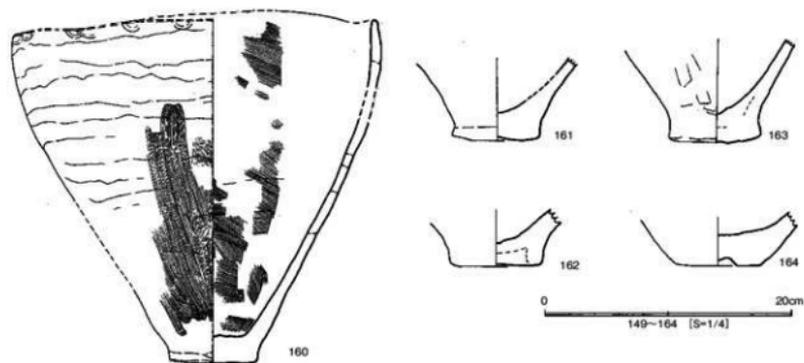
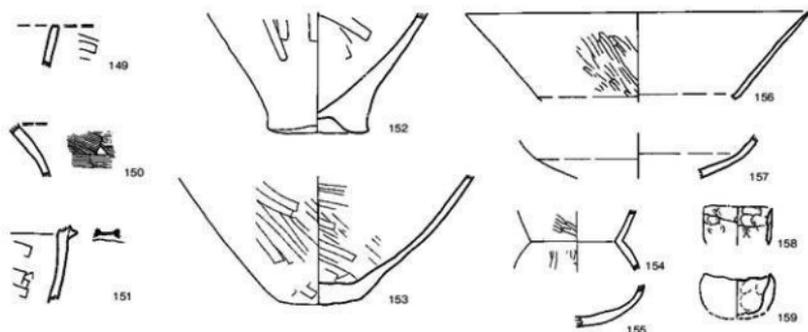
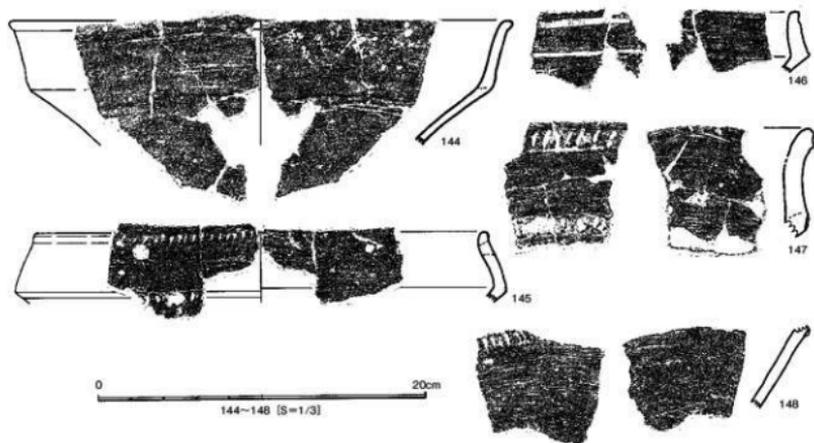
第 30 図 B 区 縄文時代の出土遺物実測図 (2) [S=1/3]



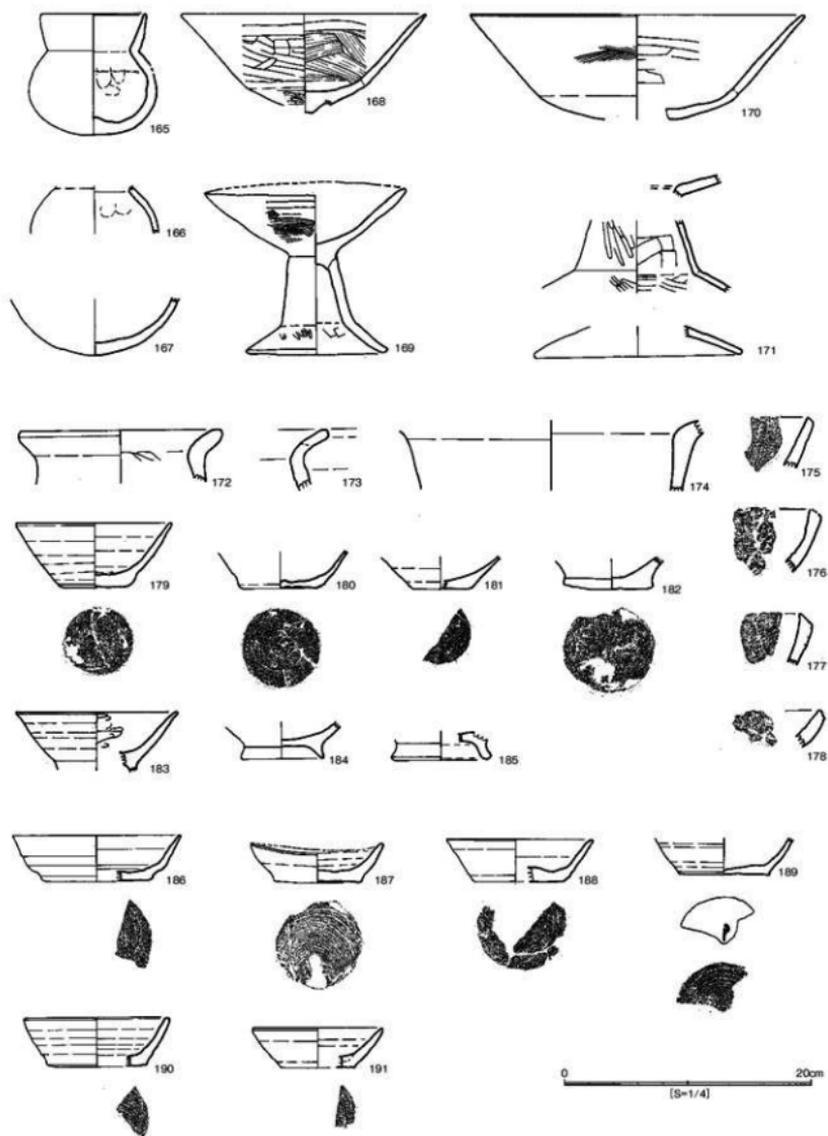
第 31 図 B 区 縄文時代の出土遺物実測図 (3) [S=1/3]



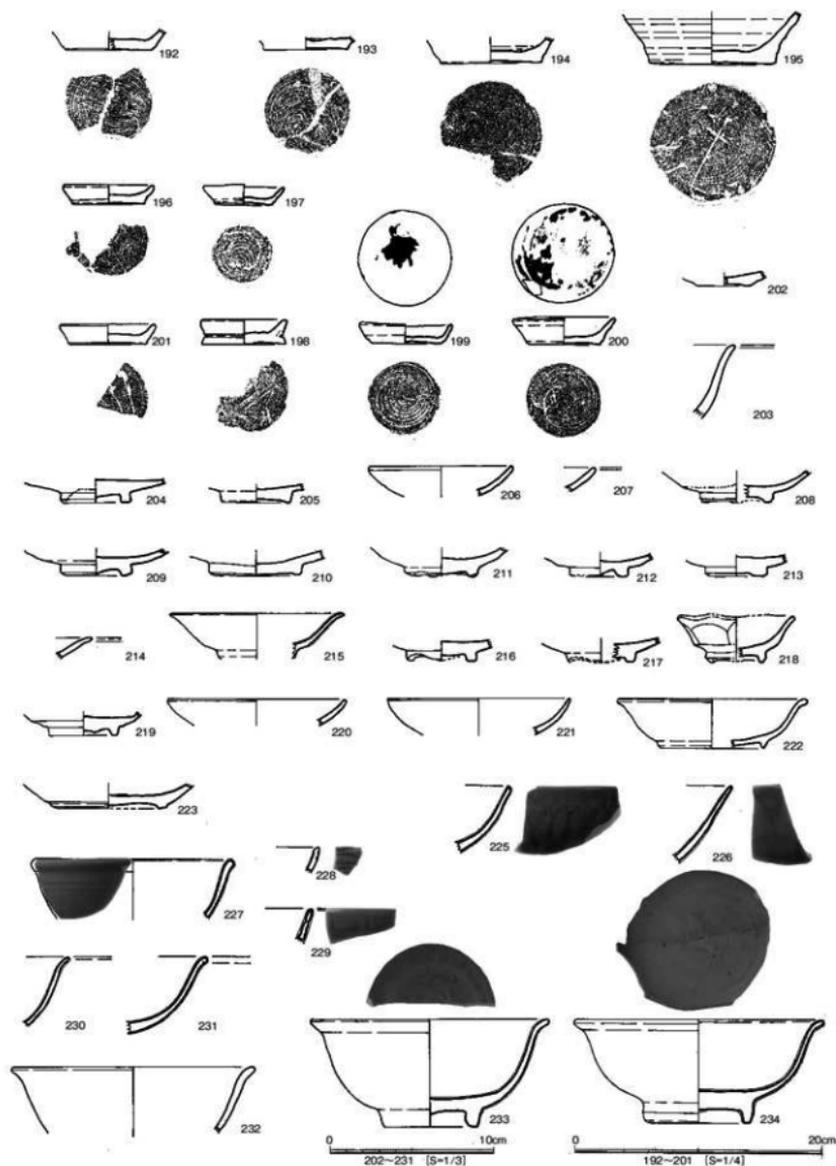
第32図 B区 縄文時代の出土遺物実測図(4) [S=1/3]



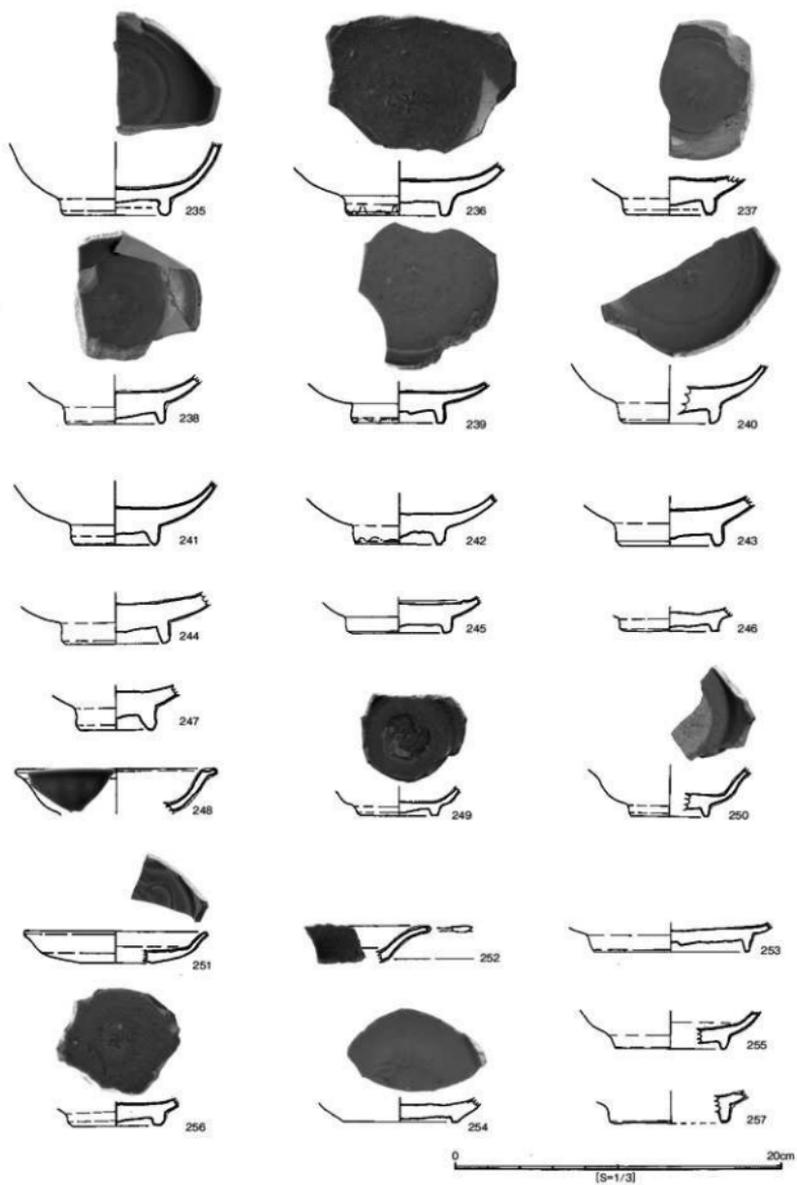
第 33 図 B 区 縄文・古墳時代の出土遺物実測図 [S=1/3・1/4]



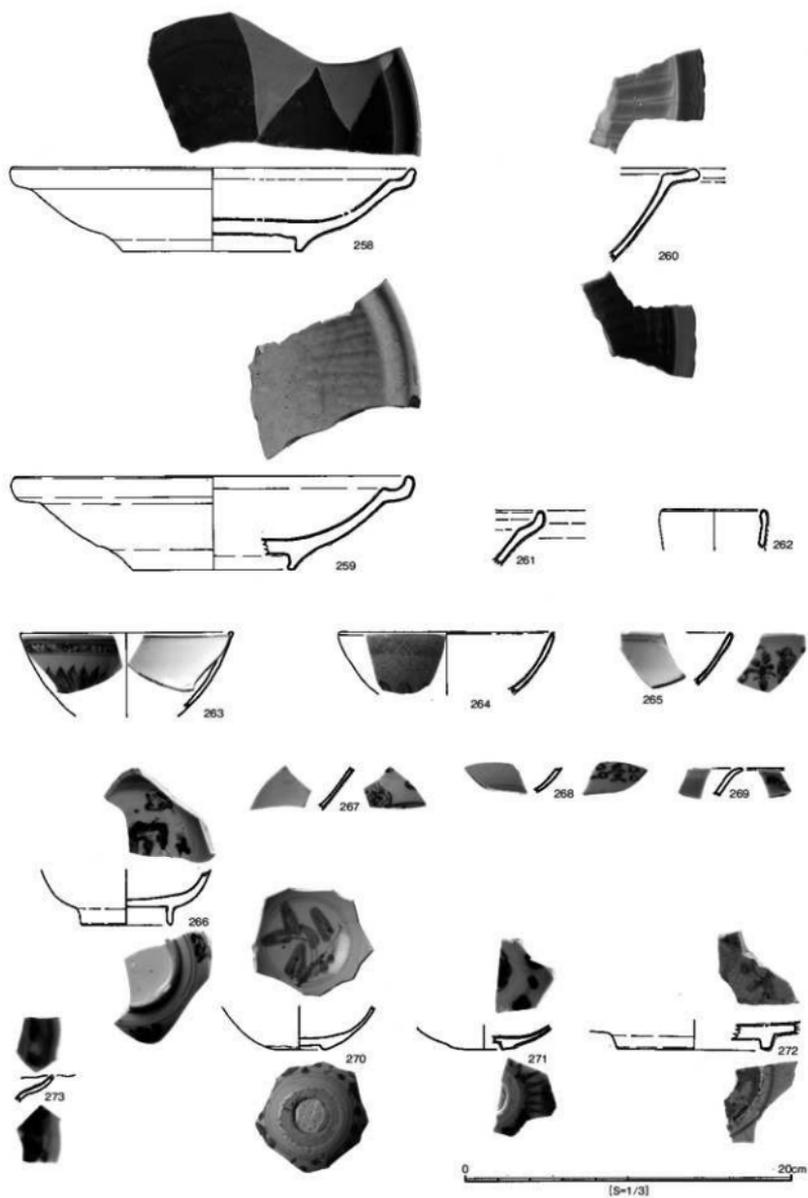
第 34 図 B 区 古墳時代・古代・中世の出土遺物実測図 [S=1/4]



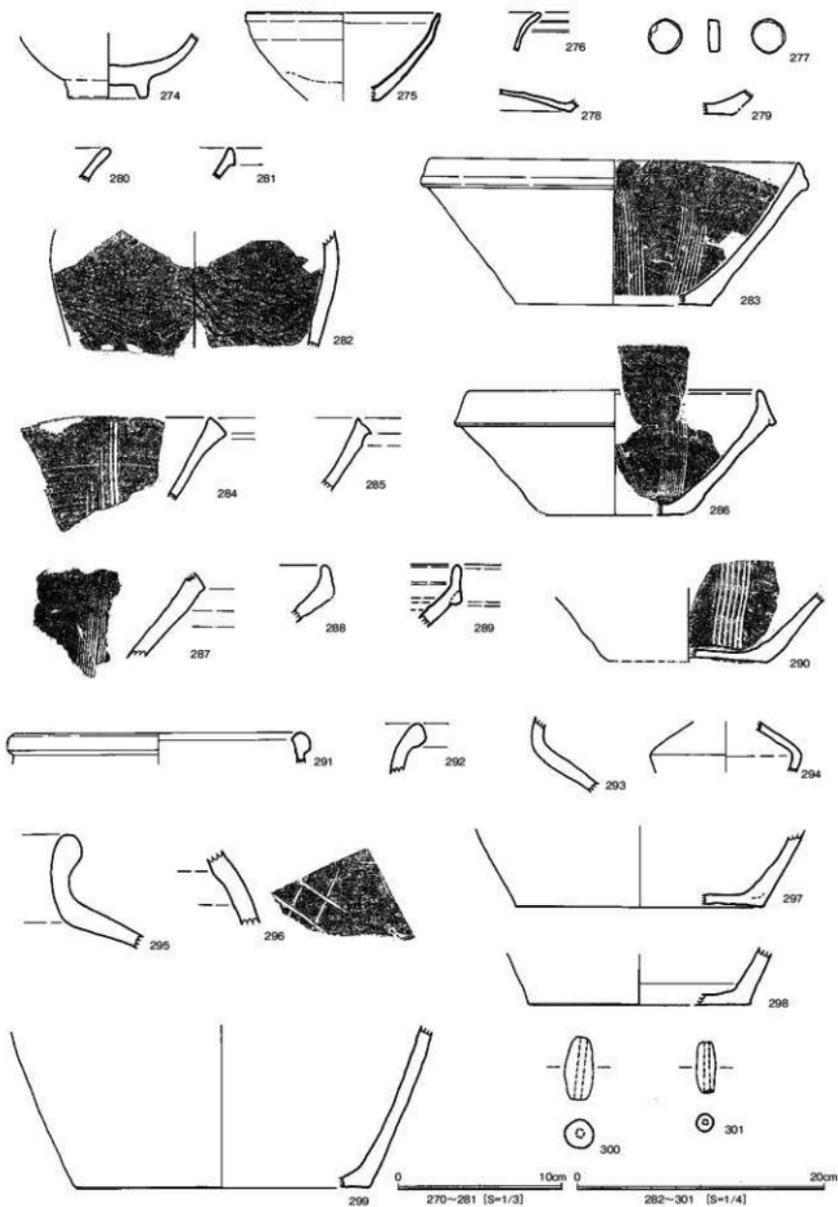
第35図 B区 中世の出土物実測図(1) [S=1/3・1/4]



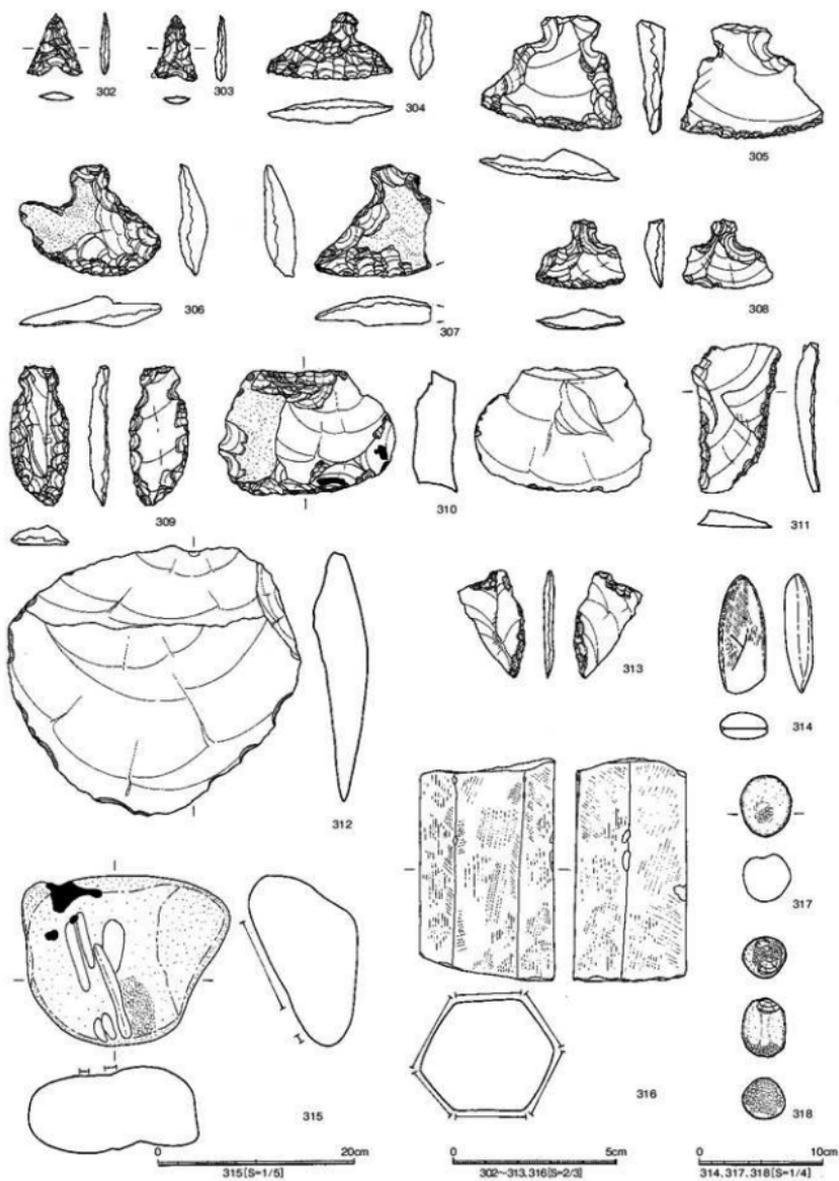
第 36 図 B 区 中世の出土遺物実測図 (2) [S=1/3]



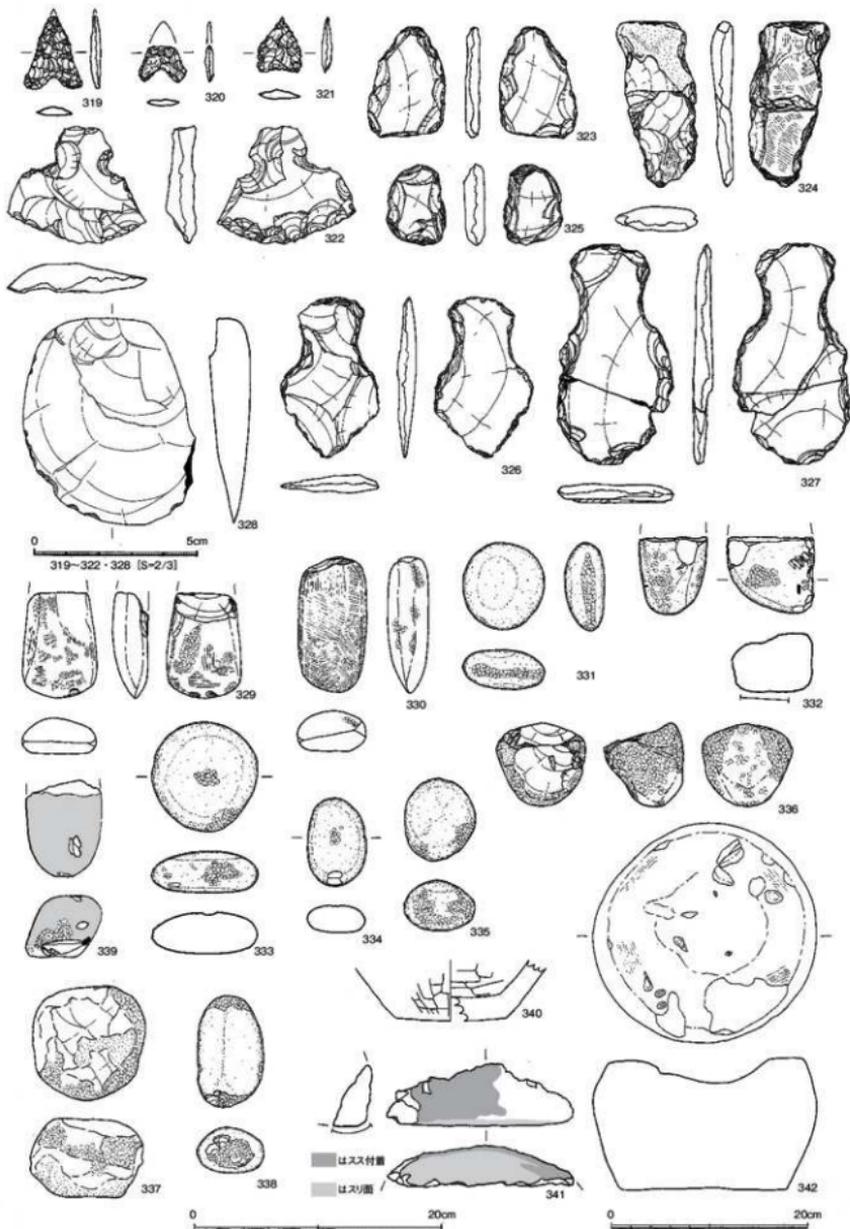
第 37 図 B 区 中世の出土遺物実測図 (3) [S=1/3]



第38図 B区 中世の出土物実測図(4) [S=1/3・1/4]



第 39 图 B 区 IV 层出土石器实测图 [S-1/5 · 2/3 · 1/4]



第40図 B区Ⅱ層・Ⅲ層出土石器実測図 [S=2/3・1/4・1/5]



第 41 図 B 区 Ⅲ 層出土・時期不明の石器実測図 [S=2/3]

第3表 B区出土遺物観察表

発掘 番号	出土 位置	種別	器種	部位	手法・調整・文様		色 調		胎 土	焼成 率	法量
					外面	内面	外面	内面			
92	P25	陶文 土器	深鉢	口縁 胴部	漆点文 口文 格子状赤褐色 赤文	目紋条痕	にぶい青	にぶい黄褐色	微細な透明光沢粒 黒色光沢粒を多く含む	口縁 1/4	
93	Q25	陶文 土器	深鉢	口縁	格子目条痕 目文	目紋条痕文	にぶい青	橙	1mm以下の灰白 黒褐色を含み、微細な透明光沢粒を少量含む	—	
94	P27	陶文 土器	深鉢	口縁	列点文 突帯文	押印文 赤点文	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	2mm以下の灰白 褐色 灰白 黒褐色粒 角閃石を含み、ごく微細な光沢粒を含む	—	
95	P25	陶文 土器	深鉢	胴部	押印文 刺突文	ナデ	にぶい黄褐色	褐色	2mm以下の灰白 黒色光沢粒を少し含む	—	
96	Q24	陶文 土器	深鉢	口縁 胴部	多方向粗み 目貼付突帯	目紋条痕の 後ナデ	にぶい黄褐色	浅黄褐色	2mm以下の透明光沢粒少し含む	1/4	口径11.7cm
97	L23	陶文 土器	深鉢	口縁	斜方向粗み 目貼付突帯 目紋条痕文	目紋条痕文	にぶい黄褐色	にぶい青	2mm以下の灰白 淡い灰白 黒褐色 褐色粒子を含み、微細な透明光沢粒を少量含む	—	
98	P26	陶文 土器	深鉢	口縁	斜方向粗み 目貼付突帯	連続刺突文	にぶい青	褐色	2mm以下の灰白 黒褐色 褐色色粒子 軟質赤色粒子 雲母を含む	—	
99	N22	陶文 土器	深鉢	口縁	貼付突帯	ナデ	にぶい青	灰黄褐色	微細な透明光沢粒をわずかに含む	—	
100	P28	陶文 土器	深鉢	口縁	ナデ 目 紋連続 刺突文	ナデ	黄褐色	灰黄	微細から1mm以下の光沢のある黒褐色 無色透明の粒を多く含む	—	
101	L23	陶文 土器	深鉢	胴部	目紋条痕 刺突文 漆点文	ナデ	黒褐色	にぶい黄褐色	2mm以下の灰白 透明光沢粒をわずかに含む	—	
102	Q25	陶文 土器	深鉢	胴部	漆点刺突文 目紋条痕 目紋条痕	目紋条痕	灰	にぶい黄	外面 ごく微細な透明光沢粒を多く含む、2mm以下の灰白の粒をこくわずに含む。 内面 2mm以下の雲母 淡黄 黒色の粒を少量含む	1/9	
103	P26	陶文 土器	深鉢	胴部	目紋連続 刺突文	ナデ	灰	にぶい黄	外面 2mm以下の光沢のある無色透明 黒褐色 角閃石粒をわずかに含む。 内面 淡黄の粒を少量含む	1/6	
104	P26	陶文 土器	深鉢	胴部	ナデ 目紋 連続刺突文	ナデ	黄褐色	灰黄	微細から2mm以下の光沢のある黒褐色 無色透明の粒を多く含む	1/9	
105	P24	陶文 土器	深鉢	胴部	ナデ 刺突 文 押印文	工具ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	外面 微細から2mm以下の光沢のある黒褐色 無色透明の粒を多く含む 3mm以下の褐色の粒を1粒含む。 内面 淡黄粒を多く含む	1/5	
106	K23	陶文 土器	深鉢	胴部	突帯文	ナデ	灰黄褐色	にぶい黄褐色	3mm以下の灰白 黒褐色色粒子 微細な光沢粒を含む	—	
107	O26	陶文 土器	深鉢	口縁 胴部	斜み目突帯 漆点刺突文	目紋条痕	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	2mm以下の灰白 赤褐色 黒褐色色粒子を含む	—	
108	Q24	陶文 土器	深鉢	口縁	目紋条痕 目刺之	目紋条痕 目刺之 目刺之 後ナデ	褐色	にぶい黄褐色	3～4mm大の淡黄褐色粒、2mm以下の淡黄褐色 黒褐色、その他の砂粒を少量含む、微細な透明光沢粒を中量含む	—	
109	P23	陶文 土器	深鉢	胴部	ナデ 三角突帯	目紋条痕	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	外面 微細から2mm以下の光沢のある無色透明 黒褐色 灰白の粒を多く含む。 内面 淡黄の粒を多く含む 2mm以下の軟質赤色粒子をわずかに含む	1/6	
110	P23	陶文 土器	深鉢	胴部	目紋条痕	目紋条痕	灰黄褐色	にぶい黄褐色	4～5mm大の淡黄褐色粒・1mm以下の淡黄褐色・2～5mm大の軟質赤褐色粒・1mm以下の黒色光沢粒、その他の砂粒を少量含む。 微細な透明光沢粒を中量含む	—	
111	Q24	陶文 土器	深鉢	胴部	目紋条痕文	目紋条痕	にぶい青	にぶい青	2mm以下の灰白 黒褐色 褐色色粒子 透明光沢粒を含む	1/4	
112	P23	陶文 土器	深鉢	胴部	目紋条痕	目紋条痕	にぶい黄褐色 褐色	にぶい黄褐色 灰黄褐色	微細な透明光沢粒を中量含む、1mm以下の黒色光沢粒・1～5mm大の軟質赤褐色色粒・1mm以下の淡黄褐色、その他の砂粒を少量含む	—	
113	K21	陶文 土器	深鉢	口縁	刺突文	ナデ	黒褐色	にぶい黄褐色	微細な透明光沢粒を多く含む	—	
114	K22	陶文 土器	深鉢	胴部	刺突文 点形刺突文	—	灰白	灰白	2mm以下の黒褐色の粒を多く含む	—	
115	SE8	陶文 土器	深鉢	胴部	刺突文 点形刺突文	ナデ	灰褐色	にぶい青	2mm以下の黒色光沢粒 灰白 褐色色の粒を少し含む	—	
116	N26	陶文 土器	深鉢	胴部 胴部	刺突文	ナデ	褐色	にぶい黄褐色	外面 ごく微細な透明光沢粒を多く含む 2mm以下の雲母をこくわずに含む。 内面 ごく微細から2mm以下の灰白 褐色 黒褐色の粒を多く含む	—	
117	Q24	陶文 土器	深鉢	胴部	刺突文 点形刺突文	目紋条痕	褐色	にぶい黄褐色	微細から1mm以下の光沢のある黒褐色 淡黄褐色 灰白 光沢のある無色透明の粒を少量含む	—	
118	N27	陶文 土器	深鉢	口縁 胴部	目紋条痕 刺突文	目紋条痕	にぶい青	にぶい青	2mm以下の透明光沢粒 黒色光沢粒 灰白色粒	1/4	口径27.4cm
119	L21	陶文 土器	深鉢	胴部	条痕	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい青	2mm以下の灰白 灰褐色 褐色色粒子 雲母を含む	—	
120	L23	陶文 土器	深鉢	胴部	目紋条痕文 連続刺突文	ナデ	橙	橙	4mm以下の灰白 黒褐色 透明光沢粒を含む	—	
121	B1K	陶文 土器	深鉢	口縁	斜方向ナデ 法刺突文	斜方向の 目紋条痕	にぶい赤褐色	明赤褐色	1mm大の灰白色粒を少量 微～1mm大の無色透明光沢粒 黒色光沢粒を少量含む	—	
122	L23	陶文 土器	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	灰褐色	にぶい青	無色透明の微細な粒を中量 微細な角閃石を少量 5mm白色	口縁部 1/20	標準口径30.4cm

掲載 番号	出土 位置	種別	器種	部位	手法・図象・文様		色 調		胎 土	保存 部	法量
					外面	内面	外面	内面			
123	B16	縄文 土器	深鉢	胴部	4本の波線 ナゲ スス 付着 ミガキ	ミガキ ミガキ	にぶい 黄緑	緑 黒灰	微細な無色透明光沢粒 2mm以下の白色半透明粒 黒色粒 白色粒を中量 まれに褐色粒を含む	—	—
124	M23	縄文 土器	深鉢	口縁	ミガキ スス付着	ミガキ	にぶい 黄緑	にぶい 黄緑	無色透明の微細な粒少量 角閃石 1mm以下の粒わずかに 白色半透明2mm以下の粒わずかに含む	—	—
125	L23	縄文 土器	深鉢	胴部	ミガキ スス付着	ミガキ	褐色	褐色	微細な無色透明光沢粒を多量 2mm以下の無色透明 黒色 光沢粒を少量 2mm以下の白色粒を中量 まれに2mm以 下の白色半透明粒を含む	—	—
126	L23	縄文 土器	深鉢	胴部	ミガキ 上具ナゲ	ミガキ	明褐色	にぶい 黄緑	微細な無色透明光沢粒 1mm以下の黒色光沢粒 2mm以下 の白色粒を多量 1mm以下の灰色粒を中量 まれに1 mm以下の白色半透明粒を含む	—	—
127	O22	縄文 土器	深鉢	胴部	ミガキ ヘウ割り	回転ナゲ ナゲ 黒 面筋あり	にぶい 黄緑	灰黄緑	微細～1mm以下の無色透明光沢粒を多量 1mm以下の 白色粒を中量 1mm以下の黒色光沢粒を少量含む	—	—
128	L23	縄文 土器	深鉢	口縁部	3条波線 ミガキ	ナゲ	にぶい 黄緑	にぶい 黄緑	白色半透明の2mm以下の粒わずかに含み、無色透明の微 細な粒少量 黒色の光る粒 褐色 少量含む	—	—
129	J21	縄文 土器	深鉢	胴部	ミガキ 四波線	ミガキ	にぶい 黄緑	灰黄緑	微細な無色透明光沢粒 1mm以下の白色粒を多量に含み、 1mm以下の黒色粒を少量含む	—	磨定口径 35.2cm
130	N22	縄文 土器	深鉢	口縁部	ミガキ 波線	ミガキ	暗灰黄	暗灰黄	微細な無色透明光沢粒 (まれに1mm大) を含み、3mm以 下の白色粒を多量に含む	—	—
131	P23	縄文 土器	深鉢	口縁部	2条波線 刷文文	ナゲ	にぶい 赤黒	にぶい 黄緑	微細な無色透明光沢粒を多量に含み、微細な黒色光沢粒と赤 色光沢粒少量含む	口縁部 =1.9	—
132	B16	縄文 土器	深鉢	口縁部	2条波線 ナゲ	ナゲ	にぶい 赤黒	黒・黒	微細な無色透明光沢粒を多量に含み、微細な白色粒少量含 む	—	—
133	L21	縄文 土器	深鉢	口縁	ナゲ スス付着	横方向ナゲ 黒灰	灰黄緑	暗灰黄	微細な無色透明光沢粒 黒色光沢粒を多量に含み、1mm大 の灰色粒を少量含む	—	磨定口径 30.8cm
134	Q23	縄文 土器	深鉢	口縁	目殺赤 横方向ナゲ	横方向ナゲ 黒灰	にぶい 黄緑	にぶい 黄緑	微細な無色透明光沢粒を中量含み、0.5mm大の褐色粒少 量・3mm大の赤褐色粒 少量含む	—	—
135	M23	縄文 土器	深鉢	口縁	目殺赤 ナゲ 黒 面筋	目殺赤 ナゲ 黒 面筋	黄 灰	灰黄	微細な無色透明光沢粒中量 1.5mm以下の黒色光沢粒中 量 微細～2mm大の赤褐色粒 灰白色粒少量含む	1.9	磨定口径 29.5cm
136	O22	縄文 土器	深鉢	口縁	ナゲ 文	ナゲ	浅黄橙	明黄緑	無色透明の微細な粒少量、白色半透明の1mm以下の粒わ ずかに含み、黒色の1mm以下の粒少量含む	—	—
137	M23	縄文 土器	深鉢	底部	目殺赤 ナゲ 刷文付着	ナゲ 黒 面筋	にぶい 黄	浅黄	3mm以下の褐色粒少量含み、微細な無色透明光沢粒を多 量含む	1/3	—
138	L22	縄文 土器	浅鉢	口縁一 部	横方向ナゲ 黒面筋	横方向ナゲ 黒灰	褐色 黒	にぶい 黄緑	外面 微細な無色透明光沢粒 黒色粒を中量 4mm大の褐 色粒 1mm大の赤褐色をまれに含む 内面 1mm以下の黒 色光沢粒 白色粒をわずかに含む	1.6	—
139	N24	縄文 土器	浅鉢	胴部	横方向 ミガキ	横方向 ナゲ 押し	黒褐色	黒褐色	1mm以下の白色 褐色粒を少量含む	1.8	磨定口径 27.4cm
140	L22	縄文 土器	浅鉢	胴部	横方向ナゲ スス 刷 文付着	ヘウミガキ ナゲ 刷文付着	黄 灰	灰白	1mm大の灰白色粒を多量 1mm大の褐色粒を中量 1mm大 の無色透明光沢粒少量	1.6	—
141	L23	縄文 土器	浅鉢	口縁部	横方向 ミガキ	横ナゲ	にぶい 黄緑	褐色	無色透明の微細な粒わずかに、白色の微細な粒わずかに 含む	—	—
142	L22	縄文 土器	浅鉢	口縁	横方向 ミガキ 黒面筋	横方向 ミガキ 黒面筋	褐色 灰白	褐色	2mm以下の白色粒 黒色粒を少量 微細な無色透明光沢粒 を中量含む	—	磨定底径 11.2cm
143	M23	縄文 土器	浅鉢	胴部	横方向ナゲ スス 刷文	横方向ナゲ スス 刷文	にぶい 黄緑	にぶい 黄緑	1mm以下の褐色粒 灰白色粒を多量 微細な無色透明粒中量 含む	—	—
144	L23	縄文 土器	浅鉢	口縁部	上具 ミガキ	ミガキ	橙	黒褐色	無色透明と白色の微細な粒少量	口縁部 =1.9	—
145	M22	縄文 土器	深鉢	口縁	ミガキ スス付着 刷目付着	ミガキ スス付着	にぶい 黄緑	にぶい 黄緑	微細～1mmの無色透明光沢粒 褐色光沢粒を少量含み 1mm以下の褐色粒 灰色粒をわずかに含む	1.9	磨定口径 28.4cm
146	M23	縄文 土器	浅鉢	口縁部	ミガキ スス付着	ミガキ スス付着	浅黄 黒褐色	浅黄	無色透明の微細な粒少量含み、白～1mm以下の粒わずかに 含む	—	—
147	L22	縄文 土器	深鉢	口縁	横方向 ミガキ 刷目	横方向 ミガキ	にぶい 赤黒	橙	微細～1mm以下の無色透明光沢粒 1mm以下の灰色粒 白 色粒を中量 1mm以下の黒色光沢粒 褐色粒 2mm以 下の白色半透明粒を少量含む	1/14	—
148	L23	縄文 土器	深鉢	胴部	刷目 横方向 ナゲ ス ス付着	横方向ナゲ	にぶい 黄緑	暗灰黄	微細な無色透明光沢粒を多量 1mm以下の黒色光沢粒 2mm以下の白色粒 白色半透明粒 灰色粒 3mm以下の褐 色粒を少量含む	—	—
149	SA2	土師器	甕	口縁	横方向の ナゲ	横方向の ナゲ	にぶい 黄緑	にぶい 黄緑	外面 微細な光沢のある無色透明 黒褐色の粒を多く含む 内面 明赤褐色にぶい赤褐色の粒をわずかに含む	—	—
150	SA2	土師器	甕	胴部一 部	ナゲ	横 前 方向の ハケナメ	にぶい 橙	にぶい 黄緑	3mm以下の褐色粒 灰色粒を多量に含む	—	—
151	SA2	土師器	甕	胴部	刷目 横方向 ナゲ	ナゲ	黒褐色	にぶい 黄緑	外面 微細な光沢のある無色透明 灰白色の粒をわずかに含 む 内面 4mm以下の黒褐色 灰白 にぶい黄緑	—	—
152	SA 2	土師器	甕	底部	ナゲ 押し	ナゲ	灰白	灰白 黒褐色	4mm以下の黒灰色 褐色 白色 無色透明光沢粒を多量 微 細な透明光沢粒を中量に含む	口縁部 =1.9	底径 82cm

規格 番号	出土 位置	種別	原標	部位	手法・装飾・文様		色 調		胎 土	残存 量	
					外面	内面	外面	内面			
153	SA.2	土師器	甕	胴部→ 底部	ハケメ 工具痕	ハケメ	浅黄 黒褐	浅黄 黄灰	赤褐色の4mm以下の粒中量 無色透明の微細な粒わずかに 黒色の4mm以下の粒わずかに含む	底径 ・12cm 底高 5.7cm	
154	SA.2	土師器	甕	胴部→ 底部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰白	1mm以下の赤褐色粒多量 1mm以下の灰白色粒少量 微細 無色透明光沢粒 黒色光沢粒少量含む	1/4	磨完径(断面)5cm
155	SA.2	土師器	甕	胴部→ 底部	ヘラミダキ ナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰黄	5mm大の褐色粒少量 1mm以下の褐色粒 灰白色粒中量 微 細無色透明粒少量	3/4	
156	SA.2	土師器	高坏	口縁部	横ナデ ミダキ	横ナデ	浅黄橙 灰	淡黄	無色透明の微細な粒わずかに含む 黒色の微細な粒わずかに含 む	1/10	磨完径17.28cm
157	SA.2	土師器	高坏	口縁部	横ナデ	横ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	無色透明の微細な粒わずかに含む 黒色の微細な粒わずかに含 む	1/8	
158	SA.2	土師器	ミニ チュア	口縁部	ナデ 指頭圧痕	ナデ 指頭圧痕	浅黄橙	浅黄橙	微細な無色透明光沢粒 1mm以下の白色 灰色を少量含む	1/2	磨完径17.55cm
159	SA.2	土師器	ミニ チュア	口縁→ 底部	ナデ 指頭圧痕	ナデ 指頭圧痕	にぶい黄橙 黄橙	黄橙	白色半透明の2mm以下の粒わずかに含む 無色透明の微細な粒 わずかに含む	1/2	口径3.2cm 底高5.0cm
160	SA.3	土師器	甕	口縁→ 底部	ナデ ハケメ	ハケメ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1～3mmと4～5mm大の褐色粒 赤褐色粒少量 微細な 無色透明光沢粒中量 黒色光沢粒多量含む	口縁部 ・12cm 底径 ・12cm 底高 6.8cm	
161	SA.3	土師器	甕	底部	ナデ	ナデ	浅黄 灰黄	にぶい黄	赤褐色の3mm以下の粒少量 白色半透明の微細な粒わずかに 含む 無色透明の1mm以下の粒わずかに含む 黒色の4mm以下の 粒少量含む	底径 ・12cm 底高 7.1cm	
162	SA.3	土師器	甕	底部	ナデ	ナデ	浅黄	にぶい橙	赤褐色の4mm以下の粒中量 無色透明の微細な粒わずかに含 む	底径 ・12cm 底高 6.2cm	
163	SA.3	土師器	甕	底部	ナデ	ナデ	橙	灰ナリにぶい黄橙	最大4mmの黒い粒中量 無色透明の微細な粒少量 灰色の 角粒状の粒わずかに含む	底径 ・12cm 底高 7.4cm	
164	SA.3	土師器	甕	底部	ナデ	ナデ	浅黄	浅黄橙	赤褐色の4mm以下の粒多量 無色透明の微細な粒わずかに含 む	底径 ・12cm 底高 6.8cm	
165	SA.3	土師器	甕	口縁→ 底部	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰色の微細な粒わずかに含む 無色透明の微細な粒わずかに含 む	口縁部 ・12cm 底径 ・12cm 底高 9.9cm	
166	SA.3	土師器	甕	口縁→ 底部	横ナデ ミダキ	ナデ 指頭痕	灰黄褐	にぶい黄橙	無色透明の微細な粒わずかに含む 赤褐色の1mm以下の粒わ ずかに含む	1/3	
167	SA.3	土師器	甕	口縁→ 底部	ナデ スス付着	ナデ 指頭痕	浅黄橙	浅黄橙	赤褐色の3mm以下の粒少量 微細な角閃石の粒わずかに含 む 無色透明の3mm以下の粒少量含む	底径 ・12cm 底高 8.2cm	
168	SA.3	土師器	高坏	坏部	ナデ ハケメ	ナデ ハケメ	浅黄 黒褐	浅黄	無色透明の微細な粒中量 灰色の1mm以下の粒わずかに含 む	口径19.8cm 坏部8.2cm	
169	SA.3	土師器	高坏	口縁→ 底部	ハケメ 横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙 黒褐	にぶい黄橙 黒褐	灰色の微細な粒わずかに含む 無色透明の微細な粒少量含む	口縁部 ・15cm 底径 ・11.3cm 底高 11.3cm	
170	SA.3	土師器	高坏	口縁→ 底部	ハケメ ナデ スス付着	横ナデ 黒 肌	浅黄 黄灰	浅黄 黒褐	灰色の微細な粒中量 無色透明の微細な粒わずかに含む	口縁部 ・15cm 底径 ・14cm	
171	SA.3	土師器	器台	口縁→ 底部	1ダキ 横ナデ	工具痕 ナデ	浅黄	浅黄	無色透明・灰色の微細な粒中量含む	口縁部 ・15cm 底径部 ・17cm	
172	N23	陶磁器	甕	口縁部	横方向 ハケメ	横ナデ ナデ	橙	黒褐 にぶい橙	無色透明の微細な粒中量 灰色の4mm以下の粒わずかに含 む 白色半透明の微細な粒わずかに含む	1/9	磨完径17.16cm
173	G22	陶磁器	甕	口縁部	横ナデ	横ナデ ナデ ナデ	にぶい橙 浅黄橙	橙 浅黄橙	2～4mm大の灰色粒 褐色粒多量 1mm以下の白色粒 白 色光沢粒 無色透明光沢粒中量 微細な黒色光沢粒少 量含む	1/11	
174	SE1	陶磁器	甕	口縁→ 底部	ナデ	ナデ スス付着 ナデ	浅黄橙 黄灰	浅黄	赤褐色の3mm以下の粒中量 無色透明の微細な粒わずかに含 む	1/6	
175	L23	土師器	鉢	口縁→ 底部	ナデ	毎日圧痕	橙	橙	2mm以下の褐色粒中量 微細な灰白色粒 無色透明光沢粒 黒色光沢粒少量含む	—	
176	B18	土師器	鉢	口縁→ 底部	ナデ	毎日圧痕	橙	橙	微細な灰白色粒少量 1mm以下の褐色粒少量含む	—	
177	SE6	土師器	鉢	口縁→ 底部	ナデ	毎日圧痕	橙	にぶい橙	1mm以下の赤褐色粒多量含む	—	
178	B18	土師器	鉢	口縁→ 底部	ナデ	毎日圧痕	橙	橙	微細な無色透明粒 灰白色粒中量 2mm以下の褐色粒中 量 5mm大の赤褐色粒1つ含む	—	
179	M23	土師器	坏	口縁→ 底部	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ	明赤褐	明赤褐	微細な無色透明光沢粒 灰色光沢粒中量 1mm以下の灰白色 粒中量 2mm以下の赤褐色粒中量含む	口縁部 ・15cm 底径部 ・12cm	磨完径17.12cm
180	M22	土師器	坏	口縁部	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ	橙	橙	白い粒 微細な わずかに含む	底径 ・12cm	底径6.5cm
181	J22	土師器	坏	底部	回転ナデ のびナデ	回転ナデ	明黄褐	淡黄	無色透明の微細な粒わずかに含む 灰色の微細な粒わずかに含 む	底径 ・12cm	底径4.6cm
182	K23	土師器	坏	底部	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤褐色の3mm以下の粒わずかに含む 黒い最大5mmの粒わずかに含 む 無色透明の微細な粒わずかに含む	底径 ・12cm	底径7.4cm

規格番号	出土位置	種別	器種	部位	手法・図章・文様		色調		胎土	保存率	質量
					外面	内面	外面	内面			
183	L23	土師器	杯	口縁～底部	回転ナデ	ミダキ	浅黄	黒	無色透明の微細な粒わずか 白色の微細な粒わずかに含む	口縁部 = 1.9 胴部 = 1.4	磨定口径 13.0cm
184	M26	土師器	杯	底部	回転ナデ	回転ナデ	浅黄	浅黄	赤褐色の微細な粒わずか 黒色の微細な粒わずかに含む	底面 = 2.3	口径 6.6cm
185	M23	土師器	杯	底部	ナデ	ナデ	明褐	明褐	厚い 2mm 以下の粒わずか 白い微細な粒わずかに含む	底面 = 1.5	磨定口径 8.1cm
186	N25	土師器	杯	口縁～底部	ナデ 赤切り	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	微細な無色透明光沢粒を中量 1mm 以下の黒色粒 褐色粒を少量含む	底面 = 1.4 胴部 = 1.4	磨定口径 13.6cm 器高 3.3cm 磨定口径 8.9cm
187	B 16	土師器	杯	口縁～底部	ナデ 赤切り	門前直 赤色顔料	浅黄橙	浅黄橙	微細な無色透明光沢粒 黒色光沢粒中量 1mm 大の褐色粒 赤褐色粒 灰白色粒中量含む	口縁部 = 1.4 胴部 = 1.4	口径 10.6cm 器高 3.3cm 口径 7.2cm
188	B 16	土師器	杯	口縁～底部	回転ナデ 赤切り	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	無色透明の微細な粒少量 赤褐色の 1mm 以下の粒わずかに含む	口縁部 = 1.4 器高 3.3cm 口径 7.1cm	口径 11.7cm 器高 3.3cm 口径 7.1cm
189	M21	土師器	杯	体部～底部	回転ナデ 赤切り	回転ナデ	灰黄褐	にぶい黄橙	無色透明の微細な粒わずかに含む	底面 = 1.4 胴部 = 1.3	磨定口径 7.2cm
190	N25	土師器	杯	口縁～底部	回転ナデ 赤切り	回転ナデ	橙	橙	微細な無色透明光沢粒 1mm 以下の黒色光沢粒を少量 2mm 以下の白色半透明粒 3mm 以下の褐色粒をわずかに含む	底面 = 1.8	磨定口径 11.4cm 器高 4.8cm 磨定口径 8.0cm
191	B 16	土師器	杯	口縁～底部	ナデ 赤切り	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	無色透明の微細な粒わずかに含む	底面 = 1.5	磨定口径 10.4cm 器高 3.4cm 磨定口径 6.0cm
192	SC3	土師器	杯	体部～底部	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	無色透明の微細な粒わずか 白色の微細な粒わずかに含む	底面 = 1.2	
193	K22	土師器	小皿	底部	回転ナデ 押出し付 稗実瓦直		にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な無色透明光沢粒少量 1mm 以下の黒色光沢粒 灰白色粒少量含む	底面 = 1.6	口径 6.8cm
194	O23	土師器	杯	底部	ナデ 赤切り	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	2mm 以下の褐色粒中量 微細な無色透明光沢粒 黒色光沢粒少量 5mm 大の灰色粒 1コ含む	底面 = 1.4	口径 8.0cm
195	B 16	土師器	杯	体部～底部	回転ナデ 赤切り	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	微細な無色透明光沢粒少量 1mm 以下の褐色粒 赤褐色粒少量含む	底面 = 1.6	口径 10.4cm
196	Q24	土師器	小皿	口縁～底部	回転ナデ 門前直 へう切り	回転ナデ 門前直	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な無色透明光沢粒 黒色光沢粒 1mm 以下の赤褐色粒 灰白色粒少量含む	口縁部 = 1.4 底面 = 1.2	口径 7.1cm 器高 1.6cm 口径 5.8cm
197	M27	土師器	小皿	口縁～底部	回転ナデ 赤切り	回転ナデ	浅黄橙	にぶい黄	微細な無色透明光沢粒少量 微細な無色透明光沢粒 1mm 以下の赤褐色粒 灰白色粒少量含む	口縁部 = 1.5 底面 = 1.2	口径 7.5cm 器高 1.8cm 口径 4.8cm
198	B 16	土師器	小皿	口縁～底部	ナデ 黒直 赤切り	ナデ 黒直	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な無色透明光沢粒少量 1mm 以下の灰白色粒 赤褐色粒 褐色粒少量含む	口縁部 = 1.5 底面 = 1.2	磨定口径 6.6cm 器高 2.1cm 磨定口径 6.7cm
199	M22	土師器	小皿	底部	回転ナデ スチ付者	回転ナデ スチ付者	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な無色透明光沢粒少量 微細な褐色粒 黒色粒少量含む	底面 = 1.5	口径 7.3cm 器高 1.7cm 口径 5.5cm
200	N25	土師器	小皿	底部	回転ナデ へう切り	ナデ スチ付者	にぶい黄	にぶい黄	2mm 以下の赤褐色粒 灰白色粒少量 微細な無色透明光沢粒少量含む	口縁部 = 1.6 底面 = 1.2	口径 8.1cm 器高 2.3cm 口径 6.0cm
201	B 16	土師器	小皿	口縁～底部	回転ナデ 赤切り	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	黒い微細な粒わずかに含む	1/4	磨定口径 7.6cm 器高 1.7cm 磨定口径 6.2cm
202	B 16	白磁	皿	底部	施釉	施釉	灰白	灰白	精良	底面 = 1.2	磨定口径 3.1cm
203	P26	白磁	碗	口縁～体部	施釉貫入	施釉貫入	灰白	灰白	精良	—	
204	SC5	白磁	皿	体部～底部	施釉貫入	施釉貫入	灰白	灰白	精良 微細な灰色粒少量	底面 = 1.6	口径 (高台) 4.4cm
205	B 16	白磁	皿	底部	施釉	施釉	灰白	灰白	精良	底面 = 1.6	口径 4.2cm
206	SE1	白磁	皿	口縁～体部	施釉	施釉	灰白	灰白	精良	1/6	口径 8.7cm
207	N22	白磁	皿	口縁～体部	施釉	施釉	灰白	灰白	精良	—	
208	SC5	白磁	皿	体部～底部	施釉貫入 高足	施釉貫入 高足	灰白	灰白	精良 微細な灰色粒少量	底面 = 1.3	磨定口径 (高台) 4.6cm
209	SE6	白磁	皿	体部～底部	施釉貫入	施釉貫入	灰白	灰白	精良	底面 = 1.6	口径 (高台) 4.4cm
210	B 16	白磁	皿	底部	施釉	施釉	灰白	灰白	精良	底面 = 1.6	口径 5.6cm
211	B 16	白磁	皿	底部	施釉	施釉	灰白	灰白	精良	底面 = 1.6	口径 4.6cm
212	M21	白磁	皿	底部	施釉	施釉	灰白	灰白	精良	底面 = 1.6	口径 3.3cm
213	SC5	白磁	皿	底部	施釉	施釉貫入	灰白	灰白	精良 微細な灰色粒少量	底面 = 1.5	磨定口径 (高台) 3.8cm

機種 番号	出土 位置	種別	原標	部位	手法・調整・文様		色 調		胎 土	残存 率	法量
					外面	内面	外面	内面			
214	SE6	白磁	皿	口縁部	施釉	施釉	灰白	灰白	精良		1/12
215	N28	白磁	皿	口縁→ 底面	施釉	施釉	灰白	灰白	精良		1/4 口径10.4cm
216	SE1	白磁	皿	底面	掛り込み スス付着	施釉 目跡	靑灰	灰白	精良		3/4 底径42cm
217	SE6	白磁	皿	底部→ 底面	掛り込み 施釉貫入	施釉貫入 目跡	灰白	灰白	精良		1/2 底径43cm
218	B18	白磁	多肉坏	口縁→ 底面	施釉貫入 目跡	施釉貫入 目跡	灰白	灰白	精良		1/2
219	B18	白磁	皿	底面	施釉貫入	施釉貫入 釉剥き	灰白	灰白	精良	底面+ 底唇	底径43.5cm
220	M22	白磁	皿	口縁→ 底面	施釉貫入	施釉貫入	灰白	灰白	精良		1/5 口径106cm
221	M21	白磁	皿	口縁→ 底面	施釉貫入	施釉貫入	灰白	灰白	精良		1/6 口径110cm
222	B18	白磁	皿	口縁→ 底面	施釉 目跡	施釉	灰白	灰白	精良		1/4
223	SE6	白磁	皿	底面	施釉貫入 目跡	施釉貫入 釉剥き	灰白	灰白	精良	底面 →3/4	底径70cm
224	M21	白磁	皿	底部→ 底面	施釉	施釉 剥離	灰白	灰白	精良		2/3 底径73cm
225	B18	青磁	碗	口縁→ 底面	垂弁文 施釉貫入	施釉貫入	オリーブ灰	オリーブ灰	精良		1/7
226	B18	青磁	碗	口縁→ 底面	縦帯弁文 施釉	施釉	オリーブ灰	オリーブ灰	精良		—
227	B18	青磁	碗	口縁→ 底面	並行沈線 垂弁文 施釉	施釉	明緑灰	明緑灰	精良		1/4 兼定口径119cm
228	P28	青磁	碗	口縁	施釉貫入 沈線文	施釉貫入	明印ノ灰	明印ノ灰	精良		—
229	SE1	青磁	碗	口縁部	施釉 垂弁文	施釉	オリーブ灰	オリーブ灰	精良		1/9
230	SE1	青磁	碗	口縁→ 底面	施釉	施釉	明印ノ灰	明印ノ灰	精良		1/10
231	SE1	青磁	碗	口縁→ 底面	施釉貫入	施釉貫入	オリーブ灰	オリーブ灰	精良		1/8
232	SE2	青磁	碗	口縁→ 底面	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	精良		1/2 口径146cm
233	SE2	青磁	碗	口縁→ 底面	施釉	施釉 印花文	オリーブ灰	オリーブ灰	精良		底面+ 1/2
234	SE1	青磁	碗	底部→ 底面	施釉 反虫文	施釉 スタンプ文			精良		底面→ 口径4 割
235	B18	青磁	碗	底面	施釉 印花文	施釉 印花文	オリーブ灰	オリーブ灰	精良		底面+ 1/2 兼定底径6.7cm
236	P22	青磁	碗	底面	施釉貫入	施釉貫入 印花文	灰オリーブ	灰オリーブ	1mm以下の白色粉 2mm以下の黒色粉をわずかに含む		底面+ 1/2 底径(高台)6.4cm
237	SE12	青磁	碗	底面	沈線文 垂弁文 施釉	施釉貫入 印花文	オリーブ灰	オリーブ灰	精良		1/2 兼定底径5.7cm
238	SE1	青磁	碗	底部→ 底面	施釉 印花文	施釉 スタンプ文	オリーブ灰	オリーブ灰	精良		底面+ 1/2 兼定底径6.1cm
239	B18	青磁	碗	底面	施釉 印花文	施釉 印花文	明印ノ灰	明印ノ灰	1mm以下の白色 灰黄色粉をわずかに含む		底面→ 口径4 割
240	SE6	青磁	碗	底部→ 底面	施釉 印花文	施釉 印花文	オリーブ灰	オリーブ灰	精良		1/2 底径60cm
241	B18	青磁	碗	底面	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	色調：灰白2mm以下の灰黄色粉を多量に含む		底面+ 1/2 底径(高台)5.5cm
242	B18	青磁	碗	底面	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	精良		底面+ 底唇
243	SE6	青磁	碗	底部→ 底面	施釉貫入	施釉貫入	灰オリーブ	灰オリーブ	精良		1/2 底径66cm
245	SE3	青磁	碗	底面	施釉貫入	施釉貫入 釉剥き	オリーブ灰	オリーブ灰	精良		底面+ 1/2 底径63cm
246	SC5	青磁	碗	底面	施釉 釉剥き	施釉	灰オリーブ	にぶい黄粉	精良		底面+ 底唇
247	SE6	青磁	碗	底面	施釉貫入	施釉貫入 釉剥き	浅黄	浅黄	精良		1/2 底径49cm
248	SE3	青磁	坏	口縁→ 底面	施釉 縦帯弁文	施釉	オリーブ灰	オリーブ灰	精良		1/6 口径119cm
249	B18	青磁	皿	底面	施釉貫入	施釉貫入 印花文	オリーブ灰	オリーブ灰	精良	底面+ 底唇	底径50cm
250	N25	青磁	皿	底部→ 底面	施釉貫入	施釉貫入 印花文	オリーブ灰	オリーブ灰	精良		1/4 兼定底径4.9cm

図録 番号	出土 位置	種別	器種	部位	手法・図象・文様		色 調		胎 土	保存 率	法量
					外面	内面	外面	内面			
251	SE1	青磁	皿	口縁～ 体部	施釉 ヘウ文様 幾点散文		オリーブ灰	オリーブ灰	精良	1/6	
252	B1c	青磁	皿	口縁～ 体部	施釉貫入	施釉貫入	オリーブ灰	オリーブ灰	精良	1/8	
253	B1c	青磁	皿	底部	施釉 施釉 施釉	施釉 施釉 施釉	灰白	灰白	精良	1/4	底径 9.6cm
254	B1c	青磁	皿	底部	施釉 施釉	施釉 施釉	明仔ア灰	明仔ア灰	精良	1/2	底径 6.9cm
255	SE1	青磁	盤	体部～ 底部	施釉貫入	施釉貫入 界線	オリーブ灰	オリーブ灰	精良	1/3	底径 6.8cm
256	B1c	青磁	皿	底部	施釉貫入	施釉貫入 汁・反魚印	明緑灰	明緑灰	精良	68% - 5%	底径 5.9cm
257	SE1	青磁	盤	底部	施釉 界線	施釉 界線	オリーブ灰	オリーブ灰	精良	1/2	底径 7.3cm
258	N22	青磁	盤	口縁～ 底部	施釉 施釉 施釉	施釉 口印文 網漆青文	灰オリーブ	灰オリーブ	精良	68% - 1%	
259	SE1	青磁	盤	口縁～ 底部	施釉 施釉	施釉 網漆青文 印花文	灰白	灰白	精良	1/5	
260	SE1	青磁	盤	口縁～ 体部	施釉貫入 網漆青文	施釉貫入 漢印文 網漆青文	灰白	灰白	精良	—	
261	SE13	青磁	盤	口縁～ 体部	施釉貫入	施釉貫入	灰オリーブ	灰オリーブ	精良	—	
262	N22	青磁	火入	口縁～ 体部	施釉貫入	施釉貫入	オリーブ灰	オリーブ灰	精良	1/5	口径 6.1cm
263	M26	青花	碗	口縁～ 体部	施釉 漢印文帯 藍色葉文	施釉 界線	明黄灰	明黄灰	精良	1/5	器定口径 12.8cm
264	B1c	青花	碗	口縁～ 体部	施釉 漢印文帯 藍色葉文	施釉貫入	灰白	灰白	精良	1/8	器定口径 13.0cm
265	N27	青花	碗	口縁～ 体部	施釉 界線 花鳥文	施釉 界線	明青灰	明青灰	精良	—	
266	B1c	青花	碗	体部～ 底部	施釉	施釉	明青灰	明青灰	精良	1/2	
267	B1c	青花	碗	口縁～ 体部	施釉 文様帯	施釉 界線	明青灰	明青灰	精良	—	
268	SB3	青花	碗	体部	小片文 界線	施釉 界線	明青灰	明青灰	精良	—	
269	B1c	青花	皿	口縁～ 体部	施釉 文 界線	施釉 界線	明青灰	明青灰	精良	—	
270	M26	青花	皿	体部～ 底部	施釉 藍色文 界線	施釉 界線 花鳥・松花 文	明黄灰	明黄灰	色調：にぶい黄橙 精良	68% - 5%	底径 3.2cm
271	B1c	青花	皿	体部～ 底部	施釉 藍色葉文	施釉 花文	明青灰	明青灰	精良	1/3	器定底径 2.4cm
272	B1c	青花	皿	底部	施釉貫入 界線	施釉貫入 春鹿文	明仔ア灰	明仔ア灰	精良	1/5	器定底径(高台) 9.6cm
273	B1c	青花	皿	口縁	施釉 界線 青草文	施釉 界線	灰白	灰白	精良	—	
274	SC5	青磁	碗	体部～ 底部	施釉 波影	施釉	オリーブ灰	オリーブ灰	精良	68% - 5%	底径 4.9cm
275	SE1	天目	碗	口縁	施釉貫入	施釉貫入	黒	黒	精良	68% - 1%	器定口径 11.5cm
276	P26	白磁	皿	口縁～ 体部	施釉	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	精良	—	
277	O22	天目	丸玉	体部	施釉	施釉	黒	黒	精良	—	
278	O27	陶磁器	盤	底部	自然釉	回転ナデ	にぶい赤褐色	灰	2mm以下の黒色 灰白色粒子 透明光沢粒を含む	—	定形
279	N26	陶磁器	盤	底部	回転ナデ	施釉	黄灰	黄灰	2mm以下の黒色 灰白色粒を含む	—	
280	B1c	灰意器	羹	口縁	回転ナデ	施釉	黄灰	黄灰	微細な無色透明光沢粒 0.5mm以下の黒色光沢粒 白色粒をわずかに含む	—	
281	M26	灰意器	控鉢	口縁	ナデ	回転ナデ	灰 灰白	灰白	色調：灰白 1mm以下の白色粒を少量含む。 1mm以下の黒色粒・2mm以下の灰白色 微細な無色透明光沢粒を少量含む。	—	
282	SE6	灰意器	壺	肩～ 胴部	磨子目 磨き痕	回転ナデ 同心円当て 丹敷	灰	灰	精良	1/4	
283	B1c	陶磁器	落鉢	口縁～ 底部	回転ナデ	自然釉 一単位八条 の眉目	灰白 黄灰	灰白 黄灰	色調：黄灰 精良	口縁部 = 14 底面 = 1/2	

陶器 番号	出土 位置	種別	器種	部位	手法・顔彩・文様		色 調		胎 土	残存 率	質量
					外面	内面	外面	内面			
284	SE6	陶磁器	指鉢	口縁	回転ナテ 自然釉	回転ナテ 一単位八条 以上の條目	黄灰 にぶい赤褐	にぶい赤褐	色調：にぶい赤褐 器底～2mm以下の灰白 陶灰 黒褐色の 粒をわずかに含む	口縁 部1/9	
285	SE6	陶磁器	指鉢	口縁	回転ナテ 自然釉	回転ナテ	灰黄褐	灰黄褐	5mm以下の灰白 陶灰 黒褐色粒子を含む	—	
286	SC3	陶磁器	指鉢	口縁	ナテ 自然釉	ナテ 一単位七条 以上の條目	灰褐	黄灰	2mm以下の灰白 赤褐色の粒をごくわずかに含む	1/5	推定口径 23.6cm 器底 10.5cm 底厚 11.6cm
287	SE6	陶磁器	指鉢	口縁	回転ナテ	回転ナテ 一単位八条 以上の條目	灰白	灰白	色調：灰白 3mm以下の灰白 陶灰 黒色の粒をす少し含 む 1cmの黒褐色の粒を1つ含む	—	
288	B1C	陶磁器	指鉢	口縁	回転ナテ	回転ナテ	にぶい赤褐	黄灰	2mm以下の灰白 透明光沢粒を少し含む	—	
289	SC5	陶磁器	指鉢	口縁	回転ナテ 自然釉	回転ナテ	にぶい赤褐	橙	外面 2mm以下の灰白 黒褐色の粒をごくわずかに含む 6mm以下のにぶい赤褐 4mm以下のにぶい黄褐色の粒を1粒 ずつ含む 内面 黄灰の粒をごくわずかに含む	1/9	
290	SC5	陶磁器	指鉢	底部・ 底面	回転ナテ	一単位七条 の條目	明赤褐	明赤褐	結晶	底厚・ 1/2	推定底径 12.9cm
291	B1C	陶磁器	甕	口縁	回転ナテ 工具痕	回転ナテ	にぶい褐	にぶい褐	3mm以下の淡褐色粒 1mm以下の灰色粒を少量 2mm以下の白色粒を少量含む	1/13	
292	SE6	陶磁器	甕	口縁	回転ナテ	回転ナテ 工具ナテ 自然釉	黄灰	黄灰	色調：黄灰 1mm以下の白色粒を中量 1mm以下の灰色粒を少量含む	—	
293	SE6	陶磁器	甕	肩部	回転ナテ 自然釉	回転ナテ 自然釉	灰白	褐	3mm以下の黒 褐色の粒を少し含む	—	
294	N28	陶磁器	壺	胴部	回転ナテ	回転ナテ	灰黄褐	灰黄褐	1mm以下の黄褐色粒(まれに3mm×) 1mm以下の黒色粒 を少量 1mm以下の白色半透明粒 白色粒を少量含む	1/7	
295	SE1	陶磁器	甕	口縁	回転ナテ 自然釉	回転ナテ	灰褐	にぶい赤褐	5mm以下の灰白 黒色 にぶい赤褐色の粒を多く含む	—	
296	SC5	陶磁器	甕	底部	自然釉 回転ナテ	回転ナテ	暗赤褐	褐	3mm以下の灰白 陶灰 黒褐色粒子を含む	—	
297	B1C	陶磁器	甕	胴部・ 底面	ナテ	ナテ 自然釉	黒褐	灰褐 浅黄	1mm以下の灰黄色粒 3mm以下の褐色粒を少量 2mm以下の黒色粒をまれに含む	1/8	推定底径 21.2cm
298	SE6	陶磁器	甕	胴部・ 底面	ナテ	ナテ 自然釉	灰褐	黄灰 浅黄	3mm以下の灰色粒を中量 1mm以下の白色粒を少量 3mm以下の灰色粒 白色半透明粒をわずかに含む	1/5	推定底径 18.2cm
299	K23	陶磁器	甕	胴部・ 底面	回転ナテ 自然釉	回転ナテ	灰赤 灰褐	灰褐	色調：灰褐 4mm以下の灰白 黒褐 浅黄褐色の粒を多く 含む	1/4	底径 24.0cm
300	N25	土師器	土師	定形	—	—	—	—	—	定形	
301	SC3	土製品	土師	定形	—	—	—	—	—	定形	

第4表 B区出土石器計測表

掲載番号	器種	石材	出土地点	長さ	幅	厚さ	重量
302	石鏃	チャート	P25	19	1.7	0.3	0.6
303	石鏃	ガラス質安山岩	P25	2	1.3	0.3	0.6
304	石鏃	チャート	M24	21	3.8	0.7	3.1
305	石鏃	チャート	N23	3.5	4.2	0.9	8.7
306	石鏃	頁岩	P24	3.4	4.3	0.9	7.4
307	石鏃	ガラス質安山岩	Q23	3.4	3.6	1	8.5
308	石鏃	チャート	Q24	2.1	2.7	0.6	2.5
309	石鏃	ガラス質安山岩	Q24	4.3	1.8	0.6	4.9
310	湖片石器	ホルンフェルス	P24	3.8	5.3	1.3	21
311	湖片石器	ガラス質安山岩	P24	4.6	2.7	0.6	6.6
312	湖片石器	ガラス質安山岩	Q23	8.3	8.9	1.7	118.5
313	湖片石器	ガラス質安山岩	P23	3.3	2.5	0.3	1.5
314	磨製石斧	ホルンフェルス	P24	9.7	3.9	2.2	118.3
315	礫石	砂岩	P24	17.4	21.2	11.1	450
316	石材製品	砂岩	K23	6.9	4.1	3.4	157.4
317	礫石	安山岩	O24	5.1	4.1	3.9	116
318	礫石	安山岩	K22	4.8	3.5	3.4	78.4
319	石鏃	ガラス質安山岩	SC 8	2.2	1.8	0.3	0.8
320	石鏃	多色頁岩	N28	1.1	1.4	0.2	0.3
321	石鏃	瑠璃石	K21	1.7	1.4	0.3	0.6
322	石鏃	瑠璃石	P24	3.6	4.2	0.9	10.1
323	石斧	ホルンフェルス	L23	9	6.3	1.2	87.9
324	石斧	ホルンフェルス	L23	13.5	6.6	1.8	166.3
325	石斧	ホルンフェルス	M23	6.6	4.8	1.7	79.3
326	石斧	ホルンフェルス	B16	13.1	8	1.5	154.1
327	石斧	ホルンフェルス	K22	18	9.4	1.6	313.5
328	湖片石器	ホルンフェルス	P24	6.3	5.3	1.3	48
329	磨製石斧	砂岩	M23	8.6	6	2.9	222.4
330	磨製石斧	ホルンフェルス	B16	11.2	5.6	3.3	329.4
331	礫石	安山岩	L24	7.2	6.6	3.2	185.7
332	礫石	砂岩	B16	6.4	7.2	5.6	353.2
333	礫石	砂岩	P23	10	8.6	3.4	346.7
334	礫石	砂岩	O25	7.3	4.8	2.3	110.9
335	礫石	砂岩	K22	6.8	5.8	4.1	192
336	礫石	砂岩	L25	6.8	7.3	6.5	355
337	礫石	砂岩	L26	9.4	9.2	6.4	264.8
338	礫石	安山岩	L23	9.2	5.4	3.8	256.5
339	磨製	砂岩	L22	7.9	6.2	5	341.9
340	石鏃	礫石	B16	8.8	5	-	283.2
341	石鏃	粗良滑結礫状頁岩	B16	5.9	15.2	2.3	165.4
342	石製品	粗良滑結礫状頁岩	M25	22.5	22.7	13.6	550
343	礫石	砂岩	SE1	6.1	4.2	1.1	34.7
344	礫石製品	礫石	M22	13.3	9.5	7.3	167.5
345	礫石製品	礫石	K22	8.2	10.8	4.2	95.3
346	磨製	頁岩	B16	6.6	5	1.1	40.9
347	石鏃	チャート	L22	2.2	3.5	0.7	4.6
348	石鏃	砂岩	B16	3.8	4.6	1.2	14
349	石鏃	炭質砂岩	B16	4.1	5.7	1.3	13.6
350	石鏃	ガラス質安山岩	B16	3.3	3.9	0.9	8.6
351	石鏃	砂岩	B16	3.5	3	0.9	6.8
352	石鏃	チャート	L22	1.7	1.8	0.4	0.7
353	石鏃	チャート	B16	1.7	1.9	0.3	0.9
354	石鏃	チャート	B16	1.7	1.7	0.3	0.5
355	石鏃	チャート	Q24	2.1	1.7	0.3	0.7
356	石鏃	千枚岩	Q25	1.7	1.4	0.4	0.6
357	石鏃	ガラス質安山岩	B16	1.9	1.8	0.2	0.8
358	礫石	砂岩	B16	3.9	2.3	1.1	10.7
359	礫石	砂岩	B16	5.5	3.1	2.2	71.5
360	礫石	リソイダイト	B16	9.5	5.8	3.3	211.9
361	礫石	砂岩	SE12	9.4	5.4	1.7	90.9

3. C区の遺構と遺物

C区では、縄文時代草創期から中世にかけての遺構・遺物を検出した。以下、時代毎に述べる。

(1) 縄文時代草創期の遺構

調査区中央部で、IX層桜島薩摩テフラを含む層の下部を掘削中に、集石遺構1基を検出した。そのため縄文時代草創期の遺構と判断しこの項で述べる。また、周囲には散礫が見られたが、遺物は認められなかった。

【遺構】

3号集石遺構(S13) [第42図]

Q33グリッドIX層で検出した。礫周辺の長軸約1m、短軸約0.7mの土は、周囲と比べてわずかに明るいが掘込みは確認できなかった。配石もなく、遺構に伴う遺物も出土しなかった。

(2) 縄文時代早期の遺構と遺物

VIb層鬼界アカホヤ火山灰層の下位のVII層掘削中に集石遺構2基を検出し、遺物が出土した。

1号集石遺構(S11) [第42図]

R33グリッドで検出した。検出面の高さは標高158.8m、掘込みは長軸約1.0m、短軸約0.7mの楕円状のプランを呈し、検出面からの深さは約15cmである。遺構内の礫はほとんどが南側斜面に流出したとみられ、遺構内に残っていた礫は9個のみであった。配石はなく、埋土は黒色土(Hue10YR2/1)のみ1層で、しまり・粘性ともにやや弱い。径1~5mm程の褐色土が2%程、黄橙色の2mm以下の粒子が1%程混じる。S11周辺には、黒曜石やチャートの小片が多数出土した。この遺構の近辺で石器の製作加工を行っていたのではないかと考えられる。

2号集石遺構(S12) [第43図]

R33グリッドで検出した。検出面の高さは約158.8m、掘込みは長軸約1.2m、短軸約0.9mの楕円状のプランを呈し、検出面からの深さは約25cmである。配石はなく、埋土は黒色土(Hue10YR2/1)のみ1層で、しまり・粘性ともにやや弱い。遺構内からは、打製石鏃427、チャート片、土器片が出土した。炭化物も含まれ、自然科学分析を行ったところ、暦年較正8695±35年BP(2σの暦年代でBC7787~7599)のカエデ類という結果が出た。

【S12出土遺物】

石器 [第50図 - 427]

打製石鏃

427は2号集石遺構(S12)内で出土した。平面形状は、ほぼ二等辺三角形で、基部の挟りがやや深く、脚部は円形に加工されている。左脚部に比べ右脚部がやや大きい。側縁部は直線的である。チャート製である。

散礫 [第43図]

P33グリッドにおいて、長軸約2.7m、短軸約2.3mの範囲で散礫を検出した。検出面の高さは標高

160.0mである。礫が集中している箇所も掘込みも見られなかったため散礫とした。礫の中に遺物は出土していない。散礫の北東に約40cm大の軽石が出土している。

【包含層出土の遺物】

遺物は、ほとんどが調査区中央部のQ33グリッド周辺で出土した。すぐ東側にS11・S12が検出されており、当時の生活の中心であったと考えられる。

土器 [第48図 - 362~369]

出土した土器はすべて深鉢である。362は胴部片である。中世の堀切の埋土から出土したが、流れ込みと判断し、この項で述べる。内面は横方向のナデ調整を施し、指頭痕が見られる。楕円形押型文土器と考えられる。363は胴部片である。内面には縦方向にケズリ気味の粗いナデ、外面には貝殻腹縁による羽状の施文が見られる。364は口縁部片である。内面は横・斜め方向の粗いミガキ、外面は口縁部にミガキの後、横方向の短沈線文、その下部には縦方向の短沈線文を施す。365は胴部片である。内面にナデ、外面はナデの後、縦方向の短沈線文を施す。363~365は下割釜式土器と考えられる。366は頸部片である。内面に横方向の貝殻条痕文の後ナデ、外面に横方向の粗いナデと横方向の沈線文を施す。367は胴部片である。内面には横方向のナデ、外面には斜め・横方向の連続刺突文、斜め方向の沈線文、燃糸文を施す。ススの付着も見られる。368は胴部片である。内面はナデ、外面は網目状燃糸文を施す。369は胴部~底部片である。内面は横方向のナデ、外面は燃糸文と、縦方向に一部沈線文が施される。366~369は、塞ノ神式土器と考えられる。

石器 [第50図 - 428・429]

打製石鏃

S33グリッドⅧ層で出土した。平面形状はほぼ二等辺三角形で、基部の抉りが浅く、脚端部は尖る。側縁は曲線的で、鋸歯状の加工が施されている。先端部が欠損している。黒曜石製(腰岳産か)である。

石匙

R33グリッドⅧ層で出土した。両側縁から調整を施し、つまみ部を作出している。周縁部は細かな加工を加え、刃部を作出している。チャート製である。

(3) 縄文時代前期の遺物

【包含層出土遺物】

遺構は検出されていないが、遺物は中世の堀切周辺で、台地が谷の浸食により狭まった地形の東側(N31~O31グリッド周辺)で多く出土した。

土器 [第48図 - 370~377]

すべて深鉢で、370~375・377は口縁部片、376は胴部片である。370は、内面に横・斜め方向の貝殻条痕文、外面は横位に3条の貼付突帯文とススの付着が見られる。371は、内面に横・斜め方向の貝殻条痕文、外面は横方向の貝殻条痕文および貼付突帯文を4条施し、部分的にススの付着が見られる。372は、内面に横方向の貝殻条痕文、外面は横方向のナデ、貼付突帯文が付く。373は、内面は横方向の貝殻条痕文、外面は縦方向の貼付突帯文が付きススが付着する。374は、内面は貝殻条痕文、外面は縦方向の貼付突帯文があり、口唇部は横並びに刻みがある。375は、堀切の埋土から出土したが、流れ

込みと判断し、この項で述べる。内面は横方向のナデの調整が施され、外面は縦方向の貼付突帯文が付く。376は、内面は横方向のナデで一部斜め方向に貝殻条痕文が見られ、外面は横方向のナデの後、縦方向の貼付突帯文および横方向の三条の貼付突帯文を施し、部分的にススが付着する。377は、内面は横・斜め方向の貝殻条痕文、外面は横・斜め方向の貝殻条痕文の後、斜め方向の貼付突帯文を施す。内外面とも部分的にススが付着する。370～377は蘿B式土器と考えられる。

(4) その他の縄文時代遺物

遺物はほとんどが調査区東側から南東側にかけての地点に偏って出土した。Ⅱ層旧耕作土から多く出土しているが、中世以降の耕作や山林としての利用等により上の層に上がってきたものと考えられる。

【縄文時代後期後半～晩期の遺物】

土器 [第48・49図 - 380～383]

380・382・383は深鉢、381は浅鉢である。380は、口縁部片で、内外面とも幅0.2～0.3mmの横方向のミガキを施す。部分的にススが付着する。381は頸部片で、内面はナデ、外面は幅0.2～0.3mmの斜め方向のミガキを施す。380・381は黒色磨研系土器である。382は晩期後半の組織痕土器である。内面は横・斜め方向の貝殻条痕文を施し、下部に少量のススが付着する。一部にナデ・指頭痕あり。外面は横方向の貝殻条痕文、下部は一部斜め方向の条痕文を施し、ススが付着する。底部にかけては編布圧痕が見られる。383は底部片で、内面は縦・斜め方向のケズリ調整が施され、多量の炭化物が付着する。外面は斜め方向の細かいヘラナデ後に横・縦方向の細沈線文を施す。一部に短沈線文の部分もある。全体に粗雑なつくりで、凹凸が目立つ。後期後半から晩期前半頃か。

【その他時期不明の遺物】

土器 [第48図 - 378・379]

378は口縁部片で、内面は横方向の工具ナデ、外面は横方向の工具ナデの後、斜め方向の沈線文が施され、部分的にススが付着する。379は胴部片で、内面は横・斜め方向のナデ、外面は縦方向の貝殻条痕文の後、斜め方向の短沈線文を施す。

(5) 古墳時代の遺物

【包含層からの出土遺物】

遺構は検出されず、遺物は調査区南側のQ34グリッド周辺で出土した。

土器 [第49図 - 384～386]

384は甕の頸部片である。内面は斜め方向のハケ目、外面はナデによる調整が施される。粘土の継ぎ目が残り、部分的にススが付着する。385は鉢の口縁部片と思われる。内外面とも横ナデ調整が施され、内面には黒斑、外面下部は風化している。386は高坏の坏部である。内面は斜め方向のナデと底部にヘラミガキによる調整を施し、外面は底部付近をヘラミガキ、体部を斜め方向のナデ、その上位を指ナデで調整している。

(6) 古代～中世の遺構と遺物

【遺構】

C区では、中世を含む溝状遺構7条、中世の土坑墓1基・犬走状遺構1条・堀切1条を検出した。

溝状遺構

C区溝状遺構7条のうち、SE1とSE2の埋土には、AD1,471年に噴出した桜島文明降下軽石が含まれているが、他の5条には見られないことから、これらの遺構には使用の時期差があると考えられる。SE1とSE7は舌状台地を横断するような配置であり、区画溝の可能性も考えられる。SE2を除き、硬化面は見られない。SE3とした遺構は調査を進める過程で、土坑墓と判断し溝状遺構からは除外した。

1号溝状遺構（SE1） [第45図]

Q33～34グリッドで検出した。ほぼ南北方向に軸を取り、長さ約23m、幅約1.0～1.5mで調査区を横断するC区では最も規模の大きい溝状遺構である。埋土には、桜島文明降下軽石が明瞭に残存している。南端には、もう一つの溝と考えられる遺構の切り合いが見られるが、樹根の影響で端部が明確でない。断面の形状はU字型で、検出面からの深さは約40～50cmである。

2号溝状遺構（SE2） [第46図]

N30グリッドで検出した。検出長は約6.0m、幅約2.0mで、西側の調査区際から堀切に向かって伸びている。埋土には桜島文明降下軽石層を含み、SE1や、堀切、犬走状遺構、土坑墓と同じく中世の遺構と考えられる。堀切との間に大きな杉の切株があり、遺構の端部がはっきりせず、堀切との関係性が明確ではないが、硬化面が確認でき、通路として使用されていた可能性もある。断面の形状はU字型で、検出面からの深さは最深部で約70cmである。

【SE2出土遺物】

土師器 [第49図 - 388・397]

中世の土師器が出土している。2点とも体部から底部片である。388は坏で、内外面とも回転ナデによる調整が施され、底面はヘラ切りした後、ナデによる調整を施す。397は小皿で、内外面とも回転ナデによる調整が施され、底面は糸切り底である。

4号溝状遺構（SE4） [第45図]

調査区際のP33グリッドで検出した。検出長は約10m、幅約0.5mで北北東に延びる。断面の形状は、浅いU字型で検出面からの深さは最深部で約15cmである。

5号溝状遺構（SE5） [第45図]

P32～33グリッドで検出した。SE1およびSE7とほぼ同じ南北方向に延びる。検出長は約7m、幅約0.6mで南北に延びる。断面の形状は、U字型で検出面からの深さは最深部で約40cmである。埋土が2層であることと、遺構の向きが同じであることから、SE7と同じ時期の遺構と考えられる。

6号溝状遺構（SE6） [第45図]

P32～33グリッドで検出した。検出長は約8.5m、幅約0.6mで、ほぼ南北に延びる。南端部はトレンチ掘削により確認できない。断面の形状は浅いU字型で、検出面からの深さは最深部で約25cmである。

7号溝状遺構（SE7） [第45図]

Q33～P34グリッドで検出した。検出長約18m、幅約1mで、SE1から西に約1m離れた位置に、

平行して南北方向に伸びる。断面の形状はU字型で、検出面からの深さは最深部で約40cmである。埋土には桜島文明降下軽石が全く含まれないが、SE1と平行していることから、桜島文明降下軽石降下前の余り時期的な隔たりがない頃のものと考えられる。

8号溝状遺構 (SE8) [第45図]

Q33グリッドで検出した。検出長約3m、幅約1mで、SE1から北東に延びる。断面の形状は浅いU字型で、検出面からの深さは最深部で約20cmである。

土坑墓 (SD1) [第46図]

N31～O31グリッドの調査区際で検出した。西側部分は調査区外にかかり、遺構の全体像は不明だが、長軸約1.4m、短軸約0.9mの範囲に磔、赤化磔、軽石、焼土塊が集中し、遺構内から、陶器片(426)、宋銭(436)が出土した。検出面からの深さは、最深部で約70cmである。宋銭には、景祐元宝(1034年初鋳)の銘が確認でき、埋土上層には、桜島文明降下軽石層が確認できることから、この遺構はおおよそ14世紀から15世紀頃のものと考えられる。

【SD1出土遺物】

陶器 [第50図 - 426]

426は、備前焼播鉢の口縁部である。回転ナデが見られ、外面に自然軸がかかる。15世紀後半～16世紀初頭頃のものである。

銭貨 [第50図 - 436]

436は宋銭である。景祐元宝(1034年初鋳)の銘が確認できる。

堀切 [第47図]

B区とC区の境界にあたるN30グリッドで検出した。標高約160mからⅪ層(シラス層)まで約3m掘り込んでいる。埋土下層に桜島文明降下軽石層が確認できたため、降灰(AD 1,471年)以前に造られたことがわかる。堀底の硬化面は明瞭に確認できるが、側面や底部は凹凸が激しく、崩落の跡が見える。形は崩れているが、残存した部分からA区の堀切と同じく菜研堀と推定できる。この堀切によって、本調査区と西側の未調査区域を合わせた舌状台地が、B区とつながっている部分で分割され、B区側の防御が固められたものと考えられる。埋土からは、土器片や陶磁器片が出土した。

【堀切出土遺物】

土師器 [第49図 - 387・391・395・398]

387は坏の胴部から底部片である。底面はへら切りの後、ナデを施している。391は坏の口縁部から底部片である。底面はへら切り底である。395は、小皿の体部から底部片、剥離が多く底面が亲切り底である。底部がほぼ完形である。398は小皿の口縁部から底部片で、底面はへら切り底と思われる。口縁部にススが付着する灯明皿である。

陶磁器 [第49・50図 - 402・407・408・425]

402・407・408は白磁皿である。402は口縁から底部片で、内外面とも施軸され貫入が見られる。底部は露胎である。輪花高台で、見込みに目跡が残る。407は底部片である。底面は露胎で、輪花高台と目跡が確認できる。408は口縁から体部片で、腰折れの器形である。底部近くは露胎である。3点とも森

田分類のD群に相当する15世紀頃のものである。

425は備前焼摺鉢の口縁部である。内外面とも回転ナデによる調整を施す。15世紀頃のものである。

犬走状遺構（SG1） [第44図]

O30～Q32グリッドで検出した。堀切から等高線に沿って幅約1m、長さ約40mで南に延び、さらに東に向きを変えて延びている。この遺構の覆土にも桜島文明降下軽石層が残存していたが、硬化面は確認できなかった。遺構覆土からは、石鉄や磨製石斧等が出土したが、流れ込みと考えられるため、(7) 時期不明の遺物の項で述べる。

【SG1出土遺物】

陶磁器 [第49図 - 406]

406は白磁皿の底部である。見込みの軸は輪状に剥ぎ取られ、外面底部は露胎である。森田分類のE群に相当する、15世紀後半頃のものである。

包含層出土遺物

遺物はO31グリッドからP33グリッドにかけての調査区北西部に多く出土する傾向がみられた。出土層位はII層旧耕作土層が多い。舌状台地は西側に隣接する未調査区域にも広がっており、当時の活動の中心は調査区境周辺であったと考えられる。

土師器 [第49図 - 389・390・392～394・396]

389・390は坏の口縁から底部片である。389は内外面ともに回転ナデによる調整が施される。390は、内外面ともに回転ナデによる調整が施され、口唇部にススが付着し、灯明皿として使用していたと思われる。392～394・396は、小皿である。392は口縁から底部片で、内外面ともに回転ナデが施され、口唇部を特に丁寧に仕上げている。393・394・396は、体部から底部片で、内外面ともに回転ナデによる調整が施される。土師器の底面切り離し技法は、すべて糸切りによるものである。

陶磁器 [第49・50図 - 399～401・403～405・409～424]

399は白磁碗である。底部の器肉が厚く、外面底部は露胎である。大宰府分類のIV類に相当し、11世紀後半～12世紀前半のものである。400・401・403・405は白磁皿である。400は、口縁部が内湾する器形で、森田分類のD群に相当する、15世紀頃のものである。401は、口縁部の軸を掻き取る口禿げで、大宰府分類のIX類に相当し、13世紀中頃～14世紀初頭のものである。403は、口縁部が外反する器形で、森田分類のE群に相当する、15世紀後半頃のものである。405は輪花高台で見込みに目跡が残る。外面底部は露胎である。森田分類のD群に相当する、15世紀頃のものである。

404は白磁八角坏で、口唇部は平らに整えられ、森田分類のD群に相当する。15世紀頃のものである。

409～413は青磁碗である。409～411は、口縁部が外反する器形で、上田分類のD群に相当する。14世紀後半から15世紀前半頃のものである。412は、見込みに印花文が見られ、高台内側は露胎である。413は、高台内側が回転ナデで調整され、露胎である。412・413ともに、底部の器肉が厚く、上田分類のD群に相当する。14世紀後半から15世紀前半頃のものである。

414～416は青磁皿である。414の高台内側は回転軸剥ぎが施される。415は高台内側が露胎である。416は高台外面の中程まで軸がかかる。

417は青磁の火入れである。高台内側は露胎、内面は無釉である。

418～421は青花である。418～420は、景德鎮窯産で、15～16世紀頃のものである。418は、端反りの皿で、外面に草花文が見られる。小野分類染付皿B₂群に相当する。15～16世紀頃のものである。419・420は碗の体部片で、外面に草花文が見られる。421は碗の口縁部片で、内湾する器形である。外面の文様は全体像がつかみにくく不明である。河南系で、15～16世紀頃のものである。

422・423は輸入陶器である。422は褐釉陶器壺の底部付近である。内外面とも施釉される。423は胴部片で黒釉陶器の壺と思われる。外面のみ施釉され、内面は露胎である。

424は国産陶器で瀬戸窯産天目茶碗の口縁部片である。16世紀頃のものである。

(7) 時期不明の遺物

いずれも調査区よりも一段下の犬走状遺構SG1周辺から出土したため、上からの流れ込みと判断し、この項で述べる。

石器(第50図 - 430～435)

打製石鏃

430はR32グリッドのIV層中より出土した大型の石鏃である。平面形状は二等辺三角形に近く、基部の抉りが深い、脚端部は、右脚部が円形、左脚部は方形を呈する。側縁部は、鋸歯状に加工されており、右側縁は左側縁に比べ抉れている。ガラス質安山岩製である。431はO31グリッドのII層中より出土した。平面形状はほぼ正三角形で、基部には、わずかながら抉りが見られる。先端部がやや丸みを帯びている。ガラス質安山岩製である。432はO31グリッドのII層中より出土した。平面形状はほぼ二等辺三角形で、基部の抉りは浅く、脚部は尖る。先端部はわずかに丸みを帯び、側縁部は直線的で、鋸歯状の加工が施されている。黒曜石製(腰岳産か)である。

スクレイパー

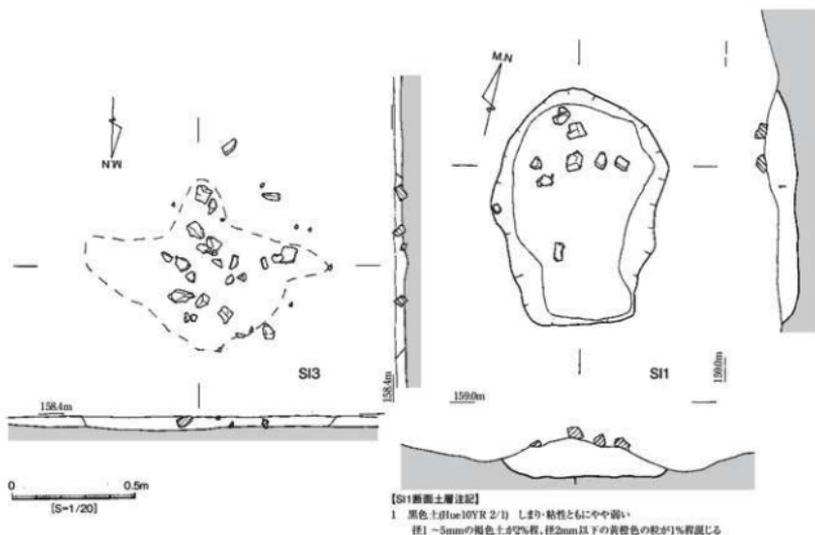
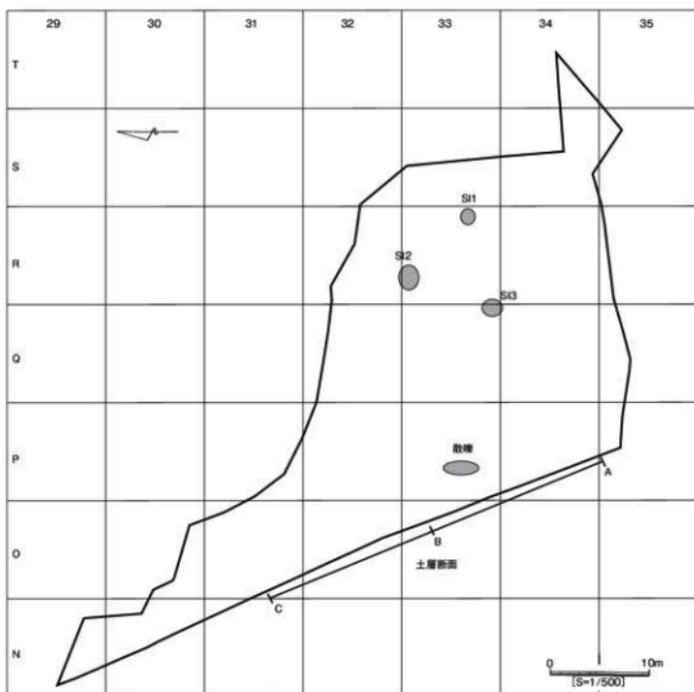
433はO32グリッドII層より出土した。剥片を素材にし、左側縁部に二次加工を施し、刃部を作出している。輝石安山岩製である。

磨製石斧

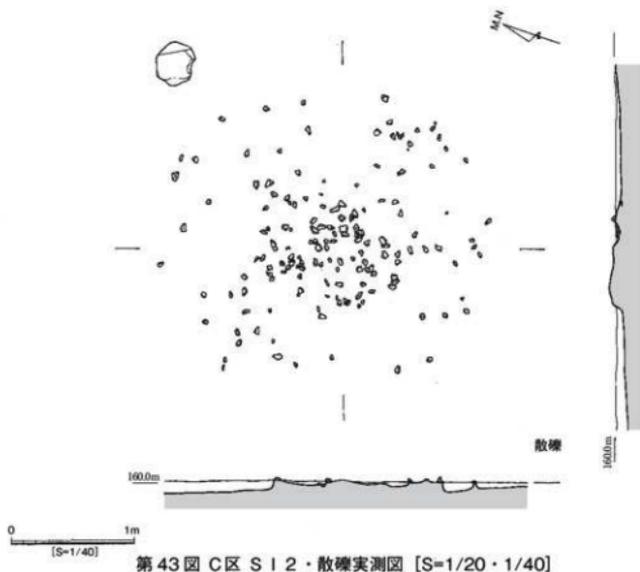
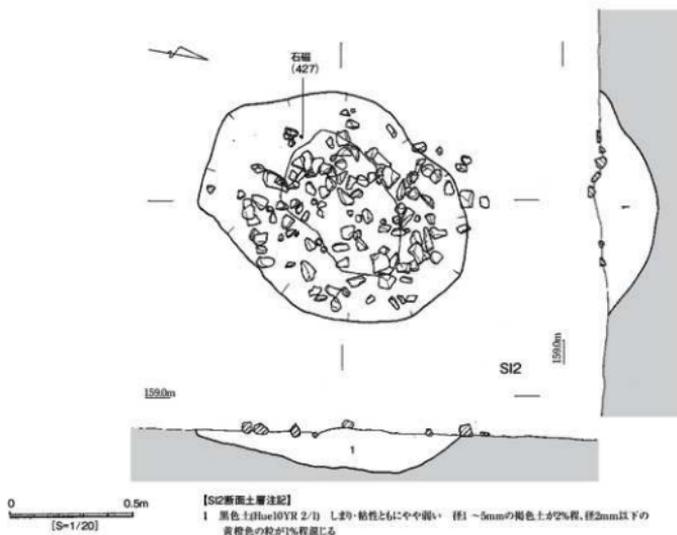
434はP32グリッドIII層で出土した。刃部は両刃で、側縁部は敲打による整形後に研磨を施している。頁岩製である。

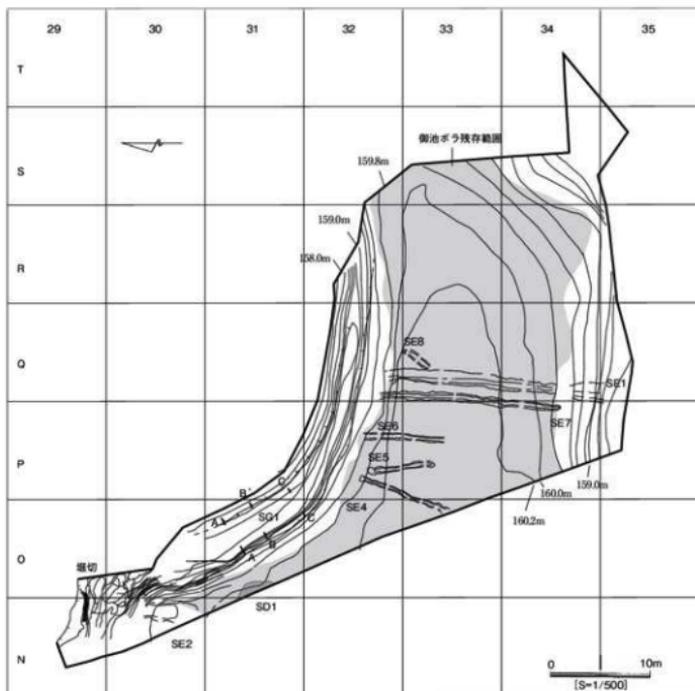
敲石

435はO32グリッドII層より出土した。平面形状は長方形で、上端部が欠損している。下端部に顕著な敲打痕が、一部に磨痕も確認できる。砂岩製である。



第42図 C区 縄文時代の遺構分布図 [S=1/500] およびS11・S13実測図 [S=1/20]





[SG1 断面土層注記]

A-A'

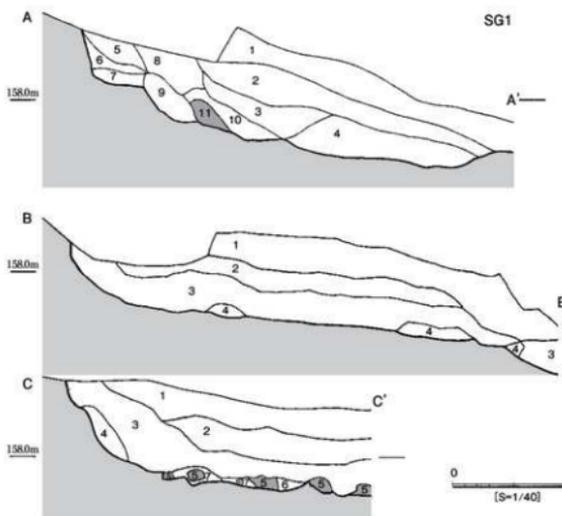
- 1 造成土
- 2 暗褐色砂質土(Hue7.5YR 3/3) しまり・粘性ともに弱い 径2mm程度の文明ボウが0%程度じる
- 3 暗褐色砂質土(Hue7.5YR 3/3) しまり・粘性ともに弱い 径2mm程度の文明ボウが9%程度じる
- 4 褐色砂質土(Hue7.5YR 4/3) しまり・粘性ともに弱い
- 5 明黄褐色砂質土(Hue10YR 6/6) しまり強く粘性弱い 二次K-Ahに黒褐色土(Hue7.5YR 2/3)が混じる
- 6 明黄褐色砂質土(Hue10YR 6/6) 5層より黒褐色の粒が少ない
- 7 黒褐色砂質土(Hue7.5YR 2/3) しまり強く粘性弱い 黒褐色上に二次K-Ahの粒が混じる
- 8 明黄褐色砂質土(Hue10YR 4/3) しまり・粘性ともに弱い
- 9 暗褐色砂質土(Hue10YR 3/3) しまりやや強く粘性弱い
- 10 黒褐色砂質土(Hue7.5YR 2/3) しまり・粘性ともに弱い
- 11 文明ボウ

B-B'

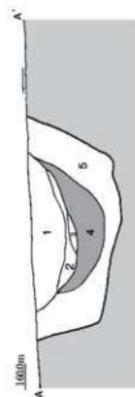
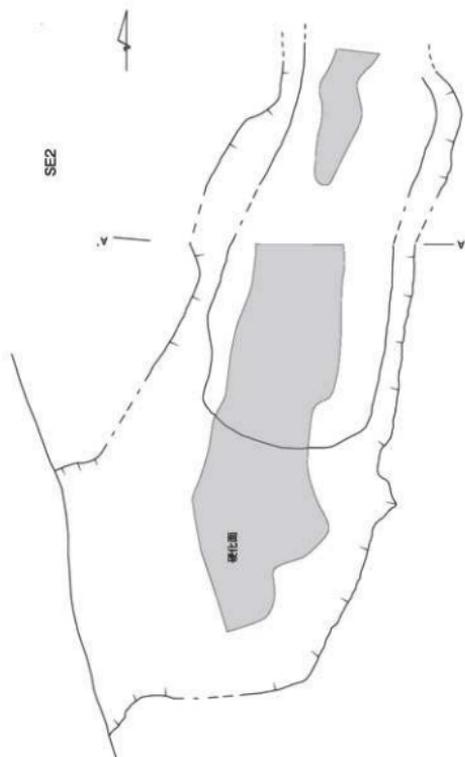
- 1 暗褐色砂質土(Hue7.5YR 3/3) しまり・粘性ともに弱い 径2mm程度の文明ボウが0%程度じる
- 2 暗褐色砂質土(Hue7.5YR 3/3) しまり・粘性ともに弱い 径2mm程度の文明ボウが0%程度じる
- 3 暗褐色砂質土(Hue7.5YR 3/3) しまり・粘性ともに弱い 径2mm程度の文明ボウが0%程度じる
- 4 文明ボウに、暗褐色砂質土が40%程度じる

C-C'

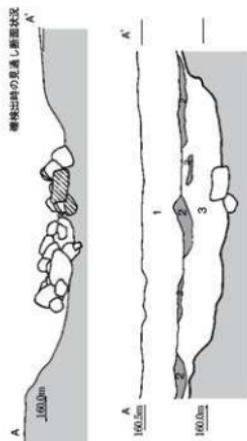
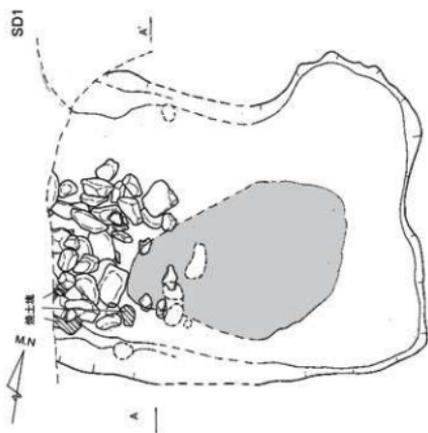
- 1 暗褐色砂質土(Hue10YR 3/3) しまり・粘性ともに弱い 径2mm程度の文明ボウが0%程度じる
- 2 明黄褐色砂質土(Hue10YR 3/3) しまりやや弱く粘性弱い 径1mm以下の文明ボウが15%程度じる
- 3 暗褐色砂質土(Hue10YR 3/3) しまり・粘性ともに弱い 径2mm以下の文明ボウが0%程度じる
- 4 暗オリーブ色砂質土(Hue2.5YR 3/3) しまり・粘性ともに弱い 径1mm以下の文明ボウが0%程度じる
- 5 文明ボウ
- 6 文明ボウに、暗褐色砂質土が40%程度じる
- 7 暗褐色砂質土(Hue2.5Y 3/1)



第44図 C区 中世の遺構分布図 [S=1/500] およびSG1実測図 [S=1/40]

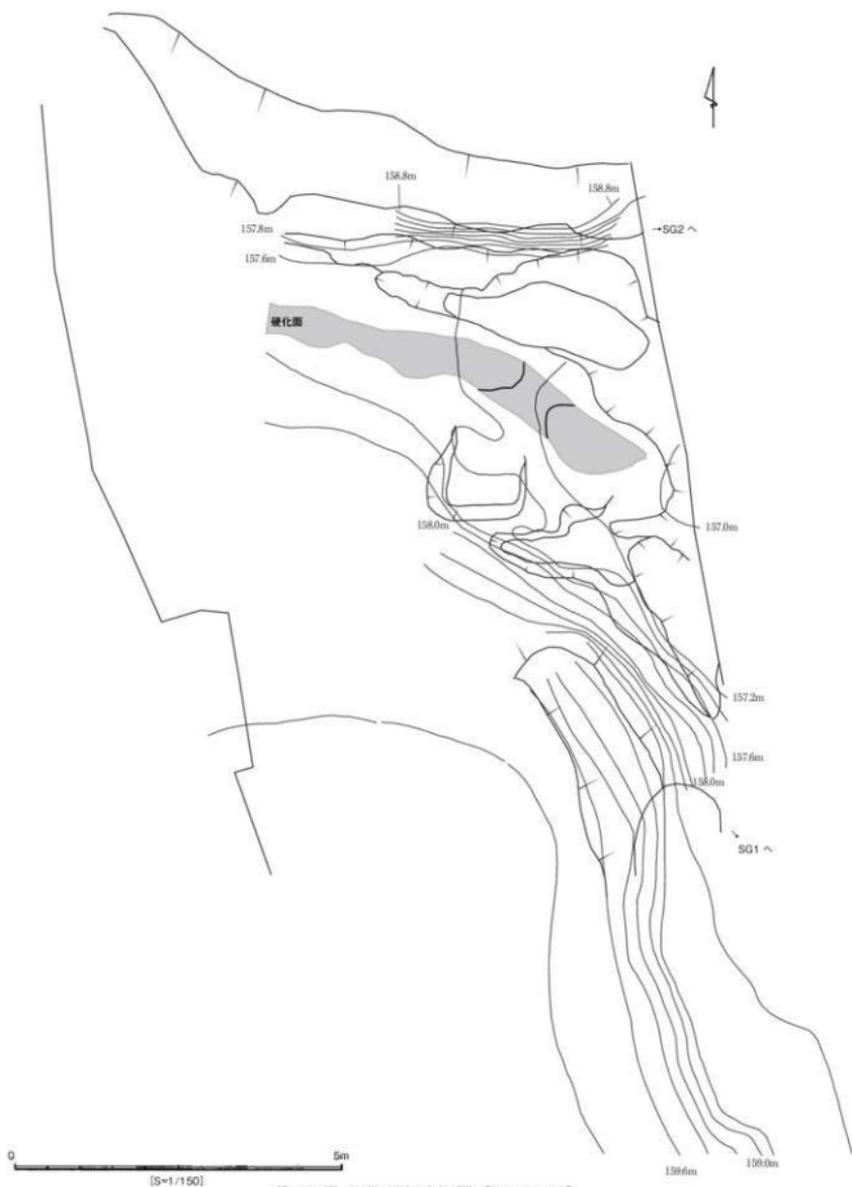


- 【SE2 舗装土層剖面】
 1 硬化面
 2 2mm厚の文相が約5%程度となる層状砂質土
 3 10cm以下の文相が約5%程度となる層状砂質土
 4 10cm以下の文相が約5%程度となる層状砂質土
 5 10cm厚の砂質土

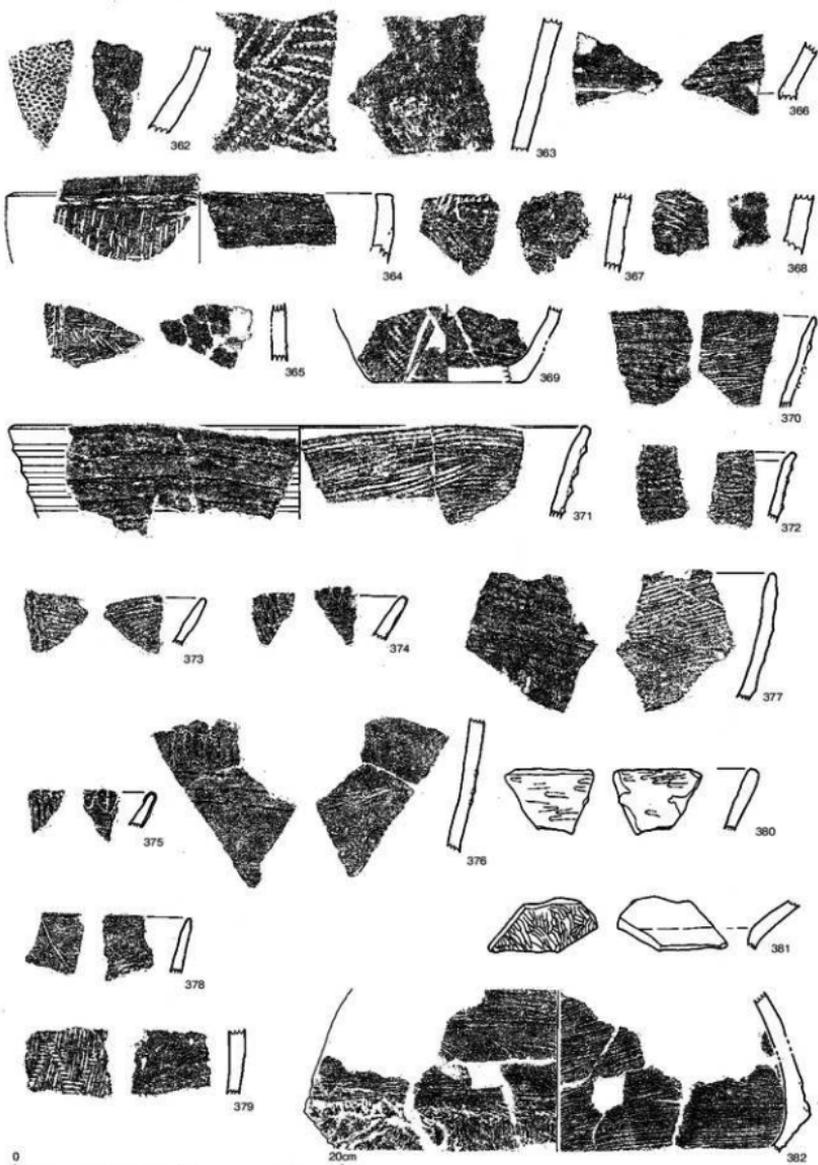


- 【SD1 舗装土層剖面】
 1 硬化面
 2 2mm厚の文相が約5%程度となる層状砂質土
 3 10cm以下の文相が約5%程度となる層状砂質土
 4 10cm以下の文相が約5%程度となる層状砂質土
 5 10cm厚の砂質土

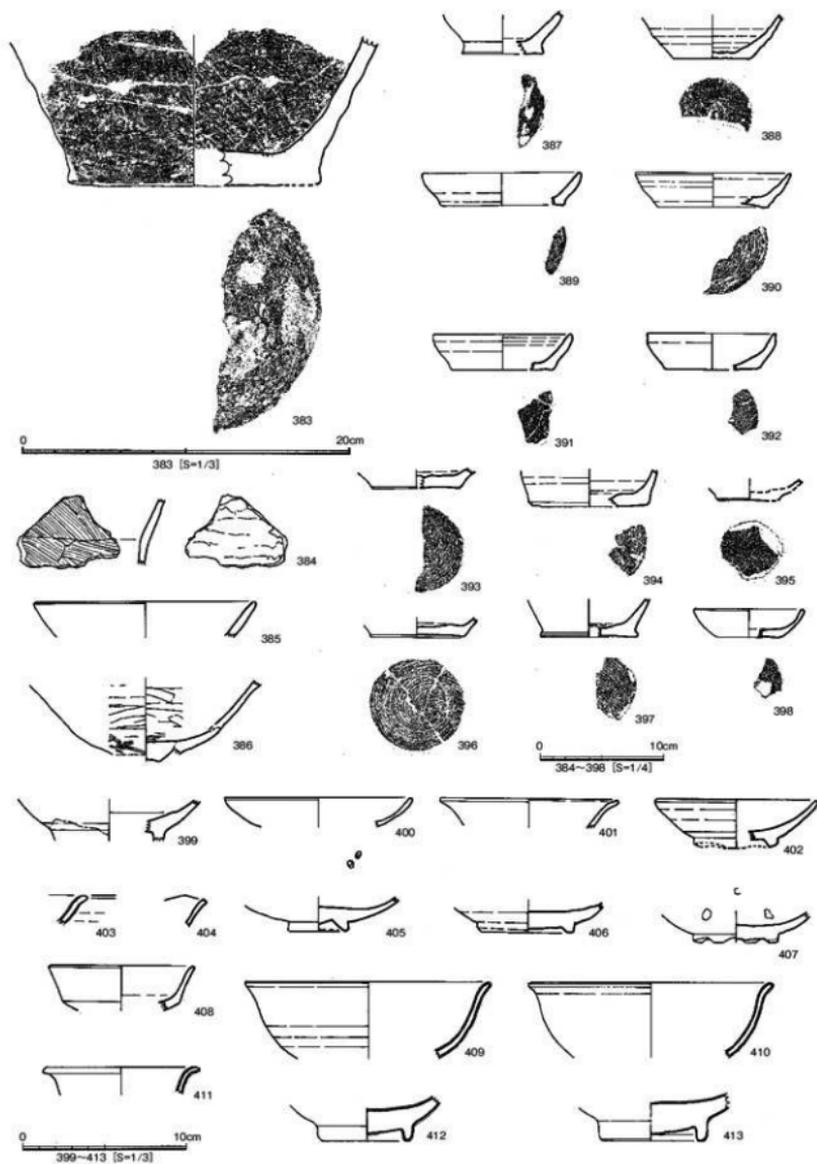
第46図 C区 SD1・SE2実測図 [S=1/40]



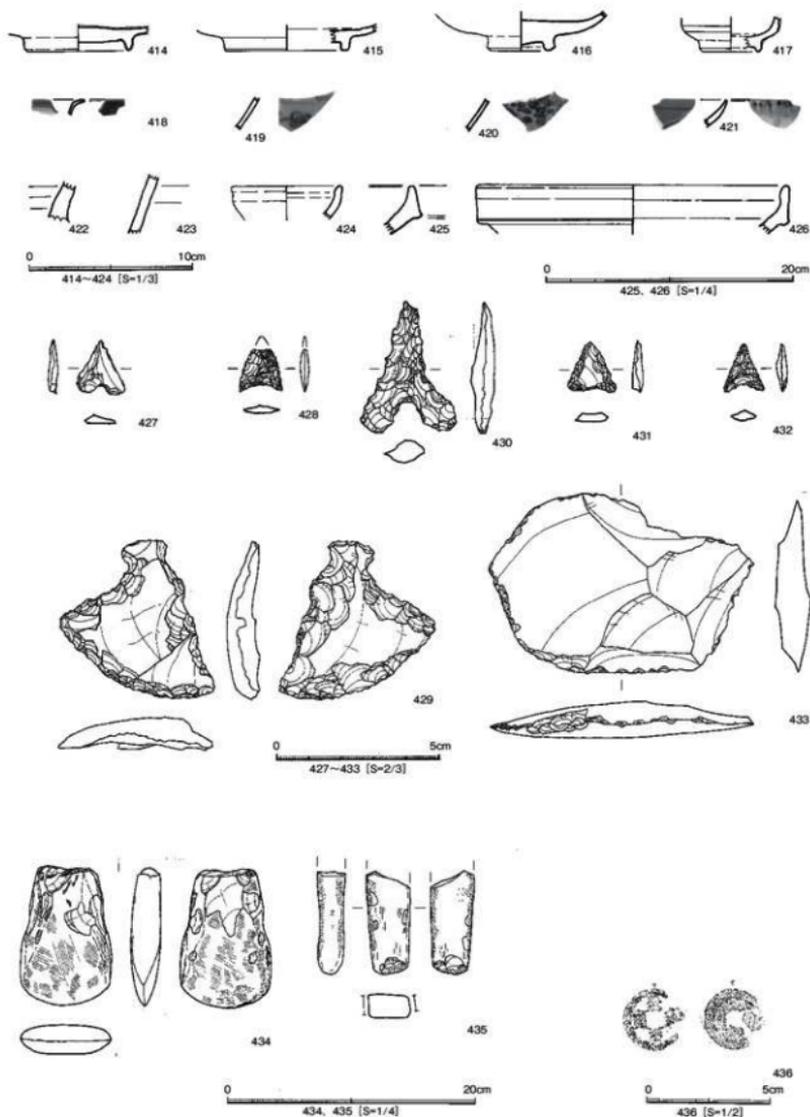
第 47 图 C 区 堀切実測図 [S=1/150]



第48図 C区 縄文時代の出土遺物実測図 [S=1/3]



第 49 図 C 区 縄文時代・古墳時代～中世の出土遺物実測図 [S=1/3・1/4]



第 50 図 C 区 縄文時代・中世および時期不明の出土遺物実測図 [S=1/4・2/3・1/2]

第5表 C区出土石遺物観察表

発掘番号	出土位置	種類	部類	部位	文様・図案の特徴		色調		胎土の特徴	残存率	法量・その他
					外面	内面	外面	内面			
362	堀切	縄文土器	深鉢	胴部	柄内付突文	縦方向のナゲ調整 筋状文	にぶい黄 G5YR 5-3	黄灰 G5YR 5-1	2mm以下の黄白色粒を中量、 1mm以下の透明光沢粒・黒 色光沢粒を少量		
363	埋蔵	縄文土器	深鉢	胴部	目録線縁による羽状文	ナゲリ気味の粗いナゲ	にぶい黄 G5YR 5-3	にぶい黄 G5YR 5-3	2mm以下の赤母片を微細な 黒色粒を少量、1mm以下の 白色半透明粒を少量		
364	埋蔵	縄文土器	深鉢	口縁部	口縁部には1ギガの後縁 側方向の目録線縁突文・下部 には1ギガの後縁方向の粗 筋状文	縦・斜め方向の粗い ナゲ	黄 G5YR 4-0 黒 G5YR 3-1	黄 G5YR 4-0 黒 G5YR 3-1	1mm以下の黄色光沢粒・白 色粒・微細な透明光沢粒を 少量	1.9	断面径17.23cm
365	埋蔵	縄文土器	深鉢	胴部	上部に斜め・縦方向の粗 筋状文による羽状文 左端は縦方向の羽状文	ナゲ	灰黄 G5YR 4-2	にぶい黄 G5YR 3-0	1mm以下の黄色光沢粒・白 色粒・微細な透明光沢粒を 中量		
366	埋蔵	縄文土器	深鉢	胴部	縦方向の粗いナゲ・横 方向の筋状文	縦方向の目録線縁文・ 横ナゲ	灰黄 G5YR 4-2	にぶい黄 G5YR 6-0	微細な赤黄褐色を中量、 微細な無色透明粒を少量		
367	埋蔵	縄文土器	深鉢	胴部	上部に斜め・縦方向の粗 筋状文・下部に斜 め方向の粗筋状文と粗 筋文	縦方向のナゲ	にぶい黄 G5YR 5-3	灰黄 G5YR 5-3	微細な赤黄褐色を中量、1 -3mm大の褐色粒を中量、 0.5-1.5mm大の赤母片を 少量		
368	埋蔵	縄文土器	深鉢	胴部	胴付状態無文	ナゲ	にぶい黄 G5YR 6-0	灰黄 G5YR 4-2	1mm以下の白色半透明粒、 微細な無色透明粒を少量、 3mm以下の白色粒を少量		
369	埋蔵	縄文土器	深鉢	胴部	赤褐色・縦方向に一部 粗筋文	縦方向のナゲ	にぶい黄 G5YR 6-0	にぶい黄 G5YR 6-0	微細な無色透明粒を少量、 微細な白色粒・黄色透明 粒を少量	1.7	断面径17.88cm
370	日曜	縄文土器	口縁部	縦方向の目録線縁文・ 3条の胎付突帯文	縦・斜め方向の目録 線文・口縁部は横ナゲ	灰黄 G5YR 4-2 灰黄 G5YR 4-1	灰黄 G5YR 4-2 灰黄 G5YR 4-1	3mm以下の白色粒・微細な 透明光沢粒を中量、2mm 以下の黄色光沢粒を中量、 その他の砂粒を少量			
371	日曜	縄文土器	口縁部	縦方向のナゲ・4条の 胎付突帯文	縦・斜め方向の目録 線文・口縁部はナゲ	灰黄 G5YR 5-2 黒 G5YR 3-1	にぶい黄 G5YR 5-3 黒 G5YR 5-3	微細な透明光沢粒を中量、 1mm以下の黄色光沢粒・白 色粒・灰色粒を少量、5mm 以下の黒褐色粒を少量	1.7	断面径17.8cm	
372	一括	縄文土器	深鉢	口縁部	縦方向のナゲ・4条の 胎付突帯文	縦方向の目録線縁文	黄 G5YR 2-2	暗 G5YR 3-3	1mm以下の無色透明粒、 細な白色粒を少量		
373	日曜	縄文土器	深鉢	口縁部	縦方向の胎付突帯文	縦方向の目録線縁文	にぶい黄 G5YR 4-2	暗 G5YR 4-2	1mm以下の無色透明粒、 細な白色粒を少量		
374	日曜	縄文土器	深鉢	口縁部	縦方向の胎付突帯文 口縁部は横並びに粗 筋	目録線縁文	にぶい黄 G5YR 3-1	黒 G5YR 5-3 黒 G5YR 3-1	微細な白色粒・無色透明 粒を少量		
375	堀切	縄文土器	深鉢	口縁部	縦方向に胎土の胎付突 帯文 口縁部から内面に横 方向の不規則な胎土の胎 付突帯文	目録線縁文	にぶい黄 G5YR 6-0	灰黄 G5YR 4-2	微細な白色粒・無色透明 粒を少量		
376	日曜	縄文土器	深鉢	胴部	縦方向のナゲ・縦方向 の胎付突帯文 縦方向の3条の胎付突 帯文	ナゲ・一部斜め方向に 目録線縁文	黒 G5YR 4-1	にぶい黄 G5YR 5-0	1mm以下の白色粒、微細な 透明光沢粒を少量、1mm 以下の赤褐色粒・白色透 明粒を少量		
377	日曜	縄文土器	深鉢	口縁部	縦・斜め方向の目録 線 斜め方向の胎付突帯文	縦・斜め方向の目録 線縁文	にぶい黄 G5YR 6-0 黒 G5YR 4-1	にぶい黄 G5YR 6-0 黒 G5YR 4-1	1mm以下の黄色光沢粒、微 細な透明光沢粒を中量、2 mm以下の灰色粒、1mm以 下の白色粒・褐色粒を少量		
378	日曜	縄文土器	深鉢	口縁部	縦方向のナゲの後縁 方向の筋状文	縦方向のナゲ	にぶい黄 G5YR 4-1	にぶい黄 G5YR 5-3	微細な透明光沢粒、1mm 以下の黄白色粒・灰色光 沢粒を中量、3mm以下の赤 褐色粒、2mm以下の白色半 透明粒を少量		
379	日曜	縄文土器	深鉢	胴部	目録線縁文の竣工具に よる粗筋状の縁文	縦・斜め方向の丁字 ナゲ	にぶい黄 G5YR 6-0	にぶい黄 G5YR 6-0	1mm以下の黄色光沢粒、 微細な透明光沢粒を少量、 3mm以下の赤褐色粒、2mm 以下の白色半透明粒、1mm 以下の白色粒を少量		
380	日曜	縄文土器	深鉢	口縁部	縦0.2-0.3mmの横方向 の1ギガ	縦0.2-0.3mmの横方向 の1ギガ	にぶい黄 G5YR 5-3	にぶい黄 G5YR 5-3	1mm以下の黄色光沢粒・白 色光沢粒、微細な透明光 沢粒を少量	1.83	
381	日曜	縄文土器	浅鉢	胴部付 口縁部	縦0.2-0.3mmの斜め方 向の1ギガ	ナゲ	オリーブ 色 GY 3-1	暗 G5Y 4-2	3mm以下の粗白色粒・白色 半透明粒、微細な透明 光沢粒を少量	1.85	
382	日曜	縄文土器	深鉢	胴部	縦方向の目録線縁文・ 下部に粗筋文	縦・斜め方向の赤褐色 一部にナゲ・粗筋文	にぶい黄 G5YR 5-3	にぶい黄 G5YR 5-0	0.5-2mm大の黄褐色粒、 微細な無色透明光沢粒・黒 色透明光沢粒を中量、1- 2mm大の赤褐色粒・灰色 粒を少量	1.5	断面径部径 30.8cm
383	日曜	縄文土器	深鉢	胴部	斜め方向の粗い・工具 ナゲの後縁・縦方向の粗 筋状文	縦・斜め方向のナゲリ	赤 GYR 4-0	にぶい黄 G5YR 5-0	0.5-3mm大の黄褐色粒、1 -2mm大の灰色粒・黒色透 明光沢粒、灰色光沢粒を 少量、5mm以下の赤褐色 粒を少量	1.3	断面径 15.4cm
384	横土 V層	土層部	葉	胴部	ナゲ	斜め方向のハナ目	淡 G5Y 7-3	淡 G5Y 6-3	1-2mm大の褐色粒・赤 褐色・白色半透明粒・無 色透明光沢粒を中量	1.8	
385	日曜	土層部	鉢	口縁部	口縁部は縦方向のナゲ・ 下部はナゲ	縦方向のナゲ	にぶい黄 G5YR 7-4	黄 G5YR 6-0	0.5-3mm大の赤褐色粒、1 mmの無色透明光沢粒・白 色粒、0.5-2mm大の黄 色光沢粒を中量	1.7	断面径17.17cm
386	日曜	土層部	高杯	胴部	底部をヘラミガキ・体 部を斜め方向のナゲ・ その上位をナゲ	斜め方向のナゲ・底部 にヘラミガキ	にぶい黄 G5YR 7-0	にぶい黄 G5YR 7-0	1-4mm大の褐色粒・赤 褐色・白色半透明粒・無 色透明光沢粒を中量	1.5	
387	堀切	土層部	杯	胴部	回転ナゲ・底部はヘラ 切りの横ナゲ	回転ナゲ	暗 G5YR 7-0	暗 G5YR 7-0	微細な黄色粒を少量、1mm 以下の乳白色粒を少量	1.3	断面径17.64cm

前継番号	出土位置	種類	器種	部位	文様・調整の特徴		色調		胎土の特徴	備考	質量・その他
					外面	内面	外面	内面			
388	S E 2	土師器	杯	体部一底部	回転ナデ・底面はへう切りの浅ナデ	回転ナデ	黄褐色 G5YR 7-8	灰 G5YR 7-8	微細な透明光沢粒を多量、2mm以下の黒褐色粒を少量、微細な黒色光沢粒および1mm以下の灰白粒・明赤褐色粒を微量	1/2	想定口径 6.2cm
389	Ⅱ層	土師器	杯	口縁部一底部	回転ナデ・赤切り底	回転ナデ	浅黄褐色 G0YR 8-9	浅黄褐色 G0YR 8-9	微細な透明光沢粒を多量、3mm以下の明赤褐色・赤褐色粒を少量、1mm以下の黒褐色粒を微量	1/7	想定口径11.7cm 想定底径9.1cm 器高27cm
390	Ⅱ層	土師器	杯	口縁部一底部	回転ナデ・赤切り底・2次的比類直線	回転ナデ・口縁部はナデ	いぶい黄褐色 G0YR 7-8 灰白 G5YR 7-8	いぶい黄褐色 G0YR 7-8 灰白 G0YR 4-5	微細な透明光沢粒を多量、1mm以下の黒褐色粒を微量	1/3	想定口径12.55cm 想定底径9.9cm 器高28cm
391	Ⅱ層	土師器	杯	口縁部一底部	回転ナデ・へう切り底	回転ナデ	浅黄褐色 G0YR 8-9	浅黄褐色 G0YR 8-9	微細な透明光沢粒、1mm以下の明赤褐色・赤褐色粒を多量、1mm以下の黒褐色粒を微量	1/6	想定口径11.1cm 想定底径8.2cm 器高29.6cm
392	Ⅱ層	土師器	小皿	口縁部一底部	回転ナデ・赤切り底	回転ナデ	浅黄褐色 G0YR 8-9	浅黄褐色 G0YR 8-9	3mm以下の赤褐色粒、微細な黒色透明粒を微量	1/7	想定口径10.0cm 想定底径7.6cm 器高30cm
393	Ⅱ層	土師器	小皿	体部一底部	回転ナデ・赤切り底	回転ナデ	浅黄褐色 G0YR 8-9	浅黄褐色 G0YR 8-9	2mm以下の黒褐色粒、微細な透明光沢粒を多量	1/2	想定底径7.2cm
394	Ⅱ層	土師器	小皿	体部一底部	回転ナデ・赤切り底	回転ナデ	淡黄 G2Y 8-9	淡黄 G2Y 8-9	4mm以下の赤褐色粒、1mm以下の白色半透明粒、1mm以下の白色粒を微量	1/4	想定底径9.4cm
395	Ⅱ層	土師器	小皿	体部一底部	回転ナデ・赤切り底	回転ナデ	浅黄褐色 G0YR 8-9	浅黄褐色 G0YR 8-9	微細な透明光沢粒を多量、1mm以下の黒褐色粒を少量	底部は不定形	底径48.8cm 底径18.8cm
396	Ⅱ層	土師器	小皿	体部一底部	回転ナデ・赤切り底	回転ナデ	浅黄褐色 G0YR 8-9	浅黄褐色 G0YR 8-9	微細な透明光沢粒、黒褐色粒を多量、2mm以下の黒褐色粒・明赤褐色粒を少量、3mm以下の黒褐色粒を微量	底部は不定形	底径7.6cm
397	S E 2	土師器	小皿	体部一底部	回転ナデ・赤切り底	回転ナデ	浅黄褐色 G0YR 8-9 浅黄褐色 G5YR 8-9	浅黄褐色 G0YR 8-9 浅黄褐色 G5YR 8-9	微細な透明光沢粒を多量、1mm以下の黒褐色粒・褐色粒・灰白色粒を微量	1/4	想定底径 7.7cm
398	Ⅱ層	土師器	小皿(石目肌)	口縁部一底部	回転ナデ・へう切り底	回転ナデ	灰白 G0YR 8-9	灰白 G0YR 8-9	微細な透明光沢粒を多量	1/6	想定口径8.9cm 想定底径5.3cm 器高23.5cm
399	Ⅱ層	白磁	碗	底部	施釉 底面は露胎	施釉	灰白(N 9)	灰白(N 9)	精製 1mm以下の黒褐色粒が少量	1/5	
400	Ⅱ層	白磁	皿	口縁部	施釉 貫入	施釉 貫入	灰白 G5Y 8-9	灰白 G5Y 8-9	精製	1/7	想定口径11.4cm
401	Ⅱ層	白磁	皿	口縁部	施釉	施釉 口縁部 口先げ	灰白 G5Y 7-8	灰白 G5Y 7-8	精製	1/9	想定口径10.8cm
402	Ⅱ層	白磁	皿	口縁一底部	施釉 貫入 底面は露胎	施釉 貫入	灰白 (N 8)・ G2Y 7-8	灰白 (N 8)	精製	口縁1/3部 1/8	想定口径8.6cm 想定底径23.8cm
403	Ⅱ層	白磁	皿	口縁部	施釉 貫入	施釉 貫入	灰白 G5Y 7-8	灰白 G5Y 7-8	精製		
404	Ⅱ層	白磁	八角杯	口縁部	施釉	施釉	灰白 G5Y 8-9	灰白 G5Y 8-9	精製		
405	Ⅱ層	白磁	皿	体部一底部	施釉 貫入 底面は露胎	施釉 貫入 見込み目跡あり	灰白 G2Y 8-9	灰白 G2Y 8-9	精製	底部は不定形	底径37.8cm
406	SG1	白磁	皿	体部一底部	施釉 底面は露胎の一部赤褐色	施釉 底面は乾の目跡剥ぎ	灰オリーブ G5Y 6-7 露胎 浅黄 G2Y 7-8 G2Y 6-6	灰オリーブ G5Y 6-7	精製	高台は不定形	底径5.6cm
407	Ⅱ層	白磁	皿	底部	施釉 貫入 底面は露胎 輪色台合	施釉 貫入 見込み目跡あり	灰白 G2Y 8-9	灰白 G2Y 8-9	精製 微細な黒褐色粒を微量	1/2	想定底径3.2cm
408	Ⅱ層	白磁	皿	口縁一底部	施釉 貫入 底面は露胎	施釉 貫入	灰白 G5Y 8-9	灰白 G5Y 8-9	精製	1/6	想定口径8.6cm
409	Ⅱ層	青磁	碗	口縁一底部	施釉 貫入	施釉 貫入	灰 G0Y 6-7	灰 G0Y 6-7	精製	1/7	想定口径14.8cm
410	Ⅱ層	青磁	碗	口縁一底部	施釉 貫入	施釉 貫入	灰 G0Y 6-7	灰 G0Y 6-7	精製	1/7	想定口径14.6cm
411	Ⅱ層	青磁	碗?	口縁一底部	施釉	施釉	オリーブ灰 G0Y 4-2	オリーブ灰 G0Y 5-2 オリーブ灰 G0Y 6-2	精製	1/9	想定口径9.1cm
412	Ⅱ層	青磁	碗	体部一底部	施釉 高台内側は露胎	施釉 貫入 見込みに印	オリーブ灰 G5Y 6-1 G5Y 8-9	オリーブ灰 G0Y 6-1	精製	1/4	想定底径5.4cm
413	Ⅱ層	青磁	碗	体部一底部	施釉 高台内側は回転ナデ・露胎	施釉	オリーブ灰 G0Y 5-2	オリーブ灰 G0Y 6-2	精製	1/8	想定底径6.1cm
414	Ⅱ層	青磁	皿	底部	回転ナデ 施釉 貫入 高台内側 回転輪剥ぎ	回転ナデ 施釉 貫入	灰オリーブ G2Y 6-2	灰オリーブ G2Y 6-2	精製	6/7	底径61.5cm
415	Ⅱ層	青磁	皿小皿	底部	施釉 高台内側は露胎	施釉	オリーブ灰 G2G 6-1	オリーブ灰 G2G 6-2	精製	1/6	想定底径7.6cm
416	Ⅱ層	青磁	皿	底部	回転ナデ 施釉 わすかに貫入 高台内側は無釉	回転ナデ 施釉 わすかに貫入	オリーブ灰 G0Y 6-2 高台付底 いぶい黄褐色 G0YR 5-6	オリーブ灰 G0Y 6-2	精製	高台は不定形	底径43.5cm

図録 番号	出土 位置	種類	器種	部位	文様・図案の特徴		色調		胎土の特徴	保存 状態	質量・その他
					外面	内面	外面	内面			
417	表保	青花	火入れ	底部	回転ナデ 無軸 わす かへ貫入 高台内筒は黒胎	回転ナデ 無軸	黒胎 G5GY 6/0 黒胎無軸 の境 にふい黄 濁 (OVR 3/4)	灰白 G5Y 7/1)	精良	高台 1/4	器定口径 3.4cm
418	Ⅱ層	青花	瓶	口縁部	回転ナデ 無軸	回転ナデ 無軸	明青灰 (OVR 7/1)	明青灰 (OVR 7/1)	精良		
419	Ⅱ層	青花	瓶	体部	回転ナデ 無軸	回転ナデ 無軸	明青灰 (OVR 7/1)	明青灰 (OVR 7/1)	精良		
420	Ⅱ層	青花	瓶	体部	回転ナデ 無軸	回転ナデ 無軸	明青灰 (OVR 7/1)	明青灰 (OVR 7/1)	精良		
421	Ⅱ層	青花	瓶	口縁部	回転ナデ 無軸	貫入	灰白 (GY 7/2)	灰白 (GY 7/2)	精良	1/15	
422	Ⅱ層	黒胎 陶器	壺	底部付 足	無軸	無軸	黒胎 (GY 3/2) にふい黄 (GY 5/3)	黒胎 (GY 3/2) にふい黄 (GY 6/3)	精良		
423	Ⅱ層	黒胎 陶器	壺	胴部	無軸	回転ナデ 黒胎	黒 (OVR 2/1)	灰黒胎 (OVR 4/2)			
424	Ⅱ層	天目 茶碗	碗	口縁部	無軸	無軸	にふい黄 (GYR 5/4) + 黒 (OVR 2/1)	にふい黄 (GYR 5/4) + 黒 (OVR 2/2)	精良	1/8	器定口径 6.5cm
425	堀切	備前	部鉢	口縁部	回転ナデ	回転ナデ 黒胎	にふい黄 (GYR 5/4)	明オリーブ 灰 (GY 7/2)			器縁～2.5mm大の灰白色粒 を多量 1～2mm大の褐色・赤褐色 粒を少量
426	SD 1	備前	部鉢	口縁部	回転ナデ 口縁部無軸 下部は無軸	回転ナデ 無軸	黒赤胎 (GYR 3/3)	明赤胎 (GSYR 5/4)		1/13	器定口径 25.1cm

第6表 C区出土石器・銭貨計測表

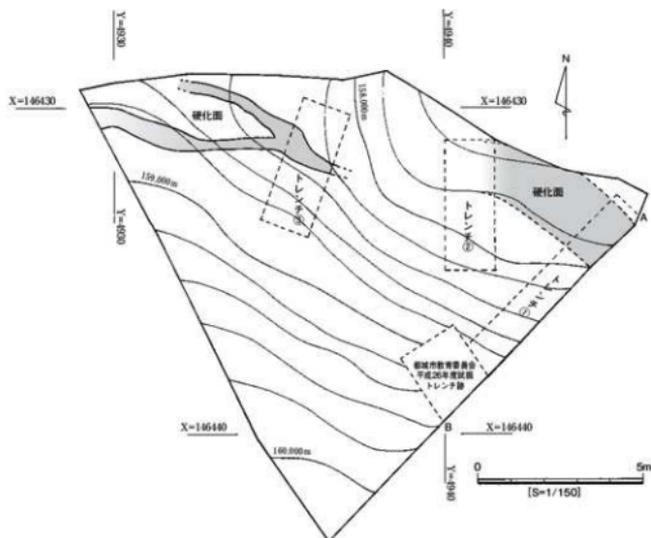
図録 番号	出土 位置	種類	器種	材質	測 量			その他
					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	
427	S 1 2	石器	打製石鏃	チャート	12	1.4	0.3	0.48
428	Ⅱ層	石器	打製石鏃	黒曜石 (備前産小)	13	1.3	0.3	0.41
429	Ⅱ層	石器	石匙	チャート	49	4.7	1	17.4
430	S G 1	石器	打製石鏃	ガラス質安山岩	4	2.9	0.7	4
431	S G 1	石器	打製石鏃	ガラス質安山岩	11	1.3	0.35	0.68
432	S G 1	石器	打製石鏃	黒曜石 (備前産小)	995	1.2	0.3	0.33
433	Ⅱ層	石器	石ノコ	輝石安山岩	35	8.1	1.1	43.7
434	Ⅱ層	石器	磨製石斧	頁岩	11.3	7.4	2.4	207.8
435	Ⅱ層	石器	磨石	砂岩	85	3.6	2.3	122.8
436	S D 1	銅製品	銭貨	-	26	-	0.1	1.6

4. D 区の調査

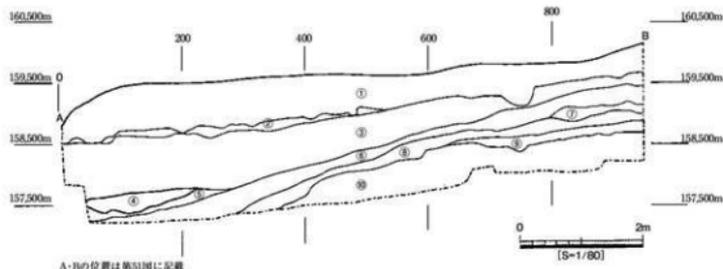
(1) D1区の調査 [第51図～第55図]

調査対象面積は約150㎡である。調査区南から北東方向に傾斜する地形で、比高差は約2.5m、調査前は杉林であった。南側は後世の削平のため、第Ⅱ～Ⅴ層の大部分が消失していた。調査は、第Ⅲ層（桜島文明降下軽石層）まで重機で除去した後に、第Ⅳ層（黒褐色土）の掘削を人力で行い、第Ⅴ層（霧島御池降下軽石層）上面検出を行った。D1区における第Ⅳ層は、斜面下方の北側に下るにつれ厚く堆積しており、最厚部は約120cm堆積していた。第Ⅴ層上面までで検出された遺構は、第Ⅳ層中に硬化面が2か所確認されたのみである。遺物は、第Ⅳ層中から縄文時代の石器・古墳時代の土師器・中世の土師器などが出土した。

また、第Ⅴ層上面での調査終了後、第Ⅴ層以下の状況確認のため、トレンチ①～③の3か所を設定（合計約18㎡・第1図）し、各トレンチともに旧石器時代～縄文時代草創期頃の層と考えられる第Ⅹ層（黒褐色土）あたりまでの深さ120～130cm程度の掘り下げを行った。しかし、第Ⅴ層以下の旧石器時代～縄文時代に属するような遺構・遺物は確認されなかった。



第51図 D1区 第Ⅴ層上面検出状況図 [S=1/150]



【D1区 基本土層】

- | | | |
|----------------|-----------------|--|
| ① 礫混雑土 | [Hac10YR-6-1] | 基本層序の第1・2層【B1区-第1層】。礫の耕作土及び後世の造成土。 |
| ② 灰白色軽石粒混黒褐色土 | [Hac5Y7.1/8-1] | 基本層序の第3層【B1区-第1層】。極高文明軽石層を中心として構成される。下部にはやわらかい黒褐色土が含まれる。 |
| ③ 明黄褐色軽石粒混黒褐色土 | [Hac25YR-3-1] | 基本層序の第4層【D1区-第1層】。下部に黒色鈣造粒石粒と安定される明黄褐色軽石粒(φ1mm以下)をわずかに含む。 |
| ④ 明黄褐色軽石粒混黒褐色土 | [Hac25YR-2-2] | 基本的には3層に近く、黒色鈣造粒石粒と安定される明黄褐色軽石粒(φ1mm以下)をわずかに含む。全体が硬化しており硬く、硬化面を形成している。 |
| ⑤ 明黄褐色軽石粒混黒褐色土 | [Hac25YR-1.7-1] | ③層と似ているが、少し色調が深い。 |
| ⑥ 明黄褐色軽石粒混黒褐色土 | [Hac10YR-2-2] | 基本層序の第5層・V層【B1区-第2層-1層】。基本層序には3層と似ているが、黒色鈣造粒石粒がブロック状で混入している。 |
| ⑦ 黒褐色土混黄褐色土 | [Hac10YR-5-6] | 基本層序の第6層・VII層【B1区-第2層-V層】。発掘アサキ平次山内(Bc-A)層がブロック状に含まれる。 |
| ⑧ 浅黄褐色軽石粒混黒褐色土 | [Hac25YR-1.7-1] | 基本層序の第7層【B1区-第3層】。層下部に極高P11次山内(Se-1)と安定される浅黄褐色パリスをわずかに含む。 |
| ⑨ 浅黄褐色軽石粒混黒褐色土 | [Hac25Y-3-2] | 基本層序の第8層【B1区-第3層】。層全部に極高P11次山内(Se-1)と安定される浅黄褐色パリスを多量に含む。 |
| ⑩ 黒褐色土 | [Hac7.5Y-3-1] | 基本層序の第9層【B1区-第3層】。層下部に極高P13次山内(Se-1)と安定される黄褐色パリスを含む。 |

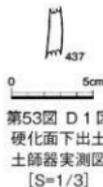
第52図 D1区 土層堆積状況図(南壁) [S=1/80]

① 古墳時代～中世の遺構

硬化面 [第51図・第52図]

遺構 [第51図・第52図] 第IV層下部から硬化面が2か所確認された。1か所は調査区北西部に平面的に確認された [第51図左側]。もう1か所は、平面的には明確に確認できなかったが、土層断面状況図作成時、調査区北東隅部において断面での確認となった [第51図右側・第52図④層]。

遺物 [第53図 - 437] 437は土師器で甕の胴部片である。細片で摩擦著しく、詳細は不明であるが、胎土に径1～2mmの砂粒を多く含み、古墳時代頃の土師器と推測できる。硬化面に伴うものではないが、硬化面近くより少し下部の位置から出土したことより、硬化面は古墳時代より新しい時期の古代～中世頃の遺構の可能性がある。



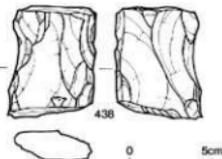
第53図 D1区
硬化面下出土
土師器実測図
[S=1/3]

② 包含層出土の遺物 [第54・55図 - 438～441]

D1区からは、基本層序の第V層を除く、第1層から第VI層までの各層から縄文時代～中世に時期比定される遺物が出土した。特に、第IV層中から多くの土器片が出土したが、摩擦した細片が多く、特徴的なものが少なかった。D1区は、一部を除き全体的に傾斜地であり、出土資料の多くが上部のB区西側からの流れ込みと推測できる。ここでは、図化した特徴的なものを中心に詳細を述べる。

縄文時代 [第54図 - 438]

第IV層中からホルンフェルス製の石斧片1点(438)が出土した。上下両端が欠損しているが、両側縁に細やかな調整剥離を行っている。縄文時代後～晩期頃の石斧の柄の基部と推定される。



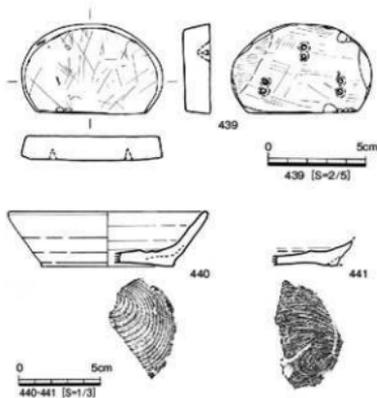
第54図 D1区 包含層出土遺物
実測図(1) [S=1/3]

古墳時代～古代 [第55図-439]

439は第IV層中から出土した頁岩製の石製鈎帯である。色調は暗灰色(Hue-N3/程度)、縦2.5cm・横幅4cm・厚さ0.7cmで下辺は直線状、両側辺から上辺にかけて曲線状の蒲鉾形を呈する丸柄である。表面は光沢をもつまで研磨され、裏面には並列する2つの穴が3か所ずつに穿孔されている。

中世 [第55図-440・441]

440・441は、第IV層中から出土した土師器片である。440は坏であり、内外面は回転ナデを施し、底面は糸切り底である。441の内面は回転ナデで仕上げられているが、外面は剥落しており、剥離面に木片等で粗い調整を施している。皿と器種分類しているが、外面調整がきわめて粗いことから、坏の体部と底部が剥離した底部側の可能性もある。



第55図 D1区 包含層出土遺物実測図(2) [S=2/5・1/3]

③ 小結

D1区は、第1次発掘調査で実施されたB区に隣接する東側斜面にあたる。調査前年の平成26年度、当地及び南側隣接地を都城市教育委員会によって試掘調査が行われたが、明確な遺構等は確認されていない。今回は、第1次発掘調査区域であるB区の調査成果を受け、古墳時代及び中世段階の遺構・遺物が数多く確認される可能性があった。しかし、調査の結果、遺構は硬化面2か所のみ確認であった。調査区域のほとんどが傾斜地であり、南西側にわずかに平坦面が残っていたものの、堆積土のほとんどが西側のB区周辺からの流入土であったと推測される。

第IV層中で確認された2か所の硬化面は、第1次発掘調査区のB区南端部と第2次調査区のC区北端部と南端部等で確認された犬走状遺構と関連した中世段階の遺構の可能性もあったが、犬走状遺構のような明瞭な段差を有することなく、構造上も完全に合致しなかったため、両者の直接の関係についてまで言及することはできなかった。

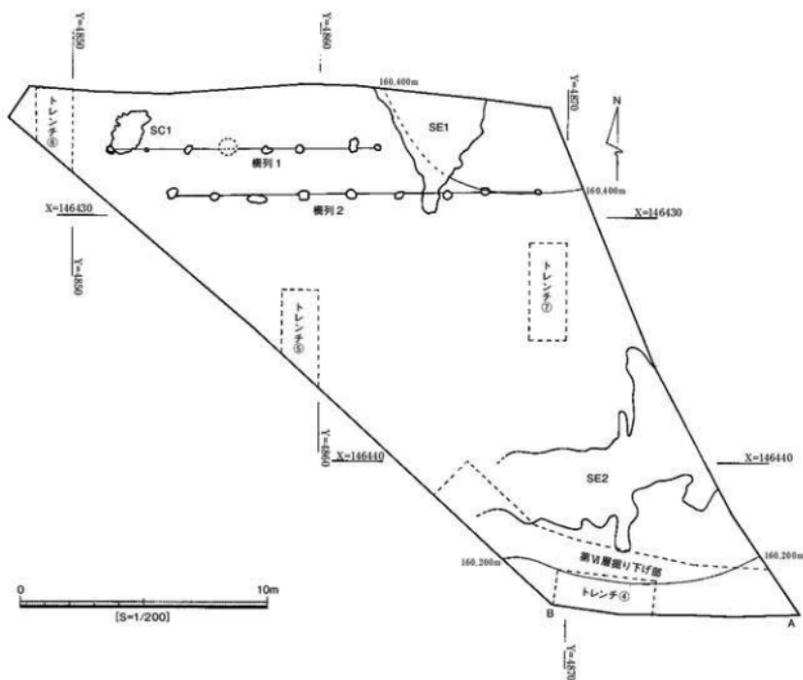
また、第IV層中から1点の石製鈎帯(439)が確認されたことにより、第1・2次発掘調査において確認された中世段階同様、前段階の古代段階においても、笹ヶ崎遺跡とその周辺地域が「地域有力層の居館跡」あるいは「何らかの公的機関跡」であった可能性が指摘できる結果となった。

(2) D2区の調査 [第56図～第64図]

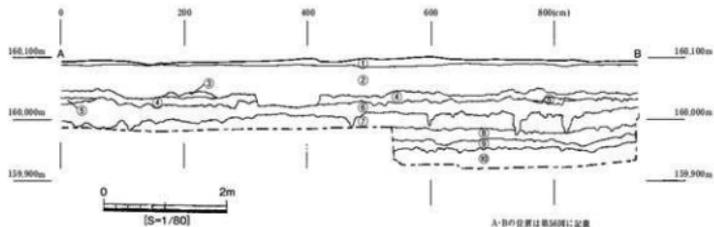
調査対象面積は約300㎡である。調査前は畑地で、わずかに南南西方向に下るが、比高差約20cmとほぼ水平に近い地形である。第V層上面まで削平されていた西側の一部を除き、第III層（桜島文明降下軽石層）より上部は、後世の畑地耕作等のため消失していた。調査は、第III層まで重機で除去した後に、第IV層の掘削を人力にて行い、第V層（霧島御池降下軽石層）上面での検出作業を行った。第V層上面で検出された遺構は、土坑1基、柵列2条を含むピット群、溝状遺構2条である。遺物は、第IV層中から縄文時代～中世頃に時期比定される縄文土器・石器・陶磁器などが出土した。

第V層上面での調査終了後、調査区南端部にトレンチを設定(35㎡)し、第VI層の掘り下げを行った。遺構は確認されなかったが、縄文土器片がわずかに出土した。

また、第VI層の部分的な掘り下げ作業終了後、第V層以下の状況確認のため、トレンチ④～⑦の4か所を設定(合計約11㎡・第56図)し、旧石器時代～縄文時代草創期頃の包含層の可能性のある第X層（黒褐色土）あたりまでの掘り下げを人力により行った。各トレンチともに深さ120～130cm程度の掘り下げを行ったが、第V層以下の旧石器時代～縄文時代早期に属するような遺構・遺物は確認されなかった。



第56図 D2区 第V層上面検出状況図 [S=1/200]



【D2区 基本土層】

① 黒褐色土	(Hae10YR6-1)	基本層序の第1層	[B区 第1層]	堀の耕作土。
② 灰白色軽石粒混濁灰色土	(Hae10YR5-1)	基本層序の第2層	[B区 第1層]	後世の造成土。
③ 灰白色軽石粒層	(Hae5Y7/1~8/1)	基本層序の第3層	[B区 第1層]	桜島文明層軽石粒を中心として構成される。
④ 明黄褐色軽石粒混濁褐色土	(Hae10YR5/1)	基本層序の第4層	[B区 第2層]	土質は中から、下部に御油軽石粒と推定される明黄褐色軽石粒(φ1mm以下)を含む。
⑤ 明黄褐色軽石粒層	(Hae2.5Y7/6)	基本層序の第5層	[B区 第2層]	幕府御油層下軽石粒(A)を中心として構成される。
⑥ 黒色土	(Hae7.5Y2-1)	基本層序の第6層	[B区 第2層]	全体に御油軽石粒と推定される明黄褐色軽石粒(φ1mm以下)を含まない。
⑦ 明黄褐色土	(Hae2.5Y7/6~8/6)	基本層序の第7層	[B区 第2層]	鬼塚アホや大山06(A)を中心して構成される。土層は二次堆積。下部には火山石が確認される。
⑧ 灰黄色軽石粒混濁褐色土	(Hae10YR5/3)	基本層序の第8層	[B区 第3層]	層全体、特に下部に灰白色パリスを多く含む。
⑨ 灰黄色軽石粒混濁褐色土	(Hae2.5Y3/2)	基本層序の第9層	[B区 第3層]	層全体に桜島P1火山石(Sa-11)と推定される灰黄色パリスを多量に含む。
⑩ 黒褐色土	(Hae7.5Y3-1)	基本層序の第10層	[B区 第3層]	層下部に桜島P13火山石(Sa-13)と推定される黄褐色パリスを含む。

第57図 D2区 土層堆積状況図 (南壁) [S=1/80]

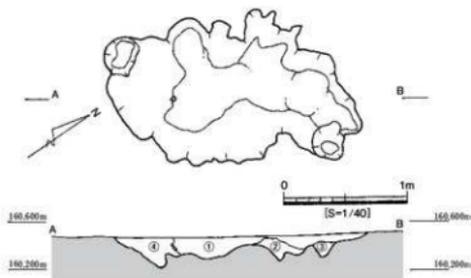
① 古墳時代～中世の遺構

(1) 土坑

1号土坑 (SC1) [第58図～第59図]

遺構 [第58図] 調査区西側に位置する。長径205cm・短径約120cmの不正長楕円形を呈し、深さ約20cmと浅い。埋土から、442・443など土師器片数点が出土している。中世段階と推測される柵列2の柱穴によって一部が攪乱されており、埋土状況や土師器の年代から、古墳時代の土坑と推測できる。

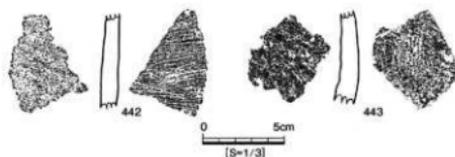
遺物 [第59図 - 442・443] 442・443は胎土に径2mm以下の砂粒を多量に含む土師器片である。外面に不定方向のハケ目が施される。細片のため、詳細は不明であるが、古墳時代の甕の破片と推測できる。また、縄文土器 [第64図-450] も遺構埋土中から出土しているが、流れ込みとして、包含層出土遺物の項に記載している。



【SC1 断面土層は記】

- ① 明黄褐色軽石粒混濁褐色土 (Hae7.5YR3/2) 土質柔らかく、全体に御油軽石粒と推定される明黄褐色軽石粒(φ1mm以下)を5~10%程度含む。
- ② 明黄褐色軽石粒混濁褐色土 (Hae10YR3/2) 土質は中と軟ているが、色調が明るく、全体に御油軽石粒と推定される明黄褐色軽石粒(φ1mm以下)を10%程度含む。
- ③ 黒褐色土 (Hae10YR3/2) 土質は中と軟ているが、全体に御油軽石粒と推定される明黄褐色軽石粒(φ1mm以下)をほとんど含まない。
- ④ 明黄褐色軽石粒混濁褐色土 (Hae10YR3/2) 土質は中と軟ており、同じと考えられる。

第58図 D2区 1号土坑 (SC1) 検出状況図 [S=1/40]



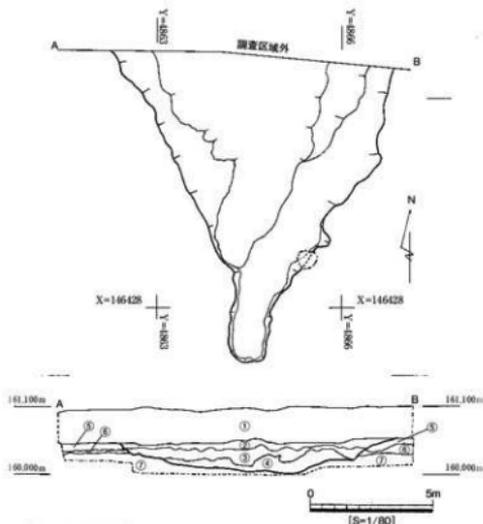
第59図 D2区 1号土坑 (SC1) 出土遺物実測図 [S=1/3]

(2) 溝状遺構

1号溝状遺構 (SE1) [第60・61図]

遺構 [第60図] 調査区北東側に位置する。調査区北端部に向かって下りながら広がる形状で、平面形は、南側の最小幅部で約30cm、北端部の最大幅で約450cmの平面三角形、南側の最浅部は約5cm、北端部の最深处は約50cmとなる。状況から考えると、谷地形に沿って下る自然流路を人工的に改変した溝と推測される。遺構埋土は、上部に桜島文明降下軽石層を含み、埋土中に444・445などの中世の陶磁器や土師器が出土することから、中世段階の桜島文明降下以前の13～15世紀前半頃の溝と推測できる。

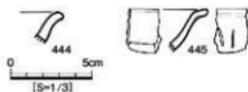
遺物 [第61図-444・445] 遺構からは、縄文土器、古代の土師器片、中世の陶磁器片など縄文時代～中世まで時期幅のある遺物が全部で約30点出土した。基本的に全て流れ込みによる堆積と考えられる。このうち、特徴的な中世の磁器2点(444・445)の図化を行った。いずれも、龍泉窯系青磁である。444は碗の口縁部である。外反する口縁部をもつ形態である。445は杯の口縁部～体部で、緩やかに屈曲する体部に、短く外反する口縁部をもつ。不明瞭であるが、外面には退化形態の蓮弁文が刻まれている。遺物からみても遺構は14～15世紀頃と推定できる。



【SE1断面土層記号】

- ① 凝灰土 (Hac10YR6/1) 基本層序の第I層。畑の耕作土。
- ② 灰白色軽石粒混成凝灰土 (Hac10YR5/1) 基本層序の第II層。後期の造成土。
- ③ 灰白色軽石粒混成凝灰土 (Hac10YR5/1) 土質・色調ともに②層と似ているが、全体に桜島文明降下軽石と推定される灰白色軽石粒を多量に含む。
- ④ 明黄褐色軽石粒混成凝灰土 (Hac10YR3/2) 遺構の上たる埋土。土質はやわらかく、①層と似ているが、全体に高島御池産軽石と推定される明黄褐色軽石(φ1mm以下)を含む。
- ⑤ 明黄褐色軽石粒混成凝灰土 (Hac10YR3/1) 基本層序の第III層。土質はやわらかく、下部に高島御池産軽石と推定される明黄褐色軽石(φ1mm以下)をわずかに含む。
- ⑥ 明黄褐色軽石粒層 (Hac2.5Y7/6) 基本層序の第IV層。高島御池降下軽石(φ<M)を中心として構成される。
- ⑦ 棕色土 (Hac7.5Y2/1) 基本層序の第V層。全体に高島御池産軽石と推定される明黄褐色軽石(φ1mm以下)を含まない。

第60図 D2区 1号溝状遺構 (SE1)検出状況図 [S=1/80]



第61図 D2区 1号溝状遺構 (SE1)出土遺物実測図 [S=1/3]

2号溝状遺構 (SE2) [第56図]

遺構 調査区南東側に位置する。調査区の東西を横切るような形で検出された。幅は約2～5m程度で深さは5cm程度と浅い。遺構は、第V層(霧島御池降下軽石層)上面で検出され、上部に桜島文明降下軽石を含む第IV層(黒褐色土)が主たる遺構埋土である。遺構形状などから推測すると、自然流路と推測される。遺物は出土しておらず、詳細な構築時期は不明であるが、埋土状況や15世紀後半以降の柱穴によって一部攪乱されていることを総合的に考えると、桜島文明降下以前の13世紀前半頃の流路と推測される。

(3) 柵列とピット群 [第62図～第63図]

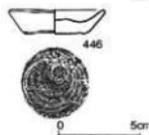
第V層上面において、調査区全域からピットが約250基検出された。ピットの埋土には、桜島文明降下軽

石粒を含むものや含まないもの、第IV層の黒褐色土が埋土であるものなどが混在することから、ピット群と一口に言っても、古墳時代～中世頃のもの混在すると考えられる。ピットの多くは柱穴跡と考えられ、掘立柱建物跡などは確認できなかったが、柵列2条が確認された。

柵列1 [第62図-446・第63図]

遺構 [第63図] 調査区北側に位置する。東西に連なる9基の柱穴から構成され、長さ約14.75m、柱間は172～2.0m（平均約1.81m）である。各柱穴は、掘り方が一部楕円形のものを除いては、概ね円形または長楕円形で、径20～40cm程度、深さ20～60cm程度である。柱穴の埋土は、霧島御池降下軽石粒を含んだ黒色土が主たる構成土で、15世紀後半降灰の桜島文明降下軽石粒を含まないことから、15世紀後半以前に作られた遺構と推定できる。

遺物 [第62図-446] 柵列1の左側から4番目の柱穴の埋土から土師器の皿(446)が出土した。この土師器は、回転糸切りの底部をもち、13～15世紀頃と時期比定され、柵列は中世段階の13～15世紀頃に築かれたと推定することができる。



第62図 D2区1号柵列
出土遺物実測図[S=1/3]

柵列2 [第63図]

遺構 柵列1同様、調査区北側に位置する。柵列1と並行するように、東西に連なる8基の柱穴（現在確認されるのは7基。1基は後世の擾乱によって消失している）から構成されると考えられる。長さ10.75m、柱間は1.0～2.1m（平均1.53m）である。各柱穴は、掘り方が一部楕円形のものを除いては、概ね円形で、径30～50cm程度、深さ15～45cm程度である。柱穴埋土は、柵列1同様、霧島御池降下軽石粒を含んだ黒色土が主構成土であるので、同時期の柵列と推測できる。

柵列1と柵列2は、列間が188～200cm程度とほぼ並行で、柱穴の規模や埋土状況など一致するものが多く、同時期に構築されたと推測できる。また、東側が重複する1号溝状遺構(SE1)との前後関係は、溝状遺構には15世紀以降降灰した桜島文明降下軽石が層状に堆積していることから考えて、溝状遺構が柵列1・2に後出すると考えられる。



写真1 D2区柵列及びピット群検出状況図

② 包含層出土の遺物 [第 64 図]

D2区からは、基本層序の第V層を除く、第II層から第VI層までの各層から縄文時代～中世に時期比定される遺物が出土した。ここでは、図化した特徴的なものを中心に詳細を述べる。

(1) 縄文時代 [第 64 図- 447～454]

第IV・VI層及び造成土の第II層中から出土した。土器は第VI層中から447が出土した。外面には縦位、内面の口縁部上端部には斜方向の縄文が確認された。詳細不明であるが、縄文時代中期前半頃の船元式系統の深鉢の口縁部片と考えられる。448は鉢の頸部付近であり、外面には横走る1条の沈線と列点文が施されており、縄文時代後期前半頃の西平式と考えられる。449～451は縄文時代晩期の黒川式の組織痕土器である。石器は、第IV層から粗製剥片石器(452)が1点出土した。砂岩製剥片の右側縁と下側縁の2辺に連続した使用痕跡が認められ、スクレイパー的な使用方法が想定できる。第VI層からは、石匙1点と磨石1点が出土した。453はチャート製の石匙である。縦長の剥片の上部両側縁に抉りを入れ、基部を設けている。454は砂岩製の磨石である。表面中央部の凸面に磨面、周縁部には敲打痕が確認され、磨石と敲石の両方として使用されていたと推定できる。

(2) 古墳時代～古代 [第 64 図- 455～459]

第IV層及び造成土の第II層中から出土した。455は土師器の胴部片である。破片のため詳細不明であるが、外面に斜方向に明瞭なハケ目を施しており、古墳時代の所産と推測できる。456～459は古代に時期比定できる土器片である。456・457は布痕土器である。両者ともに内面に目の細かい布を使用している。456は底部で尖底状の形態であることがわかる。458・459は黒色土器の高台付塊である。両者ともに内面のみ黒色となるタイプで、森分類(森隆1995)の黒色土器A類の九州系II類の範疇に入ると考えられる。

(3) 中世 [第 64 図- 460～467]

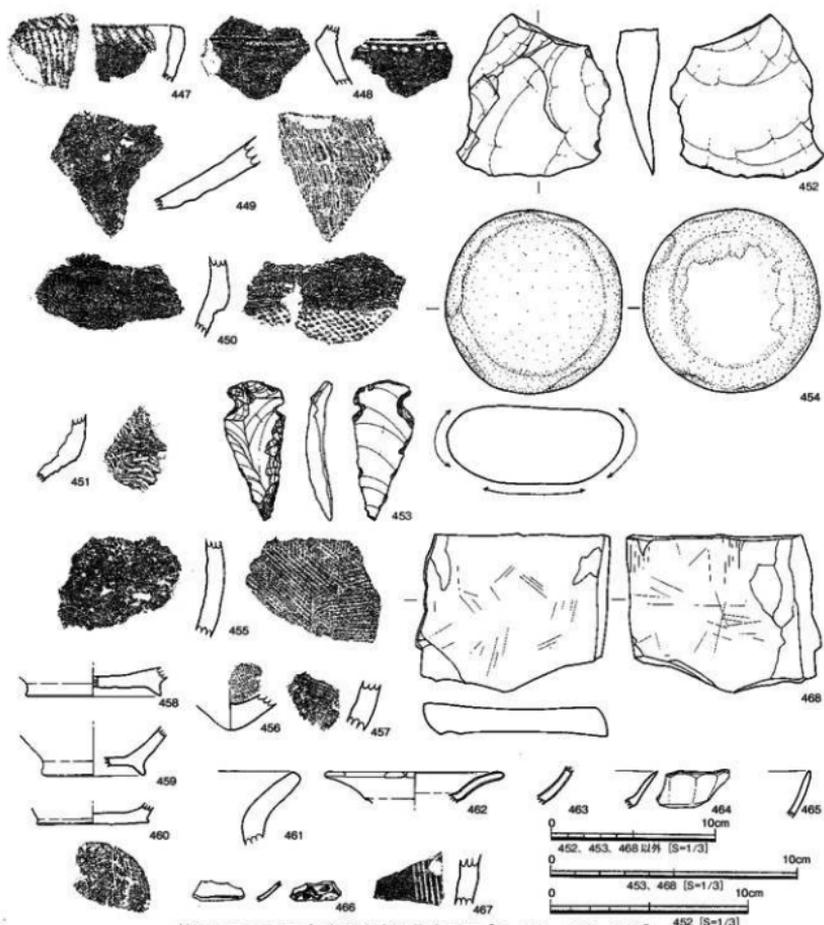
第IV層及び造成土の第II層中から出土した。460は土師器の皿であり、回転系切りの底部をもつ。461は土師器の甕の口縁部である。462・463は龍泉窯系青磁であり、462は坏、463は塊の体部で両者ともに内外面が無文である。462は波状の口縁部を有し、体部下で屈曲する器形で、13世紀後半～14世紀代頃に時期比定できる。464・465は白磁である。464は体部下半部が露胎となっている型押し菊花皿で、15～16世紀代頃に時期比定できる。466は青花染付である。口縁部下部から体部にかけての破片であるが、薄手の器壁に端反りの口縁をもつ器形と推定できる。外面には唐草牡丹文と推測される文様が施されており、15世紀後半～16世紀代頃に時期比定できる。467は瓦質土器の擂鉢である。内面に6条以上の摺目を施している。

(4) 時期不明 [第 64 図- 468]

468は砥石である。現代の造成土の第II層中から出土した。扁平な砂岩を用い、表面は摩耗によって緩やかな凹面を形成している。裏面には鉄製品等を研磨したためか、明確な線状痕が確認される。

③ 小結

調査の結果、D2区の第V層上面において確認された遺構は、土坑1基、柵列2条を含むピット群、溝状遺構2条のみであり、B区で確認された区画溝や配置された掘立柱建物群などの中世段階の遺構群の広がりには確認されなかった。しかし、第1次発掘調査時のB区北東部において確認された中世段階の造成土は、D2区周辺から持ち込まれた可能性があることがわかった。B区の造成土は、霧島御池降下軽石粒に由来する明黄褐色軽石粒を多量に含む黒褐色土であり、霧島御池軽石層(B区の基本層序の第III層)上に霧島御池降下軽石粒に



第 64 図 D2 区 包含層出土遺物実測図 [S=1/3・1/2・2/5]

由来する明黄褐色軽石粒をわずかに含む黒褐色土（B区の基本層序の第IV層）を挟んで堆積するという、本来の自然堆積では起こり得ない不整合状況を生み出している。この状況から考えて、造成土は、どこか異なる場所から搬入されたと第1次発掘調査時に推測していた。第3次発掘調査時のD2区において、第IV層の明黄褐色軽石粒混暗褐色土がほとんど存在せず、15世紀後半以降に降下したと推定される第III層の灰白色軽石粒層（桜島文明軽石層）が堆積している状況が確認された。比較的平坦な調査区域の地形を併せて考えると、第IV層の自然消失は考えにくく、15世紀後半以前に人為的に第IV層の除去が行われ、その土を造成土としてB区北東部に運び込んだ可能性があると結論づけた。そしてこの造成作業は、B区の出土遺物やD2区の柵列の年代などを考慮すると、中世段階の13～15世紀前半頃に行われたと推測できる。

第7表 D区出土遺物観察表

発掘 番号	出土 位置	種類	器種	部位	文様・調整の特徴		色調		胎土の特徴	検存 数	量・その他
					外面	内面	外面	内面			
437	V層	土師器	甕	胴部	ナデ、ヌス付着	ナデ	黄灰 (G.5Y8-3)	橙 (G.5YR7-6)	1~2mm以下の灰白-黄灰-透 明光沢鉄質赤色粉を多く含む	-	-
440	V層	土師器	杯	口縁部 ~底面	底部半切り状、回転ナ デ	回転ナデ	黄灰 (G.5Y8-3)	黄灰 (G.5Y8-3)	2mm以下の灰白色粉、1mm以 下の黒色粉粒を含む	1/3	断面口径12cm-断面 底径9.1cm-高さ 3.3cm
441	V層	土師器	皿	体部 ~底面	底部半切り状、体部の 底部との接合部分が剥 離している可能性がある	回転ナデ	にんい黄橙 (00YR7-4)	黄灰橙 (0YR8-0)	1~5mm程の鉄質褐色粉粒、 1mm以下の黒色粉粒を含む	1/5	断面底径7.2cm
442	SC1	土師器	甕	胴部	胴~肩方向のハケ目、 ヌス付着	風化著しいがナデ	橙 (G.5YR7-6)	橙 (G.5YR7-6)	3mm以下の灰白-黄灰-赤褐 -黒褐色鉄質赤色粉-灰白色 粉を含む	1/20	-
443	SC1	土師器	甕	胴部	胴方向のハケ目	風化著しいがナデ	にんい黄橙 (00YR7-4)	黄灰 (G.5Y8-3)	2mm以下の灰白-黄灰-黄灰 白-黒褐色-透明光沢赤色粉粒 を含む	1/20	-
444	SE1	磁器- 青磁	杯?	口縁部 ~体部	施釉-無文	施釉-無文	オリーブ灰 (00Y6-2)	オリーブ灰 (00Y6-2)	顔料、色調 灰白(N8-)	-	-
445	SE1	磁器- 青磁	杯	口縁部 ~体部	施釉、酸化された黒 ナデ	施釉	オリーブ灰 (00Y6-2)	オリーブ灰 (00Y6-2)	顔料、色調 灰白(N7-)	-	-
446	V層	土師器	皿	口縁部 ~底面	底部半切り状、回転ナ デ	回転ナデ	にんい黄橙 (00YR7-3)	にんい黄橙 (00YR7-3)	2mm以下の鉄質赤色粉、1 mm以下の透明光沢赤色粉を含む	1/1	口径5.2cm-口径 3.8cm-高さ14.5cm
447	V層	縄文土器	深鉢	口縁部	縦位の縄文	口縁上縁部に斜位の縄 文	黄灰 (G.5Y4-2)	にんい黄橙 (00Y6-3)	2mm以下の灰白-黄灰-黒褐 -透明光沢鉄、灰白色粉粒 を含む	1/20	-
448	II層	縄文土器	鉢	胴部	横方向のナデの後に、 胴部に横走する1条 の沈線と斜点文	横方向の丁寧なナ デ	にんい黄橙 (00YR7-3)	にんい黄橙 (00YR7-3)	2mm程の褐色粉粒を含む	1/3	底径7.0cm
449	V層	縄文土器	浅鉢	胴部 ~底面	縦織	工具による斜方向のナ デ	にんい黄 (G.5YR3-4)	にんい黄 (G.5YR7-3)	2mm以下の灰白-透明光 沢鉄を多く含む	-	-
450	SC1	縄文土器	浅鉢	胴部 ~底面	底部外面に縦織、胴 部外面は風化著しいが ナデ	全体が剥離しており詳細 不明	にんい黄橙 (00YR7-4)	橙 (G.5YR6-6)	4mm以下の鉄質赤-乳白色 鉄質赤褐色粉を含む	-	-
451	II層	縄文土器	鉢	胴部 ~底面	胴部外面は工具による 横方向のナデ、底部外 面に縦織	工具による横方向のナ デ	にんい黄 (G.5YR5-4)	にんい黄 (G.5YR5-4)	2mm以下の灰白-透明-透 明光沢鉄を多く含む	-	-
455	V層	土師器	甕	胴部	外面は斜方向のハケ目	ナデ	橙 (G.5YR6-6)	橙 (G.5YR6-6)	3mm以下の灰白-白色粉粒、 2mm以下の褐色光沢-透明 光沢鉄を含む	1/20	-
456	V層	土師器	布張り 土器	底部	風化著しいがナデ	布目肌	橙 (G.5YR6-6)	橙 (G.5YR6-6)	4mm以下の橙-灰白-黒褐-透 明粉粒を含む	1/16	-
457	II層	土師器	布張り 土器	胴部 ~底面	風化著しいがナデ	布目肌	にんい黄橙 (00YR7-3)	黄灰 (G.5Y7-2)	4mm以下の黄灰-褐色粉粒 をわずかに含む	-	-
458	V層	土師器 (黒色土器)	高台 付筒	体部 ~底面	回転ナデ、底部はへう 切り後に高台を貼り付 け	回転ナデの後にミギキ -内肌	黄灰橙 (0YR8-0)	黒 (0YR17-1)	2mm以下の灰白-黄灰-黒 褐色粉粒、鉄質赤色粉を含む	1/6	断面高台径6.2cm
459	V層	土師器 (黒色土器)	高台 付筒	体部 ~底面	回転ナデ、底部はへう 切り後に高台を貼り付 け	回転ナデの後にミギキ -内肌	にんい黄橙 (00YR8-0)	黒褐 (0YR8-0)	2mm以下の褐色乳白色 鉄粉粒、1mm以下の褐色 光沢-透明光沢鉄を含む	1/8	断面高台径4.2cm
460	V層	土師器	杯	体部 ~底面	底部半切り状の残不 定方向のナデ、回転ナ デ	回転ナデ	黄灰 (G.5YR6-6)	黄灰 (G.5YR6-6)	1mm以下の透明光沢鉄 白-黒褐色-透明光沢鉄 粉を含む	1/8	断面底径6.7cm
461	II層	土師器	甕	口縁部	横方向の丁寧なナ デ	横方向の丁寧なナ デ	橙 (G.5YR6-6)	橙 (G.5YR6-6)	2mm以下の透明光沢鉄 白-黒褐色-透明光沢鉄 粉を含む	-	-
462	II層	磁器- 青磁	瓶	体部	施釉-無文	施釉-無文	オリーブ灰 (00Y6-2)	オリーブ灰 (00Y6-2)	顔料、色調 灰白(N7-)	-	-
463	II層	磁器- 青磁	杯	口縁部 ~体部	施釉-無文、口縁部は黄 灰	施釉-無文	明緑灰 (G.5GY7-1)	明緑灰 (G.5GY7-1)	顔料、色調 灰白(G.5YR7-1)	1/4	断面口径10.5cm- 断面高さ1.85cm
464	II層	磁器- 白磁	皿	口縁部 ~底面	施釉-無文、惣柄し菊 文、体部下半部は露 出	施釉-無文	灰白 (G.5YR7-1)	灰白 (G.5YR7-1)	顔料、色調 灰白(G.5YR7-1)	-	-
465	V層	磁器- 白磁	瓶	口縁部 ~体部	施釉-無文	施釉-無文	灰白 (G.5YR7-1)	灰白 (G.5YR7-1)	顔料、色調 灰白(G.5YR7-1)	-	-
466	II層	磁器- 青磁染付	瓶	体部	内外面施釉、内面足込 み付合し木の昇線、外 面に付合し木の昇線、外 面に付合し木の昇線、外 面に付合し木の昇線	施釉、内面足込み付 合し木の昇線、外面に 付合し木の昇線、外 面に付合し木の昇線	灰白(N8-)	灰白(N8-)	顔料、色調 灰白(G.5YR7-1)	-	-
467	II層	陶器	深鉢	体部	ナデ、	ナデの後、6条以上の横 溝、	黄灰 (G.5Y6-1)	黄灰 (G.5Y6-1)	4mm以下の灰白色粉粒、2mm 以下の褐色-透明光沢鉄 粉をわずかに含む	-	-

第8表 D区出土石器・石製品計測表

発掘 番号	出土 位置	種類	器種	部位	石材	測 量			その他		
						長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)			
438	V層	石器	石斧	基部	ホルンフェルス	4.6	3.5	1.2	31.7		
439	V層	石器	石製品	石帯	丸斬	頁岩	2.8	4.3	0.8	18.7	
452	V層	石器	粗製割 片石器	-	砂岩	6.7	6.2	1.7	47.6		
453	V層	石器	石匙	-	チャート	4.3	1.8	0.8	3.9		
454	V層	石器	磨石	-	砂岩	11.2	10.7	4.8	80.1		
468	II層	石器	砥石	-	砂岩	6.5	7.9	1.3	102.4		

第IV章 自然科学分析

株式会社 古環境研究所

第1節 自然科学分析の概要

笹ヶ崎遺跡から採取された試料について自然科学分析を行った。分析内容は、樹種同定3点、放射性炭素年代測定5点、植物珪酸体分析31点、花粉分析8点である。以下に、各分析ごとに原理、試料の詳細、分析方法、分析結果および考察を記載する。

第2節 放射性炭素年代測定

1. はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や樹実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である(中村,2003)。

2. 試料と方法

次表に、測定試料の詳細と前処理・調整法および測定法を示す。

第9表 資料の前処理・調整・測定法

試料 No.	試料の詳細	種類	前処理・調整法	測定法
No.1	A区、SC-5	炭化材(スギ)	超音波洗浄、酸-7%カリ-酸処理	AMS
No.2	B区、SI-3	炭化材(スダジイ)	超音波洗浄、酸-7%カリ-酸処理	AMS
No.3	C区、SI-2	炭化材(カエデ属)	超音波洗浄、酸-7%カリ-酸処理	AMS

3. 測定結果

加速器質量分析法(AMS: Accelerator Mass Spectrometry)によって得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素(^{14}C)年代および暦年代(校正年代)を算出した。次表にこれらの結果を示し、第65図に暦年校正結果(校正曲線)を示す。

(1) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25(‰)に標準化することで同位体分別効果を補正している。

(2) 放射性炭素(^{14}C)年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、現在(AD1950年基点)から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5568年を用いている。統計誤差(±)は 1σ ^{シグマ}(68.2%確率)である。 ^{14}C

年代値は下1桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下1桁を丸めない暦年較正用年代値も併記した。

(3) 暦年代 (Calendar Years)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中¹⁴C濃度の変動および¹⁴Cの半減期の違いを較正することで、放射性炭素(¹⁴C)年代をより実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な¹⁴C測定値およびサンゴのU/Th(ウラン/トリウム)年代と¹⁴C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータはIntCal 13、較正プログラムはOxCal 4.2である。

暦年代(較正年代)は、¹⁴C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCalの確率法により1 σ (68.2%確率)と2 σ (95.4%確率)で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の1 σ ・2 σ 値が表記される場合もある。()内の%表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第10表 暦年代表

試料No.	測定No. (PED-)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	¹⁴ C年代:年BP (暦年較正用)	暦年代(較正年代):cal-	
				1 σ (68.2%確率)	2 σ (95.4%確率)
No.1	29483	-19.09 \pm 0.50	160 \pm 25 (160 \pm 26)	AD 1669-1690 (12.6%) AD 1729-1781 (35.7%) AD 1798-1810 (7.5%) AD 1926-1945 (12.4%)	AD 1665-1700 (16.3%) AD 1720-1787 (38.9%) AD 1792-1819 (10.8%) AD 1832-1880 (10.3%) AD 1915... (19.1%)
No.2	29484	-26.83 \pm 0.23	8315 \pm 30 (8313 \pm 32)	BC 7456-7341 (68.2%)	BC 7492-7297 (93.6%) BC 7220-7200 (1.8%)
No.3	29485	-27.27 \pm 0.16	8695 \pm 35 (8696 \pm 33)	BC 7729-7634 (61.8%) C 7624-7613 (6.4%)	BC 7787-7599 (95.4%)

BP: Before Physics (Present), cal: calibrated, BC: 紀元前, AD: 西暦

4. 所見

加速器質量分析法(AMS)による放射性炭素年代測定の結果、No.1(SC-5の炭化材:スギ)では160 \pm 25年BP(2 σ の暦年代でAD 1665~1700, 1720~1787, 1792~1819, 1832~1880, 1915年以降)、No.2(SI-3の炭化材:スダジイ)では8315 \pm 30年BP(BC 7492~7297, 7220~7200年)、No.3(SI-2の炭化材:カエデ属)では8695 \pm 35年BP(BC 7787~7599年)の年代値が得られた。このうち、No.1では暦年代の年代幅がかなり広がっているが、これは該当時期の較正曲線が不安定なためである。

文献

中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」。
日本第四紀学会, p.3-20.

中村俊夫 (2003) 放射性炭素年代測定法と暦年代較正, 環境考古学マニュアル, 同成社, p.301-322.

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

Paula J Reimer et al., (2013) IntCal 13 and Marine 13 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP, Radiocarbon, 55, p.1869-1887.

第3節 樹種同定

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料

試料は、土坑や集石遺構から採取された炭化材3点である。試料の詳細を第11表に示す。これらは、放射性炭素年代測定に用いられたものと同一試料である。

3. 方法

以下の手順で樹種同定を行った。

- 1) 試料を洗浄して付着した異物を除去
- 2) 試料を割折して、木材の基本的三断面（横断面：木口、放射断面：柃目、接線断面：板目）を作成
- 3) 落射顕微鏡（40～1000倍）で観察し、木材の解剖学的形質や現生標本との対比で樹種を同定

4. 結果

第11表に同定結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真（第68図）を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

(1) スギ *Cryptomeria japonica* D. Don スギ科 番号1

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。放射柔細胞の分野壁孔は典型的なS字型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。放射組織は単列の同性放射組織型で1～14細胞高ぐらいである。樹脂細胞が存在する。

以上の特徴からスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靱で広く用いられる。

(2) スダジイ *Castanopsis sieboldii* Hatusima ブナ科 番号2

年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる単列の同性放射組織型を示す。

以上の特徴からスダジイに同定される。スダジイは本州（福島県、新潟県佐渡以南）、四国、九州に分布する。

常緑の高木で、高さ20 m、径1.5 mに達する。材は耐朽・保存性やや低く、建築、器具などに用いられる。

(3) カエデ属 *Acer* カエデ科 番号3

横断面では小型で丸い道管が散在する。放射断面では道管の穿孔は単穿孔で、内壁には微細な螺旋肥厚が存在するがやや不鮮明になっている。放射組織は平伏細胞からなる同性である。接線断面では放射組織は、同性放射組織型で1~6細胞幅である。道管の内壁には微細な螺旋肥厚が存在する。

以上の特徴よりカエデ属に同定される。カエデ属には、イタヤカエデ、ウリハダカエデ、ハウチワカエデ、テツカエデ、ウリカエデ、チドリノキなどがあるが、放射組織の形質からウリカエデ、チドリノキ以外のいずれかである。北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または小高木で、大きいものは高さ20 m、径1 mに達する。材は耐朽性および保存性は中庸で、建築、家具、器具、楽器、合板、彫刻、薪炭など広く用いられる。

5. 所見

樹種同定の結果、A区 SC-5 (土坑) から採取された炭化材はスギ、B区 SI-3 (集石遺構) から採取された炭化材はスダジイ、C区 SI-2 (集石遺構) から採取された炭化材はカエデ属と同定された。

スギは、温帯に広く分布する針葉樹で、肥沃で湿潤な土壌を好む。スダジイは、温帯下部の暖温帯に分布する照葉樹林の主要構成要素あるいは二次林要素である。カエデ属は、やや湿気のある肥沃な土壌を好み、谷間あるいはこれに接する斜面に生育する。いずれの樹種も、当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能であったと考えられる。

文献

伊東隆夫・山田昌久 (2012) 木の考古学。出土木製品用材データベース、海青社、449p。

島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司 (1985) 木材の構造。文永堂出版、290p。

島地 謙・伊東隆夫 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧。雄山閣、296p。

山田昌久 (1993) 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成一用材から見た人間・植物関係史。植生史研究特別1号。植生史研究会、242p。

第4節 植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 (SiO_2) が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 2000, 杉山, 2009)。

2. 試料

分析試料は、B区北側地点のI層からIII層の上層、およびB区中央地点のIV b層からXIV層までの層準から採取された計31点である。試料採取箇所を分析結果の土層写真に示す。なお、テフラ (火山灰) については層相や堆積状況などから判断されたものであり、理化学分析による同定は行われていない。テフラの名称や年代は、新編火山灰アトラス (町田・新井, 2003) を参照した。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法 (藤原, 1976) を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を 105°C で 24 時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約 1g に対し直径約 $40\ \mu\text{m}$ のガラスビーズを約 0.02g 添加 (0.1mg の精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550°C ・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42kHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による $20\ \mu\text{m}$ 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレバート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレバート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重 (1.0と仮定) と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重) をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる (杉山, 2000)。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率およびメダケ率 (メダケ属とササ属の優占割合) を求めた。

4. 分析結果

(1) 分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第12表および第66・67図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真 (第69図) を示す。

【イネ科】

イネ、ヨシ属、シバ属型、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、ウシクサ族B（大目）、Bタイプ

【イネ科—タケ亜科】

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、マダケ属型（マダケ属、ホウライチク属）、未分類等

【イネ科—その他】

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、基部起源、未分類等

【樹木】

ブナ科（シイ属）、ブナ科（アカガシ亜属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）その他

（2）植物珪酸体の検出状況

1) B区北側地点（第66図）

I層（試料1）、I層（試料2～4、8）、III層の上層（試料5～7）について分析を行った。その結果、試料6と試料7を除く各試料からイネが検出された。このうち、I層（試料1）ではイネの密度が3,200個/g、I層上部（試料2、3、8）では2,400～3,300個/gと比較的高い値であり、その他の試料では1,000個/g前後と低い値である。稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準は一般的に5,000個/g（状況により3,000個/gとする場合もある）であるが、畑稲作（陸稲栽培）の場合は、連作障害や地力の低下を避けるために輪作を行ったり休閑期間をおく必要があるため、イネの密度は水田跡と比較してかなり低くなり、1,000～2,000個/g程度である場合が多い（杉山, 2000）。

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属型（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

その他の分類群では、III層の上層（試料5～7）ではネザサ節型が比較的多く検出され、キビ族型、ススキ属型、ウシクサ族A、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、マダケ属型、および樹木（照葉樹）のクスノキ科、マンサク科（イスノキ属）なども認められた。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でも過大に評価する必要がある（杉山, 1999）。なお、すべての樹種で植物珪酸体が形成されるわけではなく、落葉樹では形成されないものも多い（近藤・佐瀬, 1986）。I層（試料2～4、8）では、メダケ節型、ネザサ節型が増加し、ブナ科（シイ属）が出現している。I層（試料1）では、メダケ節型、ネザサ節型がさらに増加し、シバ属型が出現している。

おもな分類群の推定生産量によると、I層より上位ではメダケ節型およびネザサ節型が優勢であり、イネも比較的多くなっている。

2) B区中央地点（第67図）

IVb層（試料1、2）からXIV層（試料23）までの層準について分析を行った。その結果、下位のXIV層（試料23）では、植物珪酸体がまったく検出されなかった。XIII層（試料22）からXI層（試料21）にかけては、

イネ科Bタイプが比較的多く検出され、ヨシ属、ウシクサ族A、ミヤコザサ節型なども認められた。イネ科Bタイプはヌマガヤ属に類似しており、氷期の湿地性堆積物などで検出される事例が多い。X層下部（試料18～20）では、ミヤコザサ節型が増加し、チマキザサ節型が出現している。X層上部（試料15～17）では、ウシクサ族A、チマキザサ節型が増加し、イネ科Bタイプ、ミヤコザサ節型は減少している。また、ススキ属型が出現し、ヨシ属は見られなくなっている。

VIII層（試料11～14）では、ススキ属型、ウシクサ族Aが増加し、キビ族型、ネザサ節型、および樹木（その他）が出現している。VII層（試料8～10）では、メダケ節型が出現し、ミヤコザサ節型は減少している。VI層（試料5～7）では、メダケ節型やネザサ節型が増加し、チマキザサ節型などは減少している。V層（試料3、4）では、各分類群とも大幅に減少しているが、IVb層（試料1、2）では各分類群とも増加し、ブナ科（シイ属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）などの樹木（照葉樹）が出現している。

おもな分類群の推定生産量によると、XIII層～X層最下部ではヨシ属、X層下部ではミヤコザサ節型、X層上部～VII層ではススキ属型とチマキザサ節型、VI層より上位ではネザサ節型とメダケ節型が優勢となっている。

5. 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

始良入戸火砕流堆積物（A-Ito, 約2.9万年前）最上部のXIV層では、植物珪酸体がまったく検出されないことから、イネ科植物の生育には適さない環境であったと考えられる。XIII層からXI層にかけては、ヨシ属やヌマガヤ属?が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、周辺の比較的乾燥したところにはウシクサ族（チガヤ属など）やササ属（おもにミヤコザサ節）などが生育していたと推定される。

X層下部の堆積時にも、同様の比較的湿潤な環境であったと考えられるが、周辺ではササ属（おもにミヤコザサ節）などの笹類が増加したと推定される。タケ亜科のうち、メダケ属は温暖、ササ属は寒冷な気候の指標とされており、メダケ率（両者の推定生産量の比率）の変遷は、地球規模の氷期-間氷期サイクルの変動と一致することが知られている（杉山, 2001, 2010）。また、ササ属のうちチマキザサ節やチシマザサ節は日本海側の寒冷地などに広く分布しており積雪に対する適応性が高いが、ミヤコザサ節は太平洋側の積雪の少ない比較的乾燥したところに分布している（室井, 1960, 鈴木, 1978）。ここでは、メダケ率がほぼ0%と低い値であり、ササ属ではミヤコザサ節が優勢であることから、当時は冷涼～寒冷で積雪（降水量）の少ない比較的乾燥した気候環境であったと推定される。

ササ属などの笹類は常緑であることから、大半の植物が落葉または枯死する秋から冬にかけてはシカ類などの草食動物の重要な食物となっている（高槻, 1992）。遺跡周辺にこれらの笹類が豊富に存在したことは、当時の動物相を考える上でも重要と考えられる。

X層上部から桜島薩摩テフラ（Sz-S, 約12,800年前）混のIX層にかけては、ササ属のうちチマキザサ節・チシマザサ節が優勢になり、ススキ属やキビ族も見られるようになったと考えられる。福井県水月湖における花粉分析によると、約16,500年前（放射性炭素年代では13,540±105年BP）頃からブナ属の増加が認められ、日本海側を中心に多雪化したことが指摘されている（安田, 2004）。同層準におけるササ属などの植生変化は、このような広域的な環境変化に対応している可能性が考えられる。

VIII層から桜島11テフラ（Sz-11, 約8,000年前）混のVII層にかけては、ススキ属、ウシクサ族（チガヤ属など）、キビ族、ササ属、メダケ属（メダケ節やネザサ節）などが生育する草原的な環境であったと考えられ、遺跡周辺には何らかの樹木が分布していたと推定される。このような草原的な植生環境下で土壤中に多量の有機

物が供給され、炭素含量の高い黒色土壌（黒ボク土）が形成されたと考えられる（杉山ほか，2002）。

樹種同定の結果では、集石遺構からスグジイの炭化材が検出され、放射性炭素年代測定で 8315±30 年 BP（暦年代：BC 7492～7297，7220～7200 年）の年代値が得られていることから、この頃には遺跡周辺でシイ属などの照葉樹が見られるようになっていたと推定される。今回の植物珪酸体分析では、同層でシイ属などの照葉樹が認められないが、植物珪酸体は現地性が高いことから、丘陵部などの周辺地域の植生が反映されていない可能性が考えられる。花粉分析によると、南九州では約 9,500 年前（暦年代）にはシイ林を中心とする照葉樹林が成立していたと考えられており（松下，1992）、植物珪酸体分析でも同様の結果が得られている（杉山，1999）。このような植生変化は、後水期における気候温暖化に対応していると考えられる。

VI層の堆積当時は、メダケ属（メダケ節やネザサ節）などの竹笹類を主体として、ススキ属やウシクサ族（チガヤ属など）、キビ族なども生育する草原的な環境であったと考えられ、遺跡周辺には何らかの樹木が分布していたと推定される。前述のように、このような草原的な植生環境下で炭素含量の高い黒色土壌（黒ボク土）が形成されたと考えられる

その後、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah，約 7,300 年前）の堆積によって当時の植生は大きな影響を受けたと考えられるが、IV b 層の時期にはVI層とおおむね同様の植生が再生し、IV b 層上部の時期には遺跡周辺でシイ属、クスノキ科、イスノキ属などの照葉樹林が見られるようになったと推定される。

霧島御池テフラ（Kr-M，約 4,600 年前）の上層では、メダケ属（メダケ節やネザサ節）、マダケ属などの竹笹類をはじめ、ススキ属、ウシクサ族（チガヤ属など）、キビ族なども生育する草原的な環境であったと考えられ、遺跡周辺にはクスノキ科、イスノキ属などの照葉樹林が分布していたと推定される。マダケ属にはマダケやモウソウチクなど有用なものが多く、建築材や生活用具、食用などとしての利用価値が高い。

桜島文明軽石（Sz-3，1471 年）直下の I 層上面では、畑跡とみられる畝状遺構が検出されていた。同層ではイネが比較的多く検出されることから、当時は調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていたと考えられる。遺跡の立地や周辺の植生などから、ここで行われた稲作は畑作の系統（陸稲）であったと推定される。なお、ムギ類やヒエ属などのイネ科栽培植物由来する植物珪酸体は検出されなかった。現表土の I 層でも、継続して稲作が行われていたと考えられる。

文献

- 近藤謙三・佐瀬隆（1986）植物珪酸体、その特性と応用、第四紀研究、25、p.31-63。
- 杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—、考古学と自然科学、19、p.69-84。
- 杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体、富士竹類植物園報告、第 31 号、p.70-83。
- 杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史、第四紀研究、38(2)、p.109-123。
- 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オーバー）、考古学と植物学、同成社、p.189-213。
- 杉山真二（2001）テフラと植物珪酸体分析、月刊地球、23、p.645-650。
- 杉山真二（2002）鬼界アカホヤ噴火が南九州の植生に与えた影響—植物珪酸体分析による検討—、第四紀研究、41(4)、p.311-316。
- 杉山真二・渡邊真紀子・山元希里（2002）最終水期以降の九州南部における黒ボク土発達史、第四紀研究、41(5)、p.361-373。
- 杉山真二（2010）更新世の植生と環境、旧石器時代、講座日本の考古学第 1 巻、青木書店、p.156-177。
- 鈴木真雄（1996）タケ科植物の概説、日本タケ科植物図鑑、聚海書林、p.8-27。

- 高槻成紀 (1992) 北に生きるシカたち—シカ、ササそして雪をめぐる生態学—, どうぶつ社.
- 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) —数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—, 考古学と自然科学, 9, p.15-29.
- 藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (5) —プラント・オパール分析による水田址の探査—, 考古学と自然科学, 17, p.73-85.
- 町田洋・新井房夫 (2003) 新編火山灰アトラス—日本列島とその周辺—, 東京大学出版会
- 松下まり子 (1992) 日本列島太平洋岸における完新世の照葉樹林発達史, 第四紀研究, 31 (5), p.375-387.
- 室井綽 (1960) 竹笹の生態を中心とした分布, 富士竹類植物園報告, 5, p.103-121.
- 安田喜憲 (2004) 世界史の中の縄文時文化, 雄山閣.

第5節 花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの有機質遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2. 試料

分析試料は、B区北御地点のI層からIII層の上層までの層準から採取された計8点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

3. 方法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1cm³を秤量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加えて15分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す
- 6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。

4. 結果

(1) 分類群

分析結果を第13表に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真（第70図）を示す。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マキ属、マツ属、複雑管束亜属、スギ、イナブ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、クリ、シイ属-マテバシイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、ノブドウ、カキノキ属、モクセイ科

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科、マメ科、ニワトコ属-ガマズミ属

〔草本花粉〕

イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ソバ属、アカザ科—ヒユ科、キンボウゲ属、アブラナ科、チドメグサ亜科、セリ亜科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

[シダ植物孢子]

単条溝孢子、三条溝孢子

(2) 花粉群集の特徴

III層の上層(試料5~7)では、花粉がほとんど検出されなかった。I層(試料2~4、8)では、ヨモギ属が検出され、部分的にコナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、イネ科、アブラナ科なども認められたが、いずれも少量である。I層(試料1)では、樹木花粉の占める割合が43%、草本花粉が38%であり、シダ植物孢子も比較的多い。樹木花粉では、スギが優勢で、マツ属複雑管束亜属、クリ、コナラ属アカガシ亜属などが伴われる。草本花粉では、イネ科(イネ属型を含む)やヨモギ属が優勢で、アブラナ科、キク亜科、タンポポ亜科、ソバ属などが伴われる。

5. 花粉分析から推定される植生と環境

III層の上層では、花粉がほとんど検出されなかった。花粉が検出されない原因としては、1)乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたこと、2)土層の堆積速度が速かったこと、3)水流や粒径による淘汰・選別を受けたことなどが想定されるが、ここでは土層の堆積状況などから1)の要因が大きいと考えられる。

桜島文明軽石(Sz-3, 1471年)直下のI層でも、花粉があまり検出されないことから植生や環境の推定は困難であるが、当時は周辺にイネ科、ヨモギ属、アブラナ科などの草本類、およびナラ類(コナラ属コナラ亜属)やカシ類(コナラ属アカガシ亜属)などの樹木が分布していたと考えられる。アブラナ科には、アブラナ(ナクネ)、ダイコン、ハクサイ、カブなどの栽培植物が含まれている。

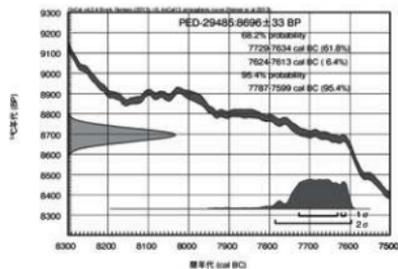
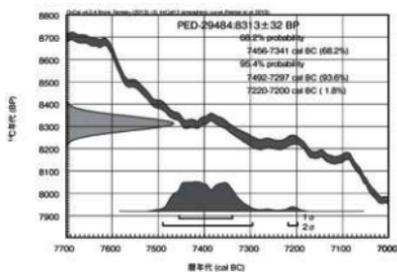
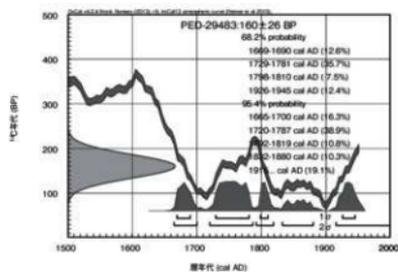
現表土のI層では、イネ、アブラナ科、ソバ属(ソバ)などが栽培されていたと考えられ、その周囲にはイネ科、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科などの草本類が生育していたと推定される。また、遺跡周辺には植林とみられるスギをはじめ、二次林とみられるマツ類(マツ属複雑管束亜属)、栽培とみられるクリ、およびカシ類などの照葉樹が分布していたと考えられる。

文献

- 金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原。新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店、p.248-262。
島倉巳三郎(1973)日本植物の花形形態。大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集、60p。
中村純(1967)花粉分析、古今書院、p.82-110。
中村純(1974)イネ科花粉について、とくにイネ(*Oryza sativa*)を中心として。第四紀研究、13,p.187-193。
中村純(1977)稲作とイネ花粉。考古学と自然科学、第10号、p.21-30。
中村純(1980)日本産花粉の標識。大阪自然史博物館収蔵目録第13集、91p

第11表 笹ヶ崎遺跡における炭化材の樹種同定結果

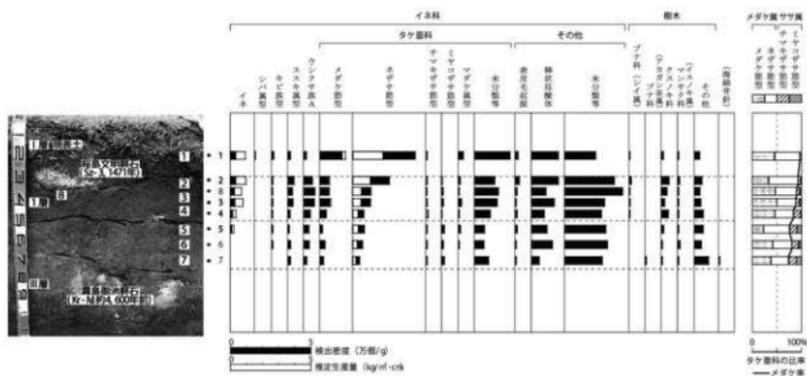
番号	地点・遺構	結果 (学名/和名)	
1	A区, SC-5	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
2	B区, SI-3	<i>Castanopsis sieboldii</i> Hatusima	スタジイ
3	C区, SI-2	<i>Acer</i>	カエデ属



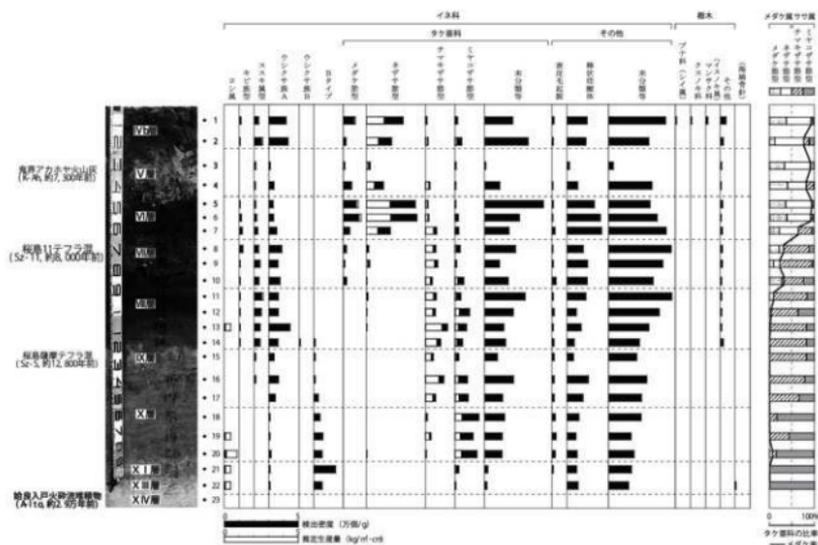
第 65 図 暦年較正結果

表13 笹ヶ崎遺跡における花粉分析結果

分類群		B区北側							
学名	和名	1	2	3	4	5	6	7	8
Arboreal pollen	樹木花粉								
Podocarpus	マキ属	1							
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複雑管束亜属	25	1						
Cryptomeria japonica	スギ	99							
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イナキ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	2							
Castanea crenata	クリ	25					1		
Castanopsis-Pasania	シイ属-マテバシイ属	2	1						
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	1	1		2				
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	7		4	2		1		3
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属-ケヤキ	2							
Ampelopsis brevipedunculata	ノブドウ								1
Diospyros	カキノキ属	1							
Oleaceae	モクセイ科	1							
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉								
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	3							
Leguminosae	マメ科	2			1				
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属-ガマズミ属	3							
Nonarboreal pollen	草本花粉								
Gramineae	イネ科	61	2	2	2				6
Oryza type	イネ属型	4							
Cyperaceae	カヤツリグサ科	3							1
Fagopyrum	ソバ属	1							
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	2							1
Ranunculus	キンポウゲ属			1					
Cruciferae	アブラナ科	18		1		2			
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科								1
Apioidae	セリ亜科	2							1
Lactuicoideae	タンポポ科	7		1					
Asteroidae	キク亜科	6			1				3
Artemisia	ヨモギ属	41	3	6	5				2
Fern spore	シダ植物胞子								
Monolate type spore	単条溝胞子	39	19	13	7	3	3	1	21
Trilate type spore	三条溝胞子	28	12	5	2	2			5
Arboreal pollen	樹木花粉	165	3	4	4		2		4
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	8			1				
Nonarboreal pollen	草本花粉	145	5	11	8	2			15
Total pollen	花粉総数	318	8	15	13	2	2	0	19
Pollen frequencies of 1cm ³	試料 1/cm ³ 中の花粉密度	2.9	4.5	8.0	8.6	1.6	1.1		1.1
		$\times 10^3$	$\times 10$		$\times 10^2$				
Unknown pollen	未同定花粉								
Fern spore	シダ植物胞子	67	31	18	9	5	3	1	26
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Stone cell	石細胞	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
微細植物遺体	($\times 10^5/cm^3$)								
未分解遺体片						0.2			0.5
分解質遺体片		2.4	3.6	3.6	3.7	1.8	1.8	2.1	5.0
炭化遺体片 (微粒炭)		7.3	10.8	8.9	9.6	2.7	3.3	3.9	21.9



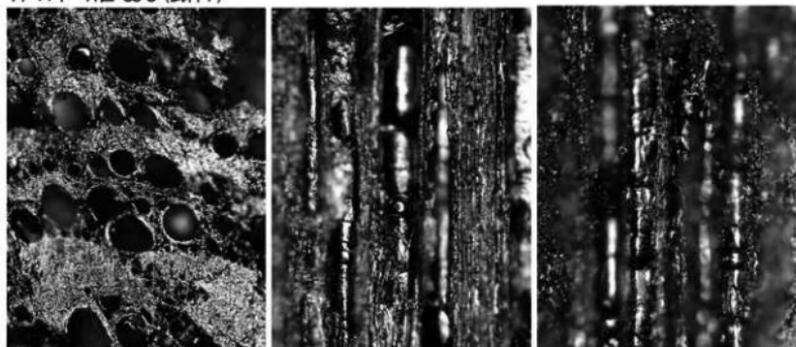
第 66 図 B 区北側地点における植物珪酸体分析結果



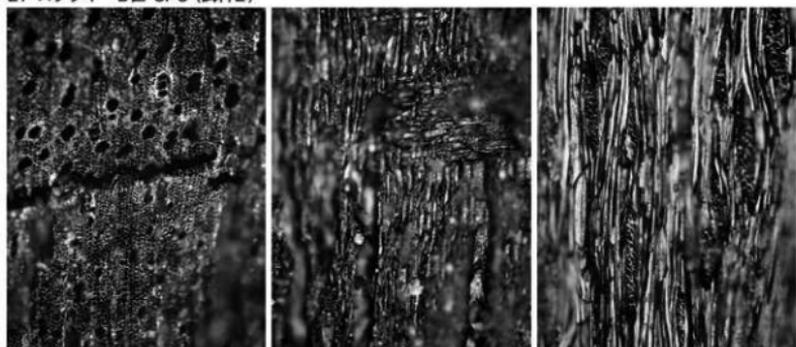
第 67 図 B 区中央部における植物珪酸体分析結果



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
 1. スギ A区 SC5 (試料1)

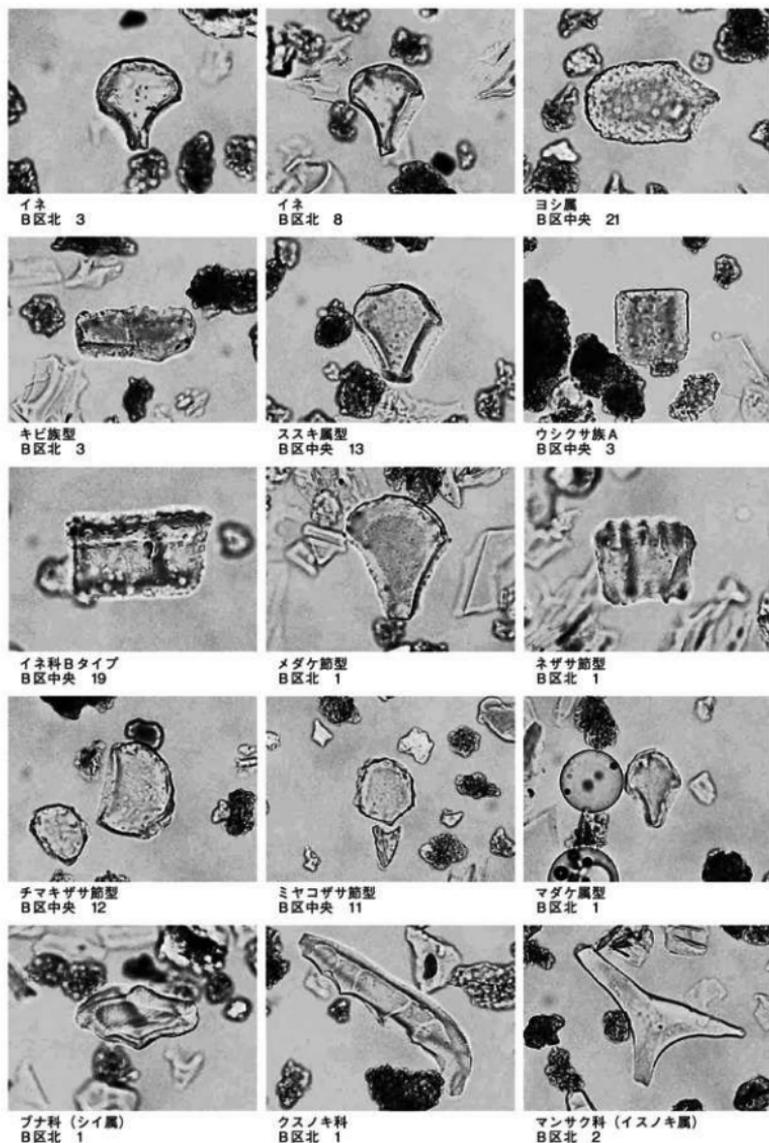


横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
 2. スダジイ B区 SI-3 (試料2)



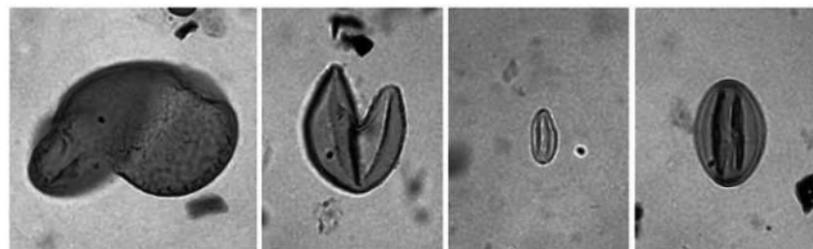
横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
 3. カエデ属 C区 SI-2 (試料3)

第68図 笹ヶ崎遺跡の炭化材



第 69 図 笹ヶ崎遺跡の植物珪酸体 (プラント・オパール)

50 μm

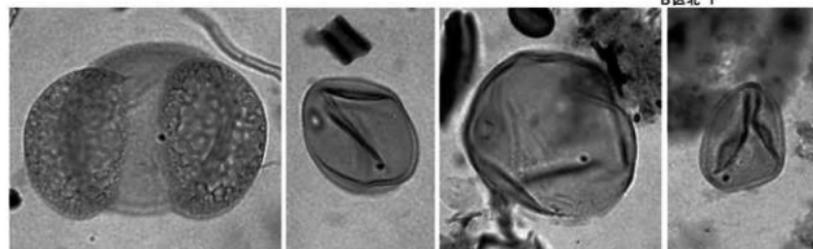


1 マキ属 B区北 1

2 スギ B区北 1

3 クリ B区北 6

4 コナラ属アカガシ亜属
B区北 1

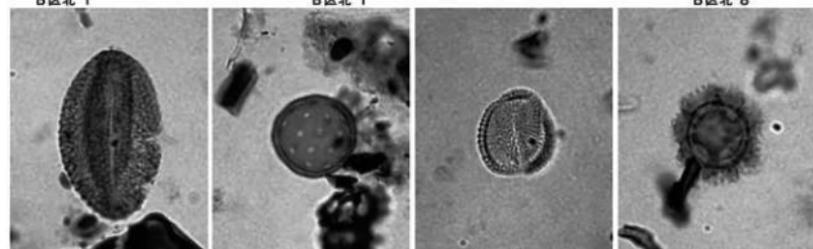


5 マツ属複雑管束亜属
B区北 1

6 イネ科
B区北 1

7 イネ属型 B区北 1

8 カヤツリグサ科
B区北 8

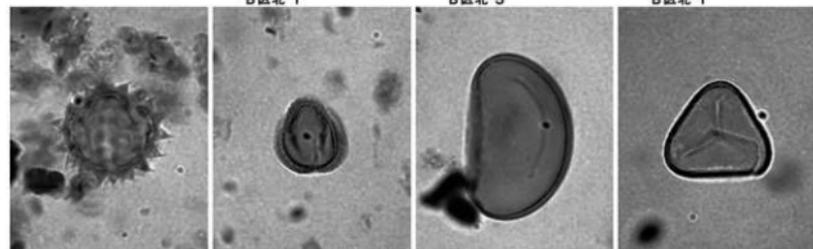


9 ソバ属 B区北 1

10 アカザ科ヒユ科
B区北 1

11 アブラナ科
B区北 5

12 タンポポ亜科
B区北 1



13 キク亜科 B区北 8

14 ヨモギ属 B区北 8

15 シダ植物単条溝胞子
B区北 3

16 シダ植物三条溝胞子
B区北 5

— 10 μ m

第 70 図 笹ヶ崎遺跡の花粉

第V章 総括

笹ヶ崎遺跡では、主に縄文時代から中世にかけての遺構・遺物が出土している。年代順にその概要を記し、まとめとあえることとする。

(1) 縄文時代草創期～早期（基本層序第Ⅶ層～第Ⅸ層）

縄文時代草創期に比定される基本層序第Ⅸ層では、C区で集石遺構が1基（S13）検出されたのみであり、遺物は確認されなかった。縄文時代早期に比定される基本層序第Ⅶ層下部では、B区から1基（S13）、C区から東側緩斜面に広がる散礫より2基（S11・2）の集石遺構が検出された。B区の第Ⅶ層検出時において、調査区域のほぼ全域が平坦な地形であったが、東端部付近では、東側の梅北川に向かって緩やかに下りはじめる地形である。確認された集石遺構はいずれも東端部で確認されており、縄文時代早期においては、東側緩斜面を中心に遺跡が形成されていたと推測できる。

(2) 縄文時代前期～晩期（基本層序第Ⅲ層～第Ⅳ層）

A～D各区より縄文時代前期末～晩期に比定される土器を中心とする遺物が数多く確認された。特に、B区東側において、縄文時代前期末～中期前葉に位置付けられる深溝式土器（96～98・101～106）が集中して出土している。当該期の遺構は検出されなかったが、宮崎県域においてこの深溝式土器がほぼ単独で近い形で集中して出土する例は少なく好例となりそうである。また、晩期においては、各区から黒川式土器を中心とした黒色磨研系土器の深鉢・浅鉢などが出土しており、その中でも底部に編物圧痕が施される組織織土器が数多く確認されている。

(3) 古墳時代

古墳時代において、A～D各区で古墳時代土師器の出土が確認されているものの、出土数は少ない。遺構は、D2区で土坑1基（SC1）、B区で竪穴建物跡2基（SA2・3）のみである。B区のSA3では、小型丸底壺や高杯が比較的良好な状態で出土しており、古墳時代前期末～中期初頭頃と推定される。一部削平されていたが、検出面から床面までの深さが50cmと深いタイプの竪穴建物である。この傾向は近隣の高樋遺跡などでも確認されており、この地域の古墳時代前半期頃の竪穴建物の特徴の一つとも考えられる。

(4) 古代

古代に比定される遺構は確認されず、遺物はA・B・D2区で内黒を含む土師器や布痕土器がわずかに確認されている。布痕土器は、細片であるが、456の形状を考慮し復元すると逆円錐形となる可能性が高い。これらの布痕土器は、製塩時もしくは塩の運搬用土器と推定され、古代官衙や官道との関連を想起させる遺物である。また特筆すべき古代の遺物として、D1区の包含層から出土した石帯の一部である石製鈔具の丸軋(439)がある。石帯は、官人やその関係者等の特定身分者のみで使用していたとされている。宮崎県域において、古代の国衙・郡衙が設置されていた西都地域に出土例が集中するが、都城市域では並木添遺跡（都城市高木町）の出土例がある。並木添遺跡では、中世の溝状遺構から出土しており、その時期差について伝世や混入の可能性が指摘されている（都城市教育委員会1993）。笹ヶ崎遺跡の出土資料は、包含層からの出土で、出土位置からの年代比定は困難であり、遺物年代から古代に比定しているが、並木添遺跡同様、中世段階まで伝世や混入した可能性もある。出土数が少ないものの、布痕土器や丸軋の存在から、古代段階より笹ヶ崎遺跡とその周辺地域が「地域有層級の居館跡」や「何らかの公的機関跡」等を形成していた可能性を指摘できる成果となった。

(5) 中世

この遺跡の最も注目すべき調査成果は、中世段階の遺構・遺物にあると言ってもよい。A～D各区より中世段階に比定される多くの遺構・遺物が確認されている。

B区とD2区において、掘立柱建物群・複数条の溝状遺構・柵列などが出土している。それらのうち、溝状遺構（SE1～6）、掘立柱建物群（SB1～8）、柵列1～2は、各主軸が南北より約西偏75～80°もしくはそれに直交するものにある程度揃っており、同時期に規格性をもって築かれた可能性が高い。溝状遺構のSE1とSE5は、南側の掘立柱建物群と北側の空白地を南北に区画するための区画溝としての役割を果たしていたと推測される。これら溝状遺構の北側にあたるB区北東部の遺構のほとんど確認されない空白地は、中世段階に搬入されたと推定される造成土が一面に約15cm程の厚さで堆積している。これらの造成土は、東西を区画するSE3・4・6の西側、隣接するD2区を含む近隣より運び込まれており（詳細はp109参照）、この時期に計画的な土地開発が行われたと考えられる。これら一連の遺構群は、いずれの遺構も埋土・覆土状況がいずれも15世紀後半の桜島文明軽石降灰以前であり、なおかつ、SE1・6の埋土・SB3の柱穴などから出土した陶磁器類などの年代が14世紀後半～15世紀前半頃が中心であることから判断して、14～15世紀前半頃に形成されたと推定できる。また、A区の土塁と堀切、B区・C区の犬走状遺構、C区の堀切も埋土・覆土状況などから考えると、14～15世紀前半頃の築造と推定できる。A区とC区で確認された堀切は、丘陵地形を利用しているが、人工的な稜形を呈しており、進入防御用に築かれた施設と推測される。特にA区の堀切は、土塁とセットになっており、その高低差は約4.5mと大きい。

これらを総合的に考えると、14～15世紀前半頃の中世段階の笹ヶ崎遺跡は、北のA区から南のC区にかけて丘陵を利用した一連の施設構造物を形成していたと推定できる。発掘調査区域が限定的で東側の丘陵斜面部や西側の丘陵頂部付近に関しては不明であり、丘陵全体については言及できないが、一連の構造物は、B区の掘立柱建物群を構造物の中心とし、丘陵端部を犬走状遺構によって区画し、堀切と土塁を防御用施設として備えている。また、出土遺物として当時貴重だった龍泉窯系青磁・白磁・天目茶碗をはじめとする陶磁器類がB区を中心として数多く出土しており、当地が特定身分者関連の場所であったと推測される。これらを総合的に考えると、施設構造物は防御施設を備えた居館またはそれに類する施設であった可能性がある。

14世紀前半頃における遺跡周辺の都市圏梅北地域は、島津荘日方南郷の一部であり、島津荘の主要地域を担っていた。14世紀代は、親応の擾乱や島津氏の内訌などの影響で、梅北地域も度々戦渦に巻き込まれた記録がある。しかし、15世紀中頃になると、島津氏の内訌は終結し、梅北地域は、実効支配していた梅北氏が島津氏に討伐され、守護である島津氏の直轄領となった（都市圏2005）。笹ヶ崎遺跡の中世段階と推定される一連の遺構群の存続する時期は、梅北地域が戦乱から直轄領へと移行する時期と重なるようである。また、これらの遺構群は、埋土状況から15世紀後半頃には廃絶されたと考えられる。想像の域は越えないが、遺構群廃絶の時期と梅北氏の動向が深く関係していた可能性がある。

その後の時代の遺構としては、B区北端部において15世紀後半以降に降灰した桜島文明軽石で覆われた中世の畦状遺構が確認されている。植物珪酸体分析等の結果から、この畦状遺構は、畑作系統の稲作、つまり陸稲栽培痕跡の可能性が高い。遺跡は、中世段階の遺構群の廃絶後、耕作地や山林などに転化しながら現在に至ったと推測される。

【参考文献】都市圏教育委員会 1993「並木添遺跡」『都市圏文化財調査報告書』第24集

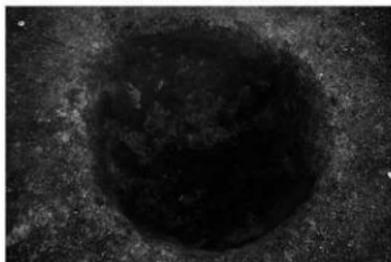
都市圏2005『都市圏史』通史編 中世・近世



① A区 1号土坑 (SC1) 完掘状況 (北から)



② A区 5号土坑 (SC5) 完掘状況 (東から)



A区 6号土坑 (SC6) 完掘状況 (北から)



④ A区 堀切と土塁完掘状況 (東から)



⑤ A区 平坦部 完掘状況 (北東から)



⑥ C区 1号集石遺構 (S11) 検出状況 (西から)



⑦ C区 2号集石遺構 (S12) 検出状況 (西から)



⑧ C区 3号集石遺構 (S13) 検出状況 (東から)

写真図版2



① C区 散礫検出状況(西から)



② C区 1号土坑墓(SD1) 完掘状況(東から)



③ C区 1・7号溝状遺構(SE1・7) 検出状況(北から)



④ C区 2号溝状遺構(SE2) 完掘状況(南西から)



⑤ C区 堀切完掘状況(南東から)



⑥ C区 1号犬走状遺構(SG1) 完掘状況(南東から)



① B区 3号集石遺構 (SI 3) 検出状況



② B区 第Ⅶ層礫出土状況



③ B区 18号土坑 (SC 18) 完掘状況



④ B区 8号土坑 (SC 8) 完掘状況



⑤ B区 2号竪穴建物跡 (SA 2) 完掘状況



⑥ B区 3号竪穴建物跡 (SA 3) 遺物出土状況

写真図版 4



① B区 1号溝状遺構 (SE1) 完掘状況



② B区 2号溝状遺構 (SE2) 完掘状況



③ B区 6・3・4号溝状遺構 (SE6・3・4) 完掘状況



④ B区 5号溝状遺構 (SE5) 完掘状況



⑤ B区 7号溝状遺構 (SE7) 完掘状況



⑥ B区 8号溝状遺構 (SE8) 完掘状況



① B区 9号溝状遺構 (SE9) 完掘状況



② B区 11号溝状遺構 (SE11) 完掘状況



③ B区 12号溝状遺構 (SE12) 完掘状況



④ B区 14号溝状遺構 (SE14) 完掘状況



⑤ B区 溝状遺構群完掘状況

写真図版 6



① B区 3・4・8号掘立柱建物跡 (SB3・4・8) 検出状況

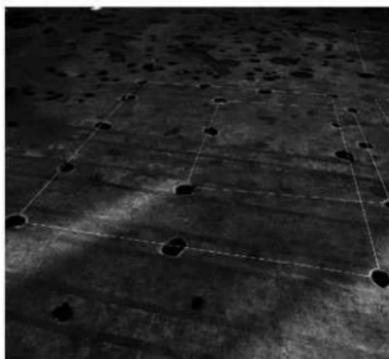


② B区 1～8号掘立柱建物跡 (SB1～8) 検出状況

※白線はデジタル加工



① B区 2号掘立柱建物跡 (SB2) 検出状況



② B区 5・6号掘立柱建物跡 (SB5・6) 検出状況



③ B区 畦状遺構 断面状況



④ B区 犬走状遺構 (SG2) 検出状況



⑤ B区 3号土坑 (SC3) 断面状況



⑥ B区 5号土坑 (SC5) 完掘状況

写真図版 8



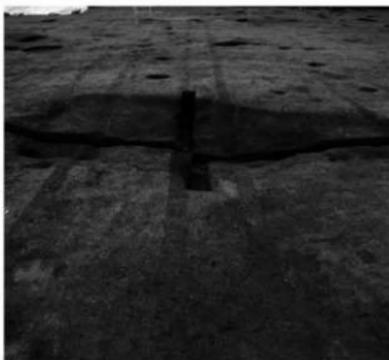
① B区 1号竖穴建物跡 (SA 1) 検出状況



② B区 4号土坑 (SC 4) 完掘状況



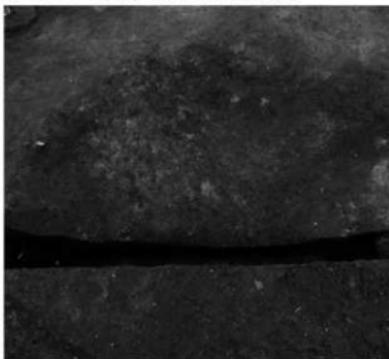
③ B区 6号土坑 (SC 6) 完掘状況



④ B区 7号土坑 (SC 7) 完掘状況



⑤ B区 9号土坑 (SC 9) 完掘状況



⑥ B区 10号土坑 (SC 10) 完掘状況



① 第3次発掘調査遺跡全景 (右:D1区・左:D2区)



② D2区 遺跡全景



③ D1区 遺跡全景



④ D2区 1号溝状遺構 (SE1) 完掘状況



⑤ D2区 柵列2の柱穴中から検出された土師器



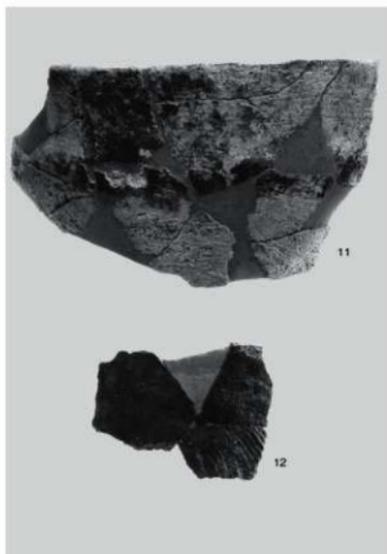
① A区 縄文土器 (1)



② A区 縄文土器 (2)



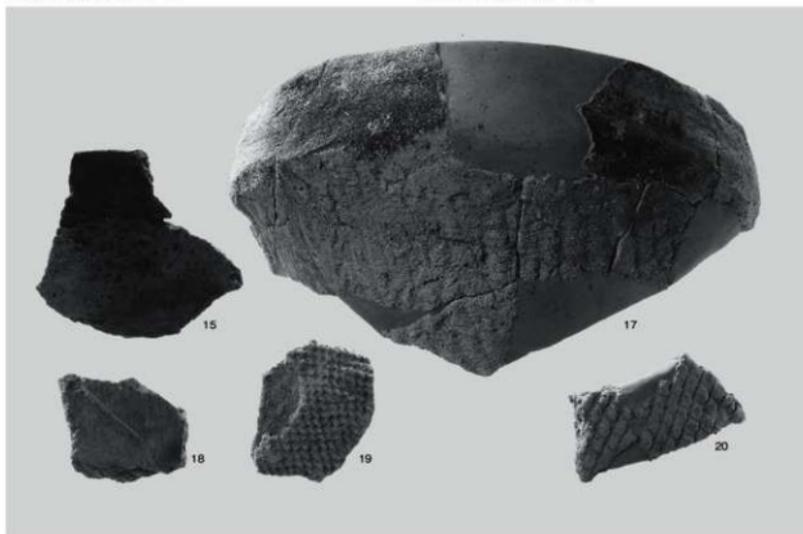
③ A区 縄文土器 (3)



① A区 縄文土器 (4)



② A区 縄文土器 (5)

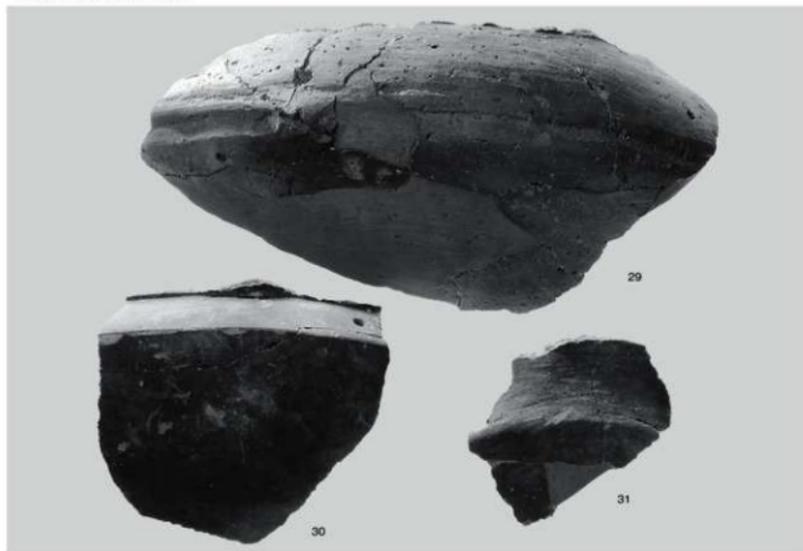


③ A区 縄文土器 (6)

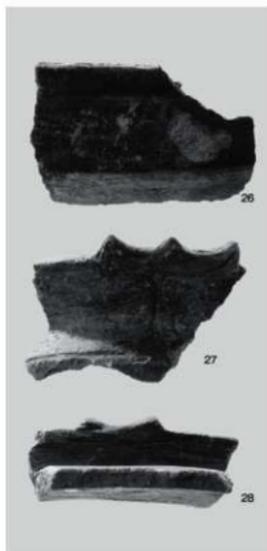
写真図版 12



① A区 縄文土器 (7)



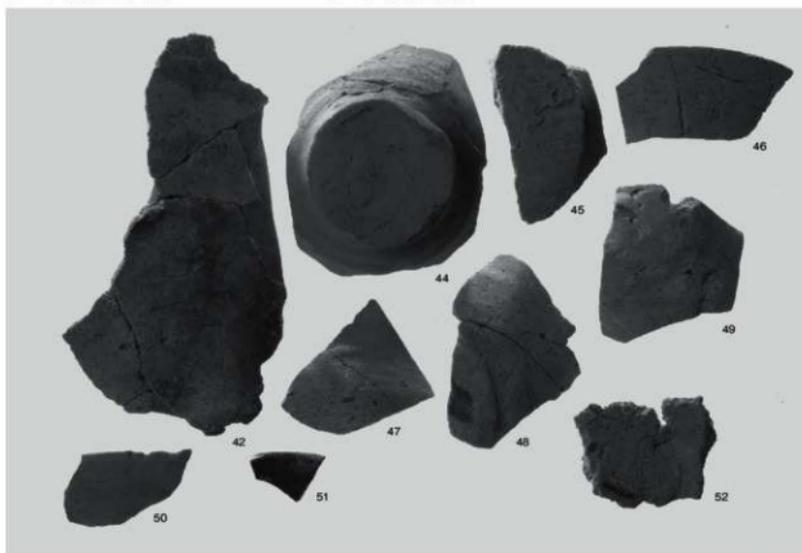
② A区 縄文土器 (8)



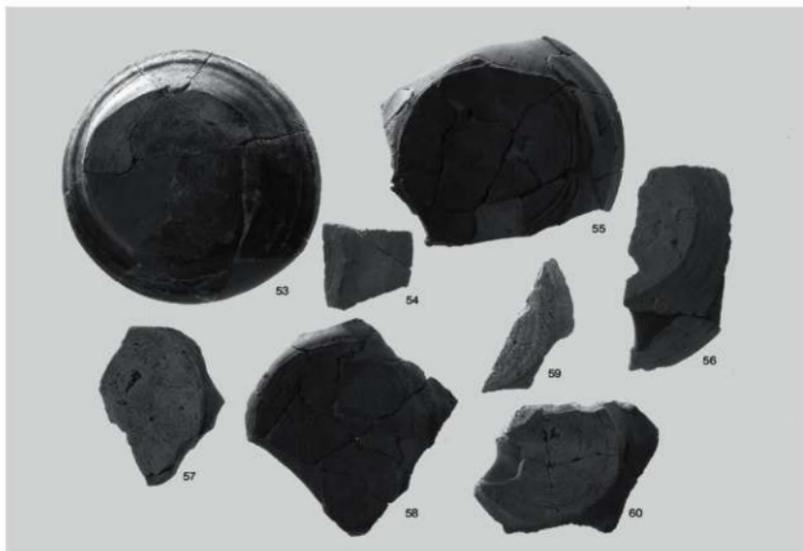
① A区 縄文土器 (9)



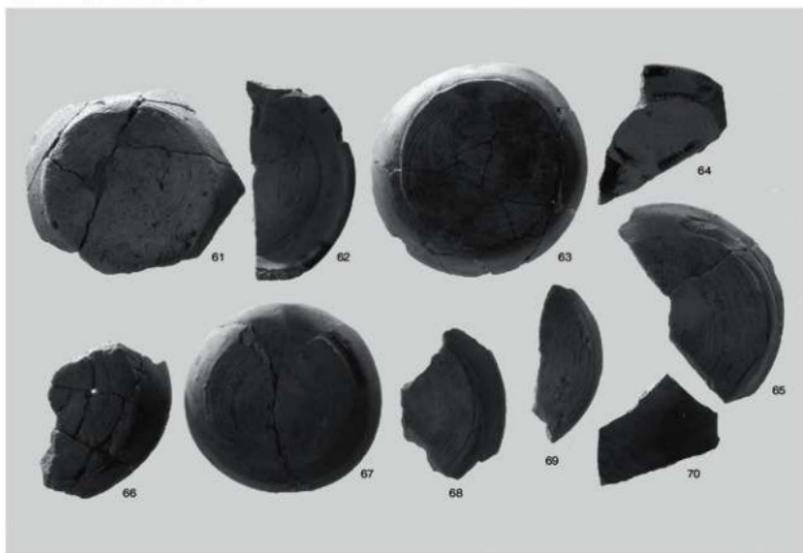
② A区 古代土師器



③ A区 古墳時代・古代土師器



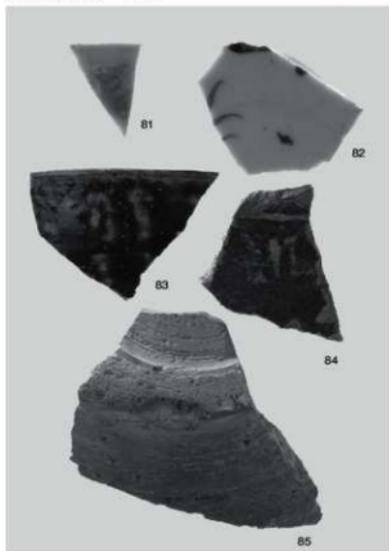
① A区 中世土師器 (1)



② A区 中世土師器 (2)・瓦器



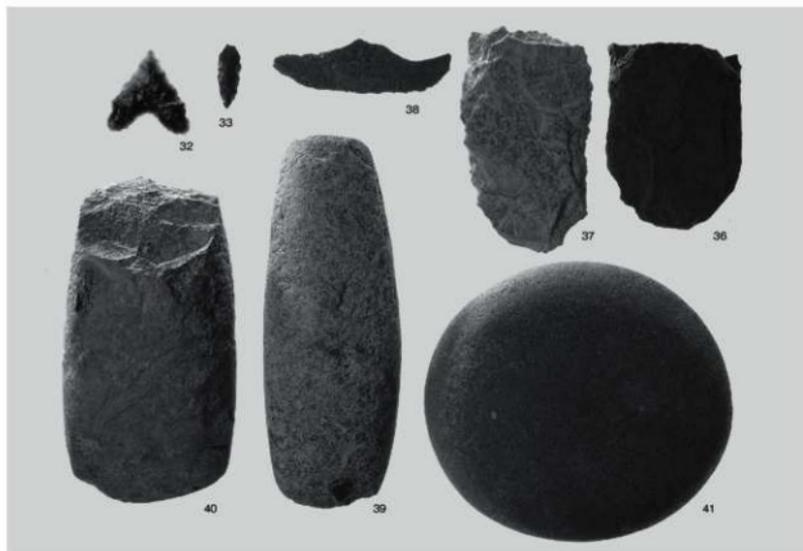
① A区 白磁・青磁



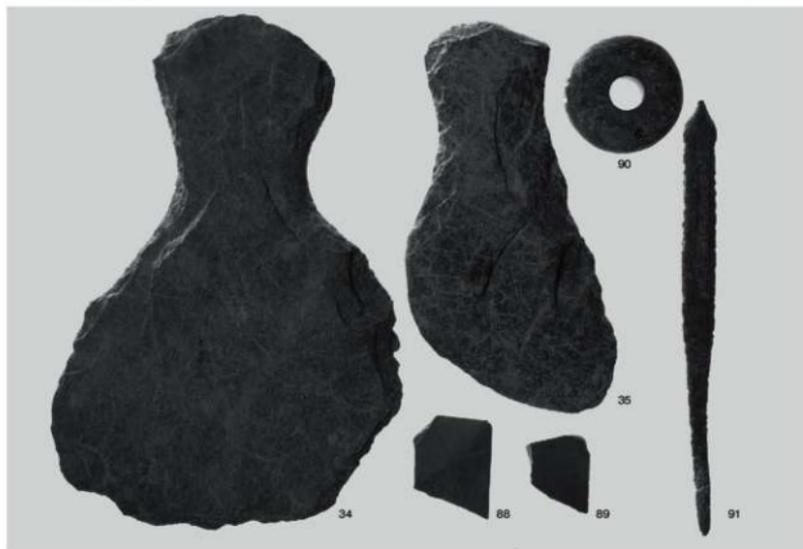
② A区 青花・陶器



③ A区 須恵器



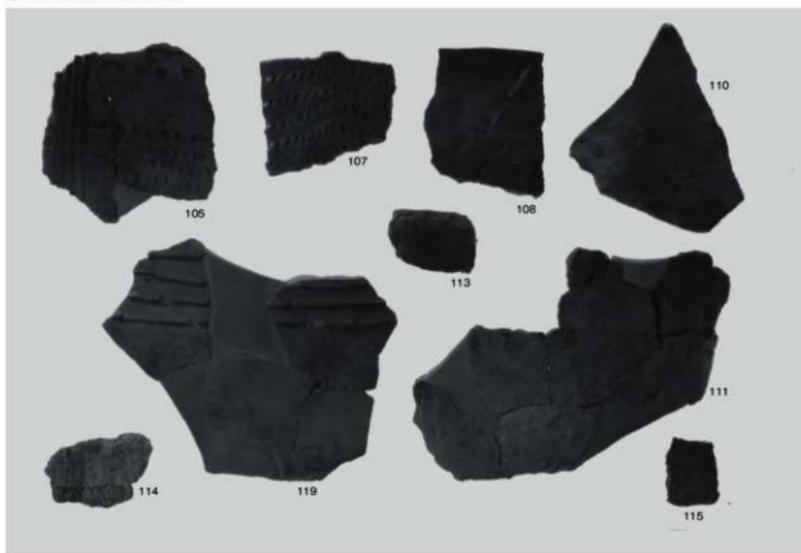
① A区石器 (1)



② A区石器 (2)・銅製品

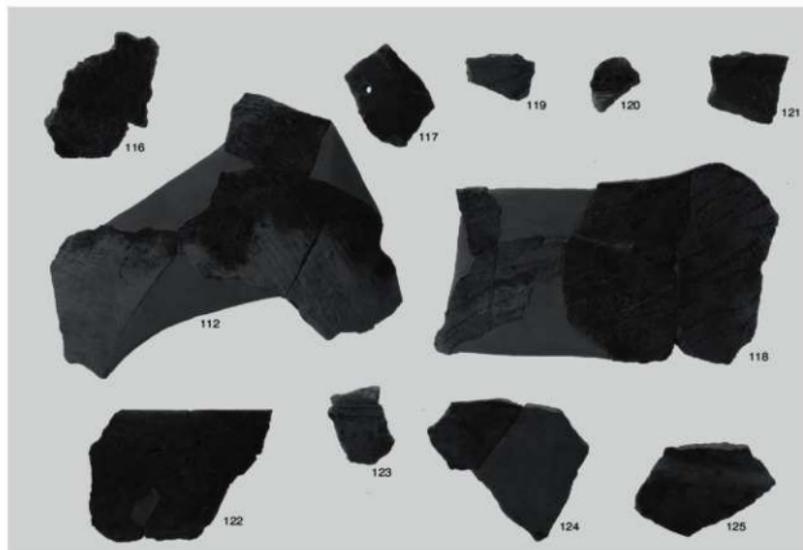


① B区 縄文土器 (1)

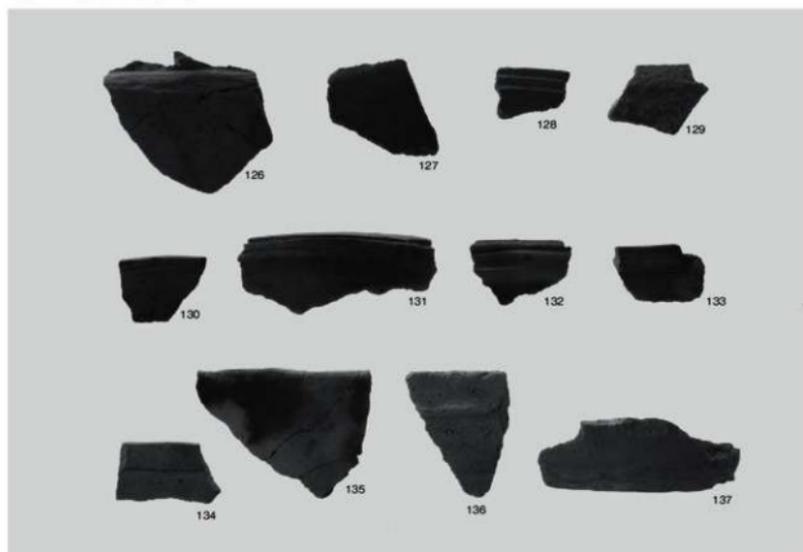


② B区 縄文土器 (2)

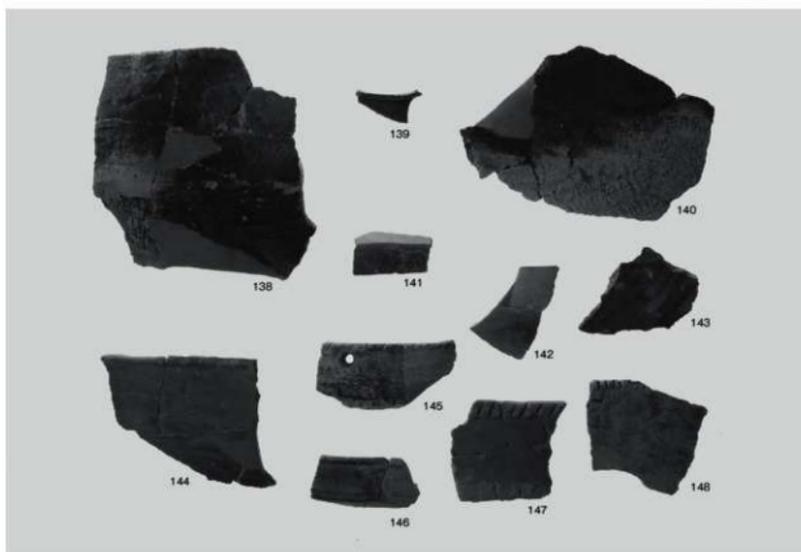
写真図版 18



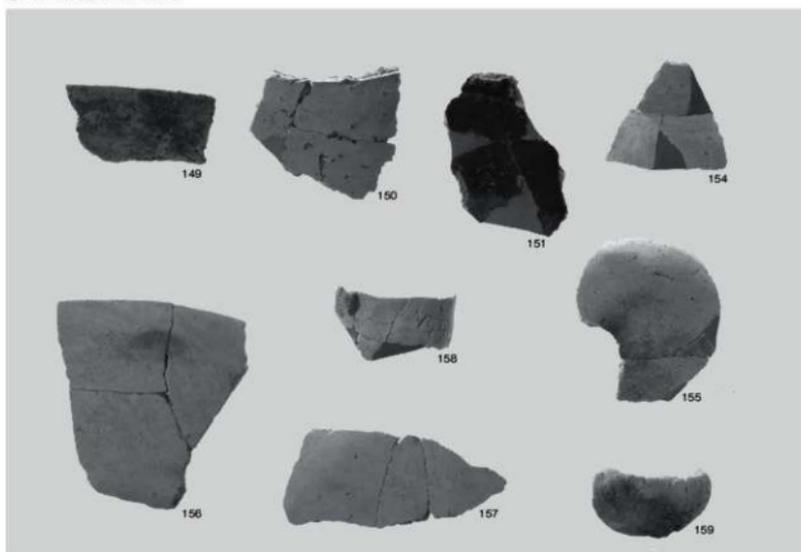
① B区 縄文土器 (3)



② B区 縄文土器 (4)



① B区 縄文土器 (5)



② B区 古墳時代SA2土師器 (1)



① B区 古墳時代SA2土師器(2)



② B区 SA3土師器(1)



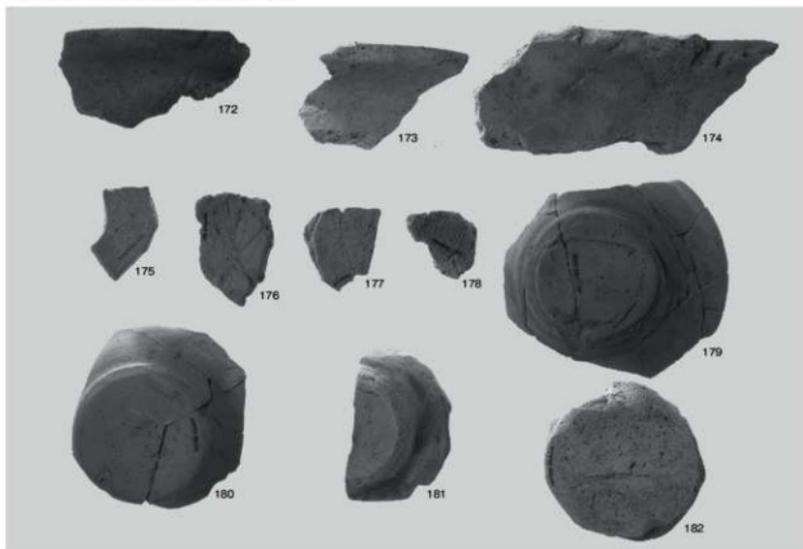
① B区 古墳時代 SA 3 土師器 (2)



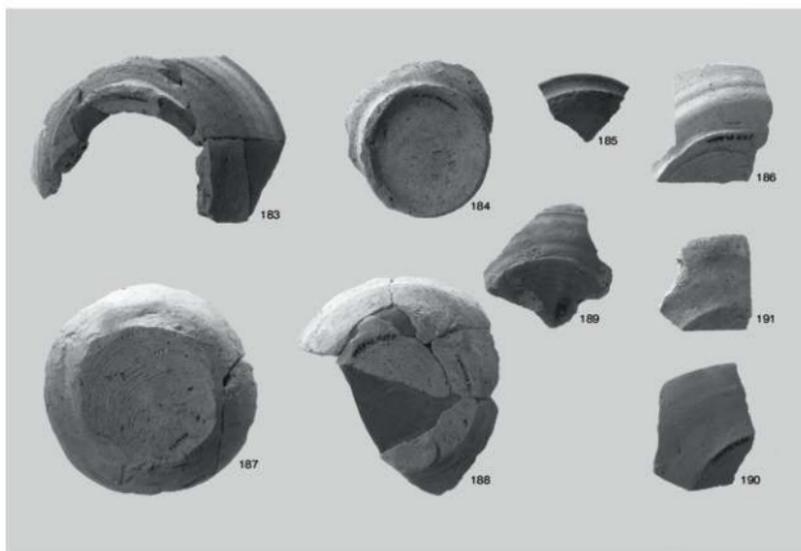
② B区 古墳時代 SA 3 土師器 (3)



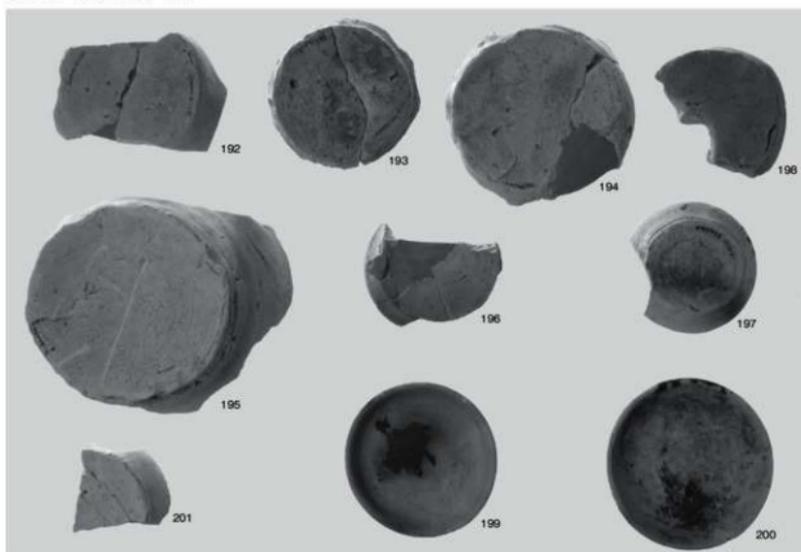
① B区 古墳時代 SA 3 土師器 (4)



② B区 古代土師器等

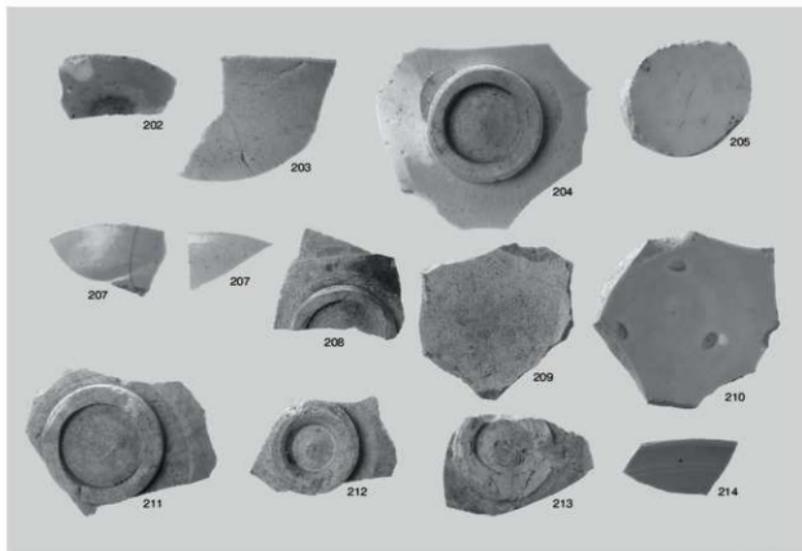


① B区 中世土師器 (1)

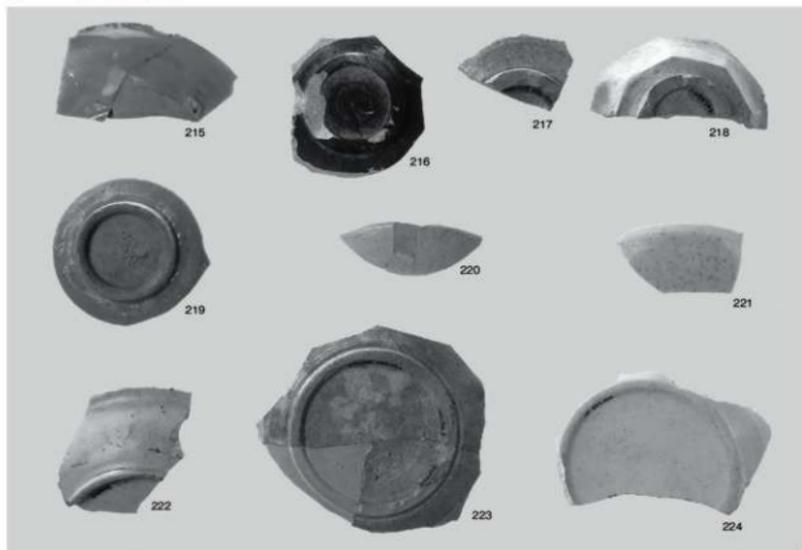


② B区 中世土師器 (2)

写真図版 24



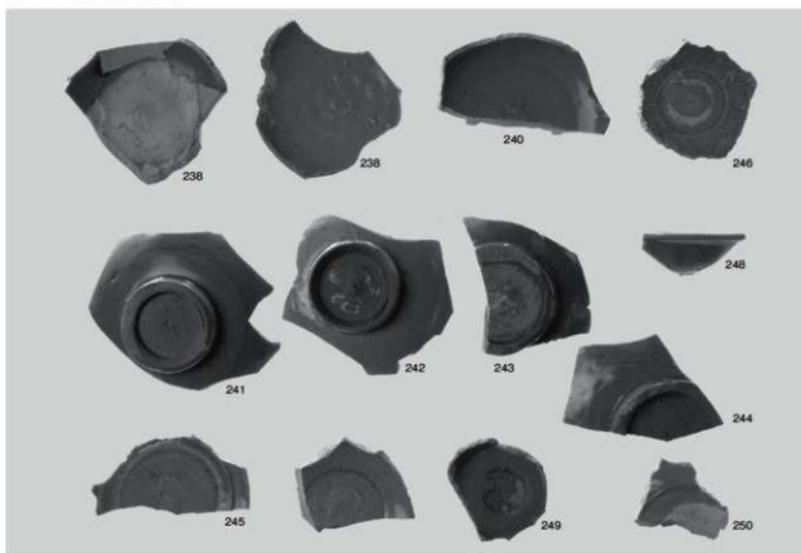
① B区 中世白磁 (1)



② B区 中世白磁 (2)

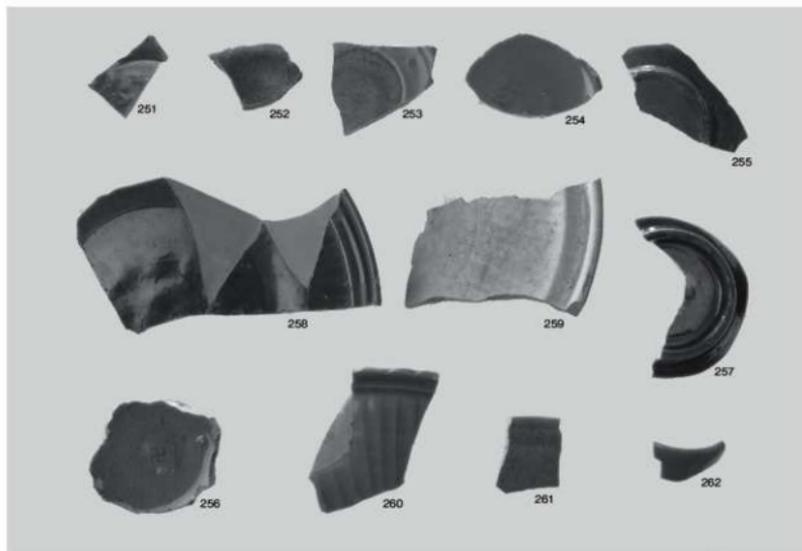


① B区 中世青磁 (1)

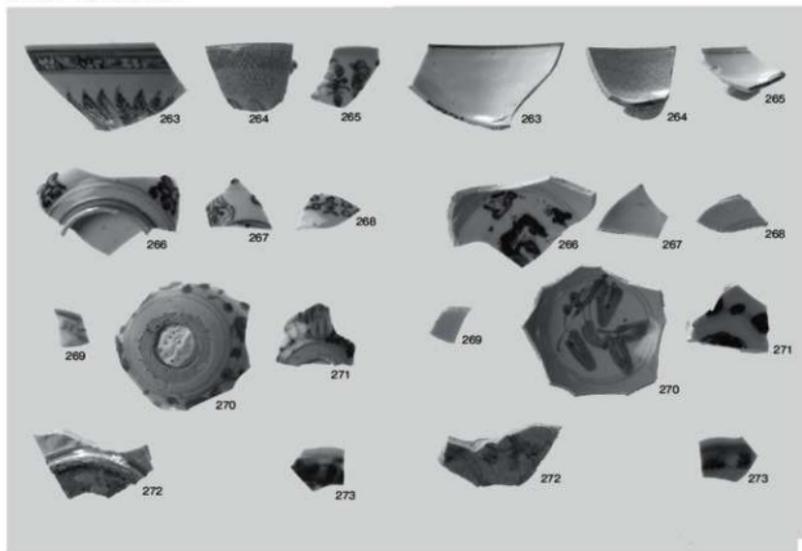


② B区 中世青磁 (2)

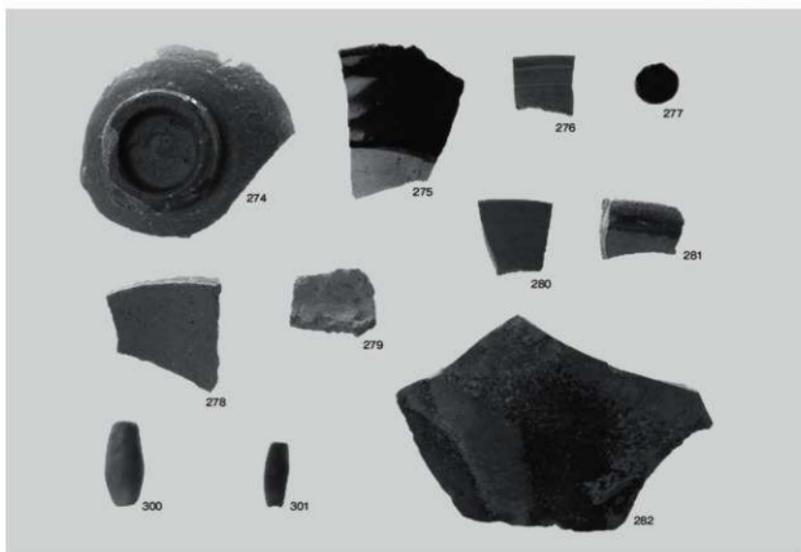
写真图版 26



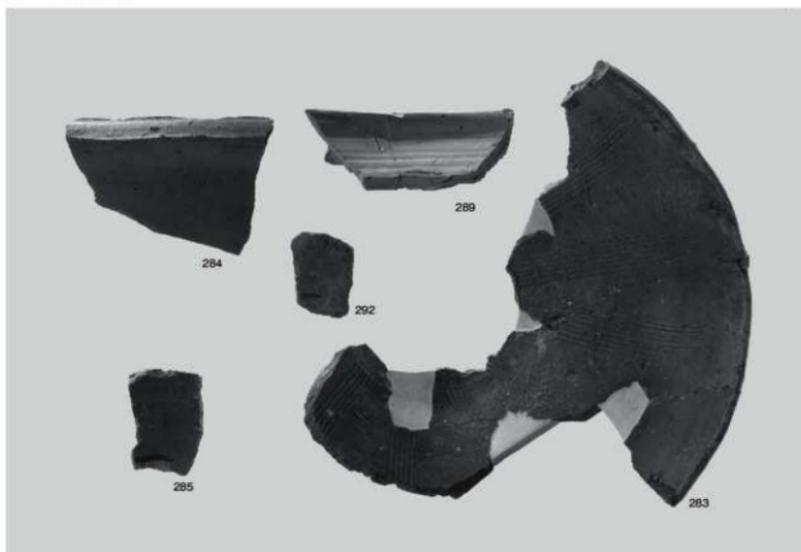
① B区 中世青磁 (3)



② B区 中世青花



① B区 須恵器等

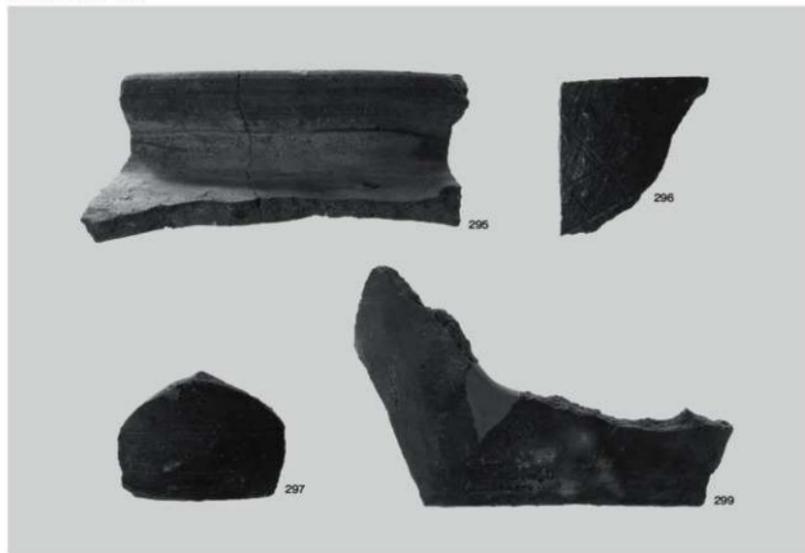


② B区 須陶器 (1)

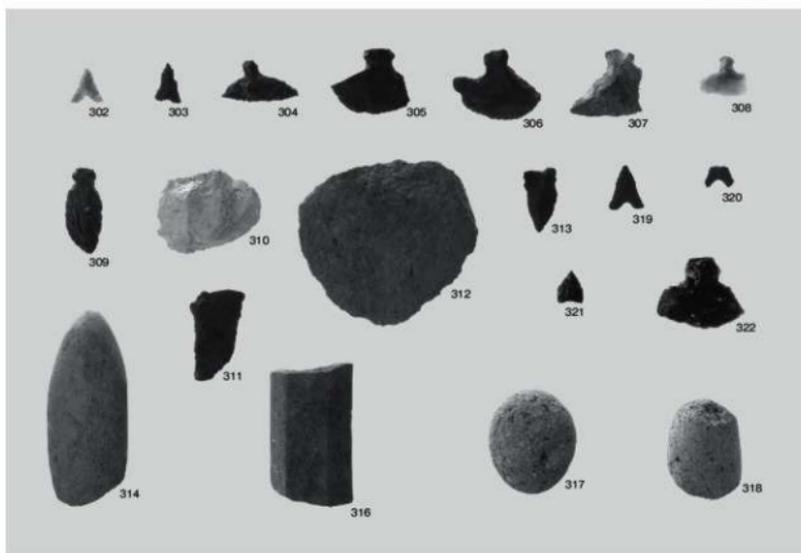
写真図版 28



① B区 陶器 (2)



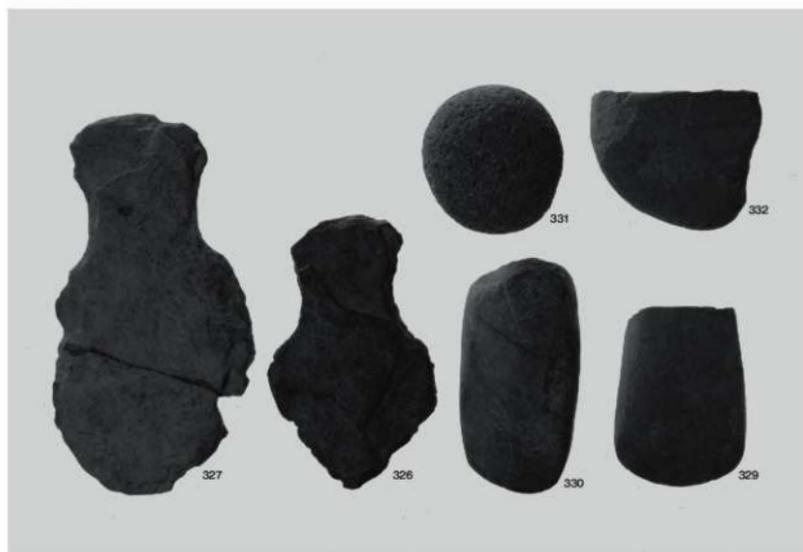
② B区 陶器 (3)



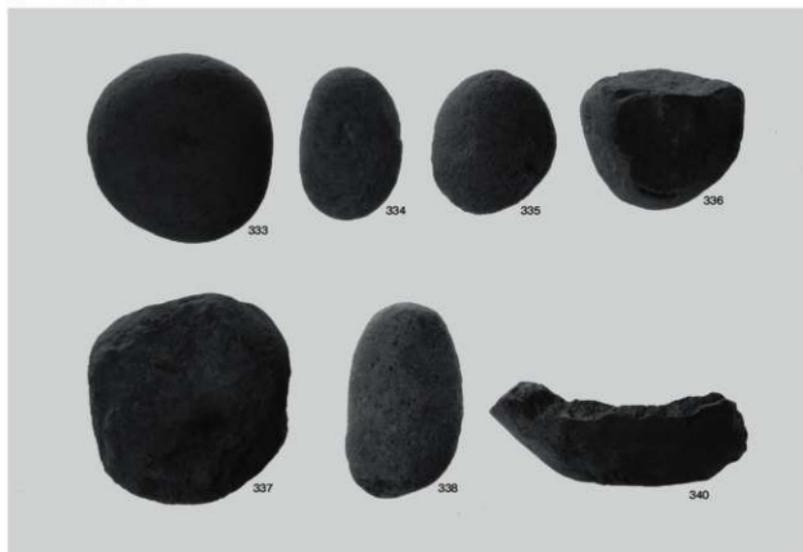
① B区石器 (1)



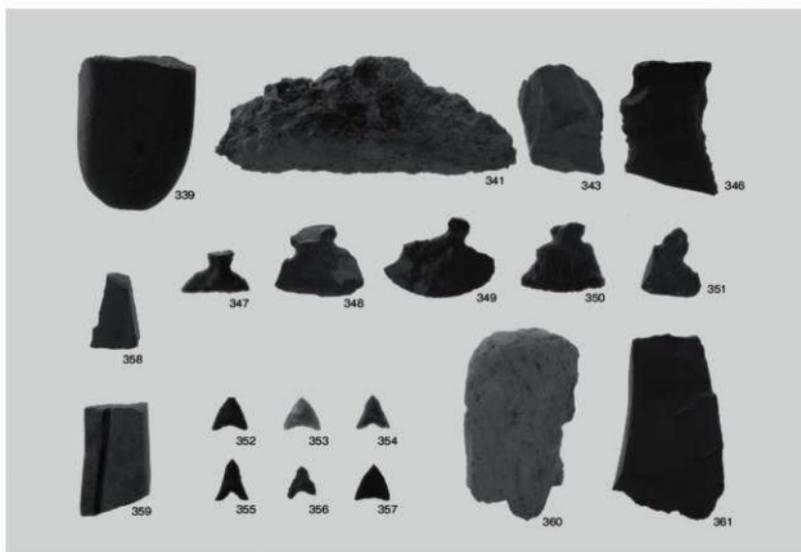
② B区石器 (2)



① B区石器(3)



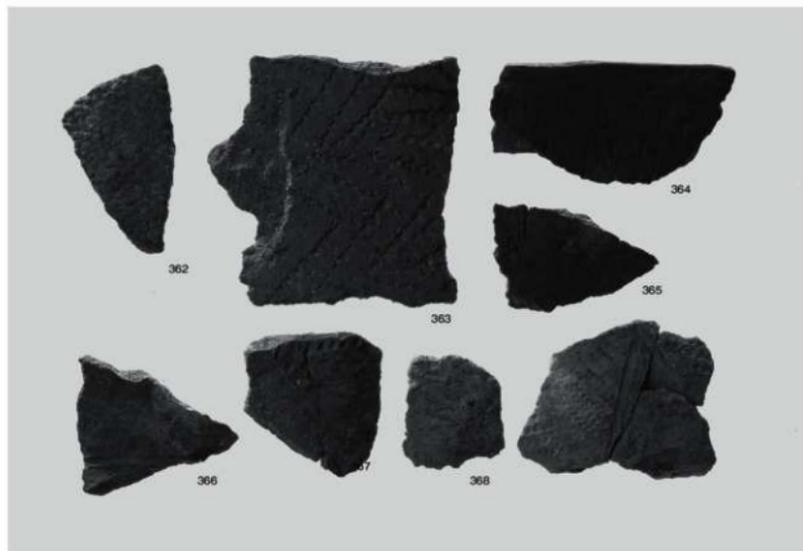
② B区石器(4)



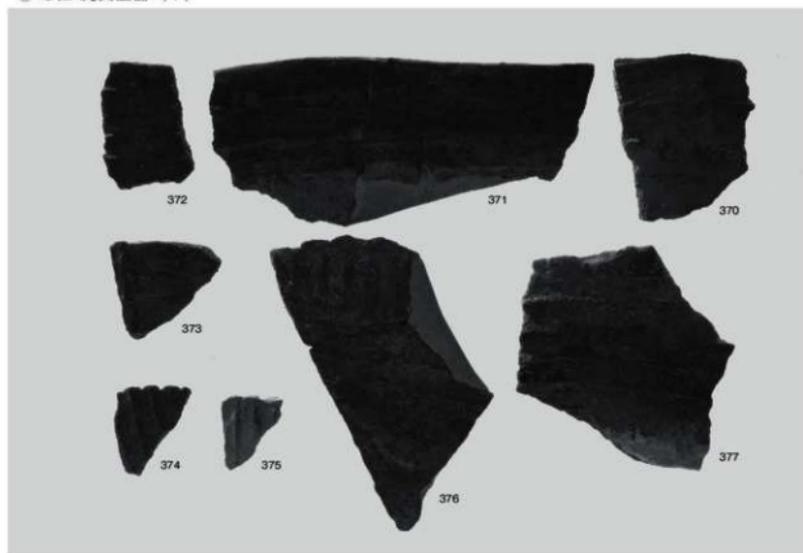
① B区石器 (5)



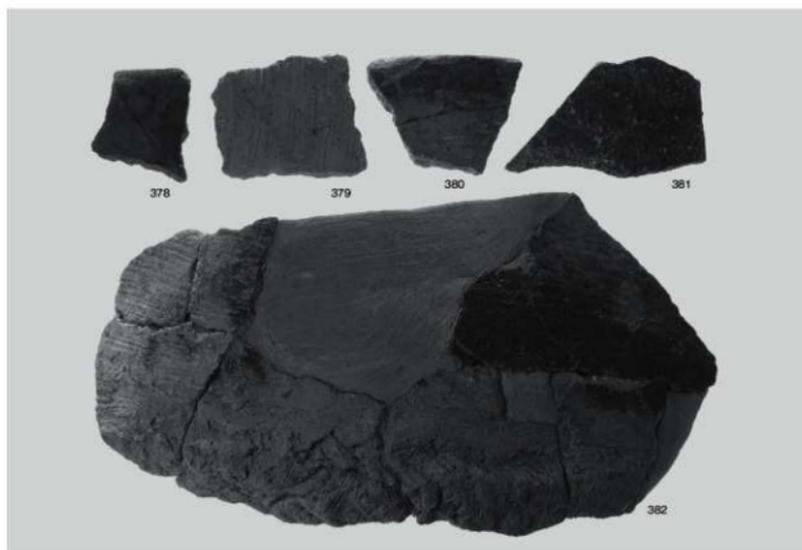
② B区石器 (6)



① C区 縄文土器 (1)



② C区 縄文土器 (2)



① C区 縄文土器 (3)

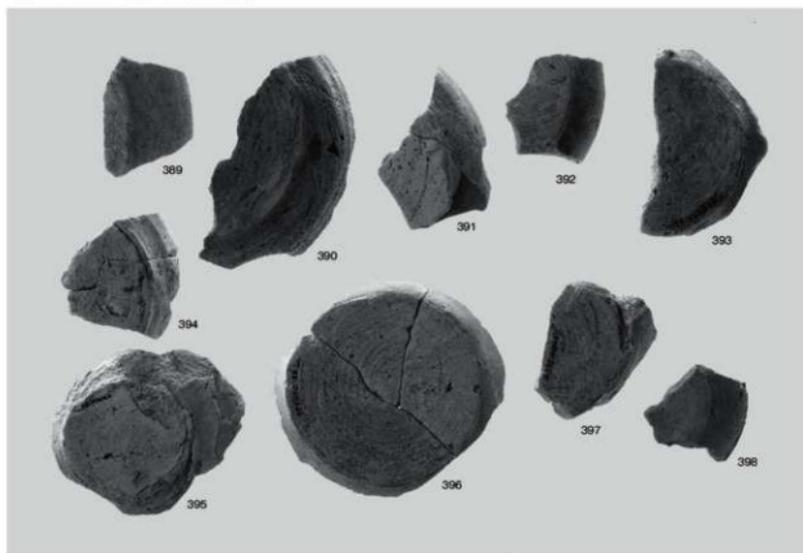


② C区 縄文土器 (4)

写真図版 34



① C区 古墳時代・古代土師器



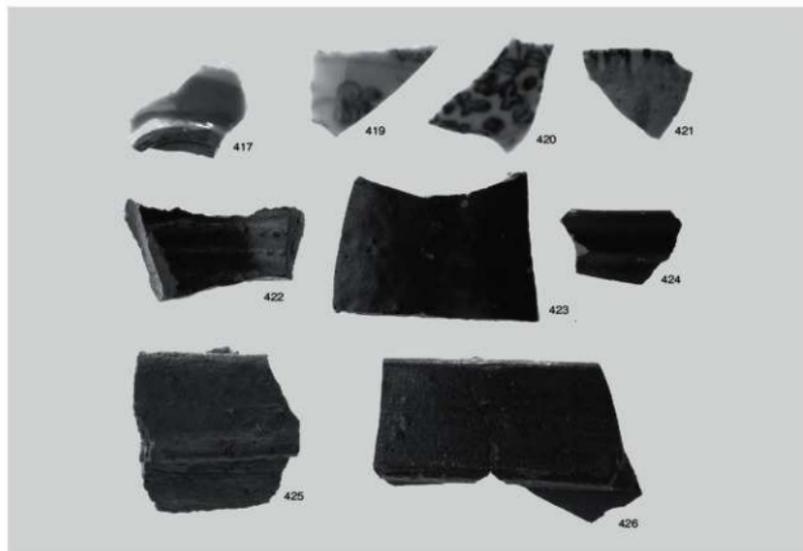
② C区 中世土師器



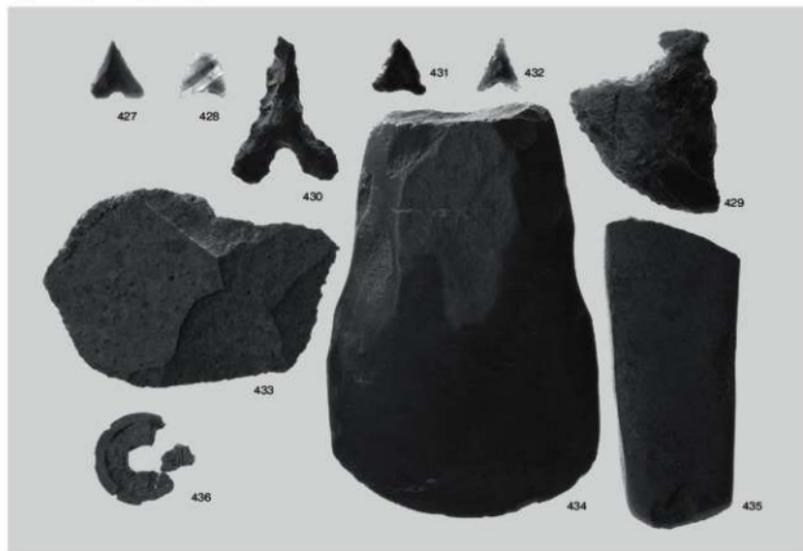
① C区 白磁



② C区 青磁



① C区 青磁・青花・陶器



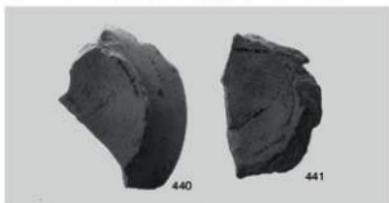
② C区 石器・錢貨



① D 1 区 包含層出土遺物(1) (土器・石器)



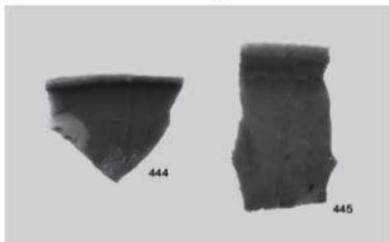
② D 1 区 包含層出土遺物(2) (鈴帯一裏側)



③ D 1 区 包含層出土遺物(3) (中世・土師器)



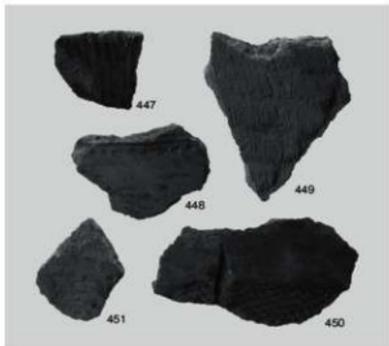
④ D 2 区 1 号土坑出土遺物 (古墳・土師器)



⑤ D 2 区 1 号溝状遺構出土遺物 (中世・陶磁器)



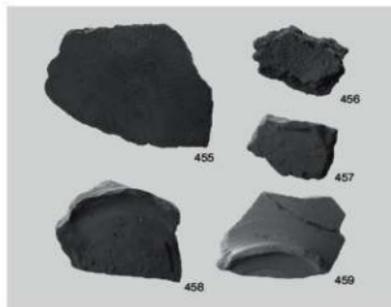
⑥ D 2 区 櫛列出土遺物 (中世・土師器)



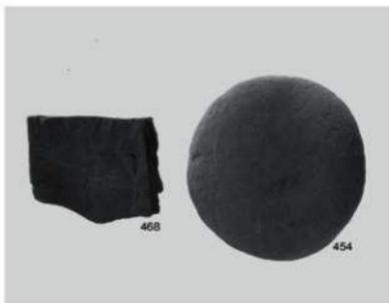
⑦ D 2 区 包含層出土遺物(1) (縄文土器)



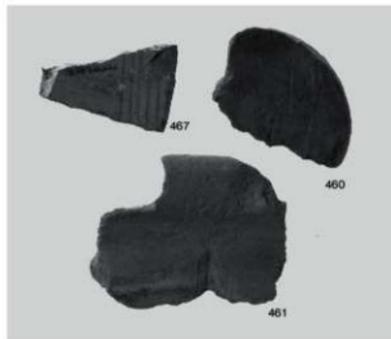
⑧ D 2 区 包含層出土遺物(2) (縄文・石器)



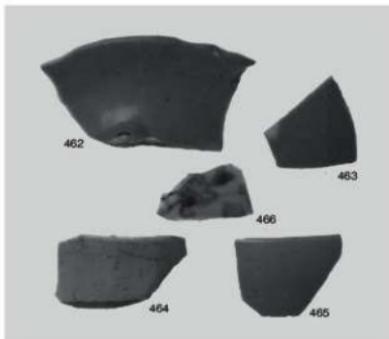
① D 2区 包含層出土遺物(3) (古代・土師器・布痕土器)



② D 2区 包含層出土遺物(4) (石器)



③ D 2区 包含層出土遺物(5) (中世・土師器・陶器)



④ D 2区 包含層出土遺物(6) (中世・陶磁器)

報告書抄録

ふりがな	さがさきいせき							
書名	笹ヶ崎遺跡(第一次～第三次調査)							
副書名	県道飯野松山郡城瀬(郡城志布志道路)路北工区道路整備工事に伴う発掘調査報告書3							
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第240集							
編著者名	山元清春・根井英樹・甲斐貴充							
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒880-0212 宮崎県宮崎市佐土原町下那阿4019番地 TEL 0985-36-1171							
発行年月日	西暦2016年 3月25日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さがさきいせき 笹ヶ崎遺跡	みやざきけん 宮崎県 みやこのじょうし 都城市 うめきたちょう 梅北町	45202	7004	31度 40分 46秒 付近	131度 03分 05秒 付近	第一次調査 2014.6.2～ 2015.2.27 第二次調査 2014.7.28～ 2015.2.27 第三次調査 2015.7.2～ 2015.8.28	8,300㎡ 第一次調査 4,600㎡ 第二次調査 3,200㎡ 第三次調査 500㎡	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
笹ヶ崎遺跡	散布地	縄文時代 古墳時代 古代 中世	集石遺構・竪穴建物跡 掘立柱建物跡・溝状遺構 堀切・土塁・犬走状遺構 土坑墓・畝状遺構・土坑 柵列		縄文土器・土師器・須恵器 青磁・白磁・青花・陶器 石器・石製品・銅製品 銭貨			
要約	<p>笹ヶ崎遺跡では、主に縄文時代から中世にかけての遺構・遺物が出土しているが、この遺跡の最も注目すべき調査成果は中世段階の遺構・遺物にあると言ってもよい。14～15世紀前半頃の中世段階の笹ヶ崎遺跡は、北のA区から南のC区にかけて丘陵を利用して一連の施設構造物を形成していたと推定できる。一連の構造物は、B区の掘立柱建物群を構造物の中心とし、丘陵端部を犬走状遺構によって区画し、堀切と土塁を防御施設として備えている。また、出土遺物として当時貴重だった龍泉窯系青磁・白磁・天目茶碗をはじめとする陶磁器類がB区を中心として数多く出土しており、当地が特定身分者関連の場所であったと推測される。これらを総合的に考えると、施設構造物は防御施設を備えた居館またはそれに類する施設であった可能性がある。また、古代の遺物として、D1区の包含層から出土した石帯の一部である石製鈚具の丸柄の存在からも古代段階より笹ヶ崎遺跡とその周辺地域が「地域有力層の居館跡」や「何らかの公的機関跡」等を形成していた可能性を指摘できる。</p>							

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第240集

笹ヶ崎遺跡 (第一次～第三次調査)

平成27年度県道飯野松山都城線(都城志布志道路)梅北工区道路整備工事に伴う発掘調査報告書3

2016年3月

発行 宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地
TEL 0985-36-1172 FAX 0985-72-0660
印刷 明巧堂印刷株式会社

Miyakonojo City

the 1st•2nd•3rd excavation

SASAGASAKI Site

The Excavational Investigation Report of Miyazaki Prefecture Archaeological Center

Vol.240

2016

Miyazaki Prefecture Archaeological Center